
流星のロックマン Secret Story

黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン S e c r e t S t o r y

【Nコード】

N 9 0 5 4 M

【作者名】

黒

【あらすじ】

エーテルとの戦いから約3週間。ゆっくりと、少しずつ迫っていた混沌は何を飲み込み、変えていくのだろう。そして、その結末は……。――『流星のロックマン < 明日へ >』の続編で、別に連載している『幻想世界英雄列伝フェアプレイズ I F』とも多少関わります。前作のオリキャラの簡単な解説はしますが、それで満足行かない人はぜひ前作も見てください。

第1話 崩れる平和（前書き）

やっところさ復活風月です。就職状況は聞かないで下さい（苦笑）。

第1話 崩れる平和

ミソラが星河家から去ってから2週間後の日曜日。スバルは1階のリビングのソファアに座って読書をしている。無論、宇宙関係の本だ。ウォーロックはそばで相変わらず暇そうにしている。とはいへ何もししていない訳ではなく、彼の好きな刑事ドラマを見ている。昔のドラマをリメイクした物のようだ。

「スバル、買ってきて欲しい物があるから、悪いけど買ってきてくれないかしら？」

「あ、うん。分かったよ母さん」

読書（特に宇宙関係）の好きなスバルだが、後でも本は読める。そのくらいは弁えている。スバルは本を閉じてテーブルの上に置き、その隣でウォーロックは腕を上^{あらわ}に伸ばしながら喜びの感情を露にした。

『おっ！ やっと外に出られるのか！ いつもの事ながら家の中でずっと引きこもってるのはオレの性に合わないんでな』

「別に引きこもってるわけじゃないよ」

「はいはい、喧嘩はそこまで。……はい、買い物メモ。今晚の夕食だから、なるべく急いでね」

暗に引きこもと称されたスバルはウォーロックを睨み、あかねはそんなスバルを諷めつつ買い物のメモを渡す。

「うん。……あ、たまご。これは気を付けて帰らないとね」

『スバル、行こうぜ。スバル、行こうぜ！』

よっぽど暇だったのだろう。ウォーロックは遊園地に行く直前の子供のようにウキウキワクワクとしている。……たかが買物だというのだ。

スバルはそんなウォーロックに苦笑しながらメモを折りたたんでポケットに入れながら答える。

「はいはい。それじゃあ母さん、行って来るよ」

『行ってくるぜ、おふくろ』

「車に気を付けるのよ」

あかねはドアノブに手を掛けたスバルとその後ろに浮いているウォーロックに声をかけ、2人は親しみを込めた笑顔でそれに応える。

「はーい」

『おう！』

ガチャ バタン

あかねはドアの向こうに消えた2人の後姿を思い出し、楽しげな笑みを浮かべる。

「ふふっ。何だかんだで仲が良いわよね、あの2人。帰ってきた時のために冷たい飲み物でも用意しますか」

『事件は会議室で起きているんじゃない！ 現場で起きているんだ
！！』

「あら、テレビ点けっぱなし」

テレビはウォーロックが見ていたため、彼が消し忘れたのだろう。使わない電気は消しておく。あかねはそういった考えからテレビのリモコンを手にとって電源を切ろうとしたが……。

『番組の途中ですが、臨時ニュースをお伝えします』

という速報であかねの動きが止まった。直接関係がなくても動きを止めてしまうのは臨時ニュースの成せる業^{わざ}だろうか。

『世界各国で起こっている原因不明の人間消失ですが、またも起きました。場所は中東、クウェービア。行方不明者は――』

今、世界各地では謎の人間消失が起こっている。行方不明者が何処に行ったのかは全くの謎。おおよそは家族や知人がその人に連絡して返信が無い事から発覚されるのだが、不可思議な事に自分から出て行ったとは思えない環境からの行方不明者もいるのだ。

謎の解明以前に、事故とも事件とも分類できないのが現状だ。

ピッ

だが、あかねにとって気にはなってもそこまでの関心。大抵は自分の身に起こらないと問題を考える事が出来ないのが人間だ。あかねはテレビを消し、スバルとウォーロックが帰ってくる前に部屋の掃除を済ませる事にした。

一方、スバルとウォーロックはスーパーに向かって歩いている最中だ。

ピピピッ！

「あ、電話だ」

スバルのハンターから電子音が鳴り、スバルは立ち止まってエアディスプレイを展開。電話を掛けてきた相手に応じる。

「……あら、あなたが外に出てるなんて珍しいわね」

「委員長までボクを引きこもりと称するの？」

スバルの苦笑。それもルナの声が冗談ではなく本当に意外そうだったから苦笑したくもなるだろう。彼女の後ろにはゴンタとキザマロ、それと片隅にジャックのツンツン髪が見えるから4人で行動しているのだろう。……ジャックは無理やり誘われたらしくため息を付いている。

ルナはスバルの苦笑を見て自分の態度を思い出し、ハンターを持つていない方の手で口を押さえ、謝ってきた。

「あ、ごめんなさい。……つい」

「良いよ。それで、何か用？」

「ええ。実は今ゴンタとキザマロ、ジャックとでヤシブタウンに買い物に行こうと思うんだけど、貴方もどうかと思って。……外出しているようだけど、何か用事でもあったのかしら？」

流石にルナは鋭い。スバルには失礼だが、彼は理由が無ければ外に出ない。ルナはスバルのそういう一面から用事で外に出ているという結論に至ったのだ。

また、4人が壁になって背景が見えないが、どうやらルナ達はコダマタウンのウェーブライナー前にいるらしい。スバルがOKを出せば彼が来るまで待っているつもりだろう。

「うん、母さんから夕飯の買い物を頼まれたんだ。終わったら合流しても良いかな？」

「ええ、もちろん。ヤシブタウンに付いたら連絡頂戴。その時私達がいる場所を教えてあげるから」

「……迎えには来てくれないの？」

スバルが若干がっかりしたような笑みを浮かべる。だが、ルナはルナで迎えにいけない理由があったらしい。

「今の季節は混むから」

「？ 何で？」

「……スバル君、今何月か覚えてる？」

「？ 11月だよね？」

厳密に言えば11月上旬だ。ルナはさもじれったそうに答えを言った。遠回しに言ったのは、スバルなら察するだろうという評価からだ。

「来月は12月。クリスマスの用具とか冬服とか、そろそろ売り出す頃なのよ」

「……なるほど」

夏服・冬服、季節の行事等、大抵は1、2ヶ月前から店に売り出されるものだ。恐らく、メテオGの事件の後スバル達でパーティを行った時同様、クリスマスパーティをする予定なのだろう。そのための用具購入と、ついでに綺麗な服が無いかな？ という女心からの買い物だ。……男子3人は十中八九荷物運びだろう。

対してスバルは実感無さ気な返答。彼は流行にも疎い。というか、興味が薄いようだ。そしてそれはルナの中で、スバルにも少し流行に興味を持ってもらおうという目標を生ませた。彼女の性格、世話焼きから来る考えだ。スバルが合流したら色々連れまわす気だろう。

「それじゃあ、連絡待ってるわよ」

「う、うん」(……一瞬委員長の目がキラんと光ったような……)

スバルはスバルでそれを察知し、背中に冷たい汗を感じながら電話を切る。

『くつくつく。大変だな、お前も。あの女、まあたお前に色々叩き込む気みたいだぜ?』

「あはは……。みたいだね。……でも、それが委員長の良い所なんだから」

ウォーロックの愉快な笑い声とスバルの苦笑。2人は再び歩き出し、店内にある籠かごを手に、メモに書かれている物を探す。

「えっと……。次は……」

「おい見ろよ、ヤシブタウンが凄い事になってるぜ?」

スバルのそばでそんな話を話している男性が2人いて、その友人らしい男が最初に口を開いた男のハンターを見て顔をしかめた。

「？ うわっ、これは酷いな。街がメチャクチャだ」
「ちょ、ちよっとすみません」

スバルは少し背伸びして男性のハンターを横から見る。街がメチャクチャというのが気になったのだ。ハンターを持っていた男性の方もスバルが見やすいようにハンターの位置を低くした。

「ッ！！ これって！」

『おいおい……マジかよ』

ウォーターロックがスバルの横に実体化してハンターの画面を覗き見る。直前に男性の1人が驚いたのでスバルにはウォーターロックの声が聞こえる少し前に彼の出現に気付いていた。

スバルは一瞬物が入っている買い物籠を持ってオロオロしたが、最終的にはレジに行ってお金を渡し、後で取りに来るとした。……だが、スバル自身、正直に言うのと取りに来れるか分からなかった。

スバルは店から出て建物と建物の間の細い路地で電波変換。ウェーブロードに飛び乗りながら強く歯を噛み締める。

「……どうしてなんだ……ジャック！ ゴンタ！」

ここであえて、スバルが買った物を取りに行けない理由を話そう。相手が強い事には変わりない。

街で暴れて、人々を傷つけているのは誰だろう、ゴンタとジャックの電波変換したオックス・ファイアとジャック・コーヴァスだったのだ。

第1話 崩れる平和（後書き）

あかねが消そうとした直前のドラマですが、アレしかり浮かばなかったんですよ。最初に思い浮かんだのが『化物語』のまよいマイマイ編の『帰り道』ですが、ウォーロックは音楽番組には興味無いだろうと思います。

さて、ジャックとゴンタの身に何が起こったのか。それは次話のお楽しみ♪

第2話 大罪を司る者達（前書き）

お待たせしました！ やっぱりこっちの方は元が無い分展開を考え込んでしまいますね（苦笑）。

第2話、大罪を司る者達。公開です。

第2話 大罪を司る者達

——ヤシブタウン——

タツ

「……こんな……事って……」

ヤシブタウンに着いたロックマンを待ち受けていたのは先程ハンターの画面で見たのと大差ない光景。建物は壊され、木々は燃え、生きているのか死んでいるのか分からない人やウィザード達が倒れている。炎に焼かれる街。その光景は、正しく地獄絵図とも言うべきものだった。

キザマロもうつつ伏せに倒れ、意識は無いらしい。そしてルナの方は、オックス・ファイアの腕に驚掴みにされていた。ちょうど、つま先から胴体までガツシリと握られている。どうやら気絶しているらしく、目を閉じて動かない。

「く……そおお……」

悔しがるような、苦しい声色。それは何と、壊している側のゴンタからの声だった。ロックマンは訳が分からなくなった。彼等を止めた後なぜ人々を攻撃したかを聞こうとしたのだが、それは彼等が自分の意思で凶行に及んでいる場合の事。だが、そのゴンタのセリフは自分の意思ではない事を示している。

オックス・ファイアはロックマンの姿を見つけるなりこう口走る。

「……スバル……。オレを……オレを倒してくれ……。オレはもう……委員長やキザマロを傷付けたくない！」

それは心からの懇願だった。彼の心からの願いだ。自分を倒せと、自分を止めてくれとスバルに言っている。

「そんな……どうしてこんな事に！」

自分の意思でやっていないのに、その相手を攻撃する事は出来ない。そうした原因となる者がいるはず。まずはそちらを倒す事が先決だ。

それが、スバルの考えた作戦。彼は優し過ぎるのだ。だがしかし……。

『優しすぎる事は良い事だけではない』

「『ッ！！』」

燃え盛る炎の中から現れた黒い影。黒い影というのは比喻での何でも無い。そのままの意味だ。ジョーカーのような体格の良い四肢に黒いコート、浅黒い肌。全身黒と言っても良い容姿の男性だ。その目は、無関心、無感情。人間を見下すとかそういった次元の目ではない。アリや雑草など、小さすぎるモノを見る目だ。特別な関心を持たず、人を人として見ていない目である。

『何もんだてめえ！　こいつらに何しやがった！！』

ウォーロックのケンカ腰の声。スバルも飛び掛りたいのを必死で抑えて現れた男性を睨みつける。

『何を？ 私はただ命じたただけだ。……人や物を壊せとな』
「命じる？」

ロックマンが眉を顰めるのに対し、男性はあっさりと肯定する。
本当に当たり前といった様子で。

『そうだ。このようにな。……止まれ』
「？ ……ッ！ 体が……動かないっ!？」

ロックマンは動きを封じられた。ただ、男性が止まれと言っただけで。動きを封じられたのはウォーロックも同じらしく、呻き声を上げている。

『……こうやってゴンタやジャックを操りやがったのか』

ウォーロックの言葉にスバルはハツとする。今まで人や町を破壊するオックス・ファイアにばかり目が行ったが、ジャックの姿が無い。

「ッ。おい！ ジャックは……ジャックは何処だ!！」

『ふん。人間にしては勇ましい勇気だ。……あのカラスならお前の上にいる』

「ッ!！」

ロックマンは急いで上を見ようとしたが、首も動かない。

「スバル！ 避けるおおお!！」

ザシュッ!！

「ッ！ あぐっ……！！」

ジャックの叫び空しく、鋭い翼はロックマンの背中を切り裂いた。ロックマンは痛みを堪えながらも男性を睨みつける。今の彼には、それしか出来ない。言葉に縛られているため、倒れる事すら出来ないのだ。

「……何で……言葉なんかで……」

『言葉なんか？ バカを言え。言葉だからこそだ』

そう言って男性は、心底見下しきるようにロックマンを見る。

『言葉は人を悩ませ、死へと導く原因を作る事も出来る。……言わば、人の心を縛り、操り、生き筋を狂わせる呪いだ。……お前の友人達のように、星河スバルよ』

「ッ！ ボクの名前まで……」

スバルの驚きが少なかったのは、組織であれ個人であれ、人間の持つ情報網の広さを知っているからだ。ディーラーしかり。サテラポリスしかり。……多分別に分類するべきだろうがツバサの情報網もしかり。

『お前の名前は良く知っている。……宿主の中で何度も聞いた名だからな』

「？ 宿主？」

尋ねつつ、ここでスバルは背筋に薄ら寒い物を感じた。嫌な予感というものだ。深淵から這い寄るような恐怖。2度と関わりたくない

いと思えるモノ。今日の前にいる者は、約3週間前に消し去ったはずの存在と似ていた。

『お前達がツバサと呼んでいた者だ。……こう言えば分かるだろう。私の母体は、ネビュラ・グレイと呼ばれていた』
「ッ!!」

良い予感より嫌な予感の方が良く当たるというが、今回のが正しくそれだろう。そしてその者は続ける。

『申し遅れたが、私の名はルシファー。母体たるネビュラ・グレイはツバサのマイナスを吸収した上でお前達の前に現れたが、大部分が吸収された。しかし、ごく一部は脱していたのだ』

大部分は吸収され、極一部はツバサの杖に払われて幾つかの塊になってどこかに行ってしまった。その塊こそが……。

『私はその一部である【傲慢^{ごうまん}】だ。……そして、手頃な人間を私という存在に変えた事で私はここに在る』

今スバルの目の前にいるのは、ネビュラ・グレイがツバサの一面を吸収して一般人に取り憑いた者だった。……いや、『私という存在に変えた』という言葉からして、もうその一般人は人間ではなくなっているのかもしれない。自我も体も飲み込まれ、今日の前にいるルシファーとなっているのだろう。

……デューオの言ったとおりだった。そう遠くない未来に降りかかる危機。その一端を担う存在が、スバルの目の前に立っている。

一方、スバルの心にある感情は恐れではない。ロックマンは強い視線をルシファーに向けたままこう言った。

「……ツバサ君は確かに人をからかったりイタズラ好きだけど、お前みたいに誰かを見下すような人じゃない!!」

怒りだ。友人の人格を踏みにじられた事による怒りである。

『見下すだけが傲慢ではない。自分1人で抱え込み、他人を蔑ろにする事もまた、傲慢なのだ』

「だからツバサ君は他人を蔑ろになんて——」

友人を傲慢だと言われたスバルは苛立ちを露にする。スバルにとって、彼が他人を蔑ろにする事なんて想像できない。誰かのために策を練る。いつだって彼はそうしてきた。

『……いや、それでも無いかもしれねえ』

だが、ウォーロックは少し考え、そういつた結論を出した。

『アイツは全部自分で抱えていやがった。立派にも見えるだろうが、自分で全て背負わなければいけないってのも、傲慢なんじゃねえのか?』

「ッ! それは……」

そうとも言えてしまう。

バギッ

ロックマンの後ろ、ジャックの立っている位置から鈍い音が聞こえてきた。それと同時に、ジャックの短い悲鳴と、何かが激突して瓦礫が崩れる音が聞こえてくる。ジャックは何者かに物理的質量を持つ攻撃によって吹き飛ばされ、倒壊した建物に激突したのだ。

『そのウィザードの言う通りだ、ツンツン頭のカキ』

後ろから聞こえてくる、無粋で、失礼極まりない暴言。ジャックを吹き飛ばした張本人だろう。その者はスバルの後ろから横、右斜め前に移動しながら話す。

容姿はルシファーと同じように人間そのもの。歳は10代後半か20代前半頃だ。ルシフェルと同じ浅黒い肌。髪はショートで、「どっちがツンツンだ」と言いたくなるくらいにトゲトゲしている。目つきはジャック並みかそれ以上に悪い。

『オレ達はアイツの中でも強い思いの陰の部分なのさ。ちなみにオレは【憤怒】を司るサタンだ。名前を間違えたらぶっ殺す』

傲慢に憤怒。7つの大罪の1つだ。傲慢、憤怒、嫉妬、暴食、貪欲、色欲、怠惰。これら7つの内、ツバサの中で強かった感情が具象化されたモノが今スバルとウォロックが向き合っている存在だ。また、何事も陰と陽が半分ずつ存在するのが世の理である。憤怒の場合、ツバサの持っていたいままでも変わろうとしない人間に対しての苛立ちだろう。思いを隠しているのと存在しないのでは、訳が違う。

「……オレ……達？」

スバルはサタンの言った単語に引かかった。オレ達というのは複数形。ルシファーとサタンという見方もあるが、楽観は禁物だ。そして、嫌な予感というのはことごとく当たらしい。

『ああ。オレとルシファーの他にゼルベブとマモン、別の世界に流されちゃった様だが、レヴィアタンもいる』

スバルはその言葉で血の気が失せるのを感じた。言葉だけで相手を操るようなトンデモ能力を持つ（と思われる）者が自分のいる世界だけでも4人いるのだ。怖気が走らなければ逆に凄い。

『……ここまでご丁寧に名乗ったって事は、オレ達を消そうって腹か？』

ウォーロックが息を呑み、彼の挑発の中に緊張が窺える。それに対し、最初に声を上げたのはサタンだ。バカにするような、怒りを込めた笑い。

『はっ！ バカかてめえ！ お前達なんていつでも簡単にぶっ殺せるんだよ！』

『ようやく我々の意識が人間の肉体と同調したのでな。今日の所は単なる名乗りだ。街1つを破壊し、その映像を世界中に流せばお前はきっと来るだろうと思ってな。……まあ、その中にお前の友人がいたのは嬉しい誤算だったが』

今回の事はほんの挨拶代わりだった。その事実、スバルとウォーロックは絶句する。

「……ボクにお前達の存在を知らせるために……」

『……街1つをぶっ壊したって訳かよ……』

それこそ、人の命をなんとも思っていない証だ。倒壊した建物の中にどれだけ人がいたと思っているのだろう。

『壊したのはお前の友人だろう。……サタンそろそろここを離れるぞ』

『へいへーい。そんな訳で、追われると面倒だから気絶しててくれや』

サタンは消えた。言葉を置いて移動した。オックス・ファイアの真正面に。

「ッ!! ゴンタ!」

『その女が大事なら、精々衝撃から庇うんだな』

ドゴッ!!!!

「ズ……あっ……」

サタンの拳はオックス・ファイアの硬い装甲を物ともせず、一撃の下打ち砕き、吹き飛ばす。

「ゴンタ!! 委員長!!」

幸いと言うべきか。オックス・ファイアはその巨体ゆえに建物に埋め込まれるほどには行かなかった。ルナは気絶しているため、今

の光景を見ないで済むのも幸いと言って良いだろうか。

『誰かの心配している場合かよ』

ミシッ……!!

『ッ!! ガフッ!!』

ウォーロックの悲鳴と共に、彼が近くにいた感覚が無くなる。代わりに、少し離れた建物が崩れる音がした。ウォーロックはオックス・ファイアよりも小柄なため、深い所にまでめり込んで行ったのだろう。

そしてとうとう、ロックマンの前にサタンが立つ。ルシファーの言葉によって動きを封じられているため、避けたくても避けられない。

『地球を救ったヒーローには特別でかい奴をぶつけてやる』

バギッ!

「ぐっ!!」

ロックマンの腹部に深々と拳が突き刺さる。斬撃でも手刀でもない、壊す事に特化している形状の『拳』が手首が埋まるほどにめり込んだのだ。肋骨の下部分を巻き込んでいたため、数本は折れているだろう。内臓が背中から吐き出されるような威力だ。

なお、ここまでの段階で、サタンは完全に腕を振りぬいていない。
それはつまり……。

『吹き飛びな!!!』

「ッ!!! うわああああ!!!」

完全に振りぬかれた拳は単純な『力』によってルシフェルの『チカラ』を打ち壊し、ロックマンを吹き飛ばす。

ドガアアアン!!!!

ロックマンの方はすでに倒壊した建物の瓦礫に突っ込んだ。瓦礫に埋もれて意識が遠のく中、ルシファーが飛び立つ。ジョーカーのように人間型の電波体らしく、ウェーブロードでの移動だ。

(……ま……て……)

ロックマンは手を伸ばそうとしたが、ダメージの大きさと瓦礫の重さで体が思うように動かない。サタンがルシファーに続いてウェーブロードでその場から離れたのを見たのと同時に、スバルの意識は途絶えた。

サテラポリスが来たのは、それから5分後の事。

『これは……酷過ぎですね』

「ああ。……とにかくスバル達を助けないと。アイツ等ならきつと

生きてるはずだ。総員！ 救助作業開始！！」

暁の指示で各隊員が動く中、暁は顎に手を当てて考え込む。

「……本来なら嚴重なセキュリティで護られるはずの人工衛星に侵入して、さらにはその痕跡すらも残さないとは……。一体オレ達の敵はどれだけの力量を持っているんだ……」

第2話 大罪を司る者達（後書き）

さてさて、今後の展開を明かさないために、あんまりこの後書きにもヒントを書く事は出来ませんね♪ 考えを巡らせて楽しむが良い。もしくは思考地獄に溺れて苦しむが良い（↑それは余計だろ）。

第3話 病院（前書き）

次話（第4話）がだいぶ安定してきたので、3話を更新します。

第3話 病院

「……………うっ……………ここは……………」

スバルが目覚めて最初に映ったのは真っ白な天井。少し首を横に動かすと、テレビや椅子、正方形の机など、いわゆる病院でよく見るような物が置いてあった。服やハンター、腰に下げている水色のポーチは机の上に丁寧に折りたたまれて置いてある。

「……………病院？」

だとすればある種スバルにとって都合が悪い。テレビの型から考えて民間の病院だという事は分かったが、もしも自分を発見・搬送したのがこの病院の関係者なら誤魔化すのに苦しむだろう。誤魔化すというのは相手を騙すという事なのだから、スバルにとっては後ろめたい。

なお、なぜ民間の病院というのが分かったかというと、民間のテレビは入院患者が持たされる専用のカード、定期券みたいな物だと思ってくれば良い。それが必要なのだが、サテラポリスの病室内のテレビはそんなのいない。

そもそもWAXAニホン支部の病院であるはず無いのだ。WAXAニホン支部は、現在急ピッチで修復中なのだから。

「……………あれ？ ウォーロック？」

スバルがそこまでの状況把握を終えた時気付いたのだが、ウォーロックの姿が無い。

「ッ！　もしかしてっ！」

スバルの脳内に浮かんだのは、瓦礫に押しつぶされてデリートされてしまった最悪のケース。ウォーロックに限ってそんな事はないとスバル自身思っていたが、あの圧倒的な力で殴られ、建物に埋め込まれ、その上瓦礫に潰されてでは、流石に『無事』という樂觀視は出来なかった。

「いっ！？」

だが、起き上がろうとした彼の肉体は付いてこない。一旦仰向けの状態に戻ってから手で布団を持ち上げて視線を自分の腹部に向けると、分厚く巻かれた包帯が胴体の自由を無くしていた。お腹を曲げられない状態だ。

ガチャ

「おいおい、骨折ってる奴が無茶するな」

「ッ。　暁さん」

暁は病室のドアを開けながら呆れたようにスバルに言う。暁の後ろにはウォーロックもあり、スバルの姿を見るなり部屋の中に猛スピードで入ってきた。

『スバル！　お前大丈夫か！？　腹の骨折ったっていう話だが……』

ウォーロックもウォーロックでスバルを心配していたらしい。スバルはそんな彼を安心させる意味合いでふっと優しく微笑んでみせ

る。

「大丈夫だよ、ウォーロック。……確かにこの包帯のせいでお腹は曲げられないけど……。ウォーロックは？」

『へっ！ お前とは鍛え方が違うぜ！』

「酷いなもう」

ウォーロックは誇らしげに胸を張って見せ、スバルは安堵を込めながら苦笑する。ウォーロックが無事だったという安堵である。

「……さて、それじゃあ2人とも」

暁はスバルとウォーロックが互いの無事を確認したのを見てから2人に話しかけた。その顔は先程のような優しいお兄さんの顔ではなく、真剣なサテラポリスのエースとしての顔だった。スバルとウォーロックも自然と顔が引き締まる。

「……何があったか教えてくれ」

これから、スバルとウォーロックは暁に戦闘の事を話した。今分かっていて相手の名前、能力、容姿、人数……。

話の過程でジャックとゴンタ、ルナとキザマロの安否を聞いた所、今のスバルと同じく入院しているらしい。ジャックとゴンタは電波変換していたため衝撃のショックを和らげる事ができ、ルナの方はゴンタが無意識に彼女を庇うように瓦礫にめり込んだため無事だったのだ。キザマロの方は本当に奇跡としか言えない。

……だが……。

「……実は、建物が倒れた時、中にいた人やそばにいた人は瓦礫で

……」

「……そんな……」

暁自身、いずれは分かる事だからという事で話したのだが、予想通りスバルは落ち込んだ。逃げ遅れた人が相当な数いたらしい。おそらく、民間人が逃げる間もなくルシファーはゴンタとジャックを操ったのだろう。それはさぞ突発的で、絶望的な破壊だったに違いない。

自分がもっと強ければ。自分がもっと早くヤシブタウンに着いていれば。いや、それ以前に元からルナ達と行動を共にしていれば……。

スバルの中でそういった後悔が渦巻く。

「お前のせいじゃないさ。お前は良く頑張ったし、よく生き残ってくれた」

暁はそう言ってスバルの肩に手を置く。その表情は本当の兄のように優しい物だった。スバルは暁に微笑を返し、励ましてくれた暁に感謝の意を示す。暁の方はそのスバルの微笑でもう大丈夫だと判断したのか、顔を真剣なそれに戻した。

「スバル、さっき言ってた容姿と人数だがな。実は世界で起きている行方不明者の数と一致しているんだ」

「えっ……それはつまり……」

答えは明々白々だが、暁はスバル本人に確認してもらうために行

方不明者の顔写真付きリストをベッドの上に広げた。

「ッ！ この顔！」

『ああ、間違いいねえ。……ルシファーとかいう奴とサタンって奴だ』

多少目の釣りあがり方など違う点はあるが、顔の各パーツの感覚や身長など、自分達が見たルシファー達と酷似していた。目の釣りあがり方が違うって言ったじゃんと言うかもしれないが、案外人間の表情というのはその人の内面でだいぶ違ってしまふ物だ。心が安らんでいる時と極度に緊張している時とでは、眉の寄り方や顔の印象がだいぶ違ってしまふのと同じような物である。

暁はスバルとウォーロックの反応を見て、やっぱりといったようなため息をつく。

「その様子だと当たりって感じだな。……さっきお前達が話してくれた事から察するに、母体がネビュラ・グレイのそいつらは一般人に取り憑き、操る事で拉致。……操っているわけだから、自分から出て行ったとは思えない状況を作るのも容易いという事か」

暁が自らの思考の海に潜ろうとした時、ウォーロックが真剣な声色で暁に話しかける。視線は真っ直ぐに、写真へと向けられている。

『……おい暁、1つ聞きたい事がある』

「ん？」

『……何でここにある写真が3枚しか無いんだ？ 奴等の写真なら、最低でも4枚あるはずだ』

ルシファーの話だと、スバル達の世界にいるのはルシファー、サタン、ベルゼブブ、マモンの4人。もう1人レヴィアタンというの

がいるらしいが、他の世界に流されてしまったらしい。大抵は冷静、かつ即座に答えるはずの暁だが、今回はかりは違っていた。

先程の犠牲者がいたという話を話すとき同様、言うのを迷っているのが分かる。否、先程よりも躊躇っているようだ。

「……スバル、落ち着いて聞いてくれ」

「……はい」

やがて決意を決めたのか、暁は静かに息を吸ってスバルと向き合う。スバルとウォーロックもまた、暁の様子が気になって真剣に耳を傾けた。

「……数日前、ゲイルから連絡があったんだ……。ライラがいなくなったので、出来れば良いから搜索を手伝って欲しい。これはサテラポリスではなく、友人のキミへの頼みだ」と

「ッ！　！　そんな……でも……そんな事って……」

不可思議な行方不明者がスバル達の敵なら、ライラもまた敵という事になる。暁が言うのを躊躇ったのは、自分の見知った者が敵というのを言いたくなかったからだ。そんなのは誰だって苦しいと思うだろうし、人一倍心の優しいスバルならなおさらだ。

『……間違い……無いのか？』

「……まだライラが見つからない以上、何とも言える事は出来ないが……確率が高い。彼女が行方不明になったのは、世間で行方不明者が出始めた時期だからな。……ゲイルの耳にも行方不明者の事は入っているだろうから、アイツも気付いているだろう」

ウォーロックの確認に頷く暁。

「そんな……ライラさんが何で……」

『……オレ達電波体の感覚で言わせてもらえば、波長が合うから取り憑いたって所だろうな』

襲う者（この場合取り憑く側）から見れば、波長が合うから取り憑く。そういったエゴな、通り魔のようなモノだ。

スバルはその言葉でルシファー達への不快感を露にする。

「……そんな事で関係ない人を巻き込むなんて……」

『……確かに理不尽ですが、いつまでも悲観していても仕方ありません。……星河スバル、良いですね？』

「……うん」

アシッドの言う通り、いつまでも悩んでも仕方が無い。仕方が無いのなら、今後の対策を立てるべきだろう。議題になるのは相手の能力の事だ。

「……しかし、何度聞いても信じがたいな。本当に命じられただけで動けなくなったのか？」

暁の問いにスバルは横になった状態で首をコクリと頷いた。

「はい。……止まれという言葉聞いただけで体が動かなくなりました」

『それはオレも同じだ。間違いねえ』

ウォーロックもスバルの言葉に続き、暁は困ったように頭を搔く。

「うーん……。そりゃ参ったな……。本当に言葉だけでそんな事が出来るんなら、対策の立てようが無い。耳を塞いで戦ったら――」

『聴覚を始め、五感のどれかを戦闘中に封じるのは良い判断とは言えません。……相手の位置の補足時なら有効でしょうが……』

暁とアシッドは声に出して唸り、腕を組む。その仕草は全く同じだ。なお、アシッドの言っている補足時とは、目を閉じる事で大幅に処理すべき情報をカット。そうする事で聴覚や嗅覚など、その他の感覚を強める事で補足する技法だ。主に暗闇など、視覚の意味が無い場所で使われる。

「あの……」

スバルはおずおずと、横になった状態から手を上げる。暁は考えるために落としていた視線を上げ、スバルを見る。

「ん？ 何だ？ スバル」

「……確証は無いんですが、もしかしたら対策を知ってるかもしれない人がいるんですが……連絡を取って良いですか？」

確証が無く、もしかしたら、かもしれない。スバルが控えめな事を言っているのはれっきとした理由がある。その人の専門は確かに『訳の分からない分野』に入るが、その人の博識ぶりなら対策とまではないかなくても、そのチカラの正体は知っているかもしれない。

「ッ！ いるのかそんな人！」

『ッ！ いるんですかそんな人！』

……以上、暁とアシッド、息ぴったりシャーロも射程範囲のシンクロでした。

スバルは一瞬その息ぴったり具合に驚いたが、すぐに平静を取り戻して頷いた。

「はい。ウォーロック、ボクの服から手鏡を出して」
『おう』

ウォーロックの返事に迷いは無い。スバルの言う相談できる人というのが、彼の中にあるその人と一致していたのだ。

「鏡？」

『……いったい何をするんですか？』

暁とアシッドが不思議そうに尋ねてくる。ここでスバルは思い出した。これから逢う予定の人物、侑子の事は3週間前の戦いの後に話したが、実際に逢うのはこれが始めてだったのだ。……もつとも、魔女とか魔力とかそういう話になると、暁もアシッドも長官も軽くスルーしてくれたが……。

スバルはウォーロックから手鏡を受け取るとその手鏡を開きながら暁とアシッドを見る。

「暁さんとアシッドに逢ってもらいたい人がいるんです。……本物の魔女に」

第3話 病院（後書き）

そんな訳で、次回はあの酒豪が登場。『X X X H O L i C』ファ
ンなら懐かしいコントもありますよ♪ お楽しみに！ ヒントは、
【……女の子にその名前は……（苦笑）】です。

結構分かりやすかったですかね（笑）？ 原作を読んでない人も
お楽しみに！

第4話 マルとモロ（前書き）

サブタイ通り、あの子達とスバルが知り合います。今まで何だかんだで自己紹介していませんでしたからね（……ストーリー進行的に、カットせざるを得なかったんですよ。容量、減らせる所は減らさないと……）

第4話 マルとモロ

「……スバル、とりあえず一言言わせてくれ」

「はい」

「……頭大丈夫か？」

「……………」

スバルは内面でずっこけ、同時にショックを受けた。人が真面目に話をしているのに病人扱いされたらそうもなるだろう。だが、暁も暁でちゃんとした理由があったらしい。

「だってなあ……。いきなり魔女とか言われても……」

『……そういえばあの戦いの後の報告でそういった事を聞いた気がします……』

暁とアシッドのリアクションから考えて、2人とも半信半疑で戦いの報告を受け止めていたらしい。まあ、一見して眉唾ものの話題だから半信半疑なのも無理からぬ事だろう。

見た方が早い。スバルはそう判断し、鏡に語りかける。

「……侑子さん、侑子さん」

1回だけだとかの間違いで呼ばれる可能性があるため、2回で出るようにしたのだ。

ヴンッ

鏡から薄いピンクの光が出て、空間その物をスクリーンとして人物が浮かび上がる。だが、それは侑子では無かった。

「……あれっ？」

「どっちが侑子さんだ？」

『……その鏡、どういう原理で空間に映像を映しているのでしょうか？』

スバル、暁、アシッドの順。スバルは望む者が映らなかった点で疑問符を浮かべ、暁は侑子と面識が無いため出てきた2人のどちらかが侑子だと思い、アシッドはどうやって鏡から映像が出ているのかを疑問に思ったようだ。

鏡から映し出された2人とは、スバルも見知らぬ少女だった。一方が、天使のような小さな羽を腰に付いている白い服を着た少女。髪はショートでピンク色。もう一方が、小悪魔のような小さな羽を先程の少女と同じように腰に付けている黒い服の少女。こちらはツインテールの水色髪。ただし、髪の長さは自分の身長を優に超している。

スバルは暁にどちらも侑子ではないという事を伝えた後、2人の少女に話しかける。

「ねえ、キミ達は誰なの？ 侑子さんは？」

「……………」

「……………」

対する少女はダンマリだ。ただし、それは悪意のあるものではない。単純に、『自分達が誰か』という問いと、『侑子さんはどうしたか』という問いでどちらに答えたら良いかで迷っているらしい。

2人の少女は互いにチラチラと見合い、スバルはそれでどちらの質問に答えたら良いかを迷っている事を察した。

「えっと、それじゃあまず、キミ達が誰なのかを教えてくださいませんか？
何て呼んだら良いか分からないと話しづらいし」

暁が、『順応性たかつ！』という視線をスバルに送る中、2人の少女は自分達の事を名乗った。上から順に、黒服、白服、また黒服の順だ。

「マルと――」

「モロ！ あなたは？」

「あなたは？」

そう。今までスバルが接してきたのは侑子だけで、他の者と逢うのは無かったのである。スバルはマルとモロに親しさを込めて微笑みながら自分の名を名乗る。ウォーロックや暁、アシッドも自己紹介を終え、スバルは用件に入る。

「それで、侑子さんなんだけど……出かけてるのかな？」

その問いに最初の答えたのはマルだ。

「主様寝てる」

「疲れて寝てる」

マルに続いてモロが答え、2人は少し眠そうに目を擦る。どうやら向こうは夜のようだ。スバルは侑子とマル、モロに気を遣ってネビュラ・グレイを母体を持つ者達の相談は明日に伸ばす事にした。

「そっか。……じゃあ、また連絡するね。聞きたい事があったから」

実を言うとマルとモロの事も、侑子とはどういう関係か気になったが、それも明日で良いだろう。……主様という辺り、店長と働き手という関係だろうか。

スバルは暁とウォーロック、アシッドに目配せした後手鏡を閉じようとしたが、その寸前で見知った声が鏡の向こうから聞こえてくる。

「どうしたの？ マル、モロ」

侑子の声だ。とても眠そうで、欠伸の中に疲労の色が見える。スバルはこのまま鏡を閉じるのも失礼と判断し、挨拶だけ済ませて侑子にはゆっくり休んでもらう事にした。まずは挨拶だ。

「こんばんわ、侑子さん。……っ！！ って、なんて格好してんですか！」

鏡を開けて侑子に挨拶するスバル。だがしかし、直後彼の顔は真っ赤になる。寝返りのせいか、侑子の寝巻きが少々はだけていたのだ。

「？ ああ、これね。……ふふっ。スバル君は本当にウブねえ。あら？ そちらの人は？」

侑子は自分の服に気付いて着物を肩に掛け直し、からかうような笑みをスバルに送る。その後、暁とアシッドに気付いて誰かと問うた。

暁とアシッドはそれぞれ自己紹介をし、それが終わった後、侑子

はマルとモロをチラッと見る。

「……私が目覚めるまでこの子達と話したって事は、この子達の名前は知ってるわよね？」

「はい。マルとモロですよ」

スバルの答えに侑子にはやっと笑う。いかにも人を煙に巻いてそのリアクションを楽しみそうな、イタズラ心満点の笑顔だ。

「じゃあ、この子達の本当の名前は知ってるのかしら？」

「？ マルとモロじゃないんですか？」

『まさか、そいつらも偽名なんじゃねえよな？』

スバルの疑問にウォーロックの推測が重なる。確かに壱原 侑子という名も偽名だし、その店にいる少女の事だから偽名である可能性は高いだろう。

だが、その推測は間違っていたらしく、侑子はブッブーと自分の前で手をバツテンに交差させた。

「ブッブー！ 外れ〜♪ フルネームはマルダシとモロダシでした♪ 可愛い名前でしょ？」

「「どこがですかあああ！！！！」」

『どこがだ！！』

『……………』

上から順に、スバルと暁のツツコミ。ウォーロックのツツコミ。アシッドは呆然としてリアクションに困っているらしい。

とはいえ、女の子に対してマルダシとモロダシという名前は無いだろう。

「それで、何の用かしら？ 悪いけど、込み入った話なら明日になるわ。……流石に疲れててね」

散々スバル達の心で遊んでからこんな事を言い出した。これでは無闇に突っ込みを出来ない。現に、侑子は疲れているらしく、最後は彼女らしくない疲れた笑みを見せた。

本来なら早く聞いて置きたいが、侑子に無理をさせるほどスバルは非紳士（またの名を薄情）ではない。

「いえ、また今度にします。お疲れみたいですし、ゆっくり休んでください」

「そう言ってもらえると助かるわ。実を言うと、流石に神創りは疲れてね。早く休みたいと思ってたのよ。……でも——」

侑子はここで一旦区切り、人差し指を立ててウインクをした。

「対価の方は一文たりとも負けないからね♪」

以上、通信終わり。

「……なんだか、ずいぶん明るい人だったな」

暁の感想にアシッドが続く。だが、もしこの場にツバサや四月一日がいたならこう言っただろう。願いを叶えてもらうⅡ毒牙にかかったと。

『先程彼女が言った対価とは、引き受けるための契約料のような物でしょうか?』

「うん。……単純にお金とは限らないけど」

侑子は、彼女にかなえられる願いなら何でも叶える店の店主。その願いをかなえるのに相応の対価、代償により叶えるのだ。その対価は物だったり手数料だったり……本当に様々だ。

スバルは暁とアシッドにそういった解説をし、対する暁とアシッドは互いに顔を見合わせ、暁が不意に笑い出す。

「……………」

スバルの、【……真面目に話したのに……】というショックを受けた顔と沈黙。暁はそれに気付き、スバルに2つの意味で詫びた。

「ああ、悪い悪い。まさか本当にああいった人がいるなんて思えなくてさ。いや、世界は広いな」

この場でスバルを笑った事に対する詫びと、3週間前の戦いでスバルの話でそういったオカルト方面を半信半疑だった事に対してだ。暁が素直、かつ真摯に謝ったというのもあり、スバルは暁同様笑いながら応じる。

「世界と言っても、別の次元だそうですね」(……別次元と言えば、アストロ君の事とか話せば、暁さん興味持ちそうだな)

以前スバルが行った別の次元。そこは自分達のいる次元と特性のよく似ていた世界で、電波技術が発達している。それも、自分達がいる次元より遥かにだ。

科学技術方面なら暁が興味を持つだろうと思い、スバルは暁とアシッドに別の次元の事を話そうとするが……。

トントントン

ドアをノックする音に遮られた。スバルが誰だろう？ という疑問を顔に出したのを察した暁は思い出したように平手に拳を打ち付けた。

「おっと、忘れてた。今回の事件でお前が戦ったという事で心配している子がいてな。無事って事と、病院の場所を教えたんだ」

誰に？

そのスバルの疑問は直後にドアの向こうから聞こえてきた声で解消される。

「スバル君、入っても良いかな？」

「ミソラちゃん？ 良いよ。大丈夫」

ガチャッとドアを開ける音。それと共に現れたのは国民的アイドルの響ミソラだった。

本来、極秘扱いされるはずの衛星からの戦闘映像。それはモノの見事に流出され、ミソラもその戦闘を見た者の1人だった。ゴンタやジャックが倒され、ロックマンも……。

ロックマンが瓦礫の中に埋もれたため、電波変換が解除された際にロックマンの正体が民衆に知られる事は無かった。しかし、FM星人とオリヒメの起こした事件、メテオGとエーテル。世界を4度

救ったヒーローが圧倒されたという事実は民衆に暗い陰を落とした事だろう。

サテラポリスはマスコミや民間の病院が動き出す前にゴンタやジヤック、スバルを救出。後はサテラポリスの息の掛かった病院に搬送させたのだ。スバルが目覚めたのはその戦闘の翌日だ。

以上のような事を暁が説明し、こう付け加えた。

「さすがに、いきなり何人も病院に来たら周りの患者にも気付かれかねないからな。1日に面談できるのは極少数だ。……悪いな」

暁が先程言ったのが、先日の戦闘の後の経緯とミソラだけが来た理由。あかねと大吾は前日に来たが、その時はまだスバルの意識が無かったという話だ。

状況の説明も終わり、ようやくミソラはスバルと話す事が出来た。アイドルというのもあるのだろうか。ミソラは雰囲気を読むのが上手い。口を開くべき時は心得ているようだ。

「えっと……大丈夫？　じゃないよね」

ミソラが視線を落とすのはスバルの腹部に巻かれた包帯。肋骨の下、何本かが折れているのだ。ミソラは悲しそうで、苦しそうな声でスバルに謝った。

「……ゴメンね。すぐに行けなくて……」

前日、戦闘の様子が流出した際、ミソラはやろうと思えばスタジオを抜け出してスバルの元に駆け付けられた。だが、それが出来な

かったから謝っているのだ。親友達が町や人を襲い、終いには自分の大事な人が建物に埋もれて瓦礫に埋もれて……。

そういったショックな光景が、その時の彼女から思考と行動を奪ったのだ。

スバルは首を横に振って、ミソラに優しく微笑む。暁とアシッドは空気を読んで退室した。なお、ウォーロックはハープに連れて行かれたのは言うまでも無い。……ただその際、ウォーロックが悲鳴をあげる間もなく連れて行かれた所からして、ハープも拉致技術が上がっているらしい。……イメトレでもしているのだろうか。

「そんな事無いよ。こうして来てくれて、心配してくれるだけで十分嬉しいんだから」

「……スバル君……。ありがとう……」

優しく微笑むスバルと嬉しそうで、ホッとした様子のミソラ。見詰め合う2人。ミソラはスバルの手を握り締め、眩しい光をそのエメラルドグリーン瞳に宿してスバルに言った。

「これからは私も出来るだけ駆けつけるね！ 今度のマネージャーさんは私の話をちゃんと聞いてくれるから、何とか説得してみるよ！」

「……えっと……無茶はしないでね」（2つの意味で）

スバルが内心で思った2つとは、1つは無理やりな交渉をしてマネージャーと溝が出来ないかどうか。良いマネージャーなら、その繋がりを大事にするべきだろう。そして2つ目は、ミソラが思っていた事だ。スバルだったらこういった事が気になるだろうというのは予想が付いている。

「……スバル君が気にしているのは戦闘の事？ ……危険なのは分かってる。……だけど、知らない間に戦って、知らない間に傷付いているのは嫌だよ。……私に何かあったら、スバル君悲しんでくれる？」

彼女が最後に聞いたのはスバルにとって愚問だ。愚問過ぎて、尋ねてきたミソラに強い口調で返すほどに。

「当然だよ！ 何を言ってるの！ 悲しむに決まってるし、そんな事させない！！」

「……うん。スバル君ならそうやって強い口調で言ってくれるって思った」
「？」

くすつと嬉しそうな笑顔を見せるミソラに疑問符を浮かべるスバル。ミソラはこの後「秘密だよ♪」などと言ってスバルを煙に巻き、2人は親しげな雑談を始めた。

強い口調で言うという事は、それだけ自分の事を想ってくれているという事。だからミソラは嬉しく感じた。そして、だからこそ倒れるわけにはいかないと思ったのだ。自分に何か遭った時に、悲しむ人がいる以上は。

——ハネダ空港——

『ふう……ふう……ふう……。やっと……ニホンに……来ました……』

そういった事を言っているのは人間ではない。かといって電波体でもない。猫だ。純白の綺麗な毛並み。無論、人の言葉を話している時点でただの猫ではない事は気付いてもらえるだろう。

『早く星河スバルに逢わなければ。……主が戻ってくるまであの子を見守るのが私の役目なのだから』

猫は自分の身の回りの光を屈折させて自分の姿を認識できなくし、誰にも気付かれる事無くハネダ空港を後にした。

第4話 マルとモロ（後書き）

原作にもあったけど、やっぱり「どこがですかあああ！！」ってのは良いわあ。スバルなら、あの子達のフルネームを聞けば本当にああいったツツコミはするでしょうしね。

なお、『X X X H O L i C』の原作では6巻の後半の話の後の設定です。

6巻といえば、最後の話で四月一日がモコナと一緒に満月のお使いに行った時、届けた先の店の中に飛王・リードのクウモリを逆さまにしたマークがあったんですが、アレは偶然ですかね？（原作持ってる方は最後のコマをご覧ください）

次話は構成を考え終わった状態です。どこまで狂うかな？（大抵は大まかな筋を決めたら、後は筋から外れない程度にアドリブで書いてるので、最初の計画と若干の誤差があったりします）

第5話 カラーコンタクト（前書き）

大変長らくお待たせ致しました。第5話、更新します。

第5話 カラーコンタクト

スバルはルシファー達の事を話そうとしたが、侑子はその際疲れていたため後日また相談する事にした。大事をとって2日の休息。相談する相手に無茶はさせられないというスバルなりの思いやりだ。……ウォーロックはその間『暴りたい』だの『暇』だの騒いでいたが、スバル自身の怪我が治らない以上はどうにもならない。

そして現在、スバルは侑子に事の次第を説明している。暁とアシッドもスバルのそばに立って話を聞いている。

「……って、訳なんです」

「……なるほど。……傲慢……ルシファー……強かった感情が形になった存在……ねえ」

一通りの話を聞いた侑子は会得がいったように頷く。

なお、先日逢ったマルとモロは侑子の座っている横長のイスの縁にちょこんと座り、時折足を床から離してはバランスをとって遊んでいる。一方、侑子は青い着物を着て髪はあかねのように上の方で結っている。……逢うたびに違う着物を着ているわけだが、彼女は一体何着の着物を持っているのだろう。

状況説明はここまで。侑子は「ふうむ……」と一瞬考え込んだ後、口を開いた。

「……スバル君、7つの大罪って知ってるかしら？」

「え？ ……いえ、分かりません」

スバルは問いに答えられなかったため多少落ち込むが、侑子とし

ては十分に予想できていたらしい。

小学生でその分野を知っているのはその分野が好きな子くらいだが、スバルが好きなのは宇宙関係。スバルにとって初耳の用語だろうとは予想出来ていた訳だ。

「いえ、試しに聞いて見たただけだから別に落ち込まなくても良いわよ。7つの大罪って言うのはね、人を罪の道へと歩ませる感情の事を指しているの。傲慢、憤怒、暴食、強欲、嫉妬、色欲、怠惰。それが7つの大罪」

『傲慢や憤怒……星河スバルの報告にあったモノと合致しますね』

アシッドの言葉に侑子は頷き、肯定する。

「ええ。その通り。そして、それぞれに対応する悪魔が存在する。……傲慢はルシファー。憤怒はサタン。暴食はベルゼブブ。強欲はマモン。そして、レヴィアタンは嫉妬。……それに……アイツの強い感情って言うのも、まあ、こうして見ると合っているのかもしれないわね」

最後に呟くように侑子が言った言葉に疑問を覚えたのはアシッドとウォーロックだ。

『……傲慢は分かりますが、暴食というのはツバサに合わないと思います』

『確かにそうだよな。アイツはどっちかってえと怠惰って感じた』

彼がサテラポリスに居た頃の認識は、サボリ野郎。そのようなあだ名が出来るほどに、隙あらば抜け出し、ぶらぶらとその辺で昼寝をしているようなサボリ人だったのだ。

だが、侑子はあっさりと笑い飛ばす。

「ふふっ。確かにそう見えるかもね。……けど、最終的にはどうにかしてたでしょ？　そもそも、本当に怠惰な人間ならあんな自分が動き回るような計画、立てないわよ」

スバル達の中に進入して自らも戦い、最終的には裏切って、それが計画の一部。……確かに本当の怠け者なら計画を考える時点で「ああ、めんどくせえ」となるだろう。

「アイツは自分の計画をやり遂げた。……だから怠け者じゃあ無いわ」

「……では、他の感情の事も知っているんですか？」

それは暁の問い。傲慢はツバサの何でも自分で抱え込む点。では、他の感情はツバサのどういった感情なのだろう。

だが、侑子はそれに答える事は無かった。

「知っていても、これ以上は言えないわ。違う次元の人間が関われる境界を越えてしまう。……それに、必要が無いとも言えるけどね」「なぜ必要が無いと？」

前者の理由は侑子が分かりやすく説明してくれたものでしょうがないとも思える。だが、教える必要が無いという理由が分からない。侑子は暁の疑問に対し、視線をスバルの方に向けて優しく微笑む。

「スバル君、貴方なら気付いたんじゃないのかしら？　……貴方のチカラなら、彼等の詳細を見破れる」

「ッ！　……でも、まだ……」

「チカラの制御が上手く出来ないのかしら。……ちょうど良い物があるけど――」

「あの、口を挟むようで悪いけど、スバルのチカラって何だ？」
『私達は聞いていません』

今このタイミングを逃したらスバルのチカラについて聞けない気がする。暁とアシッドはそういった理由でしようがなく口を挟んだのだ。誰かが話している最中口を挟むので後ろめたい。それ故のしようがなさだ。

侑子はマルとモロをどこかに行かせたのだが、暁の言葉により意外そうな目でスバルを見る事になる。

「スバル君、貴方自分の事他の人に話して無かったの？」

「えっと……………はい。戦いが終わった後はツバサ君の計画を話す事ですっかり忘れてて……………」

「……………まあ、あんだだけややこしい計画だったらねえ」

直後、侑子とスバルは2人揃ってため息を付く。理由はもちろん、ツバサの計画が無駄にややこしい点だ。

スバルは暁とアシッドに自分のチカラの事を話し、マルとモロはその間に帰ってきて、大事そうに小さな箱を持っている。

以下、スバルの能力に対しての暁とアシッドのリアクション。暁は苦笑で、アシッドは真剣な声色だ。

「……………隠し事が出来ないな、こりゃ」

『……………いずれにせよ、早く自分で強弱をコントロール出来るようになった方が良いでしょう』

「……………頑張ります」

スバルも暁同様苦笑で返し、皆が納得した所で侑子は話を再開する。

「それじゃあ話の続きね。……スバル君が自分の事を話している間にマルとモロが持って来てくれたコレ、何だと思う？」

そう言っつて侑子が小さな箱から取り出したのは、小さな円形の半透明の何かだ。何の変哲も無い、酷く身近な存在だった。

「……コンタクトレンズですか？ ……それも、カラーコンタクトですよ」

「ええ。……スバル君、貴方の読み取るチカラは今どのくらいになっているの？」

スバルは一瞬「話が逸れてないか？」とも思ったが、侑子への信頼から素直に話す。

「……前は相手の事を知りたいって時にしか読めなかったのに、最近だと……感情が揺れた時とか些細な事で……」

ツバサ、つまりクロウ・リードはスバルのそばにいた事で彼に影響を与えた。ツバサの魔力が火付け役となり、その次元のスバルに潜在的に持っていたチカラが目覚めたのだ。それが、相手の抱えているモノを読み取るチカラ。自分と違う誰かを理解する事が出来るチカラ。理解した後には、スバル自身に選択を委ねるような、彼を迷わせるような、そんなチカラ。

チカラに表裏があるのは、この世の理であるが故だ。

また、そういったチカラに目覚めたのは、同じ星河スバルがいる他の世界。……言うなれば同系統の次元の中でも、彼だけだろう。

ベン図（分からない人は、地面にフラフラが共有部分を持つ程度に重なって並んでいる所を想像すると良い）で例えるなら、チカラに目覚めたスバルのいる次元が侑子の『魔法が関わる世界』と近い位置に在るという事だ。

他の同系統の次元より侑子のいる次元に近い次元に生を受けた。そしてツバサと関わった事が、この世界のスバルがチカラに目覚め、その能力が彼だけにしかない理由だ。

感情の揺れなどの些細な事で相手の抱えているモノが見えるようになったと言うスバル。それを聞いた侑子はカラーコンタクトの入ったケースをスバル達に見えるように持ち上げてみせる。なお、カラーコンタクトの色は紫だ。

「なら、これが必要かも知れないわね」

「……それは？」

『危ない物じゃねえよな？』

スバルの問いにウォーロックがややケンカ腰で侑子に絡む。

「ちよつとウォーロック……！」

スバルがそんなウォーロックを睨みながらたしなめる中、侑子は自分の事であるにも関わらず暢気に肩を竦めて見せた。

「あら？　ずいぶん嫌われているのね。……まあ、スバル君が心配なのは分かるけど、お客にはちゃんと接するわよ？　私。……それとも、私と似たような人がそばにいて、その人が苦手だから私にも苦手意識を抱いているのかしら？」

ウォーロックはその発言で唖っている。……確かに人をからかいながらテンポを飲み込んでしまう侑子の性質は、ウォーロックの苦手とするハープと似ているかもしれない。

侑子はそんなウォーロックを見てニヤツと笑い、わざと話を前に進める。……どうやら侑子にとってスバルだけではなく、ウォーロックもからかいの鴨カモと認識されたいらしい。

「さて、このカラコンの事だったわね。これはちょっと特別なカラーコンタクトだね。昔仕事の報酬で貰った物なんだけど、これである程度チカラを弱める事が出来るでしょう。普段はこれを付けてなさい。コンタクトの色の方も――」

「ッ！ コンタクトの色が……」

『……変わっていきますね』

暁とアシッドの驚きの声。侑子がコンタクトの入ったケースに視線を向けると、徐々に紫からスバルの瞳の色である茶色へと変わっていく。

「――これで良いわ。色を変えてあげた対価も、このカラコンをあげる対価に上乗せしておくわね」

「ッ！ あっ。そうか。対価」

スバルは今思い出したという顔。だが、侑子の店のシステムに関して何も知らない暁は首を傾げる。

「？ 対価？」

『……対等の価値という意味の対価という言葉から考えて、欲しい物を得る代わりにそれと同等の物を差し出す。……といった所でしようか？』

「あら、アシッドは飲み込みが早いわね。先に言っておくけど、その対価は金や物であるとは限らない。対等な対価なら、それで良いの。……そのお兄さんはもうお堅いおじさんの仲間入りかしら？」
「……………」

暁は侑子の言葉で萎縮した。……おめでとう、サテラポリスのエース暁シドウ。キミも晴れて侑子のからかい相手の仲間入りだ。

スバルが暁に同情の眼差しを送る中、侑子はあっさりと話を戻す。

「で、世界の干渉値を崩さない範囲で情報を話した分とカラコンの対価だけど……」

「対価だけど？」

重い沈黙が流れ、やがて侑子は口を開いた。そりやもう満面の笑顔。人差し指を立ててニッコリと笑っている。

「1つ目がスバル君の手料理♪ 心を込めて作ってね♪」

ずごっ

スバル、ウォーロック、暁、アシッドはずっこけた。ずいぶん庶民的な物が来たものだ。一同の「何だそりゃ」という視線に気付いたのか、侑子はその理由を話す。

「あら、そんなのが対価かって顔してるわね。……誰かに自分の食べ物を食べてもらうっていうのは、相手に自分を知ってもらおうという事。自分の手札を明かすようなものなんだから、対価としては良いんじゃない？」

「は、はあ……分かりました。治ったら作ります。……って、あれっ？ さっき侑子さん、1つ目って……」

侑子の毒のある笑みを苦笑いでやりすごすスバル。だが、その途中で気付いた。彼女は手料理という対価が1つ目だと言った。という事は、対価が複数あると考えるのが妥当だろう。

「そう、それはあくまで情報分の対価。カラコン分はもうじき来る子のお世話よ」

「？ 来る？」

『何が？』

「っていうか世話って何だよ」

上からスバルとウォーロック、暁の疑問。侑子は「もうすぐ分かるから話しても意味が無い」とだけ言い、話を逸らした。

「そういえばスバル君、そっちの世界では私と前に会ってから何日経っているの？」

「えっ。……2日です」

「そう。……その間何も無かったのね？」

この間の侑子の問いは全て試すようなモノだった。スバルの心の奥を探るような目。冷たい声色。先程までの侑子とは明らかに違う。

「……無いです……けど……」

『それがどうかしたのかよ』

スバルの不安そうな表情に、ウォーロックはスバルを庇うように彼の前に立つ。病室に緊張感が満ちつつある中、侑子の次の言動は

……。

「運が良かったわね♪」

ニッコリ笑ってそんな事を言った。が、この直後またも声を重くする。

「まあ、理由の無い事はこの世には無いから、それにも何かしらの意味があって、今の幸運はいずれ大きな不幸として帰ってくるかもしれないけど」

『……人のテンションを上げ下げして遊んでませんか、あの人』

アシッドの言葉にスバルとウォーロック、暁は一斉に心の中で頷いた。侑子はその様子を見てニコツと本心の見えない笑みを浮かべ、自分の平手にカラコンの入ったケースを置く。

ヴォン……

次の瞬間、小さな音と共に侑子の手の上に手の平サイズの魔方陣が現れ、ケースは徐々に陣の中に沈んでいく。そして、スバルの膝の上にも侑子の魔方陣が現れ、魔方陣から生えるようにケースが現れた。

「それじゃあ、対価の方お願いね。待ってるわよ」

「「待ってるわよ」待ってるわよ」」

侑子にマル・モロはニッコリ笑って手首から先をヒラヒラと振っている。だが、スバルにはまだ聞きたい事がある。

「ちょ！ 待って！ 能力の対策とかは――」

プッ……

『……通信が切れたようですね』

「どっちにしても、これ以上話すと世界の干渉値を超えるとか言って話してくれない気がするがな」

『確かにそれはありそうだな』

上から順にアシッド、暁、ウォーロックの順。一方、スバルは侑子から送られたコンタクトレンズを見つめながら誰にも聞こえないくらい小さな声で呟いた。

「（……大きな……不幸……）」

スバルは次に窓の外を見る。青い空に、季節柄かやや灰色にくすんだ雲。侑子の言葉は、スバルの中に得体の知れない胸騒ぎを生ませた。

――その頃侑子の店――

「……大方ルシファー達のも能力の事も聞きたいんですけど、そこまで話すと干渉値を超えちゃうのよね。他にどういう能力がある

かも知らないし」

暁たちの読みは粗方当たっていて、干渉値の問題で話す事が出来なかったのだ。

「……あの子が来るのは、スバル君の世界で明日辺りかしらね」

第5話 カラーコンタクト（後書き）

作中のベン図ですが、数学の分野です。多少無理やり加えた感がありますが、アレにも意味があります。……もちろん、すぐに明かすわけではありませんがね。

実は次話と次々話のおおまかなプロットはもう出来ています。…
…ボチボチ命を減らすくらい頑張りますね（苦笑）。

第6話 白猫（前書き）

うーん、やっぱり『明日へ』の次回作という事で色々な説明がない分、展開が速いな。これはフェアIFよりも早く終わるかも。

第6話 白猫

肋骨骨折とは厄介なもので、人が上体を起こすためにお腹を曲げる際、どうしても痛みが走ってしまふ。故に……。

「はあ。……寝たきりって落ち着かないな」

それはスバルの心からの嘆息。今彼に出来るのは、横になっている事ぐらいなのだ。担当医が言うには、腹部を分厚い包帯で巻かれているとはいえ、動こうと思えば動ける。だが、トイレや着替えを除いて基本的には横になっているとの事だ。その際の手伝いはウォーロックが主に行い、あかねがいる時はあかねがしている。

一方、スバルが落ち着かないのには2つの理由がある。1つは、入院した者なら誰でも感じるであろう「暇だ」という感覚。作者自身は体験していないが、本当に暇らしい。そして2つ目が、こうして自分が休んでいる今もルシファー達が何かしているんじゃないかという不安だ。

幸いといった所か、病室に在るテレビで見る限り、まだ何も起こっていないらしい。……静か過ぎて、逆に不安が芽生えるほどに何も無い。

現状として、暁を中心としたサテラポリスメンバーが警戒に当たり、民間でも、町や周りの警戒に協力している者もいる。民間がそこまで自分から動いているのは、ココロサーバーの効果が大きいだろう。

『気持ちは分かるが、きっちり休んで早く治せ。その方が暁達も喜ぶだろ。……ところで、魔女からもらったカラーコンタクトはどう

だ？
』

ベッドのそばでウォーロックがそんな事を言ってくる。ウォーロックの言うカラーコンタクトとは、彼女がスバルに渡したチカラを抑える物だ。

「うん。コンタクトなんて初めてだから少し不安だったけど、もう慣れたよ。度も入ってないしね」

スバルは笑顔でそう答えた直後、病室のドアが叩かれる。

コンコンッ

小さい音だ。話し声で容易に掻き消されてしまうくらい小さな音。スバルとウォーロックは顔を見合わせ、スバルが返事をすると同時にウォーロックがドアを開けに行った。

「はい」

ガラッ

ドアが開かれ、ウォーロックは目を点にして驚いている。

『……誰もいねえな』

そう。開かれたドアの前には誰もいない。小さい音から考えて小

さい子という事も考え、下を見たがそれでもいない。

スバルも最初は首を傾げていたが、ふと思い立ったように片方のコンタクトを取ってみる。

「……猫？」

もしかしたらコンタクトを取ったら見えるかな？ という勘が当たった。その猫は部屋の前にちょこんと座っている。

綺麗な毛並みだ。新雪のように真っ白で、紅くて小さい目が煌々と自身が生きている事を主張する。

猫はスバルが自身を見つけた事を確認すると、ぺこっとお辞儀をしてから病室に入ってきた。

ウォーロックはスバルの視線の先に何もいないのを見て、自分には関わりえない分野だと理解。気を利かせてスバルに言われるより早くドアを閉め、大人しくしている事にした。

結果として、それは良い選択だったのだろう。おかげで、ウォーロックにも白猫を視認する事が出来た。及び、今更ながら普通の猫でない事を猫本人が証明してみせる。

『ドアを閉めてくれてありがとうございます。……病院に猫がいると即追い出されかねないので、姿を見えなくしていたのです』

喋った。それと同時に姿も現したようで、ウォーロックも『うおっ！？』と驚いている。……何も無かった所に突然猫が現れたら嫌でも驚くだろう。

「姿を見えなくって……どうやって。いや、それ以前にキミは——」
『誰だ？』

スバルの疑問をウォーロックが繋げる。白猫はとてと歩き、イスにジャンプ。さらにベッドの上にジャンプしてスバルの目の前に来た。

動物顔なのでよく分からないが、なんとなく笑っているように思える。

『もうお忘れですか？ 私はLIGHTです。……ツバサに生み出されたモノ。ネビュラ・グレイを鍵に封じる際、お会いしましたよね？』

「えっ……でもあの時は猫じゃなかったよね？」

『……姿を自由に変えられるって所か』

スバルがきょとんと首を傾げた所へウォーロックが自身の推測を述べる。ライトはそれにコクリと頷き、続けた。

『ええ。……まあ、個人的にこの姿が気に入っているので他の動物……例えば鳥などにはなりませんけど。今の私の目が紅なのは、その方が似合うんじゃないかなって思ったからです。……あ、姿を消していたのは、私が光を操れるからです。私の周りの光を屈折させて、一言で言えば透明の状態を作っていたのです』

だから、私を察知できる者がいるとすれば、視る目を持っている者だけです。

ライトはそう続けて、スバルは苦笑で応える。

「そうなんだ……。あれ？ それじゃあツバサ君は？ キミがここに居るって事はツバサ君はもう――」

彼の従者たるライトがここにいるという事は、ツバサはもう開放されているのだろうか。友人が戻ってくる事は純粹に嬉しい。

だが、ライトは首を横に振る事で否定した。

『いえ。……あなた方の事が心配だから見守れるように私を外に出したようです。……まだ囚われています』

それはライトの嘘だ。彼は今、別の世界の王女の頼みで異世界にいる。だが、ペットは飼い主に似るという事でライトの嘘が上手いのかどうか分からないが、スバルはそれを信じ、俯いた。

「……そっか。……あ、ライトさん」

『ライトで良いですよ。何ですか？ スバルさん』

スバルはライトに対してニコツと優しく微笑む。

「お疲れ様。良くここまで来れたね」

『つつうか、どうやってスバルのいる病院が分かったんだ？』

スバルの劳いの言葉とウォーロックの疑問。3者の緊張がほぐれたというのもあるだろう。突然ライトの感情が切り替わった。紅い目はうるうるとしている。

『……全くだす。ここまで本当に大変でした。気が付いたらアメロツパの荒野で、そこから星座を頼りに方角を知って、歩いて歩いて歩いて……。時に無断で貨物列車に乗せてもらって……。姿を見えなくして荷物に紛れて飛行機に乗ったは良いけど寒くて凍死するかなと思ったり……。病院の方は姿を見えなくした状態で、ガーデニングをしていたあなたのお母様から聞きました』

「そ、そうなんだ。本当に大変だったんだね」(……母さん、聞かれてうっかり答えたは良いけど姿が見えなくて戸惑っただろうな……)

スバルはその時のあかねの様子を想像して苦笑いしつつ、ライトの背中に腕を伸ばして撫でた。それが起爆剤になったのだろう。ライトは感情を抑えきれないといったようでスバルの胸に抱き付いてきた。無論、猫の状態で。

『ありがとうございます！ 本当の本当に変だったんですから！

……うわぁぁん！』

「……周りの部屋に聞こえないかな？」

個室だから同室の目を気にする事は無いが、外に響いてしまいかねない。

『オレが歌を歌ってその声でこいつの鳴き声を打ち消すってのは――』

「却下の方向でお願いします」

……これはウォロックのボケだったのだろうか。なんにせよ、即座にツツコミを入れたスバルは流石相棒と言った所か。

――中東・某国――

『……マモンよ』

場所は王室。ルシファアは端末の中から実体化してイスに座っているマモンに話しかける。なお、このイスの前の主、つまり国王はすでにマモンの手の内だ。

『ルシファアかい。何か用？』

その声は幼く、無邪気な子供のようだ。現に、マモンは子供の姿をしている。男の子、小学生くらいだろうか。服は豪華で、指には輝く指輪を付けている。肌の色はルシファアやサタン同様浅黒い。

一方、ルシファアはその視線を豪華な服や指輪に向けた。

『……また遊んでいたのか』

『遊んでないよお！ 欲しかったから貰った物だもん！ もちろん

――』

マモンはむすっとした子供っぽい態度でルシファアを睨んでいたが、やがてその視線を無邪気で残酷なそれに変える。

『――僕のチカラで下僕にしてくれ。もうこの国の人は全員ボクの言いなりだよ』

『それで至福を肥やしてやる事をしないのが遊んでると言っている。……それだけの私兵がいればどういう手も打てるだろうに』

呆れの中に若干の苛立ちを見せるルシファア。だが、マモンはそれに気付かなかったようだ。とことん子供らしく駄々をこねる。

『えー。もっと一杯豪華な物とか美味しい物が欲しくいー』

『……………』

『……………分かりました！ やれば良いんでしょ！ やれば！！』

ルシファアの突き刺さるような視線に耐えられなくなったマモンはやけくそ気味に叫ぶ。

『分かれば良い』

それだけ言い、ルシファーは元来た様に電波化。電子機器の中に入っていた。見送ったマモンは疲れたようなため息を付き、イスに頬杖を付いた。

『はあ。……アイツと話してると疲れる。……まあ良いや。一国もクリアしちゃったし、退屈だったんだ。精々楽しませてもうよ。――』

マモンの視線はイスのそばの机に置いてある、スバル達の顔写真に移された。

『――宿主の親友にして、地球を救ったヒーローさん？』

マモン。それは悪魔名。

グリード。それはマモンが司る大罪を英語にしたもの。

そしてその大罪は……。

強欲

――病院――

一方、病院ではライトがようやく泣き止んだ所だった。……言外に、他にも物凄い量の困難があったらしい。でなければここまで泣きはしないだろう。ライトは前足で目を擦りながら謝罪した。

『すみません。……つい感極まって……』

「いや、良いよ。本当に大変だったみたいだからね」

スバルは内心で、「なんでツバサ君はライトをゲイルさんの前とか、そういう手っ取り早い所に出さなかったのだろう？」などと思いつきながら再度ライトの背中に腕を伸ばして撫でる。

ライトはそれで心地良さそうな顔をしていたが、不意に気になった事が出来たかのように話しかけてきた。

『……ところでその怪我ですが』

「ああ、これ？ ……まだしばらく安静だって。……こんな時に何か遭ったら……」

スバルが不安そうな顔をしたのに対し、ライトは逆に不思議そうに首を傾げる。

『いえ、ですから私が言いたいの、どうして治さないかという事です』

「えっ？」

『あん？』

『？ 私が何かおかしい事を言いましたか？』

ライトはキョトンとしているが、スバルにとっては信じられない。少なくとも半月は動けない傷が……。

「……治せるの？」

ファイアリー

『ええ。FIREY……貴方達にはスザクという呼び名の方が良いでしょうか。あの子の生物の回復力を強めるチカラを使えば、治った後強烈な睡魔には襲われるでしょうがすぐに治るでしょう』

「……………」

『あ、強烈な眠気といっても体力を代償に傷を治すのでその疲れからの睡眠です。時間が経てば目覚めますよ』

どうやらライトはスバルの沈黙を強烈な睡魔に対する不安だと受け取ったらしい。そこで彼を安心させるために言ったのだが、スバルの沈黙の理由はもっと他にあった。

「……治るんだ……」

スバルは現実味の無い呟きから徐々に顔を笑顔に変えていく。

「やった！ 治るんだ！ これで何か遭った時、みんなの力になれる！」

戦う事は好きではない。だが、戦わない事で誰かが傷付くのは悲しいし、誰かが傷付いたり誰かが悲しむなら戦う事を選ぶ。

それが星河スバルという人間だから、今回ばかりは戦える事に喜んでるのだ。

「早速ソラさんに電話をしよう。ウォーロック、ハンターを」

残念かな、スバルが寝ている位置からは机の上のハンターが取れない。ウォーロックは対策が無いまま挑んでスバルに何か遭ったらというのを考えて行動を渋っていたが、スバルの考えている事、誰かのチカラになるために戦うという意志も理解していたため、数秒の葛藤の後ハンターをスバルに手渡した。

スバルはウォーロックに礼を言い、電話をしたが……。

『お掛けになったハンターは、電波の届かない場所にあるか、電源が入っていないかで通話できません。ピーツという発信音の後にご用件を――』

求めれば求める時ほどそれは遠ざかるとは良く言ったものだ。俗称、かつゲームで例えるなら、物欲センサーと似ている。夕方なので、料理のお手伝いだろう。

「『……はっ?』」

『……しばらく後に掛けなおすか、ソラさんの身近な人に連絡すれば良いのでは?』

スバルとウォーロックの呆然とした声にライトがアドバイスを与える。スバルは自分の頭の中でソラと親しい人を思い浮かべる。

「……後で掛けなおそうか」

今はちょうど忙しい時間。どちらにしても今電話するのは迷惑になるし、後で電話するなら旅館ではなくソラ本人にした方が早いという事でそういう選択になった。

第6話 白猫（後書き）

それでは次回もお楽しみに。

第7話 見舞い人（前書き）

今回は長くなったので2話に分けました。1つ目がおおよそ2千7百字くらいで、2つ目が約5千字とアンバランスですが、分ける場所がきわどくて……。

そんな訳で、今回は2話更新です。

第7話 見舞い人

「へえー。じゃあ、怪我治るんだ」

「うん。ソラさんは忙しいからスザクが代わりにメール返してくれただけど、今日の午後、学校が終わってから即行で来てくれるって」

スバルとミソラの会話。彼女はゴンタ達やあかねと違って中々面会には来れない。無論それは仕事のせいだ。……しかし、ツバサの責任も多分にあるように思える。

何故なら、彼はミソラが長期的に活動を休止できるように手配したそうだが、その際半分脅迫&やるべき仕事を引き伸ばすという夏休みの小学生のような措置をとったらしい。それにより、ミソラは現在激務に追われているという訳である。

先日は暁がマネージャーに掛け合い、今日は「働き詰めだと体を壊す」というマネージャーの心遣いのお陰で休めたのだ。

そして雑談とこれまでの事を話し、今はスザクの手で怪我が治るという事を話している。

また、スバルはソラにメールを出した。本来なら夕飯の片付けの終わった頃の時間を見計らって連絡しようと思ったのだが、あかねを始めゴンタやキザマロ、ジャックにルナがスバルの部屋に来たから出来なかった。何でも、4人は明日には退院するらしい。ジャックとゴンタは電波変換していたのがダメージ軽減の要因となり、ルナはゴンタにショックを和らげられる様に護られたから。キザマロは火の気に遠い場所に倒れていたため、軽度の症状（火傷）で済んだのが要因だ。

結果として連絡する時間は夜の10時になり、「こんな時間に電話は迷惑だろうから時間を取らないメールで」と思いメールを送った訳である。

あかねは純粹に息子のお見舞いだ。

なお、スザクのメールの内容を見る限り、ソラは宿題で忙しかつたそうだ。中学2年の11月下旬、もうそろそろ受験を考えなければいけない時期だ。

「ふう〜ん。……じゃあ、私その頃には帰った方が良いのかな？
ほら、治す邪魔になるといけないし」

実際の所、ミソラにはちょっと嫉妬もあった。自分にはスバルの傷を癒せるような特殊なチカラは無く、スザクにはそれがあつた、そのパートナーたるソラをスバルが頼っている事実。自分の好きな人が自分以外の異性を当てにするのは、良い気分はしないだろう。

だけど、それを表に出せば優しいスバルの事だから困って、そして悩んでしまう。そんな彼はもっと見たくない。だからその感情を隠しているのだ。

一方、スバルも友人や身近な人の前ではコンタクトを外す事は無い。事件解決の役に立つ事はあるだろうが、日常生活では疎ましい以外の何でもない能力だ。

故に、スバルは自然な反応でキョトンとした。目と眉毛の感覚を開き、口を小さく開けている。

「えっ？ ……えっと……もしそうなら部屋の外に出てもらって、終わったら呼ぶよ」

「？ 私に帰って欲しくないの？」

それはそれでミソラにとっては嬉しい限りだが。
そして、スバルは顔を赤らめながら恥ずかしそうに言った。

「えっと……さ。ほら、ソラさん旅館の方がいるからこっちに長居はさせられないし、母さんは今日パートだから来れないんだ。……だから……その……ミソラちゃんに居て欲しいっていうか……。治療が終わったら反動で寝ちゃうそうだし、看てて欲しいっていうか……」

「……………」

今度はミソラの沈黙。全くの不意打ちの事を言われて驚いている様子だ。そんなミソラを見て、スバルは彼女を戸惑わせてしまったと思い両手を前に突き出して自分のお願いを撤回する。

「ごめん！ ……やっぱり迷惑だよね、せっかくの休日なのに……」

だが、ミソラの思っていた事はスバルの危惧とは真逆だ。ミソラはスバルの謝罪で我に返り、首をブンブンと横に振った。そして、やや照れながらもえへんっと胸を張ってみせる。

「ううん！ ……しょうがない！ そこまで頼られたら断れないね！ ……しかと引き受けたよ！ スバル君！」

「……ぷっ。ははっ。しかと引き受けたって……ミソラちゃん侍みたい言葉」

思わず吹き出したスバル。ミソラもミソラで狙って言ったらしい。不機嫌になる事無く、怒っているのを装いながら、むしろ楽しそうに腕をパタパタと振る。

「酷いよスバル君！ 私は女の子です！ ……せめてくノ一って言って

よ！」

いらん説明だとは思うが、『くノ一』を組み合わせると『女』という漢字になる。女性忍者の名称だ。また、相当昔の言い方で忍者そのモノを『乱波』^{らんぱ}というらしい。

説明、及び雑学終わり。スバルはミソラの反応で楽しげに笑い、ミソラも「もう！」と頬を膨らませた後、抑えきれなくなったように笑った。

「あはははっ」

「ふふっ」

ウォーロックは礼によってハープに連れて行かれ、ライトもスバルとミソラの間係をハープから聞いてウォーロックとハープに付いて行き、しばらくは2人きりの時間を過ごせると思っていたスバルとミソラだが……。

『……怪我を治しに来ただけで、邪魔だったかな？』

病室のドアを開けた所にスザクがいる。隣にはソラも立っていた。スザクは目に見える不機嫌さ爆発といった様子で、ソラもスザクを注意する事無く苦笑いを浮かべている。彼女達の後ろにはウォーロックとハープ、ライトもいるようだ。

スバルはウォーロックに対し「ずいぶん帰ってくるの早いね」などと言おうとしたのだが、自分でその言葉を飲み込んだ。部屋に差し込んでくる光がほんのり赤みを帯びている。それはつまり、夕方という事。学校が終わった後に来ると言ったソラがいるのも納得だ。

「あ、あの……。……もしかして、待っていてくれました？」

ミソラが恐る恐る手を上げて質問をする。その問いにスザクは視線を動かし、次に首を動かしてミソラを見据える。……怒っているらしい。

『ええええ待ちましたとも。小一時間ほどですがねえ』
「「す、すみませんっ」」

スバルとミソラ平謝り。光陰矢のごとし、楽しい時間はあっという間に過ぎ去るとは良く言ったものだ。ミソラが来たのは昼ちよい過ぎぐらいだったが、そこから夕方まで話をしていたのである。

「まあまあスザク。スバル君とミソラちゃんも2人きりの時間を楽しみたいわけだね、そのくらいに――」

『ソラは甘いのよ！ 最近忙しい中何とか来てくれたってのにさあ！ 自分の事だよ！？ もっと怒ったら！？』

流石に見かねたソラのフォローにも怒るスザク。どうやら、忙しい中なんとか学校と旅館の合間を来たのに1時間も待たされたソラのために怒っているらしい。一方、ソラはその言葉でがっくりと項垂れた。

「うゝ……昨日女将から怒られたばかりなのに今度はスザクからゝ……」

『あん？ 昨日？ 何でまた』
「それがね、――」

思わずといった様子で反応したウォーロック。ソラはやれやれといったようにため息を付いて話し始めた。

第8話 治療

——前日・イースター島——

フツ……

部屋を包んでいた赤い光が収まり、部屋は漆黒の闇に包まれる。だが、スザクは自身の周りを取り巻くような炎を作って、部屋は再び明るさと暖かさを取り戻す。岩に囲まれた部屋だ。イースター島のそばにある小島の地下である。

「終わった？ スザク」

部屋の外の暗い道からそろっと現れたのは赤目に赤髪の少女だ。なお、この場所に用事があったのはスザクの方であるため、ソラの方は付き添いだ。何か遭った時、2人が一緒に居た方が都合が良かったろう。

また、スザクの用事というのは……。

『うん。……結界の新しい維持法は私達四神が存在し続ける事。そう決まったよ』

次元を囲う結界を新しい法則の元に定義しなおす事だ。以前はツバサが自分の命が消えたら結界を維持するというものだったが、彼が生きる事を選んだために新しい定義の元に張り直す必要があったらしい。なお、この3週間の間でコクレンにゲイル、藍川が終わっ

たので、ソラがラストだった。

「そっか。それじゃあ帰ろっか。早く帰らないと寄り道って言い訳が通らなくなるし」

時差はちゃんと（スザクが）計算済みだ。学校が終わってから来ているので、ニホンが暗くなる前に帰らなければならない。

『……本来ならそれで間に合ったんだけど、ニホンに付く間際でウイルスの大群に出くわしてね。それを倒してる内に言い訳できない時間になって――』

「怒られたって訳」

スザクの言葉にソラが続き、スバルは苦笑交じりで同情の眼差しを送り、ウォーロックもそれに同意する。なお、結界などあらかたの話はミソラもエーテルとの戦いの後聞いたので、言葉を選ぶ必要は無かった。

「それは大変でしたね。……本当に」

『だな。ウイルスは自然発生した奴がほとんど。人為的なモノで無い限り、多量のウイルスと出くわすなんて運が無いとしか言い様が無い』

1体2体のウイルスに遭うのはウェーブロードを進んでいればよくある事だが、大群となると話は違う。ウイルスは人から創られるモノと自然発生するモノがいるが、いずれにしても『大量に一箇所』というのはまずない。

あるとすればディーラーなど裏の組織が絡んでると見るのが妥当、かつ現実的だ。スバルは持ち前の責任感からか、念のためにウイルスがどの方角に向かおうとしていたかを聞こうとしたが、そこは本職の方がやってくれた。

「あの、そのウイルスって――」

「そのウイルスってどの方角に向かおうとしてたんだ？」

「「「ッ！」」」

部屋に居た全員が声のした方を向くと、そこにいたのはサテラポリスのエース、暁シドウとジャックだった。一同の驚きが大きくなかったのは聞いた事のある声だった事。そしてそれでも驚いたのは、何故彼等がここにいるからだ。

スバルは暁を始めサテラポリスには伝えていない。「暁さんの事だから怪訝けげんがりながら治している所を見るか、興味津々、野次馬根性で見に来る」と思っていたためだ。暁でなくても、現代医学で骨折を瞬時に治す医療法なんて存在しない以上、せせら笑うか頭の心配をされて精神形の病院へ。と、というのが大人の普通の対応だろう。

「……暁さん……何でここに？」

スバルの問いに対し、暁は頬をポリポリと掻き、ジャックはチラッと横目で暁を見る。

「んゝ……。サテラポリスの情報網で？」

「「「『』』……はあゝ」」」『』

対する一同のリアクションはため息。同じ立場であるはずのジャックからもため息が漏れ、暁は焦ったようにそのため息の理由を尋ねた。対して、ジャックとスバルの順で返す。

「……んなバカ正直に言う奴があるか。……アホ暁」
「……完全にプライバシーの侵害ですよね、ソレ」

コクコクッ

スバルの言葉にミソラやソラ、ウォーロックにハープ、スザク。一同が頷く。本気で盗聴されているのではと疑ってしまう。その後、子供達による疑いと軽蔑の眼差しが続き、暁は弁解する。

「……ッ。……ッ！ あ、ほら。サテラポリスであるオレが居た方が退院手続きとかスムーズに行くだろ？ それに、突然治りましてじゃあ上は納得しないから、実際にオレみたいな奴が立ち会わないといけないんだ」

「……じゃあ、何でジャック君がいるのにクインティアさんがいないんですか？」

『……まさか盗聴器とか仕掛けてんじゃないやねえよな？』

ソラとウォーロックにまで疑いの視線を向けられる暁。20代に達した彼は半歩後ずさりながら両手を抑え目に前に出す。

「待て待て。……もうすぐ退院するだろうから言うけど、実は隣の部屋にスバルの護衛として隊員を1人付けているんだ。……そいつが聞いた事をオレ達が知らない訳ないだろ？ ……クインティアは……その……。スバル、最初に謝っておく。ゴメン」
「？」

クインティアが来なかった理由を言いよどむ暁。スバルは謝られ

た事に首を傾げるが、半分予想出来ていた。

「……そんなオカルト信じられない。仕事が山のようにあるから行かない。……とさ」

「……やっぱりですか……」

スバルはため息交じりで返した。クインティアは現実的だ。3週間前の戦いの後の話でも、魔法や結界といったものは『話合わせ・辻褄合わせ』で信じた感がある。それは暁や長官も同じだったのだが、暁は先日、侑子との対話という形で見たので、信じざるを得なくなっただけ。なお、ヨイリーはワクワクした目でその話を聞いていた。科学者として、自分の知らない事には一段と興味が沸くのだろう。

「オレは興味本位だ。……お前が嘘付く奴とも思えないからな」

興味本位と言いつつスバルの事を信じてくれるジャック。スバルはその事に心から感謝し、お礼を言った。

「ありがとう、ジャック」

『……んじゃあ、話がまとまった所で始めますか』

スザクは場の空気が和んだのを見計らい、声を出す。スザクはスバルの近くから全員を離れさせ、スバルの前に浮かぶ。

『……始めるよ。終わるまで動かないでね』

「うん。……お願い」

答えるスバルにも若干の緊張が窺える。スザクはスバルの返答を聞くと目を閉じ、意識を集中しだした。

ポウッ……

刹那、淡く、温かく、紅い光がスバルを包み込む。

「……わぁ……」

スバルの口からため息が漏れる。強制ではなく、あくまで自然に体の中の異常が治っていくを感じる。教育テレビなどで植物の成長を早送りで撮った映像があるが、その治癒バージョンだと思ってくれば良い。

『……終わったよ』

そのスザクの言葉と共にスバルを包んでいた紅い光が消え失せる。

「スバル君大丈夫!？」

「うん。……治ったみたい……だ……ね」

急いで駆け寄って尋ねてくるミソラにスバルは微笑を返し、その瞼は段々細くなり、仕舞いには完全に閉じてしまった。

「ッ! スバル君!？」

『お、おいっ! これって成功なんだよな!？』

『大丈夫なはずだよ』

「……多分、単に――」

ミソラは、返事の途中で目を閉じたスバルを心配して必死で呼び

かけ、ウォーロックはスザクとソラに確認を取り、スザクは頷く。
そしてソラもスザクの意見を肯定しようとした時……。

「……スーッ……スーッ……」

それはスバルの寝息。本当に穏やかな寝息だ。そしてソラはその寝息を聞いてニコツと笑い、続けた。

「――寝てるだけだよ」

『今回はスバル君自身の体力から回復力を使ったからね。眠くもなるよ。……治ったばかりなんだから、ゆっくり寝かせてあげてね』

2人はそう言いながら窓に向かい、鍵と窓を開けて暁たちと向き合う。

「『じゃ、私達はこれで』」

そしてソラは窓から飛び降りた。暁は慌てて窓に駆け寄る。

「おっ、おいっ！　ここ5階だ……ぞ……」

途中で暁の声が消えた。彼の目に映るのは、夕焼けの空を駆ける赤い光。飛び降りると同時に電波変換。後は自分の翼で羽ばたき、飛べば良い。

今思えば、彼女は学校と旅館の仕事の合間に来てくれたのだから、ちゃんとした挨拶が出来ずに去るのも納得である。だが、せめて窓から帰りますくらいの事は言ってもらいたい。実際に目の前で不意打ち的に飛び降りされるとビックリしてしまう。

『……シドウ、呆然としてしないで帰りますよ。星河スバルが治った事を報告しなければ』

「あ、ああ。じゃあ、オレは先に帰る。……ジャックはどうする？」

「あ？ ……そうだな。……—」

ジャックはスバルとミソラを順々に見て、居心地悪げに頭を掻く。

「——ここに居てもする事ねえし、帰る。……実際に見ちまった以上、疑う事も今後無いだろうし。スバルにそう伝えとけ」

後半はミソラに宛てられた言葉。つまり、「自分の目で見た以上、オレはそういったオカルト方面も信じてやる」という、彼らしい素直ではない意思表示だ。おまけを言えば、「スバルに伝えとけ」という事は彼が目覚めるまで一緒に居てくれという事。

それがスバルとミソラを2人きりにさせるためだと気付いたハープはクスツと微笑み、ウォーロックの腕を掴んだ。

『ポロロン。それじゃあウォーロック、私達もFM星人同士、その辺を散歩でも行きましょうか』

『はあ！？ 何でお前と！？ 大体、オレはAM星人だ！！』

『でも、FM星育ちではあるでしょう？ ……クスクスツ』

『はあああああつ！！？ ああ言えばこう言いやがってえええええ！！』

「ロック君、病院ではお静かにっ！」

『ッ！ ……ぐぬぬぬぬっ……』

ミソラの注意に押し黙るウォーロック。そばではスバルが寝ており、ウォーロック自身彼にはゆっくり休んでもらいたいと思っている。だが、ハープの言動もムカつく。

ウォーロックは今、そういった感情の板挟みにあっているのである。

結果、その葛藤の隙を突かれてハープに拉致られるウォーロック。全員退室し、病室にはスバルとミソラの2人だけとなる。ライトもその辺を散歩して来るそうだ。

ミソラは、友人が去っていったドアに笑みを送る。厳密に言えば、個性だらけで、それでも優しい友人へだ。そして、彼女の視線はスバルへと向けられた。

「……私達、本当に幸せ者だね。……ロック君にハープ、暁さんにジャック君。ソラさんにスザク……。他にもたくさんの人から気を遣って貰ってるんだから。……早く目覚めて、みんなを安心させてあげようね。……スバル君」

「……むにゃ」

スバルの寝息返事にミソラはクスツと吹き出し、優しい目でスバルを看ていた。

その頃、ウェーブロードではソラとスザクの電波変換したスザク・フレアがいかににも大事な事を思い出した声を上げた。

「あっ！ ……暁さんにウイルスがどっちから来たか言うの忘れてた……」

ピピピッ

『ソラ、その暁さんから電話』

「あ、うん。繋げて」

気がかり事が解決できそうとの事で、ソラはウェーブロードを移動しながら暁との電話に応じる事にした。

「はい」

「あ、ソラか？ さっきはスバルとミソラの空気を読んで早々に去ったが、一応こっちの情報も聞いておこうと思ってな。……見た感じ移動中みたいだからコレだけ聞くぞ。……ウイルスはどっちに向かっていたか」

どうやら向こうも同じ用件だったらしい。ソラはその時の様子を思い出し、左腕を真横に突き出した。

「あっちです！」

「分からん」

『……西です』

上からソラ、暁、スザクの順。ちなみに、この3つのセリフはほとんど間を置く事無く続けられ、とてもテンポの良いボケとツッコミ、そして訂正となった。南のイースター島から北のニホンに向かって飛んでいたのだから、それで左腕という事は西となる。

「……はあ。……んじゃ、切るぞ」

「……はい。方向音痴ですみません」

暁のため息とソラの謝罪により電話は切られた。

一方、シーサー城では長官が頭を抱えて目の前の書面を見ていた。3週間でニホンが誇るコンピューターと施設が直ったまるか。そんな訳で、未だWAXAニホン支部の拠点はシーサー城となっている。

「……ふうむ。……中東の王国からパーティの招待状、か。……なぜこの時期に……。しかし、行かねば礼儀がなっていないと見なされて外交に傷が付くか……。どうしたものか……」

外国語で書かれた招待状にはこう書いてある。

【先のエーテルとの戦い。それを治めた英雄、ロックマンこと星河スバルを我が国で感謝と敬意の意を込め表彰したい。ぜひとも我が国へ足を運ばれよ。】

そして、全く違う国と場所。1人の電波人間がビルの頂上で風を浴びていた。

「……………」

追われる側は空気に敏感だ。不穏な気配や自分に危険が及ぶ気配。そういった空気を感ずる事が出来なければ、追われる側として生きていけない。

「……不穏な気配。……何かが起きようとしているのか。……ンフフフ……」

バサッ

そしてその者は黒いマントを翻し、その姿を消す。

煙のように。

始めからその場に居なかったかのように。

……その者の名前通り、亡霊のように。

第8話 治療（後書き）

それからクインティアの意見ですが、やっぱり電波の物質化までしてしまうご時世で『魔法』って本当にフィクションだと思うんです。そこに生きる真っ当な大人だったらまず自分の目で見ないと信じないんじゃないかな？　と思い、クインティアや長官に関しては魔法や結界などの話は積極的に信じないという設定にしました。…実際に見たらちゃんと受け入れるだけの器量は持つてると思うので、実際に見たら信じるでしょうけどね。

…現実では、自分にとって都合が良いか悪いかでその事実を受け入れたり受け入れなかったりする大人もいるけどね。

さて、強欲の名を冠するマモンがどういった手を出すか、気付いた方も多いでしょうね。そして、笑い声の通りあのシナリオマニアさんも登場です。

第9話 招待状（前書き）

退院から3日後です。事情説明のため地文が多いのはご容赦を。

第9話 招待状

スバルが退院して3日後。当の本人は外の雨音を聴きながら自分の部屋で読書をしていた。今でこそ穏やかな午後だが、3日前は色々と騒然としたものだ。何せ、通常なら全治数ヶ月は掛かるであろう怪我が数日で退院に至ったのだから。そのお陰で医者からは、「治ったのは医者として嬉しいけど、どうやって……何で治ったんだ？」という嬉しさと怪訝さの両立した表情で送られる事となった。

スバルのチカラで心を察するまでも無く、表情にその思いが如実に表れていたのである。本当の事を黙ったままというのはロックマンとしての正体を隠していただけに慣れていたつもりだったが、未だに居心地が悪い。……まあ、居心地が悪いと感じるのはスバルが良心的な心を持っているからに他ならないのだが。

そんな彼が一番困ったのは、母親たるあかねに対してだ。どうやら暁はあかねにスバルの怪我がどうやって治ったのか話していなかったらしく、詳細を聞かれると共にジト目にさらされたものだ。だが、最終的にはあかねが折れて、「話しても良いと思えた時に話してちょうだい」という結論に至った。無理に聞かないのは息子への信頼という奴である。

なお、最初スバルは……。

（暁さん……っ！ 何で話してくれないの！？）

などと思ったのだが、今はその方が良かったように思える。自身も自分の目で見て始めてツバサや侑子の関わる分野、つまりオカルトを（渋々、苦手ながらも）受け入れたのだ。きっとあかねも、実際に自分の目で見るまでは信じないだろう。

……ウォーロックなどの存在もあっさり受け入れたから現実として受け止めるだけの器量は有るには有るだろうが、確実に信じてもらうには実際に見てもらうのが一番。かといってスバルのチカラは分かりづらいし、良いモノという解釈もしがたい。

よって、自分がロックマンである事を隠していた時同様、知らなければならぬ時が来るまで黙っている事にしたのだ。

白猫状態のライトは、スバルが退院した翌日、散歩から帰ったスバルが展望台のそばで拾ってきたと言って家に置いてもらえる事になった。毛並みが綺麗で可愛いという事で、あかねは満足げな笑顔でOKを出したものだ。

そして現状、スバルはこれといってする事が無い。ルシファー達のような存在が居るのにする事が無いというのもアレだが、わたわた動揺したり騒いだりで警戒するより、どっしりと構えていた方が精神的にも余裕があるだろう。……もともと、スバルは何か遭ったらずぐに自分も戦うと言ったのだが、長官や暁がそれを許さなかった。退院したばかりという事で、しばらくは念のために休めという事らしい。

だが、父親譲りの正義感を持つスバルにとっては……。

「……………はあ。……やっぱり落ち着かないなあ……」

ため息を付いて読んでいた本を閉じ、独り言のように呟いた。誰かが頑張っている間に自分が何もしないのは落ち着かないし、自分の知らない所で誰かが危険な目に遭ったとなれば自分がそこに居ればという悔いや罪悪感に似た感情に襲われる。

一方、好戦的なウォーロックはスバルのハンターの中から彼らし

くもあり彼らしくも無い事を言った。なお、ライトは猫の状態でスバルの背に体重を預け、気持ち良さそうに寝ている。

『何言ってるやがる。退院して自宅療養しろって言われてんだろ？』

向こうは動ける奴等に任せて、オレ等はじっくり休むとしようぜ』

「んな暢気な……」

スバルはウォーロックらしさに苦笑した。彼らしいのは何だかんだでスバルの事を気遣う優しさ。彼らしく無いのは、休む事を優先するが故に好戦的な態度ではない事だ。

『それしかねえだろ？ 奴等の居場所も……っていうか奴等の事全体的に分かってねえんだからよ』

「そりゃ……そうだけど……」

ウォーロックの的確な考えにスバルは押し黙る。戦闘経験が豊富な分、こういった事ならウォーロックの判断力は確かだ。所在地はおろか、能力だってルシファー1人しか分かっていない。

『分かったら大人しく休め。……オレは退屈な事以上に辛気臭せえのが嫌いなんだ。……ったく、ただでさえ雨で辛気臭せえってのに、お前まで落ち込んでたら辛気臭さ倍増だぜ』

ひたすら核心を突くまいとしているが、ウォーロックはスバルの事を思っている。スバルも長い付き合いからそれを察し、再び薄く笑って応えた。

「酷いな、もう。……分かった、大人しくしてる」
『おう』

ウォーロックは適当かつ無関心な態度で応じるが、スバルはここである事に気付く。

(……あれっ？　ボク、ロックに諭されてばかりじゃない？)

このままでは何だか癪^{しゃく}だ。よって、お返し決定。なるべく静かな声でウォーロックに話しかけた。

「……ロック」

『あん？　まだ何かあんのか？』

「ありがとう」

『……けっ！』

スバルの礼に対するはウォーロックの照れ隠しの舌打ち。スバルは、ウォーロックが思った通りの反応をしたので小さい声でクスクスと笑う。素直ではないウォーロックの事だから褒めたりお礼を言くと素直に応じずに照れた態度をとる。スバルはそれを狙ったのだ。

スバルの性格をフォローするために言っておくが、彼は他の人からかわない。だが、慣れ親しんだ相手だからこそからかうというものもある。嫌われて良い相手の場合と、嫌われる心配の無い相手の時だ。スバルとウォーロックは、間違いなく後者であろう。

現に、ウォーロックはクスクス笑うスバルをジーツと睨んでいたが、しばらくすると舌打ちと共にそっぽを向いた。

スバルはウォーロックとのやり取りで幾分か気持ちが悪く着き、今は休む事を専念する事にした。スバルが再び本を開いた時、自分のハンターから電話の着信音が鳴り響く。

ピピピッ！　ピピピッ！

「？　誰だろ？　……暁さんだ」

『ほお、暁ねえ。読んでみろよ。もしかしたら思ったより早く暴れられるかもしれねえぜ？　……くつくく……』

「……うん」

ウォーロックはもういつものウォーロックに戻ったらしい。スバルは呆れながらも通話ボタンを押し、暁との対話に応じる。

「はい、何か遭ったんですか？　暁さん」

「いきなり物騒だな。……まあ、警戒する気持ちも分かるがな」

「うっ……。すみません」

暁からの電話についてキパキした口調で応えてしまい、暁からは苦笑された。暁からの電話Ⅱ緊急事態というのはあり得るが、いつもそうだとは限らない。緊急事態で無いのは嬉しいが、スバルから見て笑われたのは恥ずかしい事この上ないだろう。

ハンターから出ているエアディスプレイには暁の笑いを堪えるような顔。スバルは居心地の悪さからムツとした顔で本題に入るように促す。

「で、何の用ですか？」

「ははっ。そう怒るなよ。……なあスバル。お前、パーティーって好きか？」

「……はいっ？」

明るく笑いながら宥める暁の言葉に、今度はスバルが素っ頓狂な声を上げて目を点にした。

暁の話を纏めるところだ。

一国の王様が地球の危機を救ったスバルを自国に招いてパーティを開いて親睦を深めると共に、国王としてではなく、地球に暮らす一個人としてお礼も言いたいらしい。

なお、ロックマンの正体は世界のお偉いさんならほとんど知っているくらいになっている。その方が表向きでもスバルが動きやすいだろうというサテラポリスの総意と厚意だそうだ。

一通り聞いたスバルは困ったように左腕を頭の後ろに持って行った。

「えーっ……どうしよう……」

スバルが困っているのは、指定された日に予定があるとかそういったものではない。相手の気持ちに応えたいのは山々だが、相手が一国の主で一個人としてお礼を言いたいというのは、スバルの性格上遠慮を抱いてしまう。自分より明らかに目上の人間が恭しく頭を下げたら、居心地が悪いにも程がある。

暁はスバルの心情を察したのか、明るく笑ってみせた。……普通こういう状況では苦笑しながら諭すものだが、理由を聞けば納得してくれるだろう。

「おいおい、王様にいちいち遠慮してたんじゃ、今までのお前はどうなんだ？ ゲイルも王様だぞ？」

「……あつ。……そうだった……」

『アイツ……普段は変態以外の何でもねえが、一応アレでも国王なんだったよな……』

スバルとウォーロックの今思い出したというポカーンとした顔。そう。スバル達の仲間……友人と定義しておこう。その人物はれっきとした国王だ。

彼と国民の間に高い壁は無く、当たり前前に飲み友達として成り立っていきそうないフリーなので忘れそうになるが、国王なのだ。

スバルも敬語とはいえツツコミを入れた事もある。暁とはまた違ったお兄さんキャラだ。……変態ではあるが、頼りになる。

「でも……」

やはり緊張する。

暁はスバルらしさで薄く笑みを浮かべ、こう言った。

「別にお前だけって訳じゃない。オレ達も招待されてるし、お前の友達もいくらか連れて来て良いそうだ。……ほんと、嫌味なくらい豪勢だよな。中東の大国は」

「ははっ……」（この様子だと暁さん、最初に聞いた時に思いっきり驚いたんだろうな……）

後半の暁個人の感想にスバルは苦笑いを浮かべる。なお、スバルの内心の言葉はもっともだろう。スバルの友人や暁達となると、今連絡の付く人だけでも9人近くにも及ぶ。それだけの人数を気前良く招待する金持ちという事だ。

『しかし、なぜ今なのです？ 現状、正体の見えない敵に対しては慎重に行動するのが定石でしょうに』

そう言ってスバルの肩からひよこつと頭を出したのはライトだ。

なお、ライトが人の言葉を話すのはあかねには伏せている。流石にこれは驚きすぎて卒倒しかねない。

ライトは『……少なくとも、主ならそうするでしょうという意見ですが……』と続けて、暁もその言葉に同感のようだ。

「ああ。その事は長官も気にしていた。……けどぶっちゃけると、断ると外交で色々問題がありそうな国なんだよ。色々サテラポリス全体の資金援助とか、お世話になっている国だからな」

スバルはここで1つ大きなため息を付いた。そういった理由があるのなら早く言ってもらいたい。答えは決まった。

「はあ。……そういう事なら行きます。行かなかったせいで暁さん達に迷惑かけられないですから」

「そうか？ 悪いな。じゃあ、クインティアとジャックにはオレから言っておくから、お前はその他の奴を誘ってくれ」

「はい」

スバルが応えるのを確認した暁は口元を引き伸ばしたような笑みを浮かべ、「それじゃあな」と言いながらチョップするように左手を上げ、通話を切った。

「よし、それじゃあまずは委員長達からだ」

スバルはそう言ってハンターに手を伸ばし、ライトはスバルの作業の邪魔にならないように即座にスバルと背中合わせになるように舞い降りた。そして、スバルのベッドのそばの大窓に歩いて行き、依然降り続く雨と雨音を聞きながら心の中で呟いた。

《……本当に、純粋なパーティなら良いのですが……》

これから立ち向かわなければいけない相手で【ネビュラ・グレイ】が関わっているという事実から、ライトは胸騒ぎを覚えた。ネビュラ・グレイがどれほど狡猾で恐ろしいかは、自分の主を視て知っている。……『今』という時期が、彼女を不安にさせた。

第9話 招待状（後書き）

次回はご招待を受けた国へ行きます。メンバーは秘密です（クスリッ）。

次の更新はフェアプレイズを予定しています。

第10話 暗い国（前書き）

超々々待たせてしまつてすみません。……何だか既に忘れ去られていそうですが、ボチボチ復帰です。

第10話 暗い国

数日後、星河スバルを含めサテラポリスの面々は中東の一国に来ていた。

パーティへの参加者は、星河スバル、響ミソラ、委員長トリオ。サテラポリスからは、長官に暁シドウ、クインティアとジャックだ。もちろん、彼等のウィザードも一緒である。

なお、黒蓮^{コクレン}とゲイルは自国の要件で忙しく、藍川も数週間前のエーテル戦以降、ゲイルに拉致られて……もとい、半ば強引に勧誘を受け、バルズランドで暮らしている。ソラは旅館の仕事が忙しいらしい。ライトはツバサがいた時同様スバルの持つシャインPGMの中にいる。ライト（猫）を飼っている事はルナ達には話したが、異国にまで連れてくると流石にその正体を怪しまれるだろう。

スバル達が今いる国だが、かつては有数の石油大国だったが、それは2000年近く前の話。すでに資源は枯渇し、今や電力面は風力発電や太陽発電などの自然発電に取って代われ、そこから「アノ頃が忘れられない……」という過去の栄光に縛られる事数年。結果、再び立ち上がるという頃にはニホンやアメロッパなどの諸国に対して電波テクノロジーで遅れを取る形となった訳だ。……だが、

「しかしながら、その後猛烈な追い上げを見せ、今や経済面において世界トップ20に入った訳です」

キザマロは右手の人差し指を立てながら自身の知識を見せる。補足を加えれば、リアルウェーブやウィザードなど、電波テクノロジーの方面ではまだまだニホンやアメロッパ、シャーロには負ける。その国の人でなく、キザマロがその国の事を説明したのは何の事はない。暁が、「迎えが来るまで暇だからとりあえずこの国の説明

を――」と言った矢先、キザマロが立候補。解説役を名乗り出たという訳である。

……あえてもう一度、だが。と、言わせてもらおう。

だが、そんな事は歴史の教科書に載っている周知の事実。当たり前前に授業を受けていればそんな解説はいらない。……しかし、この場にはそれが必要な少年が1人いた。

「ふーん。……つまり……ものすげえ頑張った国って事だな！」

ゴンタだ。彼は授業中、寝てるか別の事（主に給食の事）を考えて授業を聞いていないかで、テスト前は毎回委員長のお世話となっているのだ。……なお、まともに授業を受けた場合、特に算数において難しい問題に対して頭から煙が出る。……まあ、それがゴンタと言う人間の全てでは無い訳だが。

「……それにしても」

と、不意に言葉を発したのはミソラだ。彼女は首をキョロキョロと動かして左右を、体を反転させて後ろを見渡す。なお、後ろには暁や長官がいたため、彼女は体を後ろに向けた後、上半身を横に傾けて後ろを見た。そして、ポツリと小さい声で言う。

「……なんか暗いね……。活気が無いっていうかさ……」

彼女が小さい声で言ったのは、暗いや活気が無いという言葉その国の人に聞かせたくないという気遣いからだ。

そして、国の人には悪いが、かつ、スバル達もすでに思っていた事ではあるが、確かに彼女の言う通り、空港の雰囲気はやや暗い。理不尽なリストラに遭ったかのような、明確な意味と理由をもつ俯いた暗さではない。覇気どころか、生氣すら感じられないような、

虚ろな暗さだ。

業務は真面目にやっているが、どこか仕草が機械的で、最も顕著なのは『目』だ。ぼんやりしていて、遠くを見ているかのような。

……まるで、夢を見ているかのような、そんな目。

その時は、単なる小さな違和感、印象でしかなかったし、その人達に話しかける事も出来なかった。『キキッ』という短いブレーキ音と共に、迎えの車が到着したからである。

「……お待たせ……しました……」

車から出てきた中年男性も例によって暗い。車自体は急成長を遂げた国だけあって、金持ちや国のお偉いさんが乗るような細長い高級車だ。

不気味という点で躊躇いがあるが、ここまで来て断る事は出来ない。全員が乗り込むと、車は重低音を立てて走り出した。

(……クウエービア……)

スバルが内心で呟いたのは、今自分達がいる国の名前だ。そして、彼の頭の中に在るのは1人の顔。以前病院で暁から見せてもらった、不可思議な行方不明者の写真の中に、この国の出身者がいなかっただろうか。

不可思議な偶然、そこから生まれる不安。胸騒ぎ。……スバルは視線を窓の外から下へ、自分の手の平に向け、手の平をグッと閉じた。戦わなければいけないかもしれない可能性に対して、意志を固めたのだ。それは暁やジャック、そしてクインティアといった『ウラ』や戦いに詳しい面々も同じ事だろう。

キキッ

車が止まる。車から降りた一同の視線に映るのは、白を貴重とした城だった。天気は、今にも泣き出しそうな曇天。

「……こちらです」

運転手兼案内役の男性が手を奥に向ける。歩く廊下は幅が1、5メートルほど。床にはレッドカーペットが敷いており、ロウソクのような暖色系の照明が、廊下とスバル達を照らす。側面には別の道や部屋があったが、それらを素通りして歩を進める。どうやら、入り口からパーティ会場となる大広間は一本道らしい。

ギィツという音と共に、両開きの扉が開かれる。人は大勢いたが、その表情は案内役の男性と同じだ。一応動くし話すし言葉の応対も出来ているが、それでもどこか、遠くを見ているような、上の空で違う現実を見ているような目。その疑問が伝播して一同に伝わり、一見華やかな空気に重い陰を降ろす。

「……さあ、どうぞ。……ご自由に料理をご馳走になってください……」

案内役の男性はそう言って、後ろ手でドアを閉める。

「あ……ああ……」

暁はそう答えるが、流石に数が多い。これだけの人数がそんな表情をしているのは、偶然では片付けられないし、不気味にも思うだろう。それはクインティアやジャック、スバルといった戦闘面で勘の良い者はもちろん、ルナやキザマロ、ミソラ。……流石のゴンタも気味が悪く思えたらしく、若干後ずさる。

『……あゝあ、やっぱり警戒しちゃうか。まあ、城の中まで入れ

ただけでも上々かな』

一同が疑念や不安から動きが止まった時、奥の階段から降りてくる人物がいた。数名の虚ろな目をした人間をそばに置き、階段を下りてくるのは、この国で行方不明になった少年だった。……ただ、彼の顔はルシファーやサタンのように浅黒い。

歳は12, 3くらい。あどけない表情だが、瞳の中にギラリと怪しい光が宿っている。宝石を埋め込んだ指輪と豪華な服もしており、髪もサラサラ。おおまかな顔の輪郭で暁から見せてもらった少年だと判断できるが、写真の顔は目の前の人物より痩せこけており、目には暗い絶望があった。

『まあ、最初からバレると思ってたから別に良いんだけどね。こいつらをこんなにした僕が言うのは何だけど、こんな表情じゃ不審がられちゃうからねえ』

続けられる言葉。今彼は暗い絶望ではなく、どこか自信に溢れ、それでも何かを求めているような目をしている。そして、その少年の口ぶりからとある事実が浮かび上がる。暁は答え合わせのように、単刀直入に尋ねた。口元には、挑発的な笑みを湛えて。

「……こいつらをこんなにして事は、キミにはそういう能力を持っているという事かな？ ……浅黒い肌の、ルシファーのお仲間くん」

浅黒い肌。そして特殊な能力。それは先日スバルが戦ったルシファーと似通った特徴だった。

第11話 影より現れし者

『うん、そうだよ。これは罨』

あっさり罨だと言つてのけた。……そもそも彼は、最初に『最初からバレると思つてた』と言つていたから、可笑しくないと云えば可笑しくない。

『国と国の関係上、もし裏があると気付いていても、断る訳にはいかないもんね?』

ニヤツと毒のある笑みを見せた少年は、胸に右手を当てて自身の名を名乗る。少年のではなく、何モノであるかの名を。

『今のうち名乗っておくよ。僕はマモン。司る感情は強欲。……キミ達は今ここで捕まり、明日にはこの世とおさらばって予定なんだから、冥土の土産に教えてあげるよ』

「……オレ達が、大人しく捕まると思っているのかい?」

暁が腰に下げているホルダーから自身のハンターを取り出す。スバル達もそれに応える様にハンターを取り出し、ルナやキザマロ、ヨイリー博士といった非戦闘員を護るように周りをかこう。

ロックマンを始めとする電波変換メンバーを目にしてもなお、マモンの余裕は崩れない。ただ、クスツと笑つて指を鳴らしたただけだ。……たったそれだけだった。なのに、今まで虚ろに目の前すらまともに見ているのか怪しい者達が一斉にスバル達に視線を向けたではないか。そこで、マモンは静かに口を開く。

『……ついだから話しておくけど、僕的能力はその人間が望む夢を見せてあげる事。そして――』

パチンツと、再び指は鳴らされる。そして今度は、低い唸り声を上げながら人が、人達が、虚ろな目と手をロックマン達に向けて迫ってくる。まるで、その先に自らが望んだ未来が待っているのを知っているかのように。

『夢に降^{くだ}った人間を操る事。こいつらは、自ら望んで僕の操り人形になっているんだよ』

この国に着いてから気付いた事はそれだ。目が虚ろだったのは他でもない。夢を見ているような目というのは比喻でもない。まぎれもない事実だったのだ。

だが、それらの話をスバル達が全て聞けたとは言いがたい。余裕が無いのだ。通常の間と比べ、腕力も何もかも上のはずの電波人間が、通常の間を押されている。

「ッ！ ……これは……通常の間の腕力じゃないぞ……」

アシッド・エースから零される言葉。現在、電波変換メンバーは相手の腹部を押さえて食い止めている状態なのだが、その言葉どおりその力は通常の間とは思えないほどだった。例え、人が雪崩のようにスバル達の輪の内側に向けて迫っているとしても、それだけとは思えない力だ。……いや、相手の力の強さだけではない。まるでゾンビのように呻き声を上げながら手を伸ばしてくる者達に対しての生理的拒絶。気味の悪さが、スバル達の力を十二分に出す事を妨げていた。

そしてマモンは平然と、暢気に肩を竦めながら話す。

『それだけこいつらが夢の世界に首ったけでただけでしょう？ 安定した収入であれ何であれ、人間の欲のチカラは強いんだから。：お前達を牢に入れば、もっと良い夢を見られると思わせるような暗示を掛けているから、必死にもなるよねえ？（……まあ、この国の人間が求めているのはそんな外側の望みじゃないんだけどね……）』

後半は小声で言ったため——というかロックマン達の周囲は夢に囚われる亡者の呻き声で聞きたくても聞けない——聞こえず、徐々にその輪は内側に狭まっていく。後ろの長官やヨイリー博士に負担を強いないように気を遣い、結果前方への力が疎かになって押される。そして何より、話を聞く限り相手は操られているだけの存在。荒っぽい事は気が引ける。

『……チツ。しょうがねえ』

「ッ！ ウォーロック！？」

その後ろ向きの手法が気に食わなかったのだろう。ウォーロックは実体化するなり人の手が届かない天井近くまで移動し、腕を振り上げながら真っ直ぐ斜めにマモンに突っ込む。……いや、ウォーロックだけではない。コーヴァスやヴァルゴ、オックスといった武闘派ウィザードは人が邪魔にならないように天井近くに移動してから攻撃を開始した。盾として人間を使われないように、直に近距離から攻撃を加える算段だ。

『こういうのはとっとと敵の親玉倒した方が早いだろうが！！』

『ケケケッ。ジョーカーちゃんはそのままそいつら押さえてな！』

抜けたら欲望の亡者どもがなだれ込むぜえ！？』

『……いたしかた無いな……』

ウォーロック、コーヴァス、ジョーカーの言葉。ジョーカーは最初から実体化していたため流れの関係上押さえる立場となっている訳だが、そこから抜けるという事は即なだれ込まれ、捕らえられる危険を指している。

だが、ウォーロックやコーヴァスの爪が、ヴァルゴの杖が、オックスの拳がマモンに届く事は無かった。別にそばにいた人間を盾に取った訳ではない。誰もマモンに触れられず、地面に落ちたのだ。そしてそのまま、そばにいた亡者に囚われていく。

「……えっ？ ……………何、が……」

あまりにも突然すぎた。

ウォーロックの實力はスバルも十分理解している。だが、何もせず戦闘不能になる事などあり得るのだろうか。……欲望を刺激し、相手を操るマモンの能力を考慮しても、強い精神力も併せ持つウォーロックが容易に飲まれるとも考えづらい。

「ッ！ スバル！ 集中しろ！！」

「ッ！ しまつ……ッ」

意識を他に回し過ぎた。手元が滑り、押さえていたバランスが崩される。

均衡というのほろいモノで、一度崩れたら止めるのは困難だ。

暁がフォローを入れるための指示を出すより早く、欲望に飲まれし者の手が迫る。

『よし良くやった。そのまま牢にぶち込んでねえ』

捕らえられ、足が地面から浮く中、マモンのそんな声と指を鳴らす音が聞こえる。その時、ロックマンはチラリとマモンを視界に入

れた。それは人垣の上から微かに見えた上に偶然だったが、それでも、はつきりと見えた。

マモンの後ろに、尻尾がある。太く、しなやかで、狐のそれを思わせる流線型。恐らく、それでウォーロック達を叩き落したのだろう。

まだ、何かある。

スバルがそれを察した頃には、すでに部屋から廊下に移動し、マモンの姿が見えなくなっていた。

牢にて、長官が言うには、罾である事は薄々気付いていたらしい。だが、断ったら外交の点で上から圧力が掛かり、何か遭った時のために電波変換が出来る面々を揃えていたのだが……。

「……それが裏目に出て即座に動ける主戦力が捕らえられたという訳ね……」

「……………」

クインティアの容赦ない事実確認の前に項垂れる長官。あえて長官へのフォローを入れるなら、戦闘になった際に足手纏いにならないように、ヨイリー博士の作った小型のバリアー——電波体の一切を拒絶する——を持っていたそうだが、生身の人間が相手では効果が無い。

一方、牢といえば通常なら男女で分けられそうなものだが、それが無い。恐らく、『牢へ入れる』という命令が優先して、その辺の配慮は無いのだろう。……そのくせ、ヨイリーの見立てでは、牢には通信妨害用の電波や電波体が触れると激痛が走るようにジャミングバリアが施されている。全くもっていらんお世話だ。……まあ、

その辺は最近の電波技術の発達に伴う電波犯罪対策とも言えるので悪く言う資格は無いのだが。

一同がやるせないため息をつく中、スバルは自分のハンターに小声で語りかける。ウォーロックは勿論、ウィザードは全て別の場所に囚われたので、彼が語りかけているのは別のモノだ。

「(……ライト、牢の外で実体化して鍵を取ってこれる?)」

今の今まで内の混乱を避けるために表に出なかった訳だが、状況が状況なためそれも仕方ない。ライトはしばらく俯いて考えていたが、ピクツと耳が動くなり顔を上げ、あるモノの名を呟いた。

『……SHADOW?』
シャドウ

「えっ？」

「？」

スバルが疑問符を声に出したからだろう。同じ牢のジャックが気になってスバルの方を向くと、驚いたような表情で上体を逸らしてスバルから引き、恐る恐るスバルを指差した。……厳密には、スバルの隣の暗い壁に。

「……ス、スバル……それ……何だ……?」

「? それ? って……」

どれ?

と、問おうとしたスバルが固まった。暗がりから、影から、平面から、人型の何かが盛り上がってくる。

シルクハットを思わせる帽子に鳥のクチバシを模した杖。そして……。

「……んふふふ。ずいぶん間抜けな罠に引っかかったものだな、サテラポリス」

という個性的な笑い声を聞いては、もうこの人物しか思い浮かばない。

「ッ！ ハイー」

「どーん！」

見張りがいる中、迂闊な発言は慎むべきだった。

スバルはジャックから口を塞がれて後頭部を壁に打ちうけ、その痛みに若干涙目になりながら後悔する。結論を言えば、超痛い。

……また、幸いにも見張りが来る足音もしない。どうせ牢から逃げられないと舐められ、警備面は甘いのだろうか。

「(……だったら何も口塞いで壁に叩き付けなくても……)」

「(しょうがないだろ。もしそういうのに反応するようになってたらどうするんだよ)」

スバルはジャックをジト目で睨み、歳相応に唇を尖らせる。その不満をジャックは簡単にいなし、目を影から現れた道化師に向ける。その目は、警戒のそれだ。向かいの牢の暁やヨイリー、ルナにキザマロも、似たようなものである。

「(……で、お前は何しに来たんだ？ ハイド)」

第11話 影より現れし者（後書き）

さてさて、マモンの身に起きた変化は次話でも明かしません。次話の更新メドは未定ですが、出来るだけ早く仕上げるようにはします。……何分ブランクが長いので自分の執筆ペースからの計算が出来ないという……。

とにもかくにも、次話もお楽しみに。

第12話 SHADOW（前書き）

お待たせしました。

……いきなりですが、復帰後久々に書いた文なので、どこか不自然な所があるかもしれませんが、その時はご指摘をお願いします。

第12話 SHADOW

ジャックの警戒を含んだ鋭い眼光。それは暁やミソラも同じだったが、スバルだけは複雑な思いでハイドを見ている。先の戦いでツバサがハイドの事も部下として信賴していた事は長官を始め皆には話したが、その思いをハイドが受け取ったかどうかまでは分からなかったため、ハイドが味方になったかどうかの判断は保留となったのだ。サテラポリスとしては立場的にもスタンス的にも警戒しなければいけない。スバルとしては、信用はしたいがそれでも疑いは拭い切れない。それが、双方の気持ちの違いだ。

疑心と警戒でピンツと糸を張ったような緊張の中、ハイドは口元に笑みを浮かべ、右手に持ったステッキを弄ぶ。ちょうど、弧を描くようにステッキの上部、鳥のような形状の部分を左手に乗せたのだ。

「ンフフフフ。……そうだ。その位の関係で丁度良い。私としても馴れ合う気はないし、そう簡単にこれまでの溝が埋まるとは思っていない」

埋める気も無いがな。

そう言っ、ハイドの電波変換したファントム・ブラックは肩を揺すって低い声で笑う。しかし、ファントム・ブラックは「だが、」と、続けた。

「だが、こちらにも頼まれている事がある。……全くの不本意だが、ここから出してやろう。……悪である私が、正義であるお前達をな」
「へっ。何だよ、お前だって何だかんだ言っ、ツバサの奴に感化さ

れたんじゃねえ——」

ジャックのからかいと警戒を入り混ぜた言葉は最後まで続く事は無かった。ファントム・ブラックの持つステッキソードがジャックの首筋を捉え、寸止めの状態となっている。

「ッ！ （ジャックっ！）」

向かいの牢のクインティアが弟に向けられた刃にいきり立とうとするが、隣に座った暁が肩を掴んで止め、目で訴える。「ここで大きく、賑やかな騒ぎを起こせば見張りが来る」と。

ファントム・ブラックはステッキを動かす事なく、ジャックからサテラポリス……。自身に警戒心を抱く者全てに冷たい目を送る。

「……勘違いはするな。私がお前達に手を貸すのはツバサという接点があるだけで、それが無ければ敵対する。私達の関係はそんなものだし、それで十分だろう」

「……ハイド……」

スバルの零れるような薄い言葉に、ハイドは彼の顔に目を留めた。

「……ンフフフ。ここ最近は本当に無様だな、星河スバル」

「べ、弁解しようがありません——ッ」

ファントム・ブラックに失礼な物言いだが、スバルは試しに苦笑いを浮かべてみた。その結果、ジャックから今度はスバルの首筋にステッキソードが当てられる事となった訳である。そして、ファントム・ブラックはどこか呆れたようにスバルを見ている。

「……つい最近まで敵対関係だった者に対してそんな笑みを送るな

ど、貴様はどこまで——いや、良い。……それよりも今はここから出る事が先決だ」

「……………」

一同が沈黙しているのは何という事はない。どこか、言葉にしづらいのだが、どこかファントム・ブラックの言葉が柔らかくなっている気がする。一同の驚いたような視線が居心地悪く感じたのか、ファントム・ブラックは小さく咳払いをして口を開いた。

「おほんっ。……今から私が外に出て、ロックを解除する。当然すぐに捕らえ直そうとするだろうから、その後の行動も迅速にな」

「お、おう。……ッ！ おい待てよ！ そもそもこの牢の格子には対電波体用のジャミングバリアがだな——」

「それに、ウォーロック達も……」

ジャックの言葉に割り込む形でスバルも問題点を挙げる。確かに、格子には電波体が触れると自身の波長を乱すためのバリアがあり、ウォーロック達がいなければスバル達は自分達で戦えない。

だが、ファントム・ブラックはすなりと、さらりと簡単にその2つの問題をクリアしてみせる。

「ンフフフ。それなら問題ない。……ウォーロック達ならここに来る前に所在を確かめてきた。そしてジャック、私は何故ここにいると思う？ ……この、牢の中に」

「あ？ ……あぁっ？」

言われて見ればそうだ。ファントム・ブラックは電波体だが、牢の中に居るという事はジャミングの影響を受けなかったという事。または、そもそも——

「確かにあのジャミングバリアは強力で忌々しいが、そもそもそれは牢の格子の内側のみ。他を通れば問題無い。……例えば、影となつて壁の小さな隙間を通つて出る分にはな」

『……なるほど、そこでSHADOWの出番という訳ですか』

澄んだ声と共に、白猫姿のRIGHTライトがスバルのハンターから出てくる。向こう側の牢でゴンタやルナ、キザマロが驚いたようだが、暁やクインティアが機転を利かせて彼等の口を塞いで大声を出すまでは至らなかった。

スバルはそれを見てフウツと胸を撫で下ろし、視線を牢の奥、フアントム・ブラックの方に向けると、先程までそこには無かったモノが居た。フアントム・ブラックの肩に座っている、雨ガッパを思わせる黒いフードを着た子供。袖も長く、指先が隠れている。そして、顔はほとんどフードで隠れて見えないが、かろうじて見える口は笑っているように見える。

『……やあ、ライトは久しぶり。ほとんどの皆さんは初めまして』

その声は見た目通り子供っぽいが、どこか慇懃無礼というか不敵というか、一言で言えば『読めない』印象だ。

『……姿を、得たのですね』

『ああ。……あの戦いの後、ハイドと一緒に居て少しずつ今の姿と喋り方に。……元主、基本的にチカラを使っても姿を与えるってまではしなかったからなー。ちなみにこの姿はハイドのガキの頃に似てるって——』

「SHADOW、それは言うな。そしてお前達も覗き込むな」

ハイド独特のナルシストな笑いが無い。それほど知られたくないという事なのだろうか。更に言えば、覗き込もうとしたのはジャッ

クで、ファントム・ブラックから拳骨を貰った。スバルも覗き込もうとしたが、ジャックより一拍遅かったため命拾い。そしてシャドウの方に視線を移すと、ケラケラと笑っていた。

(……言葉遣いは軽いけどどこか掴めない……。本当に『影』みたいだ)

おまけを言えば偏屈で捻くれ者という事らしい。喰えん奴とはこの事か。

ファントム・ブラックは調子が狂ったか居心地が悪くなったかで無然と壁側に翻し、顔だけをスバル達に向ける。

「これ以上シャドウが余計な事を言う前にやる事を終わらせよう。少し待っている。……シャドウ？」

『はいはい、分かりましたよっ』

ケラケラと笑っているシャドウはファントム・ブラックから睨まれ、肩を竦めながらスバル達に『また後で』と手を振った。そして、『ズズズ……』という低い音と共にファントム・ブラックは壁の中に消えていく。……正確には、壁の影に消えていく。

ファントム・ブラックはすぐに姿を現した訳だが、立ち位置が違う。牢の外、スバルやジャックの入った牢の向かいが暁やクインテシアの入った牢なのだが、その間、つまり廊下の部分に現れたのだ。石床の隙間から浸水するように黒い影が溢れ、面積を増してその次は上に伸び、人型となってファントム・ブラックとなる。

「……ほんの少し隙間があれば脱出可能という訳か」

「……悪用されたら洒落にならないモノがあるわね」

「……というか、もはやオカルトね……」

暁の驚いたような感想とヨイリー博士の冷静な分析。そしてクインティアのため息交じりの感想に対し、ファントム・ブラックは杖を振り上げながら返した。

「ソフフフ。まあ、気が向いたら些細な悪事は働くかもな。……フンッ」

ズバツ。という断裂音と共に、牢のわずかな光沢が失われる。ジヤミングバリアが消えたのだろう。つまり、ステッキソードが振り下ろされた先は各牢のジヤミングバリアの制御装置で、それが壊れてしまえば単なる牢。後は――。

「下がっている。……ステッキソード！」

格子その物を破壊してしまえば良いだけだ。

だが、硬質な物が崩れると当然大きい音が響く。

「ッ！ ゲツ！ あいつらだ……！」

牢から出たジャックの不気味さと嫌悪を入り混ぜた言葉。彼の指差す先には、夢の虜となった者達が捕らえ直そうと迫ってきていた。それに対し、ファントム・ブラックが取ったのはシンプルな方法だった。

杖の先を床に付け、ほんの一言いっただけ。その表情は、余裕そのものだった。

「イービルクロー」

ズンッ。という音と共に男達がうつ伏せに倒れる。上から黒い腕が伸びてきて地面に押し付けたのである。天井を見れば、天井も黒

い影で覆われている。シャドウのチカラを借りて牢中の影を操作して、影からイービルクロウを放ったのだろう。

ファントム・ブラックはイービルクロウの手の平に乗り、スバル達を振り返る。

「ンフフフフ。何を呆けている。早く来ねば次が来るぞ？」

頼もしい。

ハイドにそういった感情を抱く日が来ようとは、夢にも思っていなかった。

第12話 SHADOW（後書き）

次話はおおよそ一週間後の更新です。次話ではマモン達七つの大罪のチカラがもう一つ発動します。

また読んでくだされば幸いです。

第13話 現れしチカラ（前書き）

……えゝ……。この話がフェアプレイズの23話目になっちまっ
てた事について、まずはお詫び申し上げます……。 （↑超々々シヨ
ック……）

お待たせしました。……今回も異様にファントム・ブラックこと
ハイドがカッコ良いですが、いつまでも変わらないというのよねゝ
…。

そして、『そう在るのはそう在る理由や過去がある』って考えな
ので、彼を狡くて卑屈な悪役で終わらせるってのは満足出来なかつ
たのですね。そこはご容赦とご理解願いたいです。

第13話 現れしチカラ

タタタタツつと、複数の人数が廊下を走る音が響き渡る。牢から脱出したスバルやミソラ、暁達はハイドの電波変換したファントム・ブラックを先頭に走っているのだ。

なお、ルナやキザマロもいる訳だが、これは牢に残してきた場合人質に使われないようにという措置である。ライトはスバルのハンターに戻っている。

僅かに息を切らせながら、スバルはファントム・ブラックに尋ねた。

「ところで、ウォーロック達は……どこにいるの……？」

正面に現れた夢の虜となった人間を天井から影で押さえつけながら、ファントム・ブラックは答える。四方八方、天井からも床からも左右からもイービルクロウを放てるモノだと考えてもらいたい。

「ンフフフ。あの……マモンといったか？ そいつと一緒に居る。万が一にもお前達と合流した場合が厄介だったからだろうな」

「……ハイド、それは良いんだが――」

「この状態はどうにかならんか……」

上から暁、長官の順。長官の言うこの状態とは、長官とヨイリー博士が影の腕に掴まれて床を滑るように進んでいる事だ。ようは、自分の足で進めず、黒くて禍々しい手、イービルクロウに掴まれて移動回廊よろしく静かに平行移動している状態なのである。長官としては、情けない構図という訳だ。……ヨイリー博士は楽に移動で

きてそれほど不満では無いらしい。

……だが、そうしなければいけない理由はしっかりとあった。スバルは非常に申し訳無さそうに後ろを振り向く。

「えっと……それは長官とヨイリー博士が――」

「足が遅いからだろう？ 初老とおいばれ」

……ファントム・ブラックの言い方には眉を顰める点があるが、言う通りではある。長官もヨイリー博士もそれほど速く走れないのだ。原因を一言で言えば、『歳』だ。若い頃のように自由に速く走り回ったり、無茶は出来ない。

暁もそれは分かっていた。しかし、スバルよりも長官のそばを走っていた暁としては、長官の出すプレッシャーや不満に当てられ続け、フォローをいれたという訳である。

なお、当然と言えば当然だが、長官はファントム・ブラックの発言にカチンと来たらしい。言葉で噛み付こうとするが、ヨイリー博士に諫められる。

「貴様そんな言い方は――」

「まあまあ、良いじゃないの、長官。正直、助かっているのよ？」

私なんて長官より年上なんだから、早く走れないもの」

「しかし博士――」

「まあ流石においばれと呼ばれたら私もカチンと来るけど、本当の事にあれこれ抵抗しても意味は無いでしょう？」

それはまるで、子供をやり込める母親のようだ。スバルは視線を前に戻しながら、ポツリと零した。

「……ヨイリー博士ってしっかりしてるな――」

「ソフソフ。案外、歳を取ると大概の事に動じなくなるのかもしれない」

れないな。……ま、挑発に乗らなかったのは予想外だったが」

嵐の日でも当たり前に時間は過ぎる。慌てて先走っても、何かが好転するとは限らない。その事を知っているからこそ、マイペースでいられるのだろうか。

ファントム・ブラックはスバルの言葉を拾った後、不意に彼の雰囲気が変わった。顔付きだろうか。緊張感と警戒心が入り混じる表情である。

「……さあ、そろそろ着くぞ。今のうちに心の準備をしておけ」

その言葉を言い終わって3秒後、マモンのいる大広間にたどり着いた。……心の準備なんてする暇が無い。ファントム・ブラックの事だ。おそらくワザと遅めに言ったのだろう。

だが、勢い良く開かれたドアと現れた面々にマモンが驚いているのも事実。マモンの傍にはウォーロックを始めとした電波体が捕えられた牢があり、彼等もまた呆然としている。長らく敵対していたファントム・ブラックが現れて、何事だ。という所だろう。

また、人間が電波体と接触したら、というケースを想定して電波体を自分の傍に置いていた事から、もしも脱出されたらという考えはあったのだろう。しかしどれだけ予想していても、大きな音で思考が止まれば、ほんの少し『予想から行動』への時間が掛かる事は否めない。その僅かな隙を、ファントム・ブラックは逃すはずがなかった。

「伏せていろ！ ……シャドウフォール！」

伏せていろはスバル達に。そしてファントム・ブラックの出した技は、言うなれば影の壁だ。高速スピント共に、マントの内側から膨大な影を出している。直訳すれば影の滝だが、覆われる者から見

れば俺が自分に迫り来るように見えるだろう。それが全方位にある。

『クッ！』

マモンはその部屋のウェーブロードに逃げたが、操られているだけの生身の人間にはそんな芸当は出来ない。よって、彼の護衛を勤めていた者達は影の波に飲まれ、廊下の者達と同じように覆った影で押さえつける形で完全に動きを封じられる。

そして、先程も言った通りその波はスバル達の上を超えるように後方にも飛ばされた。後方にあるのは先程自分達が入ってきたドア。増援が来た場合に備え、ドアを影で覆って壁と成し、外から入れないように、そして内側から逃げられないようにしたのだ。

「ンフフフ。……さて、次はウォーロック達だな。出でよ、ファントムアーミー！」

そう言つてファントム・ブラックは杖で影に覆われている床を突く。それと共にズズツと鈍く、低い音と共に床に敷き広げられた影から小さめのファントム・ブラックが現れた。おおよそ、本人と比較して4割ほど縮んでいるだろうか。

「……行け」

ファントム・ブラックの指示で、影で出来たファントム・ブラックは滑るように駆ける。それも、1体や2体所ではない。3体、4体と次々に構成され、ウォーロック達電波体の方へ駆けて行く。既に先程の影の波はウォーロック達のいる牢まで届いているため、道は出来ている。

『うおおお！？ 何だ何だっ！？』
『こっちが聞きたいよっ！！』

上が現在進行形で戸惑っているウォーロックで、下がファントム・ブラックの手に対抗しようとするマモン。

マモンは影、更に言えばファントム・ブラックに支配された床ではなく牢の上に降り立った。そして一瞬チカラを溜めるように目を閉じたかと思えば、太く、しなやかな尻尾が現れて影を薙ぎ払っていく。

スバルは驚いたように目を見開いた。捕まる直前見た尻尾は、間違いでは無かったのだ。

「ッ！ あれって……っ！」

「ンフフフ。タネの1つが暴かれたな。……だが、時間の問題だな」

そう。だが、と言わざるを得ない。いくら早くて強い攻撃でも、尻尾が1本では限界が来る。よって、マモンの取った対処は単純明快だった。

『ふふんっ！ 1本で足りないなら――』

ボンッと吹き出るような音がしたと思ったら、マモンの尻尾が増えた。その数、9つ。

『――増やせば良いだけだよねえ……っ！』

そこからの戦況はマモンの方に傾いた。元から影の構成・突撃より尻尾の一撃の方が早い。今までは数が多いという理由で押していた影も、尻尾自体が増えられては戦況も傾くだろう。

「……ハイド……」

「……ハイド、一旦退こう。どこかに潜伏して、態勢を整えるのも手だ」

スバルの不安そうな声と暁の冷静な状況判断。だが、ハイドの余裕は崩れていない。視線をマモンに向けたまま、ニヤリと笑ってみせる。

「ンフフフ。まあもう少し待っている、あと少しだ」

『はっ！ 状況が見えて無いのはどっちだよ！ キミの影は僕の尻尾に薙ぎ払われて近づけないじゃ——』

ベゴンッ！

マモンの言葉の途中で聞こえた異音。その音が異様に近く感じたマモンは影の撃退をしながら首を回して周囲を見る。左右に上、後ろ。最後に下を見ても違和感が無く、首を傾げながら視線を前に戻そうとしたが、すぐに視線を下に向ける。正確には後方下、ウォーロック達を捕えている電磁牢の後方の壁。

『ッ！ なっとななな……』

ガクガクと口が塞がらないマモン。その視線の先には、牢の壁にベツタリと影の塊が張り付いていて、何かが影の中を動いている。ちようど、蛇が自分より大きい獲物を丸呑みにするような感じだろうか。

その様子は無論スバル達からは見えない。スバルは不思議そうにファントム・ブラックの方を見る。

「……ねえハイド、一体何したの？」

「ンフフフ。簡単な事だ。アイツの視線を正面に釘付けにして、その間に――」

『僕が牢の後方に穴を開けて――』
「ウォーロック達を抜け出させようという訳だ」（無理やりにな）

途中でシャドウの補足が入ったが、そういう事だ。正面からいくつも影で迫り、正面から牢を壊すと見せかけて、床の影を広げて牢の後ろに回し、壁を壊すという策である。何も正面から正々堂々やり合うだけが戦いではない。……闘いで無いのは明々白々だが……。

以下、暁とジャックの会話。どちらも呆れを含んだ苦笑いを浮かべている。

「……ハイドらしいというか何というか……」

「……ツバサの野郎もやりそうな手だけだな……」

ようは、人を喰ったような捻くれたやり方と。

更に言うなら、ファントム・ブラックは内心で【無理やりに】と言った。これはどういう事かという……。

『ぶっはああああっ!!』

「ッ！ ウォーロック!？」

現在も影のファントム・ブラックが生成、突撃していく中、饅頭のように影が膨らんだかと思えばその中からウォーロックが出てきた。スバルの驚きが収まる前に、ウォーロックはファントム・ブラックに噛み付く。

『おいこらてめえ！ 何でここに居るとか何でスバルと一緒に居るとか色々聞きたいけど、なんつう助け方しやがる!』

『危うく圧死するかと思ったぞごらあ!』

『ブロロロ……。食われる牛井ってあんな気持ちなのか……。?』

『いえ、どちらかと言えば蛇に丸呑みにされたような感じでしょう』

『……。あんたら2人とも少し黙ったら……。?』

ウォーロックに続いてコーヴァスの不満とオックスの感想、それにアシッドの分析。その描写を想像して気持ち悪くなったのか、不機嫌そうにオックスとアシッドを睨みつけるハープとヴァルゴ。

スバルは電波変換のためハンターを取り出しながら比較的落ち着いている———というか、噛み付く気力も尽きている——ルナのウィザードのモードや、キザマロのウィザードのペディアに尋ねる。

「……。ねえ、何があったの?」

『……。それが、突然後ろの壁が壊れたと思ったら問答無用で影に飲まれて——』

『その影の中が思ったよりきつくて苦しくて……。』

「……。なるほど」

視線をファントム・ブラックの方に戻すと、自分に不満をぶつけるウィザードをかるくいなししていた。その中で未だ影を突撃させてマモンを足止めさせているのだから抜け目無い。

(……。あれ、でも……)

ここで思い返してみると、ハイドはこう言って無かっただろうか。『馴れ合う気はない。今までの溝がそう埋まる訳ではないし、埋める気も無い』と。

(……。もしかして、そのつもりで……)

やろうと思えば丁重に、不満を出させる事無く助ける事も出来ただろう。しかし、それでは今までの因縁が【何となく】、言葉を変えれば【なあなあ】で埋まってしまう。……どれだけ親しかろうと、どんな場合であろうと、明確な線引きは必要なのだ。

自分は自分。何でもかんでも受け入れて、許して、譲ってしまえば、自分も何も無くなってしまう。故に、ここから先は受け入れられないという一線は必要だ。むろん、どの範囲まで受け入れるかという一線をどの辺りで引くかは個人の自由ではある。

……まあ、反対に、受け入れて、許して、譲って……そうやって誰かと補完し合うのも本人がそう決めたのなら作者個人としては何も言う気は無い訳だが、そこに在るのは自分の意思か、はたまた集団として一体化した、誰のモノでも有るし誰のモノでも無い意思か……。

ハイドはスバル達と自分の間に線を引いた。

世から見た悪として。

世から見て赦されてはいけない身して。

ゆるゆるのぬくぬくの馴れ合いではなく、自分であるために、己であるために、自らが引くと決めた境界だ。

「……ウォーロック」

スバルは静かにウォーロックを呼んだ。

『ああ!?!』

「電波変換」

『いや、けどお前も何か言えよ! コイツ抜けぬけとオレ達の前に――』

「今はマモンの方が重要だよ。……さっ、早く」

『……………チッ』

スバルとウォーロックは電波変換して、ファントム・ブラックの横に並び立つ。なお、この時点で全員が電波変換し、非戦闘員は後ろに下がっている。少なくとも、ただ様子を見ているより電波変換していた方が様々なアクシデントに対応できるだろう。

「……………ハイド。……………ありがとう」

「……………ンフフフフ。それを言うのはお門違いな上にまだ早いだろう」

『そりゃそうだ。そういったやり取りは僕を倒してからにするんだね』

その声に一同の視線はマモンに集まる。

改めてマモンを見ると、やはり大きな変化点は九つの尻尾だろうか。九尾が人に化け、尻尾を隠しきれなかったらちようどこんな感じだろう。……………もつとも、その尻尾は黒く、彼の身に纏う物で色があるのは豪華な服の色や腕輪にあしらわれた宝石だけだ。

『……………今まで好きにやったんだ。もう良いだろう？……………お前達も自分の欲望に飲まれちゃえ』

強欲を司り、支配する狐。その九つの尻尾に、淡く、暗い光が宿る……………。

第13話 現れしチカラ（後書き）

今回は一際頭を使いました。尻尾を何本にするかとか攻守のやり取りとか、言い回しとか。……別に尻尾と影の競り合いってのを書いても良かったんですが、予想が簡単に出来そうだったので……げふんげふん。

……まあ、一言で言うならば『意表を突く& a m p; ハイドがやりそうな事』って事で。……別に簡単に予想されるのを書くのが癪だったからじゃないよー（棒）。

……自分の立ち位置を印す線、自分と他を分かつ一線、様々な定義の境界……。執筆しててどう言い表そうと考えまくった部分ですね。……自分で納得できる言葉なら自分でしっくりくる感覚がするのですが、どうもこの分野は自分の語彙を超えているらしく、自分で思いつく言葉では自分で納得できないという……。

なので、本文にあるのはほんの『切っ先』みたいなもんだと考えてください。……ですね。切っ先という表現とレベルが自分でしっくり来ます。（言葉を変えれば氷山の一角）

次話はマモンとの戦闘なんですが……手早く終わってしまいそうです……。だってマモンは――（以下、ネタバレ防止）――だもん。……とりあえず言う事は、スバル君ゴメン、って所かな。

それでは、次話もお楽しみに。o o（……時間が経って、笑い話の1つになれば良いな）（↑乾いた笑み）

第14話 2つの武器（前書き）

今回は次の2話の調整を含めているので短いです。

第14話 2つの武器

マモンは相手が無意識に望んでいる願いの夢を見せ、自分の術中に掛かっている相手を自由に操る能力がある。無意識というのはなんとも恐ろしいもので、案外意識している願いより強く、抗いがたいモノだ。故に、そこを押さえるのは操る側としては理が通っているし、効果も高い。

そこまで有効な手を持っているにも拘らず、マモンは内実焦っていた。

《……クツ。確かに僕の術は掛かれればこっちの몬드けど、ぶっちゃけ戦闘はサタンとかルシファーのみたいな体育会系が専門で、僕はそれほど強くは無いんだよな》

そう。マモンは軍隊で例えるならどちらかというと情報の攪乱かくらんを担当する電子戦や衛生兵といったサポートに特化した能力で、実戦となるとサタンを始めとする他の大罪達には劣る。電波体単体なら尻尾の物理攻撃でどうにかなるが、電波変換した者、特にアシッド・エースクラスの戦闘力や分析力を持つ場合、攻撃をかわされた上に容易にカウンターを喰らう事だろう。

そういった事はマモンとて分かっている。それらを踏まえた上で、マモンは思考を続けた。

《かといって、盾であり武器でもあるあいつらはあのナルシストシルクハットに捕えられてる……。となれば、やっぱりこれしかないか——》

この間の思考、時間にして0.003秒。

言葉や文章に出す前、『思考』の段階の自己問答は大抵速いものだが、マモンのそれは一線を描すスピードだ。伊達に国中の人間、個々の欲望を管理して操っている訳ではない。先程言ったとおり、マモンは個々人の欲望を探り、その上で相手が望む夢を見せ、命令を下す時はその夢の中でアクションを起こす事で「この夢を見続けるために行動を実行しなければ」という心理へ仕向けて操っている。それは裏を返せば、個々人で違う願いを、その成就度を、全てオートではなくマニュアルで操作しているという事だ。

それはつまり、単純に一言で言ってしまうえば、マモンの頭脳、そしてその思考スピードは人間など比にならないほど速いという事である。

『……今まで好きにやったんだ。もう良いだろう？ ……お前達も自分の欲望に飲まれちゃえ』

マモンの武器はヒトの欲を利用して操る術とそれを活かす為の頭脳のみ。対人において必中にして必殺とも言える能力に、それを100%活かす頭脳。組み合わせが悪くない事はマモンも自負している。

マモンの九つの尻尾が妖しく光る。それと共に、スバル達に変化が現れた。

「？ ……なん、だ……これ……。頭が……」

ロックマンの足が覚束なくなり、膝を突く。見れば他の者も頭を押さえて呻きながら膝を突いている。

それは一種の催眠術に似ている。光を見ている内に頭がぼやけてきて平衡感覚を失い、マモンはその間相手の記憶ごと欲望を読み取るというのが第一段階。理性という水面を乱し、その根底に在る無意識の強い願いを汲み取る。そして第二段階は……。

「……ブロロロロ……でっかい骨付き肉……」
『ブロロロ……。牛丼特盛り……』

最初に幻を見たのはゴンタだ。……というか無意識の望みも食べ物関係とは……ゴンタらしいといえばゴンタらしいが……。まあ、裏表の無い性格というのは好感は持てるが。おまけを言えば、アメロッパ南部、ナンスカの骨付き肉はゴンタが絶賛するほどの味なので、彼の中で『無意識に』相当気に入っていたという事だろう。そして、オックスも喰らっているという事はウィザードにも効果があるのだろう。それもそのはず。望みや願いとは何も人間だけが持つモノでもない。ヒトに近い人格を持つのであれば、ネットナビであろうとウィザードであろうと、それは変わらないだろう。

術の発動、すなわち尻尾が光ってから効果が出るのが早かったというのもあるだろう。ロックマン達は1人の例外無くマモンの術に掛かる事となった。

第14話 2つの武器（後書き）

マモンの能力の詳細が明らかになった訳ですが、実際の白兵戦が弱いっての、意外でしたかね（苦笑）？ ……けど、このSecret Storyは別にバンバン強いキャラ出してインフレ起こしたい訳ではないのでね。

第15話 作られた夢（前書き）

この話はスバルの一人称です。理由は後書きにて。

第15話 作られた夢

「ッ。……………あれ……………」

「ん？ どうした、星河」

意識がハッキリした時、僕の視界には教室が映る。平和な教室。クラスメイトや育田先生は皆不思議そうに自分の方を見ているが、その目に陰りは一切無く、いつも自分が見ている穏やかで優しい空間そのものだ。そして、自分自身は自分の机に座って右手にはシャープンを持っている。

「えっ……………いやっ……………えっ……………？」

不思議な事だが、何故自分がここにいるのか思い出せなかった。朝起きて顔を洗って朝食を食べて……………委員長達と一緒に学校に来て……………そういった日常のはずなのに、自分のどこかでそれは違うと言う。

違和感の無い現実。

いつもの風景。

だが、それ自体が違々と自分の中で言う声がする。……………いや、それはどちらかというと直観にも似た感覚だった。

「何をボーっとしてるんだ。次の問題、星河だぞ」

「そうですよ、ゴンタ君じゃ無いんですから」

「ッ！ キザマロ！ それどういう事だっ！」

「ひいっ！ 口が滑りましたっ！」

上から先生、キザマロ、ゴンタ、再びキザマロの順だ。ようは、

いつもボーっとしているという事をキザマロから暗に言われて、ゴ
ンタが怒り出してしまった訳だ。それを可笑しげに笑うクラスメイ
ト達。先生は苦笑交じりで、委員長はいつもの凜とした声で2人を
止めに入っている間に、僕は自分の袖の辺りを引っ張られる感触を
覚えた。

そちらへ視線を向けると同時に、引っ張った主が小声で話しかけ
てくる。

「(つたく、キザマロも一言多いよな。ほれ、次の問題の答え。：
：ノート真っ白だぞ)」

「えっ……ッ！ あああああああああっ！！！！」

言われて見れば、確かに自分のノートは真っ白。先生は「ん、ど
うした？」と聞いてきたが、とっさに「何でもありません」と言っ
て事無きを得る。周囲の不思議がる視線とクスクス笑う声を恥ずか
しく思いながら、自分は改めてノートの真っ白さを教えてくれた人
にお礼を言おうと——ついでに好意に甘えてノートを見せてもらお
うと——そちらを向くと……。

「(あ、さっきはありがと——……えっ……ツバサ……君………
?)」

「(あ? ……何驚いてんだお前……)」

そう、先程は言われた内容に意識が行ってしまったが、思いもよ
らなかった人物が居た。ツバサ君だ。

彼は怪訝そうに小さく首を傾げて小声で返してくる。けど、それ
はおかしい。ツバサ君はまだ黒い繭まゆの中に囚われて……いや、出た
のか出ていないのか、そういった所も思い出せない。僕が戸惑って
いる間に、ツバサ君は「ほら、ポケッとしてないで早く写しな」と
言う。とノートをこちらの机に静かに滑らせてくる、そんな時。

「仲が良いのは結構だが、良過ぎるのも考え物だなあ」

後ろから聞こえる声にツバサ君も僕も驚いて肩を震わせる。目配せをしておそろのおそろ後ろを振り向くと、育田先生がいつものニコリ笑顔で、否、若干『やるなこのやろう』とイタズラっ子に対する時のようなイジワルな笑みを浮かべている。

ツバサ君は口元を焦りで引きつらせながら弁解する。

「い、いや先生……これは……スバルのノートが真っ白けっけであんまり頼むから仕方なく……」

「ッ！ ツバサ君っ!？」

この人僕を売ってくれたよ！

僕のツッコミに再びクラスに堪えるような笑いが起こる。ツバサ君は人差し指を立てて真剣な顔――十中八九演技だろう――で、さもありげに言ってみせた。

「いやいや、何事もケースバイケースと言ってだな」

「それ友情も適用されるの!？」

あはははははははっ

ゴスンッ ゴスンッ

クラスに抑え切れなくなった笑い声が沸いたのと、先生の持っていた教科書が僕とツバサ君の脳天を捉えたのはほぼ同時。育田先生は呆れと苦笑を混ぜた顔で、『しょうがないなあ』といった風に言ってきた。

「はいそこまで。……そんなに仲が良いんなら、この授業の最後の

問題は2人に解いてもらおうかな」

「ッ！ やぶ蛇だ！ スバル！」

「いや！ 僕だけのせいにされても！」

この期に及んでまだ僕だけに責任をなすりつけようとするかこの人は。……いや、問題を書き取るのを忘れたのは僕だけど……。

いがみあう僕達の頭に、育田先生は両手を乗せて少し力を加えてくる。スキンシップを込めた仲裁といった所だろうか。

「こらこら、だからそこまで言ってるだろう。……次の問題は他の者に頼むから、星河は今までの分をツバサのノートから写させてもらえ。……えーっと、それじゃあ代わりに問題は――」

先生の目がクラスを巡る。そしてふと、その視線が止まった。

「――うん、キミにお願いしようか。九魂くしん、頼めるか？」

「……はい」

静かで澄んだ声だった。

色白で、髪はサラサラ流れるような銀のストレート。あまりにきめ細く、儚くて、重さを感じさせない程だ。両耳の前にも一房掛かっており、それが上に行くと、正面から見ると三角形になるような髪のセットだ。……不謹慎な例えかもしれないが、動物の耳を思わせる。後ろ髪の長さは膝まであり、耳の前の一房は胸の辺りまであるだろうか。

綺麗な銀髪で、月の光をそのまま物質にしたような、静かで、優しく、どこか冷たい、そんな色。瞳の色は対照に金色だ。ただし、夏や昼のような焼け付くようなものではなく、どちらかというと朝の陽光のように柔らかで、朝露を集めた水面みなものような澄んだ目をし

ている。……透き通りすぎて、逆に関わる事を躊躇ためらってしまうほどに、綺麗な淡い金の瞳だ。

そんな、どことなく巫女装束が似合いそうな子が黒板の前に立って問題を解いてる間、僕は問題を写しながらツバサ君に尋ねた。

「（……ねえ、あんな子いたっけ……？）」

「（あ？ ……九魂くこん 飯綱イツナだろ。こないだ転向してきた）」

「（えっ……？ ……そう、だっけ……）」

その辺りも記憶がハッキリしない。……どうやら、『何故そうなっているか』という原因が分からなくなっているらしい。……あらゆる事象や因果の大本がブロックされているように……。

戸惑っている様はツバサ君の目から見ても明々白々だったのだろう。彼は片眉を下げ、若干心配そうに顔を窺ってきた。

「（……おまえ、本当に大丈夫か？ ……お前まさか——）」

そうだ。こういった不可思議な事なら大抵答えを教えてくれるはずだ。僕はそういった期待を胸に彼の言葉の続きを待つ。

「（——若年性アルツハイマーにでも——）」

「（掛かってないよっ！）」

誰が若ボケだ誰が。そもそもそれは若ければ18歳以降、つまり18歳から危惧する認知症の一種であって、僕はまだ掛かるはずが無い。……いや、それはツバサ君も分かっていたのだろう。何故なら今彼の顔は笑いを堪えているのだから……。言ってしまうと、かわれた訳である。

「(まったくもうっ……)」

僕はそう溜め息を付きながらノートの写しを再開する。……確かにからかわれた事で悔しいと思う事もあったが、反面、反対の感情もあった。

楽しい。

以前のように、当たり前前に皆と話して、遊んで、関われる。……あまりに心地良くて、最初に抱いた疑問を忘れるくらいに楽しかった。……なぜ自分は教室に居るか、なぜツバサが居るか、そしてイツナという自分の知らない人の事も……そういった疑問も、なにもかも……。

一方、ロックマン達に望む夢を見せているマモンはしたり顔で口元に笑みを広げる。

『ふふっ……。やっぱり尻尾は九つの方が効きが早いから良いよね。……さあ、地球を幾度となく救った英雄さん。キミの手でキミの間を倒すんだ。そしてその後は、僕の一番の傀儡かいらいにしてあげるよ。……キミの肉体が減ぶまで、ね……』

マモンの目が真っ直ぐロックマンを捉え、九つの尻尾の一本の光が強弱を織り成す。それはまるで、光で演奏するように明滅を織り成していた。

マモンとしては、相手の意識を失わせる所は必要だが、操る所まで入れば尻尾の意味は大してない。現に、今まで尻尾を出さずとも

国中の人間を操ってきたのだから。ではなぜ今出しているのか？
答えは簡単だ。己が能力の増強である。マモン自体を歌い手。尻尾
をアンプと見たら分かりやすいだろう。

自身の戦闘の不得手さ。

ロックマンやアシッド・エースの戦力。

それらを比較した結果が、ここまでの徹底した手という訳である。
確実に、1回で全員に自分の術を掛けないといけない。そのために、
術の掛かりが最も早く、最も強い尻尾が九本の状態になったのだ。

マモンが光の演奏を行ったちようどその頃、ロックマンの夢に変
化が現れた。

ちようど、委員長トリオに僕、ツバサ君、ジャック、で下校して
いる最中だ。ツバサ君とジャックはウェーブライナー通いで途中で
別れるので、それまで会話を楽しむという所だ。

「しかし、スバルがノートを真っ白つてのも珍しいよな、本当に」
「しつこいよツバサ君」

僕がうんざりした溜め息を付いて不満を露にする様子を見て、ツ
バサ君は「悪い悪い」と軽く謝り、委員長は自身の胸を拳で叩いた。

「まったく、最近抜けてるわね、スバル君。……よしっ！ それじ
ゃあせつかくだし、スバル君の家でお勉強会でもしましょうか！」
「「ええええええっ！」」

僕とゴンタの声が重なる。それじゃあ不満を2人で訴えるとしよ
うか。

「何で僕の家なのさっ！」

「オレ帰ったら寝ようと思ってたんだぞっ!？」

いや、ゴンタは……いや、これは委員長が突っ込んでくれるだろうから良いか。

して、委員長はゴンタに片手チョップを繰り出しながら僕の代わりに突っ込んでくれた。

「あなたは給食終わって午後の授業ほとんど寝てたでしょ！　だからこそ勉強会よ」

ゴンタは不満そうに「えーっ！」と言っているが、それならしょうがない。……どれだけ寝れば気が済むのだろう。

そんな当たり前の笑顔の中、キザマロが不意に視線を一点に留める。その表情はみるみる蒼白になり、すぐに悲鳴を上げた。

「ひいっ！　な、何なんですかあれっ!!」

一同がキザマロの指差した先を見ると、真っ黒な何かが居た。いや、眼は毒々しい赤。黒い水溜りから盛り上がるように人型になったように、明確に『足』と呼べる物が見当たらない。そして、手がポコポコと泡立ち、体同様真っ黒な鎌が作り出された。

「ッ！　……何なんだこいつら……」

「お前のイタズラじゃないのな」

「ふざける」

ツバサ君、ジャック、再びツバサ君の順だ。2人とも、それぞれ別の方を見ながらそう言う。囲まれた。そう気付いた時には、最初の一体が委員長に斬りに掛かってきた所だった。

「ッ！ きゃああああああっ！！！」

「委員長っ！ バトルカード、ノイズド——」

……自分のどこかでその影を攻撃してはいけないと言う声がする。なぜかその影を攻撃しようと思うと、心が苦しくなる。……だけど、今は戸惑っている暇は無い。

バトルカードが効くのか分からなかったが、何もしないよりは良い。そう思い、ウィザードを呼び出して相手を切り裂く『ノイズドウィザード』を使おうとしたのだが、バトルカードを持っていた手も、ハンターを持っていた手も、両方後ろから掴まれて使用できなかった。

「ッ！」

誰が止めたのか。それを確認しようと振り向いた先に居たのは、髪も顔も真っ白な女性。ティアラの宝石と瞳の色は赤。以前一度だけ見た、ライト人間バージョンだ。

安堵半分、まだ油断ならないという不安半分といった表情をしている。そしてライトは、僕が文句を表に出す前に声を出した。

『……ダメです、スバルさん。……あの方々は、貴方の大切な人でしょう』

「だからそれを助けようと——えっ……………」

再び影と委員長達に視線を戻すと、先程まで影に見えていたモノ達が委員長やアシッド・エース、ジャック・コーヴァス……皆の姿に見える。

「……………なん、で……………」

自分が今まで見ていた世界が引っくり返った。

一瞬そう感じたが、この世界その物が偽りだと気付いたのは、もう少し後の事だった……。

第15話 作られた夢（後書き）

作中に登場したイヅナという少女に覚えが無い方へ。ご安心ください。今話で初めて登場したオリキャラです（笑）。結構前から考えていた子なので、容姿説明は凝りましたよ。

一人称だった意味ですが、スバル視点でいた方が夢の中にいる彼の気持ちが良い分かるんじゃないかって理由からですね。そしてそれは逆に言えば、「ああ、スバルはこういう気持ちなのか」って、（好きな言葉じゃないけど、）客観的に見えるんじゃないかと思いましてね。

第16話 1人分の咎（前書き）

……別に『業』とかでも良かったんですけどね。業って言葉は、この『Secret Story』と『フェアプレイズIF』、双方に関わる重要な単語なので出来るだけ序盤で安易にサブタイには使いたく無いんですよ。

あ、『フェアプレイズIF』といえば、この話で『フェアプレイズIF』の要素が出てきます。……ま、世界の干渉度は書いてる側として法則は考えてますけどね。……シナリオとは別に、〇〇の時は接するって一定の法則がね。

※後書きにちよつと追加しましたが、本編は弄ってません（5／14，22…08）

第16話 1人分の咎

『マモンの幻です。……おおかた、このまま貴方の手であの方々を倒すようにという考えだったのでしょうね。私は光を操れるのでマモンの尻尾の光を屈折させてかわし、PGM経由で貴方の意識に介入する形で迎えに来たという訳です』

ライトは『……まあ、たくさんの人の願いが複雑に絡まっていたので来るのに時間が掛かりましたが』等と言って微笑み、肩を竦めて見せた。

ライトの言動からして、今見ているのは完全な夢ではなく、言わば薬物などによる幻覚症状と似ている。つまり、ここで腕を上げれば現実でも上げ、現実にある物が他の物に見えたりといった感じだ。また、光を屈折させてという事は、今のライトもマモンには見えてないだろう。実際、ライトが人間の姿になったとしても、目に見えてる幻覚はそう変化は——いや、いつまでも攻撃しないロックマンを不審に思ったのだろう。黒い影が鎌を突き立てて脅し、ルナ達も悲鳴を上げる。ロックマンが動くように、マモンが幻覚の演出を上げたのだ。……実際には、黒い影であるアシッド・エースやハーブ・ノート達は単に立っているだけだというのに。

ロックマンは大分冷静さを取り戻したらしく、マモンに悟られないようになるべく口元を動かさずにライトに尋ねた。

「(……じゃあ、ライトが現れて影達が委員長達だって分かったのは……)」

『《私が貴方に触れ、さらに意識に介入した時点で、こうして触れている間は本当のモノが見えています。……光は、数ある偽りに隠^{カクレ}

ホントウ
された真実を暴くモノですから。それに、意識に介入してるので、私は今実際に口で話してる訳ではないんですよ？』

つまり、触れている事でスバルの意識に直接意思を伝える、言っ
てしまえばテレパシーやサイコメトリーと似た事をPGM経由でや
っている訳だ。

スバルがその事を理解したのを察したのか、ライトはフツと微笑
み、囁いてきた。

『《……マモンはほぼ真後ろに居ます。振り向き、場所が分かった
ら——》』

「(次の幻覚が来る前に倒す、) だね！」

『『ッ！！』』

ロックマンが突然振り向いた事に対して驚いたのはマモンだけでは
ない。ライトもまた、あまりに突然だったため驚いてしまったの
だ。お陰で、忠告が出来ぬまま……。

場所を確認。バトルカード、ブレイクサーベルを転送して即座に
斬りに掛かる。ライトの手を離れてしまった時点でマモンは見えな
くなってしまったが、かわす隙も対処する隙も与えない。

ライトが声に出して自分を静止する声が聞こえるが、その時には
既に突きを放ち、止められない所まで来ていた。

ドスッ……………

『…………クッ…………』

マモンの呻く声が聞こえる。手応えもある。……いや、あり過ぎ
る。攻撃を空振りして岩等を斬ったような。実態のあるモノを斬っ

た様な……。マモンが力無く自分の体に寄り掛かる。それと共に目の前のコダマタウンが元のパーティ会場に変わっていく。そして、何か液体が滴っていく。……滴るのは、黒い液体……。

……呼吸が速くなる。

……動悸がする。

ライトは静かにスバルに近づき、躊躇ためらいながらといった口調で伝えた。

『……彼等が人の体組織を組み替えるだけなら、それは電波変換ではなく、異常な能力を使えるだけで……死ぬ事には、変わり無いという事です……』

だから電波体や電波人間を切った時のような、手応えと違っていたのだ。ウェーブロードに乗れようとも、特殊な能力が使えるようとも、彼等は物体。……実体を持っているのだから。

ならば、先程自分が斬ったのは……その結果は……。

……頭が……ふらつく……。

……耳鳴りが……眩暈めまいが……する……。

ドサツ……………

「ッ！ スバル君っ!？」

『おいスバルっ!!』

微かにミソラとウォーロックの声が聞こえてきた。……だが、スバルはこの時、このまま一生目覚めなくても良いとさえ思っていた。……こんな自分なんて消えた方が良く程にさえ、思っていた……。

翌日、長官が手配した飛行機により、一同はニホンへと帰る。長く欲望を介して操られていたため精神不安定になった国民の療養のため、というのもあるだろう。何せ、クウェービアの全国民が操られていたのである。それはつまり医者もという訳で、帰るついでに彼等も連れて行ってニホンで治療させよう、という事だ。

なお、ハイドは「では、これは貸しにしておくぞ」と言っただけで消えてしまった。……星河スバルを見て何か言おうとしたが、それでも言わなかったのは彼の引いた一線を自分で破らないためだろう。

そして今、シドウとアシッドは今回の件に関して報告書を書いている訳である。

クウェービア、七つの大罪、マモンに関するレポート。

動き、働き、金銭が廻って経済力が上がり、人々の生活は豊かになったが、その代償として心の余裕が無くなっていった。ひたすらに『成果』と『効率』を求めて過度な競争社会が成り立ち、心を病んだり過労で倒れる者が多発。……故に、いつしかどんな形でも良いから安らぎを求めるようになった。……心の奥の感情や欲求ほど強いモノはない。そして、マモンは夢を見せた。……個々人で違う。しかしそれでも、それぞれが心から望む願いを。……安らぎの夢を。……決して現実ではない、悪夢を。

「……ふう。……俺達があ国に行く前の状況を大まかに纏めるとこんな所かな。……結局、あの国の人の願いは共通していたのかもな。……上の身分の人は忙しさや求められる成果、義務で心を病み、下の身分の人は今を生きるのが精一杯で裕福な生活を憧れて……」

……だから願いとしては、人間らしく、自分らしく生きたかった、
って所かな……」

目に見える幸せを追い求めた結果。……それがあの国の人々の心の
苦しみ、そしてその願いを生み出したのだろうか。

『……シドウ』

「ん？」

いつに無く心配そうな声に、シドウは手を止めて応じる。

『……あのまま星河スバルを帰して良かったのですか……？』

スバルは今、WAXAの心療科で治療を受けている訳ではない。

コダマタウンにある自分の家に、戻っている。

シドウは視線を下に向け、静かな口調で言った。……ただし、そ
れは決して心が静まり、落ち着いている声ではない。

「……今は、落ち着ける時間と場所が必要だ。アイツにとって、W
AXAより家の方が落ち着くよ。……専門医がいる訳じゃないけど、
今たぶん、アイツはここを恐れると思うんだ。……昔の、キングの
元に居た俺の様に………」

シドウの声が沈む。

シドウ、ジャック、クインティア……いや、キングの元に集めら
れた子供達は裏で危ない仕事をやらされ、命を散らしてしまった者
も少なくない。それは、『逆』も言える事だ。……裏の仕事に関わ
るという事は、自分だけでなく、相手の命を散らしてしまう事であ
るのだから。

「……俺はその夜、震えたし……泣いた。……その頃にはキングのやっている事が正しいなんて思えなかったけど、WAXAやサテラポリスってのが怖かった……」

そこからの暁の言葉は、続かなかった。

世の中の言う『悪』と呼ばれる行為。どんな理由があろうと、それを行ってしまった事に違いは無い。……引け目を感じながら『悪』にいる者から見て、『正義』と呼ばれる者に対しては恐怖を覚えてしまうのではないだろうか。……それはかつてのシドウを、現在のスバルを苦しめるだろう。

しばらくしてようやく口を開いたシドウの声は、苦しみの中から絞り出すような、そんな悲痛な声だった。

「……サテラポリス側である俺達に出来るのは、無事に立ち直ってくれる事を願うだけだ……」

『……貴方まで気負いすぎたら本末転倒です、シドウ……』

それは、アシッドなりの気遣いだろう。シドウはアシッドに「ありがとう」と微笑むと、報告書の仕上げに入った。

……キングの時とは違う。……突き刺した時の質量、生々しく滴る血……。電波体となったキングや今まで戦ってきた者とは、今回は明らかに違っていた。……手にかけたという事実を、嫌でも認識させられるように……。

——旅館…うらかわ——

「……それじゃあ、一応報告は終えるわ。……もし良ければだけど

……あなたも星河スバルの事を気に掛けてくれないかしら……？」

一応報告という事で、四神メンバーやツカサといった先の戦いで関わりの深かった面々には今回の事が伝えられる事となった。……事情を知った上で星河スバルを想ってくれる人を、1人でも多く増やすために。伝える役としてはクインティアとジャックが担当して、ソラに連絡したのがクインティアだったという事だ。

ソラも戸惑っているらしく、どう返せば良いか迷っているらしかったが、最終的にはコクンツと頷いた。

「はい。……あの、クインティアさんは……」

「……私？ ……私は大丈夫。……シドウの方がダメージ大きいようだけど……。……星河スバルに対し、私より思い入れが深かったでしょうからね……」

「……はい……」

大丈夫と口で言っても、普段のクインティアより声のトーンが沈んでいるのは明白だった。……まあ、それを見抜けるとしたらジャックやシドウの様な近い人か、人の本音と建前に敏感なソラのよな者くらいだろう。

電話を切った後、ソラはハンターをベッドに軽く投げ、自身もベッドに座り込んだ。

「……はいつてしか……言えなかった……」

それは、悔い。クインティアに気遣いをもっとも、はいと答えることしか出来なかった事への無力感。戸惑いや様々な感情で心の中はぐちゃぐちゃで、それはクインティアも同じで、スバルはもっと酷くて……。そんなスバルの心情を思うともっと辛くなって……。そういった様々な感情や思いに押し潰されて、何を言えば良いのか

分からなくなってしまったのだ。

スザクはそんなソラを自身の羽で優しく撫でた。

『……今日はもう寝よう？ ……今はソラ、あなたも休まないと』

ソラはコクンツと頷くと、枕に顔を埋めて若干出かかっていた涙を拭った。それからスザクと「おやすみ」を交わし、うつ伏せから横向きに寝返りを打って、思う。

(……早く、帰って来なさいよ……。こっちは大変なんだから……)

黒い繭に閉じ込められている人を想い、また涙が出てくる。……辛い時、傍に居て欲しいと思える相手ならなおさらだ。

そんな事を思っていたからか、その彼の夢を見た。……ただし、悪夢として。

「ぐああああああああああああっ!!!」

黒い嵐だ。率直に感想を言うならそんな所だろう。渦の中心にいるのは自分の良く知る人物。失った右腕から真っ黒な何かが噴き出して、辺りの家を、鎧に包まれた騎士を、逃げ惑う人さえも、薙ぎ払っていく。

それが彼の意志でない事は明確だった。悲鳴を上げて苦しんでいるし、何より彼は関係ない、戦えない人を意図的に傷付けるなんてしない。

夢のはずなのに、夢だと願いたいののに、嫌に現実味を帯びていた。彼の悲鳴は黒い嵐の轟音にかき消され、微かにしか聞こえない。

震える手を、足を、声を抑え、ソラは力の限り叫んだ。

「…………もう…………止めてよ…………。ツバサアアアアアアアッ!!!!」

『ッ!?!? 何々何事?!?!?』

ソラの大声で慌てふためくスザク。…………覚めたらしい。

「…………夢…………? ……本当に…………?」

不思議と、『夢』という感じがしなかった。…………こればかりは直感でしかない訳だが、ソラはその夢が今まで見てきたような夢と違う事を微かに感じていた。

ふと窓の外を見ると、赤い月が煌々と輝いていた。見慣れぬ月の一面に、ソラの不安が強まる。

——クウェービアー——

時間は一日ほど遡る。

長官が手配した飛行機がニホンへ向けて離陸、徐々に高度を上げて飛び去っていく様を、離れた建物の屋根から眺めているモノが1人いた。

淡い銀色の髪が風に舞う。スバルの夢に出てきた、九魂^{くこん}飯綱^{イツナ}と呼ばれた少女だ。

「…………あれが…………星河スバル…………」

マモンの術は相手の記憶を読み、相手の最も望む幸せを見せる。スバルなら、『皆明るく、平和である事』、という風にある。その上で、彼女がスバルの夢に出てきたのはおかしい。彼女は、スバルと会った事など無いのだから。

しかし、現実に来た以上、理由はある。マモンがスバルの記憶を読む際、『スバルは自分を知っている』という風にイズナが先に術を掛けたのだ。

それも、割り込ませる形で。

それも、術者のマモンにも、ツバサの創り出したライトにも気付かれずに。

ヒュウツ……

イズナの横で木枯らしが舞う。一緒になって舞う髪をイズナが押さえた時、その木枯らしの中から声が響いてきた。

『イズナ、勝手に下界に降りたら――』

「怒られるのはこっちだ、でしょう。……分かってるわ。帰りましょう」

もしこの場を誰かに見られていたら、少女が風邪で舞う髪を押さえながら1人で話しているようにしか見えないだろう。まるで『風』が物理的な障壁となっているように、その奥に居る存在は視認できない。

風の中に潜むモノは溜め息1つで気持ちを切り替え、自分の身を隠している風のベールにイズナを入れて風と共に去っていった。

第16話 1人分の咎（後書き）

……この話は筆が進みませんでしたね。……重いもん。

そんな訳で作中でもありませんでしたが、マモンを始めとする大罪達は多少荒っぽい括り方をするなら『人間離れた能力を持つ人間』です。

暁のレポートですが、あれはオレなりの風刺文章って奴ですかね。……ま、結局どうなるかを決めるのは人間で、その報いを受けるのも人間だから勝手にやってろって心情もありますが、ね。

……『悪』、ね。我ながら、これは思い入れのあるテーマかもしれませんね。

ソラの視た夢が『フェアプレイズI F』との接点の1つです
さて、イズナの事ですが、彼女がメインで出るのはぶっちゃけ3
作目です。……出すのは迷いましたが、活動報告に書いた『良い事』
を思い付きましてね。（にっこり）

次話は……まあいいか。広告無しで次話をお楽しみに。（↑え

第17話 籠（前書き）

—— お待たせしました。……だから出来れば19話を書き上げてから
——（↑しつこい

第17話 籠

ピンポーン

星河家のチャイムが鳴る。あかねがドアを開けると、そこに立っていたのはミソラだった。

「……こんにちは」

「……ええ、いらっしやい、ミソラちゃん」

その顔は笑顔だが、それが作り物である事は、普段の彼女を何度も見ている者から見ればすぐに分かる。そしてあかねもまた辛そう
な、どこか痛いような笑顔だ。

だが、それに反しミソラは単刀直入に尋ねた。

「……あの、スバル君は……」

あかねは顔を上、ちょうどスバルの部屋の位置に向けて「まだ、閉じこもっているわ……」と言ってミソラを中へ上がらせた。

星河スバルはここ一週間引きこもっている。不登校時の様に夜空を見に行くという事も無く、ただ、引きこもっている。無論、ルナを始めとしてゴンタやキザマロ、そしておそらく僅かな時間を見つけて抜け出してきたのだろう。ソラも電波変換してやってきた事もあった。……まあ、窓から侵入しようとして若干騒ぎが起きたが、警察呼ばれたりなど大事にはならなかったとだけ言っておこう。そのいずれでも、誰が来てもスバルは陰りがあるとはいえ笑顔を見せたのだが、それが無理をしているようで逆に痛々しい。しかし、だからといって誰かが何か明確な方針——処世術とも言えるか——を、

言えた訳ではない。

何を言ってやれば良いのか、分からないのだ。

結局、人は自分の中に在るモノしか感じない。優しさも、愛情も、怒りも、悲しみも。……『経験』という分野なら一番分かりやすいだろうか。一方が経験した事を、経験していないもう一方に話しても、正しく同じ感情を抱けるとは限らない。その人が見てきた事、聞いてきた事、思ってきた事。そこから生まれる価値観や良識。双方でそれらのギャップが大きければ大きいほど、一方の経験した事の理解に障害をもたらす。

スバルのした事は、ルナもミソラも、誰でも理解できるだろう。だが、それは事実としてだ。どういう感情になっているかを厳密に理解できるのは、同じ事を経験した者だけだろう。

だから、彼の友人達は何も言えない。どんな言葉を掛けたら良いのか分からないのだ。それでも何か言おうと口を『あ』の字に開けるが、言う事が見つからず静かに息を吐きながら『ん』の字に閉じてしまう。

ガチャ

ミソラはノックと軽く声を掛けてスバルの部屋のドアを開く。以前来た時同様、電気は消されていて、彼の部屋にある大きな窓とカーテンは閉められている。そして、スバル自身はベッドに座っていた。

「……いらっしやい、ミソラちゃん。ゴメンね、今電気付けるから」

そう、スバルは苦しげで、若干寂しそうな笑みを作りながら部屋

の電気を付ける。

ところで先程『以前来た時同様』と言ったが、ミソラも一度だけ、僅かな休み時間の間に電波変換して来てくれた事があるのだ。……時間が経ったからだろう。その時よりいくらか落ち着いているようだ。

(……けど、それじゃ根本的な解決にはなってないんだよね……)

ミソラの内心の声の言う通り、それはあくまで気持ちが荒れていない状態になったというだけで、依然としてスバルは己を責めているだろう。……ただ、それを周りに心配かけまいと振る舞い、それでもまだ未熟で、自身の気持ちが雰囲気となつて外に出ている。

罪悪感と自分への嫌悪感は、今もなお彼の心に絡み付いている事だろう。

(……けど、今日は……)

だが以前来た時、ミソラは見た。侑子と通信が出来るという手鏡が机の上に置いてあるのを。

何でもかんでも当てにするのは良くない。自分で頑張る事も必要。

ミソラもそのぐらいの事はミュージシャンとして経験しているし、分かっている。それに、最近ことあるごとに頼んでるような気がするが、それでも、スバルを元気にしたかった。そしてその気持ちと同じくらい、自分では一歩進めるような何かをしてあげられる事は出来ない事も解^{わか}っていた。

「……スバル君」

「ん？ 何、ミソラちゃん」

「ゴメンッ！」

ゴスッ！

「うっ……」

小さな呻き声と共に倒れるスバル。ミソラがスバルの部屋にあった本——それも分厚い宇宙図鑑——を手に取り、思いつきり頭を叩いたのだ。補足を加えれば、角で。

だが、こうでもしなければスバルに内緒で侑子に出会うなんて出来ない。彼が知ったら十中八九、止めに入る。……自分のためにミソラが代償を払う事を、良しとしないだろう。少なくとも、今の彼は。

今の、自己肯定感の下がっている彼は……。

ウォーロックは即座にスバルのハンターから飛び出してミソラを言及しようとしたが、すぐにハープに口を塞がれて下にウォーロックの高い声は届いていない。一方、ミソラは部屋を見渡し、手鏡を見つけるとすぐに開くが……。

「……どうやって話せば良いの？」

そう。手鏡の事自体は聞いているが、どうやって侑子と話すかまでは分からなかったのだ。このままではわざわざ気絶させた意味が無い。どうしようどうしようと焦るミソラに、ハンターから出たライトはツンツンと彼女の太ももを突付き、言った。

『私が知ってます。……協力しますよ』

ライトはミソラとハープの行動からおおよその事を察したのだらう。

そして、鏡から発せられる円形の光の中に映る侑子に、ミソラは言った。その目にあるのは、大切な人を元気にしたいという意味と、僅かながらの恐怖。

「……願いがあります」

侑子は意外な人が出た事で若干驚いたようだが、傍に倒れるスバルとライトを見て、そしてミソラの必死な様子の目を見て、聞く構えを取った。

——バルズランド——

「……なあ、ゲイル」

「ん？ どったの藍川」

現在、2人は書類の整理に追われている。ゲイルは立場柄当然だが、藍川は『手伝わされているから』というのが正しい。なお、黒蓮はゲイルと藍川が仕上げた決算表や諸々の記録を書類保存用の書庫に置きに行っている。

手を止めて切り出した藍川に対し、手を休めず声だけ返すゲイル。そんなゲイルに藍川は溜め息を付くと、自身が作業を中断した理由、つまりは気がかりな事を言った。

「……良いのかい？ スバル君の事。……あの子、きっと悩んでる……」

スバルの事はゲイルや藍川、黒蓮にも当然伝わっている。それか

らというもの、普段は黒蓮や藍川に押し付けている仕事を自分もやり始めてはかどるのは良いのだが、スバルに何も出来ないという事を藍川は心苦しく思っていたのだ。

ゲイルは手を止め、藍川の方を見る。ただし、その顔はからかうような笑みだ。

「優しいなー藍川は。僕達の中で一番優しいんじゃないの？」

「からかうな。……良いから答えろよ。……そりゃあ、ライラの事もあるから多くは言えないけど、少しはスバル君の事も気に掛けてあげたらどうなんだい」

だが、今の藍川に冗談は通じなかったらしい。これでもかというくらいにゲイルを睨み付ける。ゲイルは藍川の優しさに呆れすら覚えながら、苦笑と共に答えた。

「だからこうやって仕事して、余裕を持たせているんだろう？」

「だから何の余裕を――」

「おおかた、今の内に出来るだけ終わらせて自由な時間を作り、何かするつもりなんじゃろう」

「ん、ああ。黒蓮お疲れさま」

藍川のイライラした声を年配の声が遮る。黒蓮はゲイルの労いに頷きで答え、椅子に座った。藍川は背中を擦る黒蓮に近づき、肩を叩きつつゲイルに問う。

「……何をするつもりなんだい？」

「あー無駄じゃ無駄。教えもせん上に、コイツの発想は中から刀でもニトロビンでも何でも出てきそうな突拍子も無いパンドラの箱じやから知らん方が良い」

「ひっどいな。……息子に肩叩きしてもらってる絵になっている人に言われたく無いよ、おじいちゃん？」

「……ほっとけ」

ゲイルの碎けた軽口に無然と鼻で息を鳴らして顔を背ける黒蓮。

藍川はその時の黒蓮がゲイルの息子という言葉に反応したように見えて、つい、といったように尋ねた。

「……黒蓮さん、もしかして息子さんとかいる？」

黒蓮はギロツと藍川を見上げるように睨み（肩を叩いてもらっているのだおのずとそういう視線になる）、やがて視線を前方へ戻し、溜め息と共に答えた。

「……いる」

答えは簡潔だった。ただ、それだけ答えると椅子から立ち上がりながら藍川の手を払い、代わりにお礼の意味を込めて藍川に微笑み、ゲイルの机に向かった。

「……さて、終わったのはこれじゃな。さっきので大分楽になった。早く置いてくるとしよう」

そう言って黒蓮は2人の終わらせた書類を手に取り、いそいそと部屋から出て行った。藍川の気になるような視線を察したのか、ゲイルは椅子の背もたれに体重を預けながら口を開く。

「詳しくは聞いてないけど、息子さんと険悪になりそうな別れ方したそうだね。黒蓮も負い目があるようで、その話題が出るとさっきみたいに早々に立ち去っちゃうって訳」

「……悪い事、切り出しちゃったかな……」

「いやいや、藍川が気に病む事はない。……僕も昔けっこうしく切り出しちゃったしね。……それに――」

ここでゲイルは一旦言葉を切る。机に両肘を突いて顔の前で手を組み、ゆっくり目を閉じ、そしてゆっくり開けた。それは、自分の中で考えを再考し、見直ししているようにも見えた。

「――……僕の見立てだとあとはキツカケだけだと思うんだよなあ。

……黒蓮も納得するだけの会う理由があれば……」

「……意地っ張りで頑固だからね、あの人……」

普段の黒蓮の態度を思い出して思わず苦笑いを浮かべる藍川。黒蓮は根っからの現実主義者で、自分で見た事や聞いた事、それらを自分で納得しないと自分の中で正しいと受け入れないというくらい頑固だ。だが、その厳しいとも取れるスタンスは輸出品の選定で存分に振るわれ、良い値で売れて国の実利に繋がっている。それはもう、彼がバルズランドへ来る前と来た後では大違いだ。

ゲイルは顔の前で組んでいた手を解き、明るい声と顔で藍川を見る。

「さっ。いつまでも喋ってないで出来るだけ終わらせよう」

「それ僕の台詞」

藍川も笑顔で返すが、どこか話を逸らされた感が否めなかった。

(……けど、黒蓮さんがそう言うなら……)

だが、今の行動が何かに繋がるなら、信じてみようとも思っていた。

第17話 籠（後書き）

……さて、「……なんか本当に事ある毎に侑子さんに頼んでるな。……ただの展開上の便利アイテムみたい」などと思った人へ。……後で見ても。

っと、語調が若干荒くなりましたが、今回はそう軽くは無いです。そんな都合の良いキャラの扱いはしたくないですね。

……本当、次の話も更新できたら良いんですがね。19話が真つ当な形になるまでは更新を避けたいので。

で、後半の大人3名の会話ですが、もちろん無意味じゃありませんよ。1作目はソラが主に一面（性格や個性）を出していた感があるので、今作は他の四神メンバーの一面を掘り下げようって思惑があったりしますし。……もう2つは仕組みましたかね、伏線。

それでは、次話もお楽しみに。

第18話 遵守する理（前書き）

……自分の書き方に完全に戻すために書きたいように書いてたら
ドンドン19話が形になっていったという……。とにもかくにも、
19話が乗って来たので18話を更新します。

第18話 遵守する理

――星河家――

一方、ミソラから一通りの話を聞いた侑子は目を閉じ、ゆっくりと目を開けた。

「……対価が要るわ」

「……私に払えるモノなら、払います。……だから、スバル君を……」

ミソラは正座しながら黄色のショートパンツをぎゅっと握り、視線だけは気負いせず、真っ直ぐに侑子に向けた。彼女の願いは、スバルを元気にする事。……元気にするとまではいなくても、そのためのキツカケだけは欲しかった。

対価は何かと緊張するミソラを前に、侑子は「ところで」と言い、突拍子も無い事を切り出した。

「――ところで、2人は付き合っているのかしら？」

「へっ？ ……あつ、はい。……一応」

「付き合い始めてから一番の思い出は？」

ミソラはその問いに一瞬キョトンとしたが、眉を寄せ、人差し指を顎に指して真面目に思い出す。

「えっ……つと……。……学園祭の時、私がスバル君にキ、キスした事かな……。あっ！ で、でもこれは私が勝手にやったヤツで、その後スバル君を抱き締めちゃったり……」

『……ミソラ、段々のろけ話になってるわよ？』

「ッ！ えっ、つと……これはその……」

ハープに指摘されて自身の言った事を反復、及び、その時の甘酸っぱい想いや経験を『つい』嬉しくて多めに話してしまった感がある。

侑子は愉快気に笑いながらミソラをフォローした。

「ふふふっ。あら良いじゃない、可愛らしくて。私もその時の2人見てみたかったわぁ」

「い、いえ……そんな……」

侑子の屈託の無い笑顔にいつの間にか緊張が解け、素直に照れという感情を露にするミソラ。

「じゃあ、それを対価にしましょうか」

「……………えっ？」

あくまで明るく言う侑子の言葉に目が点になり、思考も止まるミソラ。ハープとウォーロックも同じようなりアクションで、ライトは俯き、目を伏せた。だが、ミソラは女性の勘というものだろうか。侑子の言う『それ』に、頭の片隅で警報が鳴る。

「学園祭の日、2人はキスをして抱き合ったりした。……言っつまえば甘酸っぱい青春の思い出ね。その記憶を対価としてもらうわ」
「そんな……………」

自分の警報が当たった事に愕然となるミソラ。ショックを受けているミソラの横に並び立つように、ハープとウォーロックが庇い出る。

『ちょっと！ それって酷いんじゃないかしら。……2人の思い出を……対価なんて……』

『大体、記憶なんて渡したり出来るもんなのか？ それに、今までの対価は料理とか軽いヤツだったじゃねえか！』

ハープの言葉はミソラの心情を思つての言葉。ウォーロックは正論というヤツだ。確かに、記憶を相手に渡して自分がその経験を忘れるなんてどういったものか想像できないし、今まで――ウォーロックが見てきたのは――料理や酒といった比較的手軽な対価だった。だが、それに侑子は押されない。ブレもしない。冷静な声色で続けた。

「いいえ、本当に大事で、大切な記憶だからこそ対価になるの。……ミソラちゃんのスバル君への想いは強い。……その想いの強さの分だけ、対価は重くなるわ」

ミソラはスバルの事を本当に大事に想っている。その大事な存在が辛い時、それを助けてもらおうというのだから、想いが強ければ強いだけ対価が重くなるのは分かるだろう。……例えそれが当事者たちの倫理に関わろうとも、それが対価として正等なら、対価として頂く。それが、侑子の『願いを叶える店』なのだ。

そしてその答えは、ウォーロックの問いをも答えを返していた。侑子の冷静な口ぶりからして、出来る自信があるのだろう。そして、今まで対価が軽かったのは、今まではたまたま願いが軽かったからというだけなのだろう。今回はたまたま願いが重かった。故に対価も重くなる。……ただ、それだけなのだ。

『けどっ！』

「いいっ。……良いよ、ハープ。……ありがとう」

食い下がろうとするハープの前に手を伸ばして止めるミソラ。その目には動揺と不安の色が映るが、心は決まっているらしい。

「……お願いします」

ミソラは視線をハープから侑子へゆっくりと向けると、静かに頭を下げながらお願いした。そして侑子もまた、静かな口調で応える。

「……ええ。……スバル君を元気にするキツカケは与えましょう。

……その点は安心して」

「……はい」

ミソラはしっかりと頷きながら返した後、スバルの方に視線を移す。

「……もし過去にあった事を忘れても、思い出は続いていく……。

……これからも作れるもんね。……スバル君との、思い出を……。

――」

悲しくない訳が無い。

苦しくない訳が無い。

自分の大事な記憶を失うのだから。だが、思い出を失っても終わりではない。彼女の言う通り、思い出や過去というモノは、時間や当事者達の想いと共に綴られていくモノだから。

そしてスバルの横顔を見ながら、ミソラは微笑んだ。

「――……今度は、スバル君の方から返してくれると嬉しいな」

「……それじゃあ、いくわね」

侑子はミソラが言い終わるのを見てから手を彼女の方に向けた。それと共にミソラの目が虚ろになり、頭から光の粉が登る。それは記憶の欠片というものだろう。記憶の欠片はミソラの頭上で結晶となり、鏡の中に吸い込まれる。そして記憶の結晶は向こうに居た黒モコナの口から出て侑子の手に収まった。

「……確かに対価はもらったわ。――」

ドサツ……

虚ろだったミソラの目は完全に閉じ、横向きに倒れた。ハープとウォーロックは驚いているが、侑子は最初から倒れる事を知っていたのだろう。言葉の続きはハープとウォーロック宛てに言った。

「――今晚、展望台に行きなさい。そこで待っているモノがいるから。……そう、ミソラちゃんに伝えて。……何の記憶を渡したかは思い出せないだろうけど、私に願った事は覚えているだろうから」
『つていうかミソラはどうしたのよっ！』

「寝ているだけ。しばらくすれば目を覚ますでしょう」

依然として冷静な口調な侑子にカチンと来たのだろう。食い付くハープにアツサリと返す侑子。

そして鏡から光が失われ、また人工的な光で照らされた部屋に戻る。

『ケッ。自分で叶えるんじゃないのかよ』

『……まあ、あそこまで対価対価言われたらねえ……。言ってる事は分かるんだけど、やっぱり何だか……』

ウォーロックとハープはミソラとスバルの寝顔を見守りながら不

満、というより納得できない事を表に出す。そんな中、ライトは手鏡を元の場所に戻した後ポツリと言った。

『……そうするだけの理由があったんだと思います。……侑子さんなら、おそらくスバルさんがマモンを手にかけて記憶はもちろん、その時の感情も抜き取る事が出来るでしょうが、その分対価も重くなる。……もしかしたら、何か1つの2人の思い出ではなく、告白した時の記憶や感情……下手をするとミソラさんの中からスバルさんへの記憶や感情……言うなれば関係性が対価になっていたかもしれない……』

そしてライトはこの時言葉や態度に出さなかったが、侑子の表情から感じる事もあった。通信を切る直前に見せた薄い笑み。眉を下げ、どこか寂しそうで、申し訳無さそうな瞳。それに対していくつかの推測は立てられるだろうが、そのいずれも冷たさとは程遠い感情だ。

……ただ、その感情より彼女の遵守じゅんしゆしている理コトワリの方が彼女の中で強かった。……ただ、それだけなのだろう。そうでなければ、『遵守』とは言わない。

ウォーロックとハープはその言葉に目を見合わせ、再びライトの方を見る。

『……あの魔女に出来るオレ達への最大の譲歩があれ、って訳か。……だから、出来るだけ対価が軽くなるように別のモノに頼むって形で……』

『……けど、一体何が待っているのかしら？』

『そればかりは……』

首を横に振るライト。元気にするキツカケ、という言葉から、悪

いモノではないだろうが……。

「……ん、んんっ……」

瞼を動かし、スバルがゆっくりと目を開けて起き上がる。その際、手に何かサラサラした物が触れるのを感じ、そちらを見るとミソラが寝ていた。

「ッ！……！！？？」

及び、座ったまま後ろに下がって机に激突。ウォーロック達が声をかける暇も無い。そしてスバルは思いつき慌てた様子でミソラやウォーロック達を指差した。

「なななななんでミソラちゃんが寝て——っていか何で僕の頭が痛くて……！？」

『大丈夫、スバルさんは寝てる間何もやらしい事はしてませんでした』

『《……殴られた記憶ねえのな。……痛みで記憶ぶっ飛んだか？》』
『《……ま、その方が良いでしょう》』

ライトはスバルにやや冗談を加えたフォローを入れ、ウォーロックとハープは小声でやり取り。そしてそんな賑やかな声のせいか、ミソラも目を覚ました。

「ん。………おはよう、スバル君。……えへへ、スバル君がお昼寝しちゃったから私もつい寝ちゃった……」

小さく舌を出してはにかむような笑顔のミソラ。

「……え、そう、だっけ……?」
「うん♪ そうだよ」

記憶が曖昧なため首を傾げるスバルに依然笑顔なミソラ。そんなミソラに対し、ウォーロック、ライト、ハープの順で以下のような事を内心で思う。

《……即興で良くそこまで言えるもんだ……》

《さすがミソラさん……》

《……まあ、活動がら歌が中心だけど、演技も上手いしね、ミソラ……。……っと、伝えないと》

ハープは今晚展望台へという侑子の伝言をミソラの耳元で伝える。ミソラは視線をハープの方に向けながら「ふんふん」と頷くとスバルの方を見て、言った。

「ねえスバル君。今晚、展望台へ行かない?」

「……ゴメン。……そういう気分じゃないんだ」

一瞬驚いたようにキョトンとしたが、再びスバルは陰りのある笑みを浮かべた。誘ってくれたミソラに対して申し訳ないという気持ちも表に出ているが、それ以上に外に出るのが怖いかもしれない。周りの目や声が自分へ向けられていて、責められている。……そういった、被害妄想とも取れる考えを持つまでに彼の精神は病んでいるのだろう。

ミソラもその感情を察したが、それでも笑顔で誘う。

「だったら、深夜はどう? その時間なら人はまずいないだろうし。それに確か、冬って空気が澄んでるから星が綺麗に見えるんだよね

？」

「う、うん。確かに今12月だからちょうど……。けどまだ行くとは――」

「問答無用！ たまには外に出ないと体にも悪いよ？ それじゃ、電波変換して迎えに来るから！ ……そろそろ行くよ、ハープ」
「えっ、ちよっ！ ミソラちゃんっ!？」

シュタツと手を上げ、文字通り問答無用というテンションで退室するミソラ。

「……結局何しに来たの？ ミソラちゃん……」

『少しでもスバルさんとお話したかったんですよ、きつと』

「……そう、なのかな……」

どこか腑に落ちないながらも、とりあえずライトの言葉に納得するスバル。一瞬その前に寝てしまおうとも考えたが、それこそミソラに悪い気がして起きている事にした。

第18話 遵守する理（後書き）

……ライトが言っていた侑子の表情ですが、『ツバサ』で言うところ20巻、インフィニティ（チェスの国）で見せた顔です。イーグルに対して「十分よ」って言ったような、あんな表情。

……実はこう見えて、対価は自分なりに対等なのを考えてるつもりなんですよ、毎回ね。その願いが重ければ、その人にとってその者の価値が高ければ高いほど、対価は重くなる。

……最初は告白した時の記憶と感情をって思ってたんですが、それだと少し重いので調整を、と。

……そして実は、ハープを宥めて納得して決めるミソラに対し、書いてて「……電波少女ミソラ★ウェーブ……？」等と思ってしまったり……。だって何だかまどマギ12話で契約する時のまどかちゃんに見えちゃったんだもん、あの場面のミソラちゃんが……。いや、俺だけかもしれないけどさ……。

こほんっ。……次の話ではHOLiCキャラが登場。誰が出るかはお楽しみにです。……あえてヒントを言うと、可愛らしい、かな。

第19話 おでん屋（前書き）

はい、このサブタイで誰が出てくるか分かった人はX X X H O L
i Cを読んでもすね（笑）。

第19話 おでん屋

ミソラは電波変換した姿で予告どおり深夜に星河家（の、窓から）に訪れ、スバルと共に展望台へ向かう。玄関から行くより、両親には寝ている事にして電波変換。窓から外、そしてウェーブロードへ行った方が心配をかけずに済むというミソラの作戦だ。

ハープ・ノートはロックマンの左後ろを走りながら話しかけてくる。

「で、どう？ 久しぶりのロックマンは」

「うん……。特に問題はないよ。……ッ。ゴメン、ミソラちゃん。先に行くね」

「えっ」

言うが早いか、ロックマンは俯いてスピードを上げて正面の電波くんを追い抜いていった。

『ビビッ！？ い、今のロックマンさん……………？』

「ゴ、ゴメンね。大丈夫？」

驚いた様子の電波くんに駆け寄るハープ・ノート。彼女の気遣いに、電波くんはハープ・ノートを見上げて頷いた。

『は、はい。……けど、どうしたんですか？ 最近ずっと引き籠つてと思ったら猛スピードで爆走なんて……』

「……怖いのかな……」

ポロツとハープ・ノートの口から紡がれる言葉。彼女自身上手く言葉に出来ないが、今、彼は恐れているように思う。むろん電波く

んではない。そういう問題ではない。

他と関わる事自体が怖いのだ。

マモンを手にかけて自分に対する嫌悪感。それがまるで螺旋を描くかのように廻り、増幅され、そのマイナス感情のデフレスパイラルとも言える動きが彼の心の中で起きている。

他に否定される恐怖。

自分が関わる事で相手の道筋を変えて悪い方へ変えてしまうのではないかという恐怖。

それらの恐怖を一度に回避するには、自分が怖いと思うモノ……つまり自分以外の『他』を拒むのが手っ取り早い。だから、電波くんを避けたのだ。

なお、ミソラやあかねは親しい仲という事で、「近くにいるのは良いけど過干渉は……」といったラインなのだろう。人は相手に応じて『自分に近づいて良い距離』を作り、活用するものだからだ。

一方、ハープ・ノートの『怖いのかな』という発言を自分の事だと誤解してしまったらしい電波くんはビクビクと泣き声だ。

『ビビッ……。僕ってそんなに怖いんですか……。あの優しいロックマンさんに怖がられるなんて……』

「えっ、あ、違うよ。電波くんの事じゃない。ゴメンね、それじゃ」

ハープ・ノートは苦笑交じりで電波くんに謝るとロックマンの後を追う。

案内する側が後を走るって、なんだか申し訳ない。

そんな事を思いながらロックマンに合流。ちょうど展望台の入口の階段の辺りという事で、そこで降りることにした。

電波変換を解除したスバルはふと顔を上げ、キョロキョロ辺りを見渡し始める。

「？ どうしたの？ スバル君」

「うん……。ねえミソラちゃん、何か匂わない？ ……何だか、美味しそうな匂い……」

「えっ？ ……ホントだ。何の匂いだろ」

電波変換している時は酸素があるかどうかなど気体の影響を受けないが、人間の状態なら違う。匂いといったモノも感じられる。

ウォーロックにハープ、ライトもハンターの外に出て5人で顔を見合わせ、匂いのした方へ歩いて行く。場所は展望台で望遠鏡が置いてある辺り。ようは広めの高台の上だ。そして、近づくにつれて鮮明になるその匂いは……。

「……おでん？」

『みてえだな』

『……ちよつとウォーロック、よだれよだれ』

『おつと……』

スバルの言葉にウォーロックの同意。……まあ、ハープの忠言通りあまりに美味しそうな匂いだったという事でウォーロックはよだれを垂らし、それを一同に見られるという恥をかいてしまった訳だが……。

ミソラがそれを苦笑いで済ませて再び前方を見ると、おでんの屋台がそこにはあった。

「ッ!？」

先程まで無かった存在に目を擦って存在を確かめるミソラ。だが、それでも屋台は存在している。また、ミソラの驚いた様子に気付いた他の面々も正面を見て驚いた様子だ。

一同が呆然としている中、屋台から一匹の従業員が出てきた。おそらく、皿の用意などだろう。……なお、一匹というのは間違いではない。その従業員は、その子は、狐なのだから。

糸のような細い眼。着物を着て、腰には三日月とススキが描かれた布を付けている。

「ッ！！？」

次々起こる事態に一同が驚いている中、その狐の子もスバル達に気付いたらしい。スバル達の方をジッと見て……。

「……っ！ 人間っ！？」

「ッ！ ウォーロック！」

『おう！』

あんまり驚いたらしく皿を手から放り投げてしまうが、それが地面に落ちる事はなかった。とっさにスバルがウォーロックに呼びかけたのとウォーロックが動いたのは同時。ウォーロックは両手で器用に皿を受け止め、小狐に渡す。

『ほらよ、もう放り投げるんじゃないぞ』

「う、うん……ありがとう……」

小さい声、オドオドした態度で受け取る小狐。どうやら相当シャイで照れ屋な性格のようだ。

「どうした？」

静かで落ち着いた声と共にのれんの奥から一匹の狐が出てくる。丸眼鏡を掛け、首には布を巻き、無地の着物。腰には小狐と同様の布を付けている。どうやら、この小狐の父親らしい。

小狐は皿を片手に抱えるように持つと、空いた方の手をウォーロツクやスバル達に向けた。

「あ、あのねっ。驚いて皿を落とした時、この人が落ちる前に拾ってくれたの」

「おや、そうでしたか。それはありがとうございます」

狐の御店主が深々と頭を下げ、次にスバル達を凝視。やがて何か気付いたのか、納得した声を上げた。

「……あ、もしかしてあなた達が侑子さんが言ってた方達でしょうか。侑子さんがこの使いを飛ばして——」

言いながら右手を上にとげると、のれんの奥から一匹の黒い蝶が飛んできて指に留まった。

「——今日あなた達が来るからもてなして欲しいと頼まれましたね。まあ、次元を越えた出張店舗の様なもんです」

侑子が言っていた『待っているモノ』は、どうやらこの狐の親子だったらしい。侑子の使いだと言う蝶は、役目を果たしたのか霧に溶けるかのようになんと消えていく。

侑子の知り合いという事で、スバル達の中にわずかに残っていた警戒心も解ける。伊達に宇宙人や古代文明ムーのトンデモ技術を見

てきた訳ではない。順応性はある方だ。

ここで不意にご店主は、「ところで」と切り出した。

「ところで、その方々は……。視た所アヤカシでも無いようですが……」

彼の視線の先にあるのはウォーロックやハーブだ。おそらく、彼等の世界はウィザードが存在しない世界なのだろう。

『えっと……言うなればこの世界のアヤカシのようなものです。チカラが無くても人間に見え、手助けしたりする者達でしょうか』

ライトの簡単な説明。ウォーロックは『オレ達がアヤカシって何だよ』等と言っているが、スバルやミソラが苦笑交じりで「まあまあ」と抑える。

（そういえば、封魔さんもそんな質問してたっけ。……やっぱり、封魔さんも他の世界の人だったのかな……）

今更な再認識。そして、スバルはふと思った事がある。狐の親子はツバサが教えてくれたような明らかに『アチラ側の存在』にもかかわらず、ウォーロックには狐の親子が見えている。

「……ウォーロック。……えっと、この人達の事見えるの？」
『あ？ ……あ、そういや……』

スバルは狐の親子に対して人と言おうか匹と言おうか迷ったが、流石に後者では失礼という事で人とした。また、ウォーロックもスバルの言葉の意味が分かったらしく驚いている。

そう。今までアヤカシを始めとした『アチラ側の存在』はスザク達のような特別なウィザードを除き、通常のウィザードには見えなかった。だが今、ウォーロックには狐の親子が見えている。

呆然としているウォーロックに対し、狐のご店主はケラケラと明るく笑ってみせる。

「そりゃ見えますよー。私達はここに在るんですから。……もつとも、余程強いチカラのある方で無ければ店も私達も見ること出来ませんかね」

そう言ってご店主はスバルに視線を移し、スバルは驚いたように自分を指差した。

「えっ。僕、ですか……？」

「ええ。……見た所、封じられてはいるようですが、それでも相応のチカラがあれば。それと、他の方に見えているのも貴方のチカラが影響しているためですね」

スバルの質問に頷きながら答え、「まあ、この狭間という場のチカラもありますが」等と続ける。その言葉にふと周りを見れば、周囲は靄もやの様な紫色の景色。こちら側とあちら側の狭間。ちょうど、境界のような場所のため彼等の姿がウィザードやミソラにも見えやすくなっているのだろう。

『……移動した感じはしなかったぞ……？』

「私共を見て、店の周囲に来たらそうなります。まあ、神隠しに遭ったり狐に化かされたようなものと思ってくださいな」

いまいち納得できないように唸るウォーロックに快活に笑うご店主。そしてそのすぐに、ご店主の背後の店から小狐の顔がひょっこ

り出てきた。

「お父さん、皿の用意できたよ」

どうやら、ご店主がスバル達と話している間にせっせと用意して
いたらしい。シャイ故に話にくくて、代わりに用意を、という考
えからだろう。

「ああ、ありがとう。……さあ、寒かったでしょう。おでんでも食
べて温まっていってください」

ご店主は首を動かし、息子の方を向いて礼を言った後スバル達を
店へ誘った。確かに、今は12月上旬。外気は刺す様に寒い。

スバル達は若干の抵抗があったが、不思議と悪い人——というか
狐——でない気がしてのれんをくぐり、屋台に入る事にした。

第19話 おでん屋（後書き）

うーん……スバルの心の動き、伝わりましたかね？ 悪い感情、不安な感情ってのは、まるで螺旋を描くかのように下へ下へ嵌って行きますから。

なお、相手に応じて受け入れられる距離が違うってのはそういう名前はちゃんとあります。心理学の方面で、『パーソナル・スペース』ってヤツですね。言ってしまうと、心理的な縄張りや心理的な結界とも言えましょうか。

では、次話もお楽しみに。○○（おおまかなプロットは出来てるから、後は書きたい事を整理して書くだけってね。……まあ、それも難しいんだけどね）（苦笑）。

第20話 護壁（前書き）

サブタイは、『マモリカベ』と読みます。……別に結界でも良かったのですが、少し違うので。

第20話 護壁

「どうぞ」

狐の店主からおでんを渡されるが、スバルは中々手を触れようとしない。

なお、ミソラはスバルの隣に座り、ウォーロックにハーブ、ライトは席の大きさの都合上、屋台ののれんの外側にいる構図だ。

「どうしたの？ スバル君。……美味しいよ？」

ミソラはスバルに尋ねたあと一口食べ、感想を言う。スバルは「うん……」と頷くだけで、依然として手を付けようとはしなかった。狐の店主は腕を組んで考え込み、やがて口を開いた。食べてもらえない事に対しての不機嫌さは感じられない。

「……他と関わったり、他を知るのが怖いんですか？」

「ッ！ えっ……………」

その戸惑いの声はスバルのものだったが、ミソラもウォーロックも、ハーブもライトも驚いた。また、子狐くんはスバル達が一斉に驚いた事で驚いている。

なぜ？ という感情が外に出ていたのだろう。狐の店主は穏やかな口調で切り出す。

「料理ってのは、作り手の心、まあ、性質、とでも言いましょうか。それが宿るもんです。甘い物が好きなら無意識に砂糖が多くなった、柔らかい方が好きなら煮込みが長くなったり。……そういった、作り手の個性とも言えるものが、料理に現れてしまうんですよ。長

く作ってるなら、なお更に」

味覚。それは自分が生きている間少しづつ重なり、積み上げられていくモノ。自分の好みという癖が無意識に料理に影響を与える。……いや、味覚だけではない。聴覚や他の器官でも、同じような事が言えるかもしれない。……例えば、長く複数の声を聞いている内にそれらの声を聞き分けられるようになったり、何かしらの経験が長くからだ軀に染み込む事で、「ついやってしまう」という無意識による五感の癖はあるだろう。

『……それがどう繋がるんだ』

「ウォーロック」

料理という全く関係ない所から話が始まった事でウォーロックは首を傾げて口を挟み、それに対してスバルがたしなめる。狐の店主は気にしなくて良いと言いたげに手を横に振り、続けた。

「だから、料理を食べるという事は、作り手を知る、という事にもなるんです。自分なら自分を。相手なら相手を。……私どもの料理に抵抗を持つという事は、私達を知ったり、関わるのが怖いんじゃないかなと思いますね」

暗い気分の時、食欲が湧かないのもそういうケースがあるかもしれない。料理やテレビ、雑誌……一言で言えば『外部からの刺激』から避け、何もせず、自分の殻に閉じ籠りたい。そういう時は無いだろうか。……それはもしかしたら、他と関わらず、自分の殻に閉じ籠る事でこれ以上傷付かないように、自分の身を護ろうとする動きなのかもしれない。

「私共は、お客さんに幸せな顔で帰ってもらいたくて作らせて貰っ

てます。なので、どうかお食べになってくださいな」

狐の店主の言葉の後、子狐くんがスバルのズボンをクイクイと引っ張る。スバルが子狐くんの方を向くと、恥ずかしそうにチラチラと目を合わせたり背けたりしながら言った。

「あ、あのね……。お父さんのおでん、凄く美味しいの。……それで、元気になってももらえたらなって……」

「……僕が……。元気に……」

2人の厚意は嬉しい。だが、まだスバルはその気持ちを受け止めきれずにいた。自分なんか元気になって良いのだろうか。自分なんかが開き直って、当たり前前に生きていて良いのだろうか。

狐の店主は、スバルのそういった考えを見透かしてか、それともただの偶然か、明るく笑いながら言う。

「なって良いと思いますよ。料理ってのは、人を元気にさせるモノですから」

何かを食べるといふのは、自分の中にエネルギーやビタミン、諸々の養分を取り入れるという事。肉体を健全に保つ大事な要素だが、フアクター精神面にも効果がある。何かを口に含んだり食べると、安心感があるそうなのだ。

「……………いただきます」

スバルは一言そう言って、大根を口に含む。

実は、頂きます、という挨拶も意味がある。普段何気なく使われているが、これは命を頂きます、という意味なのだ。食材となってくれた生物と作ってくれた人に感謝を込めて言われる挨拶。

「……美味しい」

ポツンと零れる言葉。

身に染みるとはこの事か。灰汁あくが念入りに抜かれた出汁だし。大根元々の苦味に埋もれず、強過ぎず、適度な甘みを加えた出汁。そして大根も、長く時間を掛けたのだろう。出汁の味がよく染み込み、それでも歯応えを維持している。

どこか、何故だか、懐かしいと思わせるような、そんな風味だった。

「？ あれ、スバル君……」

「えっ？ ……あれっ……」

隣のミソラがキョトンとして自分の顔を見てくるのに気付いたスバルは自身の頬に冷たい何かが伝うのを感じた。

ナミダだ。

完全に無意識に流れた涙にスバルが戸惑っている中、狐の店主は口の端を笑みで広げた。

「……ほら、元気になったでしょう？」

泣くというのは、『泣ける』という事だ。スバルの心は死んだ訳ではない。ただ、自責の念や強いショックで凍っていただけだ。凍った心は温められればまた感情を取り戻す。店主が本当にお客の事を考えて料理を作り、幸せな顔で帰ってもらいたい。そういう願いを頭より先に直感で理解でき、スバルの心の氷は涙となって溶け出したのだろう。

「……あの……実は……」

スバルの口は自然と開いていた。そして、打ち明け始めた。自責の念から生まれた心の氷が溶けた事と、こんな料理を作れる人——本当に食べる側の事を考えて料理を作る人——だったら、話しても良いと思えたから。……実際、スバル自身も抱えてる感情や思いを言葉にして誰かに聞いてもらいたかったのかもしれない。正しい・悪い以前に、苦しんでいる事自体を誰かに認めてもらいたかったのかもしれない。

店主も、静かに聞いてくれた。不意な話に戸惑わず、ただ、聞いてくれた。時折相槌を打ちながら。

実際、その方がスバルも助かっただろう。途中で否定なり気遣いなりの何らかを言われて自分の言葉が中断されてしまったら、次また続きを言えるか分からないから。

誰かの相談に乗る、相手の打ち明けてくれた話を聞く時、まずは相手の話を聞く事から始まる。否定も肯定も自分の意見も言わず、まずは話を聞き、相手の『苦しい』を受け入れ、赦す。そこから少しずつ信頼関係を作っていくので、本当にまずはそこからのだ。

スバルの話が一通り終わった時、狐の店主はスバルの頭に手をそっと置き、言う。

「……お若いのに、大変な思いをしましたね」

それしか言わなかったが、その方が嬉しかった。聞こえの良い飾り事も何もかも、今はスバルを追い込めるだけ。今の彼に必要なのは、単純に、受け入れてもらおう事だ。

スバルは目線を沈めて誰とも目を合わせないまま尋ねる。

「……狐のおじさん……。……僕なんかが安穩と生きていて良いんでしょうか……。……いっそ……。消えてしまった方が良いんじゃないかと自分の中で思ってしまったって……」

「……それは、酷く勿体無い事ですね」

「？ ……勿体無い？」

疑問で顔を上げるスバル。消えるのはダメだという否定ではなく、勿体無いという言葉を使ったのだ。

狐の店主は頷きながら穏やかな口調で続ける。

「ええ。本来、チカラが強ければ強いほどアヤカシを呼び寄せやすく、自責の念などで自分を追い詰めている時はなおさら引き寄せて、どんな厄災が起こるか分からない」

スバルのチカラは先の戦いを通じて強まり、ツバサが離れてからも育ち、狐の親子や屋台が見えるくらいに強くなった。そして、スバルは自分を自分で「存在しない方が良いんじゃないか」と悩み、自責の念に駆られている。……それは言うなれば自分の不幸を願うという事であり、アヤカシを引き寄せる要因にもなり得る。

だが……。

「しかし、見た所そういったモノを見たり経験したというのは無さそうだ」

確かに、アヤカシ絡みと思われる不可解な災難は経験していない。経験以前に、そういった存在が近づいたら、ライトが知らせるだろう。それが無いという事は、先に何かに阻まれていたという事。

「それが無かったのは、貴方を知る者達が貴方に元気になって欲しい、これ以上傷付かないで欲しいという思いが壁を創り、護ってい

たからでしょう。……そんな大切に思われている人が、元気になって悪い訳がないじゃないですか」

スバルが落ち込んでいる事は暁やクインティア、ジャック……あの場にいた者を始め、ソラやゲイル、藍川、黒蓮。様々な人が知っている。そしてそれと同時に、誰もスバルにこれ以上に傷付いて欲しいなんて思っていない。

狐の店主はフツと微笑み、スバルの頭に再び手を置いた。優しく、穏やかな声と同じように。

「だから、そんな事は言わないで下さい。……それに、ウチのチビは貴方を気に入ったようだ。チビが気に入った人には、落ち込んでいて欲しく無いですからね」

その言葉にスバルとミソラが子狐の方を向くと、照れくさそうに、恥ずかしそうに、それでも、スバルの腰——ちょうどベルトの位置——を掴んでいる。まるで、自分がいる事をスバルに訴えるように。スバルは優しく微笑み、子狐と顔を見詰めて礼を言う。

「……ありがとう」

「ッ!」

元々照れ屋な性格だからか、子狐の尻尾がボツと膨らむ。おそろく、嬉しいのを上手く表現できなくて顔や言葉以前に尻尾に現れてしまったのだろう。そして、スバルの腰を掴んだままミソラの後ろに周りこみ、恥ずかしそうに、嬉しそうにスバルを窺ってくる。

スバルは、改めて『外』へ目を向けた。今までは自分を責め、自分の内側だけを見てきたが、ミソラも、狐の親子も、ウォーロックもハープもライトも、誰も自分を責めている目はしていない。その事に、今やっと気付けた。

「……ありがとう」

その礼は子狐だけでなく、この場に居る者だけでなく、自分に元気になってもらいたいと思ってくれた人全員に対してのお礼。

……自分の傍に居る、消えないように願い、自分の存在を受け止めてくれる人達。そして自分自身がその人達の為に消えたくないと思える人達。

そういった人達がいる事を、スバルは再認識できた。悲劇や自責の渦中にいる時は気付けない事だ。

スバルがその礼を言った時、再び感情が涙となって溢れ出てきた。犯してしまった事実。それによる罪悪感。自分を追い詰めていた苦しさ。受け入れてもらえた嬉しさや安堵。様々な感情が秩序無く彼の中で溢れ出している。

ミソラはそつとスバルの顔を自分の肩に埋めさせ、泣かせてあげた。優しく頭を撫でながら、狐の店主が子狐にハンカチを持たせてミソラに渡すまで。

スバルの涙は、しばらく止まる事が無かった。

第20話 護壁（後書き）

そういえば、『千と千尋の神隠し』でも白のおにぎりを食べて千が泣いていたシーンがありました。この話のもそれですね。心を元気にしたって事で。

なお、子狐くんがスバルを気に入ったのは、優しい人だと直感で分かったからだと思ってくださいな。小さい子や動物って、優しい人が無意識に直感で分かるって言いますし。

狐のおでん屋の話はまだもう1話（下手すれば2話）続きます。

……ホント、長くなりがちですね（汗）
では、次話もお楽しみに。

第21話 言霊（前書き）

サブタイの読みは、『コトダマ』ですね。活動報告に書いたとおり、ちよつと後半がややこしいです。

第21話 言霊

スバルの涙が落ち着いた頃、狐の店主は明るい口調で切り出した。

「さあ、元気になった所で、ここからは明るい話をしましょう。先程申しました通り、私共はこの世界の事をほとんど知りません。例えば、その方達のような存在は私共の世界ではいなかったもので、色々聞いてみたいんです、この世界の事を」

それに、土産話にもなるでしょう。

などと手札を隠す事も無く、愛想良く話す店主。そして、店主が言うその方達とはウォーロックのようなウィザードの事だろう。

スバルとミソラは笑みを返し、時折店主の出したおでんを食べながら色々な事を話した。ウィザードとはそもそも電波体の事で、それには宇宙人と人工の2つがある事。……多分に例外かもしれないが、ムーの電波体の事も。

そして、スバルとミソラも店主からそちらの世界の事を色々聞いた。表に出ないだけで、人間が認知できていないだけで、アヤカシや妖怪がいる事。スバルがこの世界にもいると言うと、店主が知ってる限りの対処法も教えてくれた。まあ、ほとんどが撃退よりも身を護る事を重視した対策だったが。

そんな中、スバルのチカラが何ガキツカケで目覚めたかという話でツバサの話が出て、そこからツバサがどれだけトラブルメーカーでイタズラ好きかという話題から今回の厄介事——ルシファー達——の話題に入った時、狐の店主はうーんと腕組みして困ったような反応をした。

「うーん……。言霊とは厄介ですね……」

「？ 言霊？」
『って何だ？』

ミソラとウォロックが首を傾げたのを見て、狐の店主はどう説明したものかと考えているのか「ふむ」と考えてから口を開いた。

「手早く言えば、ヒトにだけ使える鎖、とでも言いましょうか。本来、私共を含めて生物は様々なものに縛られています。自然の決まり事や時の流れ、軀という名の器、心という名の自我。……それらは全ての生き物に共通する鎖ですが、人にだけ使える鎖があるんです。まあ早い話が言葉コトバですね」

「……言葉……」

あっけらかんと明るく言うが、それはそれで怖い話だ。コミュニケーションの手段として当たり前に使っている『言葉』。それらは確かに使うようにっては誰かを励ましたり傷つけたりも出来るが、ルシファアルシファアのものは別格だ。彼の『言葉』は他を言葉のままに操るチカラを持っている。

スバルの反芻に、店主は頷いて続けた。

「ええ。言葉です。一度口から出してしまったものは返せず、無かった事にはなりません。言葉は生きています。そして、時には人の生き筋さえ縛ります」

例えばこんな事は無いだろうか。他人からダメと言われ、その言葉が重荷プレッシャーとなって全力を発揮できず、結局失敗してしまうという事が。

それは言葉を投げかけられる事で「本当に失敗したらどうしよう」という不安や「そんな事は無い。絶対に成功しよう」という打ち消すような思い。それらはプラス・マイナスの区別はあろうと自分の

中での葛藤となり、雑音となり、集中を阻害する。そして失敗してしまうというプロセスによるものなのだろう。

そして、誰かの言葉に励まされ、その人の一生を支える言葉となったのなら、1つの言葉がその人の人生に影響を与えた事を意味する。それは人の生き筋を、運命を、縛ったとも見える。

言葉は、その時々で励ましたり傷付けるだけでなく、場合と言葉、相手によっては永遠に思考や行動を縛る鎖ともなり得るのだ。

ウォーロックはここで、先程店主が言った言葉に唸りながら尋ねた。

『……言葉、言霊の方が良いか？　その持つチカラは良く分かったが、何でそれが人間にだけ使える鎖なんだ？　お前等だって普通に喋ってんだろ』

「私共は、単なる在るモノ、ですからね。そこまでの影響力はありません」

「???」

スバル達がキョトンとしたのを見て、言葉足らずだと気付いた店主は分かりやすい言葉を選びながらといった様子で少しずつ答えた。

「……一言で言えば、ヒトの影響力は大きい、といった所でしょいか。……ヒトが見聞きし、それに対して名付け等で存在を認識しなければ、単なる現象で終わります。アヤカシであれ私共妖怪であれ、自然現象であれ、それは同じです」

古来より、人間は他に影響を与えて、時に与えられて生きてきた。開拓という形で森を切り開き、先に言った様に言葉や行動が後の人

間に影響を与えたり、その影響力と範囲は広く、強い。不思議な事や奇々怪々な事、そしてその存在は、人間が興味を持ち、調べ、認知しなければ、ただの事象として終わるのだ。

認識やその認識をベースに出される思考や行動。その影響力はどこまで深い所に踏み込んでいるのか分からないほどに。

「……でも、それじゃあ貴方達は……」

スバルは眉を下げて狐の親子を見る。

それでは、人間がこの世の理を曲げ、無いモノを在るモノとし、在るモノを無いモノとしているような、神にも似た所業とも言えるようで、良い感覚はしなかった。それでは、いま自分達の目の前にいる狐の親子の存在が幻のような感じがして、寂しく思った。……確かに今、話しているのに……。

スバルの心情を察したのか、狐の店主は明るく笑いながらその考えを否定した。

「いえいえ、正真正銘、私共は存在しますよー。ただ、視えない人にとっては存在しない。見える人にとっては存在する。ただそれだけです。……善悪というのもヒトが勝手に決めているだけで、ヒトでないモノにそんなのは関係ありませんしね」

ヒトは現実存在する数多の情報や出来事を自分の価値観によって取捨選択し、取り入れて価値観の一部としてたり否定したり答えを出したりする。そうやって自分の認識の中に創られた世界は、自分だけの世界といえるし、もう1つの世界とも言える。そして『自分の認識という物差し』で判断し、他に影響を与えたり、者や物やモノの存在を受け入れ、時に拒絶しながら生きている。

だが、実際には厳然と現実存在する。当たり前存在し、その事象——自然現象も含む——が起こったとしても、『ヒト』が受け

入れなければ、『ヒト』にとっては存在しないという事になるのだ。

ヒトが見聞きして認識しなければ事象として終わるが、事象として、事実としてなら存在する。ただ、存在に気付けないだけで。存在しないと思ってしまうえばヒトにとって『存在しない』という答えとなるだけで。

つまりはそういう事だ。

『……何か、人間ってのが分からなくなってきたな……』

禅問答のようにややこしくなり過ぎた為だろう。ウォーロックが腕を組みながら唸り、狐の店主は空になったウォーロックの盆におでんを入れながら答える。

「ははは。まあ、そうですね。……少なくとも、摩訶不思議という点では私達より遥かに上ですね」

『そ、そうか……』

「……ウォーロック、そんな珍獣を見るような目で見ないでよ」

『い、いや……おう……』

ウォーロックが釈然としない返事なのは、これ以上聞いても何か納得出来なさそう、というか理解できなさそうだな〜という理由からだ。そして、そんな話を聞いてはつい普段とは違った目でスバルを見てしまうという訳である。

狐の店主はけらけらと笑いながら自分を指差して見せた。

「ウォーロックさん、珍獣ではなく妖怪なら目の前に居ますよー」

「い、いや、自分で言わんでも……」

『っていうか、御店主のギャグだったりして……』

スバルの苦笑交じりの真面目なツツコミとハープの推理。おそらく、ハープの言う通り店主なりのギャグだったのだろう。スバルやミソラ、ウォーロックにハープの反応を見て楽しんでいる。

その後もしばらく談笑しながらおでんを食べていたが、不意に店主が上を向いた。

「？ 狐のおじさん？」

「どうしたんですか？」

ミソラ、スバルの順の問いに、狐の店主は残念そうに口を開いた。

「そろそろ店仕舞いの時間のようです。午前二時、丑三つ時はアヤカシが賑やかになるので。……以前あるお客さんに頂いた破邪矢があるとはいえ、危険な橋は渡りたくないですからね」

ようは、危ないのでそろそろお互い帰りましょう、という事らしい。丑三つ時は常世、つまりあの世と繋がる時間のため、アヤカシもよく出るのかもしれない。……いや、もしかしたら丑三つ時＝怪談というヒトの概念がそのままアヤカシの行動にも影響を与えているというのもあるのかもしれない。

アヤカシは移ろうモノ。そういった不確定なモノは流されやすく、影響を受けやすい。故に、ヒトの情念というモノにも影響を受けてしまうのだろう。

スバルとミソラは席を立ち、ウォーロックやハープ、ライトと共に狐の親子と向かい合う。お代の方は、侑子さんから貰っているという。おそらく、狐のおでん屋に支払う分も込み込みでミソラの対価が決まったのだろう。スバルは何を支払ったのかミソラに尋ねたが、思い出せないとの事だった。

「それじゃあ、僕はこれで。今日は本当に色々とうございました」

「また出来れば来てねー！」

『結構美味かったからな』

『アンタはがつがつ食い過ぎよ……』

上からスバル、ミソラ、ウォーロックにハープの順。ちゃっかりウォーロック達ウィザードもごちになって、気に入ったらしい。ウォーロックとハープのやり取りに苦笑しながらも、ライトもまた狐の親子に挨拶をする。

『あはは……では、そちらもお元気で』

「ええ。……なにかと物騒なようなので多くは来れないと思います
が、いつか来ますよ」

「……………」（……それまで、僕も頑張って美味しいおでんを作れるようになりたいなあ）

という言葉を言いたいけど、まだちょっと恥ずかしくて切り出せない子狐くんだった。

第21話 言霊（後書き）

……思えば、まだ序盤なんだよね……。……それで20話以上つて……。なんだかなあ……。……

第22話 キメゴト（前書き）

サブタイですが、ちよっくらXXXHOLiCを意識してみました。アレも、カナでサブタイが書かれてたと思ったので。……まあ、実際それしか思い浮かばなかったんですけどね（苦笑）。

第22話 キメゴト

「それでは、侑子さんによろしく」

子狐くんと店主はペコリとお辞儀をし、スバル達が礼で返して顔を上げた時、今まで見ていた屋台も空間も消え、普段見慣れているコダマタウンの展望台へと景色が変わっていた。

『……何か、本当に狐に化かされたか神隠しに遭ってたみたいだな……』

呆然とするウォーロックの言葉に素直に頷くスバルにミソラ、ハープ。ライトはいたって慣れている様子で眠そうに欠伸を堪えている。

そういえばライトは元々こっち（魔法やアヤカシ系）だったなあ……。

そんな事を漠然とスバルは思い浮かべていたが、不意に彼の中である事が思い出される。

ライトに侑子。そして、美味しいおでんを食べさせてくれた狐の親子が「侑子によろしく」というのを伝えると共に、今回の事でお礼を言わないといけない。ようは、逢わなければいけない。

「……対価の料理、忘れてた……」

病院にて、色々な事を教えてくれた対価の料理。それを何だかんだで忘れていたのだ。

とりあえず、今日はもう遅いのでゆっくり休み、侑子への対価（料理）の事は翌日考える事にした。そんな訳で、今は帰路に着いている。

『……で』

「？で？」

電波変換してウェーブロードを疾駆しているさなか、ウォーロックがロックマンに話しかけてくる。何用かと首を傾げながら問うスバルに、ウォーロックは実体化しながら本題に入った。

『お前はどうしたいんだ。済んだ事でどう言う気はねえ。だが、お前が今回の事を自分の中でどう決着を付けたのか気になってな』

マモンを、そしてその宿主となった者を殺めてしまった事は紛れも無い事実。知らなかったなんて言い訳に過ぎない。厳然と叩きつけられる事実は降り積もる歴史のように覆らない。大切なのは、その後何を選ぶかだ。

忘れられるのなら、忘れる事も出来る。

都合の良い解釈を自分の中で見つけて自己解決という形も取れる。またはそれらとはまったく別の答えというのもある。

スバルは何を選んだのか。どう自分の中の葛藤とケリを付けたのか。ウォーロックが問いたいのはそこだ。

ロックマンは静かに視線をウォーロックから前方に戻し、かと思えば再びウォーロックの方に視線を移して真っ直ぐに視線を合わせて言った。

「マモンは……マモンも、その宿主になってしまった人も、ちゃん

と弔うよ。……マモンにも、その宿主にも、自分に出来る事と、してあげたい事をしようと思う」

死者を弔うというのは、亡くなった者を敬い、真っ当なヒトとして扱い、別れを告げる儀式。

スバルは真面目で優しすぎる。だから、人一倍罪悪感に襲われ、自分を追い詰めてしまったし、自分にとって都合の良い解釈で立ち直るという真似はしなかった。そんな彼の出した答えは、言葉の通りである。

まずは謝罪の意味を込めて弔う。誰かが反対しても、1人でだろうとちゃんと弔う。それが、殺めてしまった事への弔いだ。

そして、これからは……。

「次にルシファーやサタン。他の奴と戦う時は、捕らえるようにする」

今の所能力が明らかになっているのはコトダマ使いのルシファー。だが、口を塞いで四肢を封じれば捕らえられない事も無いだろう。他の者も、能力の特性が分かればそれを封じられるような捕らえる方法を戦いながら模索する。

「……けど、もしそうしなければいけない時は……」

ロックマンはここで初めて視線を自分の手の平に移した。そして、何かを改めて決意するかのように拳を握る。

『……そうか』

ウォーロックにとってそれだけで十分だった。

スバル自身やスバルにとっての大事な存在が危機に陥れば、彼は苦痛を心に抱えながらも剣を振るうだろう。誰に何を言われても、護りたい者を護れるのなら。……そして、これから彼がするように、その者達の事もちゃんと弔うのだろう。

何より、スバルは自身の拳を握り締めるまで視線をウォーロックから外さなかった。それは、ウォーロックの視線から逃げずに向き合うという意味の表れでもある。故に、それだけで十分スバルの考えと意志の硬さはウォーロックに伝わった。

背負う。

行動の罪も業も、誰かの想いも。

忘れるのも、都合の良い解釈をするのも、言うなれば逃げだ。無論逃げる事は悪い事ではない。己が命を維持するために、それもまた一手なのだろう。

だが、スバルはそれを選ばなかった。忘れる事は出来ない。開き直る事もしたくない。ならば、今後はどうするかを考え、今の罪や業、後に背負うかもしれない罪や業を背負う。そう決めたのだ。

ウォーロックはここで『へっ』と笑った。

『……へっ。良いんじゃないかねえか？ 綺麗な御託並べて勝手に自己解決なんてやられたら、ものの一発ぶん殴る所だ』

「酷いな、もう」

眉を下げて苦笑いを浮かべるスバル。……とっさにだろうか。ぶん殴るという言葉聞いた時一步引いた。ウォーロックとしては冗談だったのでちょっと傷付く。が、それを表に出しては十中八九ハープやライトにからかわれそうだったので伏せておき、ロックマン

の肩をバシバシと叩いた。

『別に良いじゃねえか。……けど、背負うってのは聞こえは良いが、重いぜ?』

試するようなウォーロックの視線に、スバルはその目に力を込めて応じる。

「……分かってるよ。……今は、自分に居て欲しいと願う人がいるなら、僕はここに居たいって思えるんだ。……例えその為に、何を背負う事になろうとも」

「カッコ良いけど、背負い過ぎは壊れちゃうよ」

その声と共に、ロックマンの背中に何かが覆いかぶさる。ハープ・ノートがちよこんと乗り掛かったのだ。体重がゼロなので、何かが覆いかぶさったぐらいしか加重を感じられない。

ハープ・ノートはロックマンの首の横からひょこっと顔を出し、頬を膨らませてジト目でロックマンを見る。

「キミだけが真剣に背負いすぎて、何でもかんでも自分でってなったら壊れちゃう。……頼れる事なら、ちゃんと頼ってね。他の人も、きつと同じ気持ちだから!」

その怒りは純粹にスバルの事を心配しているのだろう。

「……うん、ありがとう」

スバルは素直にお礼を言った。自身の『読むチカラ』が無くても十分判る。彼女もまた、嘘偽り誤魔化し無く、心配してくれている。

『ポロロン。……まあ、ウォーロックは不器用な励まし方しか出来ないでしょうからね。私の方からフォローするのでしょうか』

『ああ？　ハープてめえ、それじゃあ俺が真っ正直にしか言葉を言えねえみたいじゃねえか』

『……それが不器用ってんだけどね……』

おそらく会話の陰気を振り払うためだろう。スバルへ『私も味方』という意図とウォーロックへの挑発を含めたハープの釣りに見事に釣られたウォーロック。

ロックマンとハープ・ノートが陰りを感じさせない苦笑いを浮かべた事で、ハープは目を閉じて穏やかに微笑んだ。

その後もハープの冗談にウォーロックが本気になり、それをハープがいなしてライトがウォーロックを慰めたり、それをスバルとミソラが互いの相棒を宥めたりしてる間に、星河家に着いた。

「それじゃあ、ルナちゃんやキザマロ君、ゴンタ君にもちゃんとゴメンって言うんだよ？　皆スバル君の事気にしてたんだから」

スバルは電波変換を解除し、スバルの部屋の大窓の外、手すりに座るハープ・ノートと向き合ってる状態だ。

右手人差し指を立てて唇を尖らせるハープ・ノートに、スバルは頷きながら応えた。

「分かってる。……それじゃあ、今日はありがとう、ミソラちゃん」
「えへへ。……うん！　またね、スバル君！」

ハープ・ノートは嬉しそうな照れ笑いを浮かべるとウェーブロードに乗ってピンクの閃光となり、夜空を駆けていく。

「……嬉しそだったね、ミソラちゃん」

「本当ねー」

「ウォーロック、女口調は——……」

後ろを振り向くと同時にスバルの声は途切れた。何をどうやって女性の声をウォーロックの声に間違えたのだろう。

部屋の電気は付けられ、ドアには腕を組んで目を閉じているあかねの姿があった。……雰囲気というか長年の経験で分かる。伊達に何年も親子をやっていない。……怒ってる。

あかねはズカズカとスバルに近づきながら言葉を掛けた。

「こんな時間にどこに行っていたのかしら？　せめて一言掛けて行きなさい。でないと心配で——」

今度はあかねの声が途切れる事になる。

怒られる。最悪の場合平手を喰らう事を覚悟して身構えていたスバル——ウォーロックとライトもあかねの出す気迫でとっさに固まってしまった——としては面食らってしまった形だ。

「……今回だけよ」

あかねはクルッと踵を返すと、来た道を引き返していった。

こちらにも長年の経験というやつで、この数時間でスバルの表情が良くなった事に気付いたのだ。クウェービアに行く前の、元気で素直な顔に。だから、本当なら怒らなければいけないのについて嬉しくて。けれどそれを悟らせないように素っ気無く去ろうとしたのだ。怒りに来たのに嬉しくて喜んだらその感情の変化にスバルは戸惑ってしまうかもしれない。

「あつ、母さん！」

「？　なあに？」

スバルが思い出したように呼び止め、ドアノブを掴んだ辺りで止まるあかね。

「明日、ちょっと料理を教えて欲しいんだけど、良いかな？　えっと、色んな人に心配掛けちゃっただろうし、そのお詫びとお礼に。……出来ればお菓子が良いんだけど……」

それは次元の魔女への対価だが、心配を掛けた人達へのお詫びというのも勿論ある。スバルの記憶にある限り、甘い物が苦手な人はいなかったはずだ。

あかねはちよつと気になるようだったが、時間も時間という事で「分かったわ」と頷いて1階へ降りて行った。流石に互いにそろそろ寝る時間だ。

それからスバルは眠りに付いた。

……自分でも気付いていない内に、ここ数日眠れていなかったのだろう。数々の不安や葛藤で、睡眠が取れていなかったようだ。ゆったりと、自分でも驚くくらいスムーズに、スバルの意識は沈んでいく。……気持ちは、悪くは無い。

時間はやや遡り、場所はコダマタウンの高級マンション。一言で言えば、ルナの部屋だ。現在、彼女は父親と電話をしている。向こうも忙しいため、両親と連絡を取りたい場合は深夜になるというのは日常茶飯事だ。

「ええ。そう。……大丈夫よ。絶対巻き込んで、ペースを奪って、元気にして見せるわ！」

勇ましくガッツポーズをしてみせたルナに父親のナルオは苦笑いを浮かべた。

「ははは。……母さんの若い頃にそっくりだ。……それじゃあ、スバル君や皆によろしくな」

「ええ。おやすみなさい、パパ」

「ああ、おやすみ」

通話用エアディスプレイが閉じたのを確認してから、ルナはハンターを机に置いて窓を開け、星空を見る。

父親に電話をしたのはとあるお願いをするためだ。半ば強引にスバルを外に連れ出し、あくまで自然に皆で楽しんで立ち直ってもらおう。独りじゃない事を思い出してもらおうという思いからだ。

「……晴れると良いわね、明後日」

父親にお願いしたのは多少大事だ。それをするには準備が必要との事で、1日待って欲しいという事で明後日になった訳である。

机の上には、シェロ・カステイロと書かれたパンフレットが置いてあった。

第22話 キメゴト（後書き）

……スバルのキメゴトはそう軽くはありませんね。誰に恨まれても、自分と自分が護りたいと思う者のために闘い、自分を恨んでいるであろう相手とも向き合い、弔う。……ある種、味方も敵も大事にするとも言える。……ミソラの言う通り、自分でやらなきゃと背負い過ぎたら潰れてしまう。

……人によってはスバルのそれも自己解決に思えるのですが、自分で自分が選んだ事の先にある苦しみを理解し、その上でそれすらも背負うと決めた上で進むと決めたのなら、十分に評価に値すると思っています。少なくとも俺はね。

……けど、自分で感じて、自分で考えて、自分で答えを出したモノ——決意とか誓いって言葉が合うかな。それは、強い。……自分で納得するか、どうしようもない状況（スポーツ選手なら下半身不随とか）でも無い限り、止まりやあしなひですからね。大人しい奴に限って感情を溜め込んで、意志が強くなりがち。頑固になったりね。

……まあ、ぶっちゃけ、残りの大罪でくたばる方が少なかったりするんですけどね。

……で、シリアス回はひとまず終わり。次回はギャグです。……何話構成になるかは未定ですけどね。

第23話 シェロ・カステイロ（前書き）

。今回は……全体で見ると影の薄い話になりそうですね……（苦笑）
自分で言うかって感じですけど、諸々の清算って感じです。

第23話 シェロ・カステイロ

「……………はあ」

思わず溜息を漏らすスバル。

彼は考えた。どうしてこうなったのだろう。……どうして今自分は、シェロ・カステイロにいるのだろうと。現在、まだゲートの前の噴水にいる状態でジャックを待っているのである。おおかたサテラポリスの手伝いをして遅れているのだろう。

なお、シェロ・カステイロというのはスバルのいる時代から約200年前に開かれた遊園地だ。様々なアトラクションやそれにちなんだキャラクターが出迎え、歓迎してくれる。

そしてスバル達がそこにいるのは、前日の夜にルナから送られたメールがキツカケである。

『明日の午後、クラスの皆でシェロ・カステイロに行きます。拒否不可』

もはや強制的な命令形だった。

何でも、まずは育田先生を説き伏せて次は育田先生と共に校長を説き伏せて学校関連の問題はクリア。そして父親にお願いしてシェロ・カステイロの1日フリーパス券を取っていてもらったらしい。

流石にクラスメイト全員に1人1人送るのは億劫だったのだろう。送られてきたメールのアドレスが大量にあった。俗に言う、一斉送信を使ったのだろう。

スバルは本人に悟られないように、視界の片隅で噴水を囲う石に座るルナを捉えた。

(……まあ、僕を心配してくれて、元気にしてあげようって考えかなんだらうけどね)

スバルの内心の言葉に『多分』が無いのは、ルナの心が読めてしまったからである。今は侑子から渡された制御用のカラーコンタクトを取っているのだ。

自分の因果を自分で背負うと決めてから自分でも色々考え、制御出来ずに封じようと思っていたチカラを制御できるようにする事で自分のチカラも逃げずに受け止めていこうと考えたのである。して、ライト監修の元少しずつコンタクトを取った状態を慣らしていこうという訳だ。『読めてしまった』のは、スバルの「何故委員長はこんな事を？」という疑問に反応してしまったからであり、手早く言えばスバルの未熟さからである。

おまけを言えば、どうやって先生方を説得したのかも見えてしまった。こればかりはスバルだけの為ではなかったらしい。……いや、確かにスバルの事は心配していたが、他のクラスメイトの事も心配していたらしい。

ツバサは一般では、スバルのクラスメイトはおろか、ルナやキザマロ、ゴンタにも『死んだ』という事になっている。エーテル戦で世界中で行われた戦闘活動の混乱の中亡くなったという事になっているのだ。それ以来、スバルのいるクラスは少し沈んだムードが漂っている。

暁からはせめて委員長トリオには話すかと問われたが、断った。ゴンタはすぐ顔に出るからアウト。キザマロはその辺の分別は上々だがうっかり口を滑らせる事があるため不安。ルナはそういった事も無い話しても良い訳だが、スバルとしては彼女にはもう何も

抱えて欲しくない、少なくともゴンタにもキザマロにも明かせず1人で抱え込むような事はして欲しくなかった。

なので今回の事は、スバルだけではなくクラス全員を励まそうという目論見もくろみがあったのだろう。

先生方を説得できた方法だが、何の事は無い。正直に言うだけだ。ただ、クラスメイトが亡くなり、クラス全体の雰囲気落ち込んでいるので何とかしたい。午後に全員でシェロ・カステイロに行って陰鬱な雰囲気払拭してくる。などとそういった感じで、後は彼女の交渉術と熱意により育田先生も校長も説き伏せられてしまった訳である。

また、やはり子供だけで行くのは……という不安から引率は必要という事で、育田も同行する事になっている。

「……ッ」

不意にスバルは思考を停止させた。視界の片隅のルナも同じように、視界の片隅でスバルを見ている事に気付いたのだ。スバルが自分の視線に気付いた事を向こうも察したのか、スクッと立ち上がってスバルの方に近づいてきた。

「……………」

「……な、何？ 委員長」

逸らす事無くジッと見られたのでは、対応に困ってしまう。まあとりあえず何か用かというスバルの問いにルナは溜息を付いて肩を落とした。

「何でも無いわよ。（……お節介だったかしらね）」

彼女が小声で言った事の内容からして、彼女もスバルの表情を見て彼が立ち直った事を察したらしい。あえて言おう。白金ルナの直感は恐いくらいだ。それはもう、眉のちょっとした動きで心情を掴まれそうなくらい。

そしてその強い直感のままに言うべきか、彼女はスバルの顔を見ていたかと思うと真剣な表情でこう切り出した。

「……ねえ。また何かあったの？」

「えっ……」

「おーいっ！」

スバルが答えに迷った時、少し離れた所からジャックの声が響いてくる。ルナは少し迷ったようだが、ジャックを出迎える方に向かった。

「遅いわよ、ジャック！ 集合時間ぐらい守りなさい」

「ぐっ……しょうがねえだろ。こっちだってサテラポリスの仕事があつてだな……」

「言い訳は聞きたくありません」

「……（老婆心ドリル女）……」

「何か言ったかしら？ 黒髪ツンツン」

ルナにピシヤリと弁解を封じられてせめてもの反撃として小声で不満を言ったがそれすらもルナに拾われて反撃を受け、2人の間で火花が散る。ゴンタとキザマロが2人を宥めている様を、スバルは苦笑いを浮かべる反面、内心でルナの言葉について考えていた。

確かに、あつた。それもまた、つい昨日の事。ルナからメールが届く少し前。次元の魔女に対価を渡す時である。

「……確かに、頂いたわ」

病院での情報の対価の料理。遅ればせながら納入完了である。狐の店主から料理は作り手を映すと言われ、妥協無く今の自分に出来る精一杯を送ろうと考えてあかねに手頃な甘いお菓子のレシピを貰い、作ってみたのだ。チョコチップクッキーである。

だが、何だかんだで遅れてしまった事で言わなければいけない事がある。

「あの……。遅れてごめんなさい……」

謝罪だ。理由はどうあれ約束を破ったのは確かなのだから。

それに対し侑子は、先に食べようとあの手この手でチョコチップクッキーに迫るモコナを視線をスバルに向けたまま対処しながら明るく笑ってみせる。

「あははっ。別に良いのよそのくらい。2ヶ月以上も待って未だに返してもらって無いケースもあるから」

「な、何をそんなに……」

本来なら他のお客の事を聞くのはマナー違反だと思うが、本当に『つい』言葉が出てしまった。だがそれすらも侑子は飄々と簡単に答えてみせる。

「バレンタインのチョコ。異世界の子達に送ったんだけど、未だに返して貰ってないのよ。酷くない!？」

スバルがどう返答したものかと考えてる間に、侑子は口にクッキーを放り込んだ。と同時に、モコナも小さい手で掴んでパクツと食

べる。

「あっ。……え、えっと……どうですか……？」

自分が始めて作った物を食べてもらうのは結構緊張する。学校の調理実習とはまた違った感覚だ。自分でも1つ味見してみたが、侑子の舌に合うかどうかは分からない。

侑子はモグモグと咀嚼し、飲み込んだ後笑顔で親指を上立てて見せた。

「うん。上出来よ、スバル君。意外と料理上手なのね」

「ええ、まあ。……母からもそういった事を言われました」

照れを苦笑いで隠し、応じるスバル。

実際、アカネがそう言った事は間違いではなく、それどころか「スムーズに行き過ぎてむしろ面白くない」と言ったほどだ。息子に何を期待している。……まあ、それでも上手く出来た事を一緒に喜んでくれたが。

「？ どうしたの？」

マルとモロにもクッキーを渡し、2人が美味しそうに食べてるのを優しげな微笑みで見ていた侑子はスバルが何か言いたそうに見ているのに気付いた。

スバルが問いたい事。それは……。

「……あの。……ミソラちゃんは、何を対価にしたんですか……？」

スバルを元気にするキツカケを得る代わりに、自分自身の何を差し出したのか。それがずっと気になっていた。

侑子は笑みを遠のかせ、冷静な声色でハッキリと告げる。客であるミソラから話さないようにと約束していればともかく、今回はしていない。答えてはいけない理由が無い。相手が知りたいと望むなら、真剣に応じるべきだろう。

「……記憶よ。学園祭の時の、2人の初々しい記憶。……2人の思い出が、対価」

「ッ！ ……そう、ですか……」

狐のおでん屋で対価が何だったのか聞いた時、ミソラが思い出せないと言った時から薄々予想は出来ていたが、実際に聞くとやはりショックが拭えない。

顔を俯かせ、太ももに置いていた手をズボンと共に握り締めるスバルを心配してか、ウォーロックが実体化して語りかける。

『……ミソラが対価を渡す前に言ってたんだけどよ。……もし過去にあった事を忘れても、思い出は続いていく。これからも、お前との思い出を作れる。だから、次はお前から返してもらえれば嬉しい、とさ』

「？ 何を」

自分でも間抜けな問い掛けだったと後で思う。ショックで頭が働かず、そんな中ミソラからの伝言を反芻していて他の思考が働かなかったのだ。

顔を上げてウォーロックと目を合わせると、彼は笑っていた。力強く、陰りも無く。それはとても、彼らしい。

『決まってるんだろ。これからその記憶が霞むような良い記憶をたくさん渡して行けば良いんだよ。一緒にそういう記憶を作っていけや』
「ッ。……うん」

スバルは小さな笑みを浮かべながら頷いた。本当にウォーロックらしい。ガッツで不器用だが、今回のようにガッツ人の引いた線を踏み越えながら明るく励ましてくれる。だからスバルも立ち上がれるのだろう。……最初のFM星人との戦いの時も、彼はスバルの心の壁を崩す一因になったのだから。

スバルは侑子と向き直り、頭を下げた。

「色々、ありがとうございました」

「……もう、大丈夫なの？」

尋ねておきながら、侑子にはスバルの答えが分かっていた。もう大丈夫というのが表情に表れている。その予想通り、スバルはお礼で倒した体を起こした後、しっかりと頷いてみせる。

「はい。……これから、2人の記憶をたくさん作っていきます」

それが、自分の為に自分の大切な記憶を差し出したミソラに出来る事だと思ったから。そしてそれが、ミソラの願いだから。

侑子は穏やかな笑みで「そう」と応えると、不意にニヤツとイタズラっぽい笑みを浮かべた。

「そう。……まあその場合『思い出を作る』より、『思い出をプレゼントする』の方が良いかもしれないけどね♪」

「ッ！ か、からかわらないでくださいっ！」

『クック……。照れて真っ赤だぞ？ スバル』

『まあ可愛らしい』

「2人ともうるさいよ！」

スバルの素直なりアクションが面白かったのだろう。ウォーロッ

クが乗り、ライトもまた便乗して乗るのをスバルは一喝。対する侑子は可笑しそうに笑いながらニッコリと手を振った。

「あっはっは。それじゃあ、そろそろ切るわね」

「あっ。はい。また」

「ええ。また、ね」

スバルと侑子の挨拶が交わされ、通信は切れた。

そしてその後、ライトにチカラの制御の先生役をお願いした訳だ。

「スバルくん！ 行くわよー！」

「あ、うん！ 今行くよ！」

ルナの自分と呼ぶ声。ぼんやり思い出してる間にジャックとの睨み合いも終わり、皆ゲート前に移動したらしい。

スバルはタッタと駆け足で皆の元へ向かう。

最近は大変だったから、久しぶりに羽を伸ばすでしょう。それに、シェロ・カスティロは初めて来る遊園地だ。存分に楽しめそうで、自分でもワクワクしているのを感じる。

……だけど、この時の僕達には知るよしも無かった。……まさかあんな騒ぎになるなんて、委員長もウォーロックも、ライトも育田先生も誰もかも、予想していなかったんだ……。

第23話 シェロ・カステイロ（後書き）

さて。次回は楽しめそうですねー○○（特に作者自身が）……

まあ、次回をお楽しみにとって事で♪

ちなみに、スバルが料理上手ってのは公式には無い設定ですが、無理はないかなって感じで書きました。機械いじりしてるから手先は器用だろうし、真面目だから念入りに臨むでしょうからね。

作者自身の話になりますが、カレーでも灰汁抜きを念入りにしたのと適当なのでは結構違います。前に弟と一緒に作りましてね〜。

それと、次回は2つの側が交互に進みます。予め言っておきますね〜。

第24話 予感（前書き）

お待たせしました。……今回は書いて懐かしかったです。……
いや、1つ俺より前の世代の話題がありますが……。

第24話 予感

「それじゃあ、時間が着たら城の前に集合だ。みんな、しっかり楽しんでくるように」

「「はーいっ」「」」

育田先生の声に生徒たちの声が続く。遊園地の内側に入るなり、いざというときの集合場所を決めた。大きな白い城の前だ。そこから遊園地のどこに居ても見える。そして、自由時間という事で生徒達はいくつかのグループを作って走っていく。

スバル、ルナ、キザマロ、ゴンタ、ジャックもまた、まずはどこに行こうかと全体図を見ながら言葉を交わす。

「……あ、この遊園地って何度か増改築されてるんだね」

「ええ。時代や世代のニーズに応えるため、シェロ・カステイロのアトラクションは割りと良く変わるんです」

地図の片隅にある遊園地の成り立ちを読んで感想を漏らすスバルに持ち前の知識を持ち出すキザマロ。

ニーズというのは、言うなればその世代の流行のキャラクターにちなんだアトラクションを作るなどだ。

例えば、『ビックリマン』のシールやフィギュアを集めたビックリマン祭なんてのがあったとしても、その作品を大して知らない人にとっては来る気にならないだろう。それで喜ぶのは童心に戻る当時の子供達、つまり今のおじさんおばさん世代だけだ。

「まあ開園当時のアトラクションも、当時とあるトーナメントがあったそうで、その記念に現在でも残ってますがね」

「……みたいだな。パンフにも書いてある。おおかた、点検とメンテを繰り返して保ってきたんだろうよ」

「……あなた達、ちゃんと今から何を回るか考えてる？」

目先の事に興味が行きがちな男子達に呆れたような目と言葉をくれたのはルナだ。彼女としても、せっかくだからとことん遊び倒して楽しみたいという考えもあるようだ。そんな訳で、とっとと行く所を決めて遊びたいらしい。

まあでも、と、ルナは溜め息を付いて思い出したように言った。

「まあでも、そういう話ならパパから聞いたわ。シエロ・カステイロにあるのは大きく分けて開園当時の物と増改築を繰り返されて出来た物の2つがあるって。当時から在るのはキザマロが言ったから良いとして、増築されたアトラクションは十数年に1回単位で改装が成されているタイプだそうよ。何でも百年以上前、とあるトラブルから『常に斬新さを。常に進化を』というのを叩き込まれ、そこからその時代や世代のニーズに応えようという流れが生まれたんだって」

なお、当時何が遭ったかの詳細は不明で、今ではネットに複数の説が流れる都市伝説と化している。

ルナはそこまで言うなり男子達の目を他所にパンフレットをパンツと閉じると顔を上げた。

「まあ、時代の波には逆らえなかったって所かしらね。人を楽しませる分野で飽きられたらお仕舞いだし、変わらざるを得なかったんでしょう。……………なに？」

ルナが眉を顰めてスバルを始めとした男子達を怪訝そうに見る。だが怪訝そうに見てきたのはスバル達が先で、ルナはその様子を訝いぶか

しんだだけだ。

以下、スバル、ジャック、キザマロ、ゴンタの順で怪訝そうにルナを見ていた理由を話す。

「……何って、いきなりそんなセンチメンタルな発言をされたら……」

「……驚くもんな」

「……委員長はもっとハキハキ話してる方が多いのでついポカーンと……」

「うんうん。普段の委員長は男らしく堂々としてるからな」

あ……。と、ゴンタ以外の男子は息を呑み、次にルナを見た。思ったとおり、怒っている。彼女はやや顔を下げ、目元を前髪で隠す形でポツリと言った。

「……ゴンタ。あなたスバル君やジャックより私と一緒に居る時間長かったわよね……」

「お、おう……」

ゴンタも彼女の放つ鬼気に気付いたらしい。小さく震えながらルナから目を離せない状態だ。もはや、目を逸らす事すら許さないという程の迫力である。

「じゃあ——」

「「「ッ！！！」」」

ルナが顔を上げた。その時の怒った顔と迫力に当事者のゴンタは勿論、スバルやキザマロ、ジャックまでもが青ざめ、恐れ戦く。業火を思わせる怒りの炎がルナの背後に見えるようだ。その怒りは炎のような熱さというより、極寒のような冷気を男子達の背中に刻み

付ける。

ルナは鬼神モードにて、自身の言葉を締める。

「――私が女性であって男性では断じて無いって事、知ってるわよねえ？」

「お、おおおおおう！ し、ししししつ、失礼したぜ………
…っ！」

確かにルナはハキハキハッキリ物を話すし行動力もあってリーダーシップバリバリで男らしいが、本人の前でハッキリ言うべきではない。哀れゴンタ。その失言により、彼の精神のライフは思いつきり削れてしまった。まさに、蛇に睨まれた蛙である。

もはや、少なくとも今日、ゴンタはルナから何を要求されても逆らえないだろう。

「……ゴンタ。命令よ。今日私達のグループが飲むジュース代、貴方が奢りなさい」

「えっ……でも委員長のお父さんがくれたフリーパスで全部タダなんじゃあ……」

ゴンタは逃げだした。何とか言葉で逃れようとした。

「フリーパスはあくまでアトラクションだけ。ジュース代は範囲外よ」

だが、ルナに回り込まれてしまった。

地面に手を着き、ショックで焦点が定まらないゴンタを他所に、ルナは笑顔で手をパンと合わせた。

「さあ。早速1つ目行きましょうか。この城、昔トーナメントが開

かれた場所が一般開放されてるのって今日は午前だけなんですって。他のアトラクションは午後からでも見られるし、先にこっちを見てしましましょう」

殺生だ。あまりにむごい。

予想外の出費と先程の迫力のショックで半ば放心状態のゴンタ。それに反比例するかのような笑顔のルナ。

スバルはルナがクルリと方向転換をして城の方を向いたのを見計らい、ゴンタに耳打ちした。

「（ゴンタ、僕の方は自分で買うから。……それなら、少しは負担が減るでしょ？）」

流石にあんまりだと思い、スバルはゴンタの心情を見てみたのだ。「ゴンタは大丈夫だろうか」とか、「どのくらい落ち込んでいるのだろう」とか、相手に興味を持てばそれに反応するらしい。

それはつまり、関心が無い時とか知りたくない時はそれで壁を作って読まないように出来るという事。知る必要は無いという心情を定着させれば、読む必要の無い読みは無くなるかもしれない。概して、チカラを制御する鍵になるかもしれない。

スバルがそんな事を思いながらゴンタに自分の分は自分で買ってゴンタの負担を減らすと言った矢先、スバルは思考の海から抜け出ざるを得なくなった。その理由と感情は簡単。驚きだ。

「ッ！ 心の友よおおおおっ！！！」

「ッ！ ゴンタ！ 痛い痛い！ 苦しいって！！」

急にゴンタの目が潤みだしてスバルが驚いた直後（この時点でスバルの思考は停止した）、彼はスバルに抱きついてきたのだ。

……お前はどこかのガキ大将か。

段々呼吸が苦しくなってきたスバルに助け舟を寄越したのは城の前から声を張り上げるルナだった。

「そこ！ 何してるの！ バカな事やってないで早く来なさい！」

「おう！ スバル、行くぜ！」

「う、うん……」

けほけほとむせながら答えるスバルに、ゴンタは手を貸してスバルを立ち上がらせながら声を潜めてこう言った。

「（サンキューな、スバル。本当に嬉しかったぜ）」

「（ッ。……うん。どういたしまして）」

心を視る事の後ろめたさや呼吸が苦しくなるほどの力で締められたり散々だったが、そのお札を言うゴンタは本当に嬉しそうだった。先述の散々を「ま、いっか」と思わせるような、そんな気分になった。……報われた、というものだろうか。

その後、2人でルナとキザマロ、ジャックの下に歩いていった。後に聞いた話では、キザマロとジャックもゴンタに相応のお返しをしたらしい。やはりキザマロとジャックも、ゴンタに同情したのだろう。

ルナ達と合流して笑みを交わしながら、スバルはふと思い出した。百年以上前に起こったトラブルとは何だろう。そして委員長は当時の人達は常に成長を、というのを『教えられた』ではなく『叩き込まれた』と言った。それは恐らくルナの父親の受け売りの表現なのだろうが、『叩き込まれた』という表現が気になる。……まるで、周りをとことんまで巻き込むトラブルメーカーが何かをしたかのよ

うに……。……なにか、自分の知ってる人が関わっていきそうな予感を感じる。

第24話 予感（後書き）

……ガキ大将はともかく、ビックリマンは知らない人の方が多い
でしょうね……。……。

第25話 予感は現実に（前書き）

ちよっくら追加加えました。ゴンタがどのくらい奢らされたかです。（↑言い方選べ）（8月22日）

第25話 予感は現実

場所は変わって、バルズランド。

『……現段階での決算、おおよそ終わるわ』

「うん、ありがとう、アイリス」

電腦の中からのアイリスの言葉に、藍川は目と手を作業途中のパソコンに向けたまま答える。

例によって黒蓮と藍川は資料整理。ただ、あのふざけた態度の割りに仕事の速いゲイルがいないためか、アイリスが手伝いに来ているのだ。

ゲイルの家は図書館で、国王ゆえに城でもある。そしてバルズランドの執務室は最上階にあり、アイリスは普段黒い繭まゆの在る地下の図書館に居る。

暇潰しにその本を読みつつ、待っているのだ。その黒い繭の中から出てくる人を。

だが、ゲイルに藍川、黒蓮の3人のうち誰かがどこかに行く時は彼女がその穴を埋めている。……今まではライラが居たからそれで足りていたのだが、今彼女は行方不明。よって、手伝いに来ているわけだ。

アイリスは『ふう』と息を吐くと、ポツリと思い出したように言う。

『……そういえば、ゲイルさんは間に合ったかしら？』

「あゝ……どうだろう……」

「……彼奴きやつの事だから、ワザと遅れて騒ぎを傍観してそうじゃがな」

藍川がこの場に居ないゲイルへのフォローとして曖昧にボカした所を容赦なく斬る黒蓮。藍川や黒蓮のハンターの中に入っているセイリュウやゲンブもゲイル・ホワイトという人間の人柄を思い出し、5人仲良く溜め息を付いた。

事の発端は、昨日に遡る。

「へえー。シエロ・カステイロねえ。良いんじゃない？　楽しんできなよ」

「ああ、そりゃ良いけどよ。あんのドリル女、拒否不可って何だよ拒否不可って」

これはこれで珍しい事だが、ジャックがゲイルに電話している。先程ジャックの下にルナからの強制参加命令が届いて、その鬱憤うっぷんを晴らしている所だ。

ゲイルもゲイルでジャックが不満を言いたいという気持ちも、何でわざわざ自分に電話してきたのかも分かっているのだろう。ケラケラと明るく笑ってみせる。

「あはは。まあ、微笑ましくて良いじゃないの。……シー君もクーちゃんも、せっかくだから楽しんで来いとかニヤニヤ顔で言ったから、今度は僕の所に電話してきたんだね」

「ッ！　てめえ……」

それではまるで、身近な人が誰も真っ当に取り合ってもらえないから、拗ねてゲイルに電話したようではないか。そういった、気付きたくないし思いたくない凶星を指されたジャックは怒りで額に青筋を浮かべてこれでもかとゲイルを睨みつける。

ゲイルは勘が良い上に頭の回転が速いため、当たり前前に笑って話

してもその裏ではいつの間にか本心を見破られていたり、核心を見抜く事が多々ある。本人はそれを時に親しい者をからかうために、時に外交のために、時に状況の打開のために使う訳だが、今回は1つ目に該当するらしく、凶星を指されたジャックは「もし直に目の前に居たら一発ぶん殴る」という様子だ。

ここは逃げさせてもらおう。

「んじゃ、こっちも忙しいし、そろそろ切るよ」

「てめっ！ まだ話は――」

「そっちも早めに寝ないと、ルナちゃんに怒られるよ」

「……覚えてろよ……」

忌々しげな舌打ちをしながらジャックは電話を切る。殺し文句発動だ。彼が――というか彼女の周りの男子が――ルナに逆らえないのは夏休みに来た時に察し済みである。

そして、その様子を聞いていた面々はジャックに同情の意味を込めて。

「……ほどほどにしときなよ？」

「……はあ」(……言っても無駄じゃろうがな……)

藍川の一応という忠告に黒蓮は慣れきった溜め息と共に、内心で期待無しな意見。

『だけどそこが良い。……でっ！』

基本的に面白いモノ至上主義のビヤッコは相棒たるゲイルにグツと親指を立てるが、直後セイリュウとゲンブから無言の脳天平手ツッコミ。

ゲイルは自分の事を言われているにも関わらずケラケラと笑っているが、不意にアイリスの方に目を留めた。

アイリスは何やら、記憶を探るように顎に手を置いて目を瞑っている。

「……どうかした？」

ゲイルの声にアイリスは目を開いて彼らの方を見る。その目は語っている。果てしなく嫌な予感がすると。

ゲイルに藍川、黒蓮。ビャッコにセイリユウ、ゲンブは互いに顔を見合わせてどうしたのかと尋ねるが、実際の所、ゲイルと四神のウィザードは半ば予想が出来ていた。

藍川と黒蓮は彼との付き合いが薄いからしょうがない。……だが、彼と付き合いの長い者が彼のイタズラを予想する時の顔はおおよそ想像がつくし共通している。……そう。それは今のアイリスのような……。

『……以前、来斗さんとツバサがシェロ・カステイロに行って、その……その日に園内のアトラクションが一斉に暴走して……』

「もう良い、分かった」

ピシヤリと話を打ち切らせるゲイル。いつもの飄々とした態度は無く、珍しく彼は陰鬱な溜め息を付いた。

おそらく、その日ツバサはイタズラ心全開で何らかの細工をし、それがパニックになったのだろう。……その時の彼の顔は、さぞ底意地が悪くて心底楽しそうな、良い笑顔をしていたに違いない。

「……彼って、そんなに？」

何だかツバサの印象に関わりそうという事で言葉はボカしたが、

藍川の問いたいのはどうだろう。『彼はそこまで重度で困ったちゃんなトラブルメーカーなのか?』黒蓮も同じ事を問いたいと目で言っていたが、YESと言わざるを得ない。でなければ、ゲイルが陰鬱な溜め息を付く訳が無い。

そして藍川の質問には、ゲイルの代わりにセイリユウとゲンブ、ビヤッコが答えた。

『……否定するのは難しいな』

『……難しいというか――』

『確定だろ』

四神も四神で、彼の元に居た頃はアイリス共々苦労したようだ。……まあ、ビヤッコやスザクの性格なら退屈しないという事でそれはそれで良かったのだろうが……。

ゲイルは目を閉じて腕を組み、やがて何か思いついたように「ふむ」と言いながら目を開いた。

「ふむ。それじゃあ、僕が向こうに行ってくるよ。その時代という事は、精々電腦を介してのイタズラだろうからね。ビヤッコを電腦の中に入れば、パパッと解決出来るだろう」

今はウィザードを用いてより複雑な事は出来るが、昔は電腦を介して現実世界に影響を与えるだけ。それだけでも様々な事が出来るが、今の方が遥かに複雑で過度なイタズラ――行き過ぎれば犯罪――が可能。ビヤッコのポテンシャルなら、わざわざ電波変換しなくても十分だと確信していた。

「……ゲイル」

「……お前……」

『……ゲイルさん……』

『『……………』』

上から順に藍川、黒蓮、アイリス、そしてセイリユウとゲンブの沈黙。彼等はゲイルを注視しているが、それはこれから出かける彼を心配してでは無かった。

「『『あの子達に迷惑かけるなよ』』』

『スバルさん達に迷惑かけないで下さいね』

「……………信用無いな。僕」

人間ウィザード含め、一番上が男性陣。真ん中がアイリス。最後が肩を震わせて苦笑いを浮かべるゲイルだ。彼の事だ。結局はなんだかんだで手を貸すだろうが、それまではひたすら傍観して成り行きを楽しむに違いない。

ゲイルがヘラヘラ笑いながら部屋から出たのを見送った一同。そして藍川は、過去にどういった事がシェロ・カステイロで起こったのか聞いてみる。その頃はまだツバサとアイリスは面識は無いだろうが、その時の騒ぎを知っていたという事は監視者として見てきたという事だろう。

その勘は実際当たっていたらしく、アイリスは目を閉じて眉を寄せて記憶を引き出し、話し始める。

『……………。……………まず、そのトラブルの大本は——』

そして時間は再び現代に戻り、さらに場所はシェロ・カステイロに移る。

『《……………正解です》』

「(やった!)」

ルナ達の目が城内に行っている間に、スバルはライトに先程自分が思ったことの答え合わせをお願いしていた。

『視る必要が無い』という考えを自分の中で定着させれば、不意に読む事は無くなる。

そのスバルの推測は正解だったらしく、ライトは小さく微笑み、スバルは周りに悟られないように小さく拳を握る。その手の事はその手のモノに聞くのが一番だ。

最初は意識して定着させなければいけないだろうが、次第に無意識に定着していくだろう。そうなれば、コントロールも出来るようになるはずだ。

「おや、改めて見ればこの石像、ゴンタ君に似てますよ」

「？ ……おお……」

キザマロが指差している石像を見て、スバルは思わず感心してしまった。かつてトーナメントの舞台となった城の最上階を見て再び下に戻ってきた訳だが、エレベーター近くに置いてある石像がゴンタに似ていたのだ。下顎が大きい事といい、顔だけ見ればそっくりだ。

銀色の鎧を着ていて、両刃の剣を右手に持っている。左手には、銅をイメージしたのだろう。茶色の盾を装備していた。

「……そうか？」

うーんとやや不満げに唸るゴンタに、ルナとジャックは笑いながら頷いた。

ちなみに、ゴンタは現段階で八百四十ゼニーほど奢^{おご}らされている。スバル達は五人でジュースは一缶百二十ゼニーなので計六百ゼニー

なはずだが、残りの二百四十ゼニーはルナの飲んだヤツだ。……宣言通り、容赦が無い。なお、スバルは密かに自分のお金を渡している。なので自腹で、ジャックやキザマロも後日彼にその分を渡している。なので、実質ゴンタの出費は自分の分とルナの分だけだ。

ルナの方も、もう気が済んだのか機嫌も直っている。

「あら本当。似てるじゃない」

「ぎやはは。よし、今日からこの像をゴンタ像と呼ぼう」

「……あゝ……。何だか前にそんなのを見たような気が……」

ジャックのゴンタ像という発言で、スバルの中である記憶が過ぎる。どうもゴンタ像というのを実際に見た覚えがある気がするのだ。キザマロもまた同じ事を思ったようで、少し思い出すのに時間が掛かったがやがて思い出したらしく、人差し指を立てて言う。

「あ、ほらアレですよスバル君。前にナンスカに行った時、ゴンタ君がゴンターガ様という英雄として祀^{まつ}られてその像も出来たっていう」

「ああ、アレか。……アガメさん元気かな」

それは約一年と半前。スバル達が古代文明ムー絡みの事件に巻き込まれた時、キザマロとゴンタ、そしてミソラはとある事で世界各地に飛ばされた。ゴンタが着いたのは地上絵で有名なナンスカという国で、ゴンタは頭を打った事で記憶を失った。さらに、『空から落ちてきたのでムーの使者では』という具合に誤解を招いて祀^{まつ}られていたのである。

ゴンターガというのは祀^{まつ}られていた時の名。アガメさんというのは、ゴンタを崇めていた村の村長だ。

「……お前等……」

一方、笑いのネタにされてさらに話に置いて行かれたゴンタは不満を露にする。腕を振り上げて、手近に居たという理由だけでジャックに殴りかかる。ジャックの後ろに石像があるが、今の彼には見えていない。それに何より、電波変換しているんじゃないし、小学生の力で石像は壊せないだろうから特に問題も無いだろう。

「いい加減にしろおおお！」

上から下にハンマーの如く振り下ろされた拳を、ジャックは最短の動きで簡単に避けてみせる。

「ッ！ おっと。……へへっ。当たるか、んなパン——」

ガゴンッ

「——チ……？」

避けた後、後ろの石像から不吉な音がした。

強度的に壊れないと思うが、もしもという事はある。一同が恐る恐る石像を見ると、石像の左手が降りていた。

「ッ！？ ……あの、これもしかして壊しちゃったんじゃない……」

「……………」

「ま、まあイザという時は弁償は私の方でやるわ。流石にこれまでゴンタに背負わせるのは酷だし」

「ッ！ 委員長っ！」

上から順に「あわわ」と愕然となるキザマロとゴンタ。そして焦りながらもフォローを入れるルナに、彼女の厚意に感動するゴンタの順だ。ジャックは割りと冷静で、すぐに石像を調べに掛かる。スバルも一瞬焦ったが、ジャックが冷静な理由に気付いて一緒に石像を調べた。

「……大丈夫だよ」

「？ 何が大丈夫なの？ スバル君」

キョトンと不思議がるルナに、スバルに代わってジャックが説明をした。

「この石像の左手、上から力を加えると下にスライドするようになってたみたいだ。……おそらく、振り下ろされたゴンタの拳の力でガゴンツと降りたんだろうな」

「……じゃあ、オレは……」

不安の中に希望を見つけたゴンタは期待の眼差しでジャックとスバルを見る。2人はニツと笑みを浮かべた。

「大丈夫。ゴンタはこの石像を壊してないって事だよ」

「ま、そうならそうだったで面白そうだったけどなあ」

「こらジャック？」

「へへっ。わりいわりい」

ケケツとイジワルな笑みを浮かべるジャックをスバルがたしなめ、対するジャックは肩を竦めて冗談である事をアピール。

壊した訳ではないという事が発覚した一同は喜んでいたが、ルナは不意に思い立ったように顎に手を置いて考え込んだ。

「……でも、何でわざわざそんな仕掛け作ったのか——……」

ルナの言葉は最後まで続く事は無かった。彼女の視界にあるものが映りこんだのだ。灰色の毛に細い尻尾。清潔である必要がある遊園地では即駆除対象であろう存在。それは……。

「きゃあああああつ！　ね、ねねねね、ネズミiiiiiiiiiii
！！」

どこかで聞いたようなセリフだが、彼女にとってネズミは馴染み薄いモノだろう。彼女の暮らしているのは高級マンション。ネズミなんて入る隙間もない。

ルナはとっさにそばに在ったジャックに飛び付いた。

以下、自分より身長の高い女性に飛び付かれたジャックの災難。

「……こ、こら……。……重い……」

ドゴツ　ガクツ

「グッ……」

呻き声と共に膝を突くジャック。しがみ付きながらも、ルナの拳は的確にジャックの鳩尾みぞおちを捉えたのだ。

その後、ウォーロックやオックスにも協力してもらって何とかネズミは外に追いやれた。後は見かけたスタッフがどうにかしてくれるだろう。

スバルは肩で1回息をするとルナの方を見る。彼女は自分の何倍も息を切らせながら、ネズミが出て行った先を見ていた。……若干その目に雫がある。

「……ひとまず、委員長が落ち着くまで休もうか」

「ですね」

「……だな」

「おう」

「……ゴメンね、ありがと……」

スバル、キザマロにゴンタ、ジャックの気遣いにルナは若干泣きそうな目で礼を言って笑顔を見せた。

とりあえず一箇所に座ろうと考えたスバルは歩き出すが、自分の右斜め後ろに浮いているウォーロックが動き出さない。彼の視線は、ネズミの出で行った方に固定されていた。

「……ウォーロック？」

『ッ。あ、ああ。すまねえ。……何でもねえよ』

「……なら良いけど……」

何でも無いと聞きつつそれでも心配そうなスバルに、ウォーロックは背中をバシバシと叩きながらスバルを追い抜いた。

『ほら。しけた面してねえでさっさと行くぜ』

明るく言いはしたが、彼の中では先程感じた違和感が残っていた。……先程のネズミは生物のネズミではないのではないかと。

それからの数分は平和だった。ジャックがゴンタをからかい、スバルやルナ、キザマロが笑う。ネズミを追い掛け回した疲れも、ルナのシヨックも、和らいだ頃だった。

「きゃあああああああつ!!」

突如城の外から劈くような悲鳴が聞こえてきた。それに驚いたスバル達は以下のようなリアクションを取る。

「ッ! なんだろう」

「トラブルですかね」

「……………」(…………そろそろ腹減ったな…………)

「…………さっきのネズミでも発見されたか?」

「ちよ…………止めてよねジャック…………」

上から順にスバル、キザマロ、ゴンタ、ジャックにルナの順。一番的確なのはジャックの予想だが、事実はそれすらも追い越してそれぞれの想像の斜め上に行く。

「ウ、ウウウ…………ウィザードッグがあああああつ!!」

……………。

「「…………はっ?」」

外から聞こえてきた新たな悲鳴に愕然となるスバル達。

ウィザードッグというのは一言で言えば遊園地のキャラクターの1人な訳だが、その名の通り魔法使いの犬だ。200年前の開園時からあるアトラクションのキャラクターである。

そして、遊園地という場に似合う愛らしい顔をしている。…………決してそんな恐れるような感情は抱かないと思うが…………。

この時の体験で僕は思った。彼が帰ってきたら、今回の事で一発

殴ろうかと。……いや、もう帰ってこない方が良いのかもしれない。
……彼自身のためにも……。

第25話 予感は現実に（後書き）

……えっ。次話より、ある種ホラーになるかと思われます。…
…だって構想練ってたら「あれ？これってこういう事態も起こるんじゃないね？」って思い浮かんでしまったんですもん……。…どこのバイオだと。

第26話 序曲（前書き）

実は今回シェロ・カステイロ編をやるに当たってエグゼ4をやり直してみたり。細々とどこに何があるという記録をしたらなんとまあ8KB。……今更ながら、良く打ったな、キーボード。

第26話 序曲

戸惑いと共に外に出てみると、さらに戸惑う場面に出くわした。いや、戸惑いというのにも語弊がある。確かに戸惑いはしたが、同時に驚きもあるし、何より怖い。

バイオハザードという映画をご存知だろうか。某社で開発されたウイルスがその会社の人に感染。死した後本能のまま動き回り、仲間を増やしていくモノ達だ。その本能とは、食べる事。噛み付いたり引っ掻いたりする事でウイルスを相手に感染させ、相手も亡者に変えてしまう。

今スバル達の目の前で起こっている事も、それに近い面がある。いくらなんでも人間に噛み付いて人間をおかしくするというのは無いが、アトラクションのメインキャラクター達が人間を襲っているのは本当だ。そりゃもう、パニックとしか言い様が無い状態である。

「と、とりあえず、あのウィザードッグを止めよう!」

スバルの声でジャックとゴンタが頷き、ハンターを構える。だが、キザマロはハッとした顔で忠告する。

「ダメですよ! ここじゃ目立ち過ぎます。電波変換してる所見られたら、後々面倒ですよ?」

「うっ……それは……嫌かも……」

「俺は別に良いけどな」

「……ゴンタ、守秘義務って知ってるか?」

スバルはキザマロの言葉でハンターを手に挙げていた手をゆっく

り下ろし、無自覚なゴンタにジャックが溜め息交じりでツツコム。広がった情報は戻らない。ゴンタⅡオックス・ファイアという事が分ければ、今まで通りに暮らす事は難しくなるだろう。

よって、あくまでバトルウィザードを連れていた小学生という事でウィザードを電腦に送り、解決する事にした。ウォーロックもコーヴァスもオックスも武闘派ウィザード。1体ではやや不安が残るが、3体の連係を活かせれば十分解決に導く事が出来るだろう。

それが決まるなり、スバルとゴンタにジャックは、顔と牙を全面に突き出して威嚇するウィザードッグにそれぞれのウィザードを送り込んだ。

『で、どうすりゃ止められるんだ？ スバル』

「うん。……多分、電腦の中に管理システム、または緊急停止スイッチがあると思う。それを弄れば大丈夫じゃないかな」

こういった公共の場にある機器は暴走した時のために初期化として緊急停止装置が備わっているものだが、何らかの理由でそれが作動しないものと考えられる。

なお、人間と電腦内のウィザードの会話はPGMを介して行われている。ハンターに向かって言葉を発すると、ウィザードの方にも声が響くといったものだ。

そしてスバルの推測にジャックが肯定の意味を込めて頷く。

「俺も同感だ。コーヴァス、システムを弄るのはお前に任せた。……スバルの指示があったとしても、ウォーロックじゃ力加減が効かなくて変な風にしちまいそうだからな」

『ああ！？』

ようは、壊してしまつてさらに制御不能になるかもと。

ジャックの言葉にウォーロックはカチンと来たようだが、不覚にもスバルまで納得してしまつたほどなのでフォローしてくれる人はいない。

ジャックに対してケンカ腰なウォーロックに、コーヴァスは可笑しそうに笑いながら彼の手を掴んで先を促す。

『ケケッ。とつとと行こうぜ、ロックちゃん』

『ブロロ。相変わらず血の気の多い奴だ』

『オックス、てめえにだけは言われたくねえ!』

『ほーらほら。その怒りを道を遮るウイルスにぶつけろよ、ウォーロックちゃん』

『! ウガーッ!!』

コーヴァスの挑発にウォーロックブチ切れ。先に行くコーヴァスと、コーヴァスに掴まれて一緒に電脳を翔けるオックスを追いかけ、その前に立ち塞がるウイルスを玉碎していく。

その様子に対し、ウィザードッグに追い駆けられながらも付かず離れずの距離を保つスバルは内心で思う。

(……ウォーロックとコーヴァスって、案外相性良いのかも……)

及び、

(これ、ウォーロックに言ったら何言われるか分からないな)

と苦笑する事となる。

そして一方電脳では、ウォーロックの怒りのためか道行くウイル

スを片付けるのは速かった。……ただ、怒りでハイテンションに攻撃しまくった結果、制御システムに付いた頃にはウォーロックはバテバテである。

『ぜえ、ぜえ……。……コ、コーヴァス……。てめえ覚えてろよ……。』

コーヴァスはジャックの指示の下システムを弄りながら、さらに笑いながら応じる。

『ケケッ。良い運動になったろ？ ウォーロックちゃん』

『……。いつかしばく……。』

先程も言ったが、ウォーロックはバテバテでコーヴァスに掴みかかる気力は無い。そんな彼を、同じ星の育ちのよしみか、オックスがフォローを入れる。

『ブロロ……。何かスマン。今度スバル共々牛丼奢ってやるから』

『同情するならあの馬鹿ガラスぶん殴ってくれ……。』

このウォーロックの発言は半分本気で半分冗談だ。ムカつき具合からして一発分殴って欲しいのは本当だが、デリートさせてしまうような本気は出さなくて良いという、あくまで友人同士のど突き合のようなものだ。

コーヴァスとオックスは目を合わせて肩を竦めた。

『ブロロロ。分かった。悪く思うなよ、コーヴァス』

『ケケッ。ま、ウォーロックちゃんは苛立ちを自分の中に収められない子供だからしょうがねえなあ』

『！ コーヴァス、思いつきやっちゃえ！！』

ウォーロックの中で、『デリートはしない範囲で思いっきりぶん殴れ』という感情に変わったのを知ってか知らずか、オックスは『へいへい』と軽く返事すると拳を振り上げ、コーヴァスもまた吹っ飛ばされないように指先を動かしながらも身構える。

そして、オックスが拳を振るおうとした時とコーヴァスが緊急停止を施したのはほぼ同時。処理が終わった事への安堵もあったのだろう。緊急停止システムを作動しないようにしていた張本人であるウイルスが飛び出てきた事に対応が遅れてしまった。

『！　ブロロ！　コーヴァス、あぶねえ！』

『はっ？　ッ！　ガッ！？』

拳を振ろうとした時というのもあるだろう。オックスはあえてさらに速さを強めてコーヴァスをぶん殴る。

『てめえ、オックス！　何もそんな力で殴らなくても――』

コーヴァスの言葉は止まった。オックスは左手にウイルスの攻撃を受けていたのだ。

見た事の無いウイルスだ。蒼い鋭角的な体に四本の足で体を支え、一見して狼のような印象を受ける。そのウイルスに、右腕を噛み付かれていたのである。

だが、今はウイルスに対して分析を行っている場合ではない。

「ウォーロック！」

『チッ！　病み上がりだつてのに！』

それでも、スバルの声に即座に応える辺り、ウォーロックもウォーロックで義理堅い。そしてジャックもまた、彼の考えを持って事態に臨む。

「お前等、一応報告としてオレとコーヴァスはそのウイルスを捕獲するから即行デリートは止めてくれよ」

ジャックとてサテラポリスの1人。見慣れぬウイルスがいれば捕獲してヨイリー博士やクインティアといった研究側に渡さなければいけないし、何より後に報告書が必要という時に、騒ぎの原因と思われる物は確保していなければいけないだろう。

『へっ！ だったらあいつが空中を舞ってる時にでも捕まえるんだな！ うおら、ビーストスイング！』

そう言いながら振るわれるウォーロックの爪。下から突き上げるように振るわれた爪はウイルスの腹を直撃。狼型のウイルスは真上に吹き飛ぶ。その衝撃によりウイルスはオックスから離れた。

ウォーロックが空中を舞っている時に捕まえると言ったのは。ウイルスが地上型である限り空中で自由に動けないからその間に捕まえろという意味だろう。

「コーヴァス！」

『おうよ！』

続いてジャックがコーヴァスに送ったのはアイテムカード――戦闘用のバトルカードとは違い、様々なバリエーションがある便利道具のような物――の捕獲ネットを搭載した銃だ。

ジャックやシドウなどの実動派には、いつ何があるか分からないため自己防衛用と犯罪者を現行犯で逮捕するためのネットが支給されているのである。

『おうらよっ！』

コーヴァスに送られたのは拳銃サイズの銃だったが、そこから放たれたネットは狼型ウイルスを簡単に包み込むほどの大きい。質量保存の法則はどこ行ったと言いたくなるが、恐らく銃の中に電波を圧縮させ、その電波からネットを形成。圧縮された圧力によって撃ち出しているのだろう。

できるだけ小型で扱いやすい方が良いだろうという事で拳銃サイズとなったのだ。

さらに、ネットの4つの角には重りが付いており、ネットに捕われた者を地面に縫い付ける。

ウイルスはネットの接近に気付いたようだが空中を飛べないため逃げられず、ネットに捕われて地面に伏す事となる。

グルルル……と呻き声を上げるウイルスはネットごと銃に吸い込まれる。これにて捕獲完了だ。

ウォーロックは肩を1回上下させ、現実世界の面々に語りかけた。

『ふう。どうだ？ そっちは。収まったか？』

「うん。ウィザードッグは落ち着いたみたいだけど……」

「うわああああっ！！」

「……いたる所で暴走してる……」

『……みてえだな。今聞こえた』

聞きなれぬ誰かの悲鳴につい溜息を付いてしまうウォーロック。楽しめると思ったら、どんな厄日だ。

なお、今スバル達はほぼバラバラに逃げている。ウィザードッグ一体ならともかく、シェロカスティロ開園当時からあるアトラクションはおろか、割と最近のアトラクションまで暴走しているのだ。

纏まって逃げていては逃げにくい。ルナに対してはゴンタとキザマロが付いていて、スバルとジャックは個々で逃げている状態だ。

「ウォーロック、とりあえず電腦から出てきて。どのみち、一度皆と合流しないと」

『だな。……城が良いんじゃないか？ あの中、確か電腦を持った人形無かったろ』

「あのゴンタ似の石像は？」

『アレは電腦を持ってない』

「なるほど」

それなら問題は無さそうだ。

スバルは早速クラス全員に『一時城に集合』というメールを送り、その間にウォーロックはスバルの下へ戻る。ウィザードッグの方を見れば他の面々も電腦から出たらしく、2色の光がゴンタとジャックの下に飛んでいく。

一方、シエロ・カステイロの片隅にある管理事務所。手早く言えば、所長や数名の所員がいる建物だ。監視カメラもあるため、事態は見えている。

「所長！ これは……！」

「むう……。これはまるで過去に起こった災厄そのものではないか……」

100年以上前に起きた事は教訓と同時に黒歴史として所長から所長へと受け継がれている。

この所長はなぜ教訓？ 単なる忌むべき黒歴史ではないかという

認識だったが、今はそんな事を思っている暇は無い。そんな時に自分の思考に沈むほど身勝手でもない。

「とにかく、所員を総動員させて事態を収束させろ！ ウィザードを電脳に送り込んで緊急停止装置を強制的に手動で作動させるんだ！」

園内の案内や見回りを行っている所員を合わせれば相当な数になる。その利点、存分に使わないで何とする。

「りよ、了解！」

所員は一斉配信で各地の所員に連絡を飛ばす。

「それが終わったら、お客様へのお知らせも忘れるなよ」

所長の言葉に連絡を行っていた所員は親指と人差し指の先を合わせ、それ以外の指を広げて了解と意思を表す。

第26話 序曲（後書き）

え〜。今回『……え、オックスが？ ……嫌な予感するな〜』って思った方へ。その勘は正解です。……今回書く側である俺が思った事は、むやみやたらと科学技術が進むのもアレだよね〜って事です。

それでは、次回もお楽しみに！

第27話 ウェーブハザード（前書き）

今回は若干恐めにて〜♪（↑楽しむな

ちなみにサブタイは『バイオハザード』より。アレはどちらかと言うとタイトル通り生物的な災害（人為的）ですが、こちらは機械的、それもスバル達の次代で言うなら電波的なので、ウェーブハザードが適していたかと思ひまして。

第27話 ウェーブハザード

シェロ・カステイロにある白と青を基調とした城。スバル達は今、そこにいた。ルナやゴンタ、キザマロを始め、クラスメイトの多くがそこに集まっている。そして当然の事ながら、子供達だけではなく、その他の来場客の方々もいる。シェロ・カステイロは大きなテーマパークだ。その来場客がスバル達だけなんて、そちらの方がありえない。無論、今城の中に居る者だけでは無いだろうから、恐らくその他の人達も物陰などに隠れて様子を見ている事だろう。

また、暴走したロボットが入って来れないようにリアルウェーブの車を出し、入り口に置く事でバリケードにしているのだ。通常なら園内で大きなリアルウェーブを出すのは違反だが、状況が状況なので仕方ないだろう。

「……これからどうなるんでしょうね……」

キザマロの不安そうな溜め息交じりの声に、ルナは勢い良く背中をバシッと叩いて拳を握る。

「大丈夫よ。異変に気付いたスタッフさん達がきつと対応してくれるだろうし、もしもの時はスバル君もいるんだから」

ようは、いざという時はロックマンがいると。それに対し、ウォーロックはからかうような笑みでスバルに話しかける。一応周りに声が聞こえないようにだろう。低めに言った。

『《クックック……。頑張れよ、ロックマン?》』

「(……ウォーロックも手伝ってね……)」

『《へーへー》』

自分をからかおうとする意図を察してか、スバルはウォーロックにジト目を当てるが、彼はサラッと軽く流す。そこに険悪さは一切無く、むしろ互いに楽しんでいるようにも見えた。

一方、名前を挙げられなかったジャックとゴンタはぶつぶつと。

「……オレらもいるんだけどなー……」

「委員長……」

『ケケッ。まあ良いじゃねえの。もしもの時が来たらウォーロックちゃんとスバルちゃんより活躍すれば良いだけだ』《……さり気に一発喰らわすけどな!》

半眼で溜め息をつく2人に表向き前向きなコーヴァス。裏は若干カチンと来ているらしく、さり気な『あ、間違った』のノリで一発喰らわせる気満々だ。
そしてコーヴァスは同じ炎属性のよしみか、オックスに話しかける。

『なあオックス。てめえもそう思わねえかい？ あいつ等より活躍しちまおうぜ』

『……………』

『……オックス?』

反応が無いオックスに、『あれ？ これもしかして無視された?』という感じで若干不機嫌そうにサイド彼の名を呼ぶコーヴァス。
そしてオックスはその2度目でやっと気付いたらしい。

『……ッ。……スマン。……どうもあの電腦から出てから調子が悪くてな……。……ブロロロロ』

「大丈夫か？ オックス」

オックスの調子が悪いという言葉に、ゴンタも心配する声をかける。そしてスバルやルナ、キザマロもまた、様子がおかしい事に気付いてゴンタの周りに集まってきた。

オックスは両手を自分の胸の高さまで持ってきて、ジッと手の平を見る。

『……ブロロ……。変な感じだ。……血が滾たぎるというか、気が高まり、溢れるというか……』

お前はどこの超サイヤ人だ。
というツツコミはさておき、オックスは続ける。

『……それと、理性を失いそうというか……』

「……それって一体……」

疑問で眉を寄せて首を傾げるスバルの耳に、不意に周囲から興味深い話が聞こえてくる。

「……そういえば、ロボットの周りにネズミが出てからおかしくなつたよな」

「えっ……?」

それは、自分達の近くで話していた一般客の言葉だった。青年がふと零した言葉に最初に耳を奪われ、次に意識。最後に首を動かしてそちらを見て反応するスバル。

オックスの方も気になるが、この事態の原因に繋がるかもしれない。そう思ってスバルは青年に話を聞こうとするのだが……。

ピンポンパンポーッ!

城の中に設置されたスピーカーにより、音声は響き渡る。

「お客様、不意のアクシデントによりご迷惑をかけ、申し訳ありません。さらにご迷惑を重ねる形となりますが、これより事態が収拾するまで入場ゲートは封鎖させていただきます。並びに、現在スタッフ総出で暴走したロボットの電腦にウィザードを送り込み、原因の究明、及び解決を目指しております。今しばらく各自で避難、または管理事務所に避難を。繰り返します。……」

運営側からのアナウンス。その内容から考えて、園内全土にその声が届いている事だろう。

だが、途中からその繰り返しされるアナウンスがおかしくなってくる。

「お・、逃・ろ！ ウィザ・・まで・走をっ！！」

声が途切れ途切れで別の人の声が入ってくる。おそらく、園内全土に声を届けている人のそばにもう1つ、鎮圧隊からの音声が入ってくる受信機があり、その鎮圧隊の人の音声だろう。スバル達には途切れ途切れにしか聞こえないが、園内全土に放送している人には全部聞こえているはずだ。

鎮圧隊の言葉を来たオペレーターは、非常に焦った口調でアナウンス内容を変更する。

「！ み、皆さん！ 実体化しているウィザードには念のため近づかないで下さい！ 鎮圧に当たったスタッフのウィザードが電腦でウイルスや電波君から噛み付かれて暴走したという報告があります！ サテラポリスへの通報はこちらですので、皆さんは急いで逃げてください――」

「来・な……！ ツ！ う、うわああああああっ……！！！」
『グルオオオオオオオッ……！！』

ブツッ……

オペレーターの耳にも、スバル達の耳にも、いや、園内中の全ての人間の耳に届いただろう。鎮圧に当たっていたスタッフの悲鳴と、通信が切れる音が。

オペレーターは声を張り上げ、必死にお客に呼びかける。

「逃げてください！ 一刻も早くシェロ・カステイロの外へ！ 少なくとも、中よりは安全です！」

だが、その声はほとんどの人に響いていないだろう。

ウィザードが暴走したという事実。その後鎮圧隊の悲鳴に暴走したウィザードの怒号。そして通信が切れる音。こんなのはアメロツパの行き過ぎホラー映画だけで十分だ。

何がどうなったかというと単純明快。

「おい、早くリアルウェーブの車どけろ！ 逃げなきゃ！」

「誰か一緒に来てくれ！ 連れとはぐれたんだ！ 連れがどこにいるか心配で！」

パニックとなる。

本来、こういったパニックになると自分だけは助かろうとする考えが生まれ、その考えは水面の波紋が広がるように伝染していくものだが、今回そうはならなかった。……いや、厳密に言えば、約2ヶ月前から。

「連れが!?! ……分かった。あのリアルウェーブの車は俺のだ。助手席に乗せてやるから一緒にその連れを探そう」

「! ……すまない」

連れとはぐれたと言う人に声をかける青年。はぐれた人は礼を言
い、協力を申し出た人も「良いつて」と言って肩を叩く。

だが、結果としてリアルウェーブの車に乗る事は出来なかった。
バギヤツという破壊音と共に、横に置いていたリアルウェーブの
車は破壊されたのだ。運転席側のドアと後部座席のドアの境、ちょ
うど中央の部分が縦一線。引き裂かれてしまったのである。

維持不可能なダメージを負ったリアルウェーブの車は空气中に雲
散霧消。消えていく。そしてその奥からゆっくりと近づいてくる壊
したモノ。それは……。

『グルオオアアアア!!!』

スタッフのものと思われる暴走したウィザードだった。ノイズに
より暴走した時のように、口は大きく開いて牙が見える。そして右
手にはソードが。おそらく、電脳攻略時に使われたバトルカードが
そのまま装備されているのだろう。

リアルウェーブの車は単なるテーマパークにあるようなロボット
なら抑えられる。遊園地にあるロボットの出力がそう強い訳が無い
からだ。それなら、リアルウェーブの車で十分バリケードとして機
能する。

しかし、現代の科学が誇るウィザード、それもバトルカードを装
備しているなら話は別だ。『車』という用途なので多少の強度はあ
るだろうが、戦闘専用のデータであるバトルカードの攻撃力を防ぐ
事は出来ない。

車が壊される事で動きが止まった2人の青年。ルナは意を決したようにふっと息を吐き、自身のハンターから車のリアルウェーブを実体化させる。なお、車のリアルウェーブは一般的にちゃんと運転席に助手席、後部座席もあるので4人は平気で乗れる。

「急いでください！ ……連れ、探しに行くんでしょ？」

「！ あ、ああ！ すまない」

「困った時はお互い様」

等と彼女は言うが、彼女がこうなのは昔からだ。何だかんだで面倒見が良いのである。

『ブロロロロ！』

「お、オックス!？」

2人の青年が車に乗り込もうとした時、後ろから血気盛んな声が響く。ゴンタのウィザード、オックスがハンターの操作無しで実体化したのだ。その口には、小さいが細かい牙が。

「……これって、もしかして……」

「……けどこれは見るからに……」

ルナが口元を引きつかせて後ずさりして、ジャックはついと言った感じで彼女の前に立って後ろに庇う。そしてオックスは、両手を高く掲げて声を張り上げた。

『ブロロロロ！！！ 本能が言っている！ 噛み付いて殴って炎を吐いて暴れろとおおおおお！！！』

（（（感染してるうううううっ！！！）））

その場にいた全員の心の声は見事に重なっていたという。事実、オックスは電腦でウイルスに噛み付かれていた。恐らくその時に感染したのだろう。

前面にはスタッフのウィザード。後方にはオックス。文字通り、前門の虎、後門の狼という状況だ。……いや、オックスは牛な訳だが、そこは状況が同じという事で。

ルナから車を借りた青年は前方後方を見てルナ達——ようは子供達——に声をかける。

「お礼に正面の退路は確保する！ その間に一気に突破してくれ！」

壊された車の持ち主で協力を申し出た青年はそう言うなり即座に行動に移す。まだ若干呆然としている青年の肩を掴み、ルナが実体化させた車に押し込むとアクセルを入れてスタッフのウィザードを跳ね飛ばす。

その後、動き出すタイミングは全員同じだった。生物がそれぞれ持つ、生き残るための勘というものだろうか。その効果により、全員が一斉に出口へと駆け出したのである。

スバルもまた走り出すが、並走しているのは普段見知った人ではない。先程「ネズミが出てからおかしくなった」などという事を言った青年だ。ルナの方にはジャックやゴンタ、キザマロもいるだろう。……いや、むしろルナならゴンタやキザマロ、ジャックだけでなく、クラス全員の引率までしてしまいそうだ。自分も何とか大丈夫だったという報告は後で良いとして、今はどうしても聞いておかなければいけない事がある。

スバルは走りながら青年に話しかけた。

「あ、あの。さっきネズミが出てからおかしくなったと言ってたが、それってどういう……」

大人の全力疾走に合わせているので相当ハードだ。本来なら「どういう事ですか」と続けたかったのだが、そこまで余裕が無い。

不意に変な質問という事で青年は眉を寄せたが、一応といった感じで答えてくれた。

「ん、ああ。……俺が見たのはブリキングだったけど、何かネズミみたいなのがブリキングに近づいて……かじったのかな。それから少しして変になったんだ」

「……かじった……」

「ああ。……それがどうかしたのか？」

「……………」

スバルはすぐには返さず、無言で思考を開始する。

ネズミがかじってロボットがおかしくなったのなら、そのネズミからウイルスをうつされた事が考えられる。もしそうならあのネズミは――。

『ああ。オレも何となく思ってたが、今の話を聞く限り間違いねえ。そのネズミは人工物だ!』

「……やっぱ」

ウォーロックの識別が正しいのならそれで間違いない。ネズミ型のロボットからウイルスをロボットに感染。その電脳でウイルスや電波君から噛み付かれたウィザードにも感染。そういった流れだろう。ならば――

スバルは青年の方を見上げ、返した。

「もしかしたらそのネズミが、この事態の原因なのかもしれません」
「何だって！ ……キミはどうするんだ」

「……僕は……」

——考えられる対応策は2つ。

「そのネズミを捕まえます。それで、何とかウイルスを駆除する方法を見つけないと……」

1つ目は、単純にネズミ型ロボットを壊す事。そのネズミ型ロボットその物がウイルスのマザープログラムを持っているのなら壊せば済む。だが、壊してしまつては元には戻せず、他の方法が解除する手段だった場合、二度とウィザード達を元に戻せない可能性だつてある。

なので、それはあくまで最終策。まずは『2つ目』を実行する方が良い。

その2つ目とは、捕まえて専門の人——今シエロ・カステイロにいる人物でスバルの知る者で言えば、ジャック辺り——に見てもらつて、専用のワクチンを作る事。その行程はサテラポリスの本隊が着いてからになるだろう。

「なるほどな……」

青年はスバルの考えを聞いた後少し考える様子で視線を下げ、やがて視線を前に戻した。

「よし、俺も手伝おう。人手は多い方が良いだろう」

「えっ、でも……」

気になる事を聞いただけの人に、そこまでお願いしてしまつて良

いのだろうか。

スバルの遠慮を察した風に、その青年はニッと笑ってみせる。

「良いって。さっきあの女の子も言ってただろう？ 困った時はお互い様って。それに、こっちも連れとはぐれていてね。そいつを探すついでだと思ってくれれば良い」

「……そう、ですか……」

それでもまだ遠慮がちなスバルに、ウォーロックがハンターの中から話しかけてくる。

『良いじゃねえかよ。せっかくの厚意だ。受け取っとけ』

「そうそう。キミのウィザードの言う通り」

「……むう……」

ウォーロックの言葉に乗り気で答える青年にスバルはいまいち納得できない風に視線を前へ戻した。

「^{フウキ}風来だ」

「？」

青年が零した言葉に疑問を顔に出すスバル。青年は力強い笑みを浮かべながらスバルを見る。

「風が来るで風来」

「あ、えっと……。僕は星河スバルです」

「そうか。よろしくな、星河」

風来と笑みを交わすスバル。

スバルとしてはいざという時、物陰から電波変換するなり対処し

やすいので1人の方が良いのだが、風来の方にも探し人がいるなら協力しよう。

第27話 ウェーブハザード（後書き）

さて、今回あんなパニックでもどこか一致団結って感じだったのはちゃんとした理由があります。……創っておきながら、問題提起をしたい事柄でもありますしね、アレは。

なお、オックスの言った「気が高まり、溢れる」っての、知ってる人どのくらいいますかねー（笑）。 ヒント…ブローリー

風来さん、最初は単なるモブキャラの予定だったんだけど、好都合な感じに使えそうだわ。彼は一度、姿も名前も出てないけど既に登場しています。……思いの他重要人物になってしまっ、こちらも驚きました（笑）。

では、次話もお楽しみに。

第28話 かつての悲劇（前書き）

これから数話はスバル側が一区切りついたらルナ側って感じで、交互に行きます。今回はスバル側ね。OO（……まあ、二話に分けたから次の話もスバル側なんだけど……

第28話 かつての悲劇

現在、スバルと先程知り合った風来はシェロ・カステイロの管理事務所に向かつて走っている。園内全体を見れる監視カメラの映像を一手に見られるという環境も含め、現在の段階においてサテラポリスが来るまでの暫定的な、かつ実質的な拠点となっている場所だ。なお、風来の容姿だが、歳は十代後半から二十代前半。……先祖でロンシャなど欧州の人でもいたのだろうか。高めの鼻だ。その反面、肌の色や顔立ちは日系である。体格は一見スラリとしているが筋肉は過不分無く付いており、引き締まっている。スポーツ選手として十分にやっていけそうだ。

この事態の大本と思われる存在がネズミ型ロボットであるなら、その情報を一気に園内全土に回してお客とスタッフを合わせた一大搜索によりサテラポリスが来るまで出来るだけの事をしようという考えである。

事務所は見るからに物々しい。いつもの、周囲の景色に同化してテーマパークのイメージを崩さないようにという考えはまるで無い。

城で自分達がやったように車などの大き目のリアルウェーブで即席のバリケードを作り、ロボットはそれでブロック。……対ウィザードの防衛策は即席なようでまだ完全ではなく、とりあえずリアルウェーブの上からバトルカードを使って対処している。

攻撃力が低めのマッドバルカンをウイルスモード——この場合、固定砲台のバルカン砲のような感じ——で召喚し、それにマヒプラスを付加して足止めをしているようだ。流星にお客さんのウィザードをデリートしたら責任問題になるため、攻撃力の低いバトルカードを選んでいるのだろう。

リアルウェーブの上に立つスタッフはスバル達の顔を見ると大きな声で話しかけてきた。

「おい！ 大丈夫だったかー！？ 今バリケードに穴を開けるから待ってろ！」

恐らく、内側からその声を聞いていたのだろう。文字通りバリケードに穴が開き、スバル達を迎え入れる。穴と言っても光線で撃たれた様に風穴が空いた訳ではなく、単に車のリアルウェーブを移動させて中央に隙間を作っただけだ。……ロボットが入れない程度に、という事で狭い事は否めないが……。

バリケードの内側に入ってみるとその内側は意外に広く、事前にある程度スペースに余裕を持ってバリケードを構築したのが窺える。中には避難してきた人が多くいて、転ぶなどで怪我をした人はスタッフから治療を受けている。消毒液やバンソウコウは事務所から拝借。

手が空いていたスタッフがスバル達の方に近づいてくる。

「君達、大丈夫だったかい？ ……せっかく来て貰ったのにすまないね。……じきにサテラポリスも来るだろう。その時までの我慢だ」

それは、スタッフがスバル達に対してただ逃げてきただけだと思っていたための態度だ。苦労したお客に対しての労いである。

だが、最初に述べたとおりスバル達がここに来た目的は他にある。

「あの、この事態の原因が分かったので報せに来たんですけど……」「あはは……。済まないが今は忙しいのでね。確証の無い話は後にしてくれ」

唐突に言ったら驚くだろうかと考慮して若干おどおどしながら言ったのがまずかったらしい。子供の戯言だと思われて流されてしまった。スタッフはスバル達を避難民の所に誘導させようとするが、風来が助け舟を出した。

「いえ、オレ見ましたよ。大体七、八センチくらいのネズミがブリキングに近づいて、かじって、それからおかしくなりましたから」

実際の目撃者と、風来の歳が割と上というのもあるだろう。その言葉にスタッフはピタリと動きを止め、風来を、そして次にスバルの方を見る。二人が目を逸らさず視線を返した事から信じる気になったのだろう。コクリと頷いて手を避難者の居る所ではなく事務所に向けた。

「分かった。所長に話を通そう。……さっきは疑って済まなかったね」

後半の言葉はスバル宛てだ。弱ったように、申し訳無さそうに中腰になってスバルと視点を合わせる。スバルが別に良いと言いたげに首を横に振って笑顔を見せたので安心してか、笑みを返して「さあ、行きましょう」と言うなり背中を向けて歩き出した。

「所長！ 次第に暴走ウィザードの数も増してきました！ ……もし一斉にこっちに襲ってきたら……」

「バリケードとしてバトルカード、ダブルストーンを新たに取り入れるように伝えろ！ ……暴走したウィザードの中にはお客様のウィザードもいる。もしデリートしたら取り返しが付かないぞ！」

やはりと言えそうだが、事務所の中も相当忙しそうだ。

外にある車とバトルカードでのバリケードは確かにロボットもウィザードも抑えられる。だが、それも今だけだ。スタッフが電脳に送った暴走ウィザードが外に出て、同様に外に出ているお客さんの、民間のウィザードに感染させればみるみる暴走ウィザードが増える事になり、そうなれば現在の対策では対処しきれないだろう。

オペレーターも所長も自分達の仕事で忙しそうでスバル達や二人を連れてきたスタッフには気付く余裕が無い。そこで、スバル達を連れてきたスタッフは声を張り上げて所長を呼ぶ。

「所長！ この事態の原因と思われる事柄が分かりました！」

その言葉と内容により所長含めスタッフの手と口が止まる。

所長は他の職員に引き続き仕事に戻るように言うと言務所に入ってきた三人を手招きで引き寄せる。

「原因？ 分かったのか」

「ええ。この二人が証言してくれました。実は――」

スタッフは自分の聞いた事を所長に聞かせて、不足のある所はスバルと風来が補足を加えた。一通り聞き終わった所長は机に両肘を置いて顎が上に乗るように手を組み、目を閉じた状態から左手の中指をトンツと上下させる。

「……なるほどな。分かった。……すぐに各所にいるスタッフに連絡してネズミ型のロボットを見つけたら捕まえるように連絡しろ！」

所長はすぐにオペレーターに指示を出し、オペレーターも仕事をしながら会話を聞いていたのだろう。指示が出る頃には回線を開き、「了解」と応えればすぐに発信できる準備をしていた。

スバルも風来もその判断と指示と行動の迅速さに舌を巻いたが、

所長がこちらに視線を向けたのですぐに意識を所長に向ける。

「報せてくれてありがとう。原因すら分からなかったから助かったよ」

「いやいや、それほどでもあります」

「風来さん」

ケロツと謙遜していない風来に苦笑い込みで注意するスバル。事務所にスバル達を招き入れたスタッフと所長は笑みを浮かべるが、不意にスタッフの顔が疑問に変わる。

「……けど、そんなのいつ、誰が何のために持ち込んだんだろう……」

「！ あのを、それに対して少し話しておきたい事が。……実は――」

スバルは思い出したように口を開き、三人の視線がスバルに集中する。

スバルが話したのは城での事だ。誤って友人が石像を殴ってしまった事。それにより石像の腕が降りて、それからその場所で最初にネズミ型ロボットが現れた事。それらの事から推測して……。

「――そのロボットは、持ち込まれた物ではなく、元からこのテーマパークにあったんじゃないでしょうか」

そして、何かしらの衝撃で石像の腕が降ろされた時、部屋のどこかに穴が開いてそこからネズミ型ロボットが出てくるという訳だ。

その証言に三人の男性は顔を見合わせ、考え込む。

なお、友人としてゴンタへのフォローは多めに入れて説明をしておいた。事態が事態で状況が状況だが、報告はちゃんとしておかねばなるまい。その上でスバルにゴンタに出来るのは、挑発されてそ

の相手を殴ろうとしたらかわされてその先に偶然石像があったなど、フォローを入れる事だけだ。

そしてスバルの推測に対し、長考から戻った所長はぼんやりと言う。

「……確かにあの石像は二百年前のトーナメント当時からあるという事で清掃する時も壊さないように強い力を加えないようにしているから、腕を降ろす事でどこかしらに入り口が出来てそこからロボットが出る仕組みになっていたのなら、今まで我々が知りえなかったのも無理はない。全く持って盲点だ」

ここで所長はスバルと風来に視線を移す。

「……スバル君と風来君、だったね。報せてくれたキミ達だからこそ、知らせておきたい事があるんだ。……実は百六十四年前、今の状況と極めて似た事件が起こったんだ」

そこから、所長はかつての悲劇を語りだした。

……このテーマパークの信条が『常に進化を、常に進歩を』というモノになったキツカケを……。現在では……都市伝説として憶測のみが飛び交う事柄の真実を。

第28話 かつての悲劇（後書き）

語られると言っても、思いつきりはしよられるので覚悟してください（笑）。↑威張れる事か

第29話 欠けた人との再会（前書き）

はい、今回のサブタイで「誰？」ってなった人へ。見れば「ああ、あの人」って感じになるかと思います。……ま、サブタイ通り、相当印象が変わってますけどね。

第29話 欠けた人との再会

その時の様子は本当に大変だったらしい。ロボットは暴走してナビを電腦に送り込んでも感染して、全く打つ手が無いまま時間とパニックだけが続いたそうだ。なお、その日偶然にも光熱斗の息子、来斗が居て、お客の誘導など協力してくれたために大して怪我人は出なかったそうだ。

「私はいまいち理解できないが、そこから常に変化を、という教訓を叩き込まれたらしい」

「……大変でしたね……」

としか言い様が無い。そしてスバルの言葉に所長は全くだと言わんばかりに頷いて、言う。

「全くだ。……一応当時の事件の終始は記録に残っていて内部の間だけが見る事が出来るが、そこにネズミのネの字も無かったから、本当に原因すら分からなかったんだ」

「それで、どうやって収まったんですか？」

スバルの問いに所長は「ううむ」と唸って首を横に振った。

「実はそれが良く分からないんだ。記録にあるのは、『時間が経ち、時刻は夕方。その時なぜか自然と元に戻った。感染していたプログラム君にもナビにも、感染していた時の記憶が一切無い』だそうだ。……自然に収まるなど、訳が分からない」

確かにそうだ。駆除されない限り永続的に悪さをするタイプのウイルスではなく、時間が経てば解決など、仕組んだ側がどういった

意図でこういった事をしたのか理解不能だ。

スタッフと所長、風来とスバルは少しの間唸ったが、所長はすぐに思考を次に移した。

「……答えの出ない事にいくら悩んでも無意味、か。とにかく、今はできる事を専念しよう。……二人とも、良く報せてくれた。改めて礼を言うよ。ありがとう。後は我々に任せて休んでいてくれ」

それは純粹に様々な情報を教えてくれたお礼というのものもあるし、何よりお客様であるスバルと風来にこれ以上危険な目に遭わせる訳にはいかないという考えからだ。

スタッフもその考えに同調といった様子だが、スバルは首を横に振ってそれを辞退する。

「いえ、僕も出来る事はやって来ます。外に頼りになる友人がいて、僕のウィザード、ウォーロックもそれに負けないくらい頼りになるので、ネズミを捕らえるのに手助け出来るかなって」

優秀な計算能力を持つ、キザマロのウィザードのペディア。現サテラポリス実働部隊の一人、ジャックとコーヴァス。そして優れたリーダーシップを持つルナ。……ゴンタは……ゴンタは……オックスが暴走しているため期待は出来ないが、それでもメンツとしては十分だろう。

それは無論、まだ彼等がウィザードを保持していて十分動ける状態であればの事だが、恐らく大丈夫だろう。特に頭の切れるジャックとルナがいるのだ。今もまだ彼等に大きな危機は訪れていないだろう。

当面はメールで集合場所を決めて合流。事情を説明したら搜索しながらクラスメイト全員にメールを出し、協力をお願いする。

スバルはそういった事を考えていたが、所長は案の定首を横に振る。

「いや、気持ちは嬉しいがキミは私たち職員にとってはお客様だ。お客様を危険な場所に放り出す訳にはいかない」

「それじゃ、オレも一緒に行きますよ。こう見えて力があるので、いざという時は星河を担いで逃げます」

風来はそう言うのと二カッと無邪気な笑みを見せる。確かに、彼は見た目に反して筋力があるようなのでスバルを担いでそのまま走るくらい訳ないだろう。

「いや、だから――」

「この広い園内でたった一匹の小さなネズミを探す。……こういった状況でスタッフだけで対処ってのがどれだけ不毛か分かってるんですか？ 今は一人でも多くの人手を加え、搜索の手伝いを願っているのが最善かと思いますが」

所長が繰り返そうとするのを風来が一蹴。口を挟んで毒を吐く。口調は飄々としているが、どこか突き放すような言葉を投げる。

そしてそれは確かに正論で、所長もスタッフも「ぐう」と唸らざるを得ない。

やがて所長は溜め息を付き、スバルと風来を見た。

「……分かった。それじゃあ、こちらからもアナウンスでお客様に協力を求める。二人にも出来る限りの協力をしてもらいたい」

とうとう折れた。

スバルと風来は顔を見合わせて笑みを交わすと応^{おう}と頷き、お辞儀をしてから退室した。

……で、

「……所長が？ ……本当？」

バリケードのすぐ内側で捕まっていた。どうにも連絡が遅れたらしい。

「ホントだって。早く通せよ！」

「そんな事言われても……」

「うわああああああっ！！」

風来がスタッフに言葉で噛み付き、スタッフは対応に困っている時、バリケードの外から悲鳴が聞こえて来た。

「！ 何だ！？ あ、こらボク！」

スタッフの静止を聞かず、スバルはリアルウェーブの車を登り、上からその様子を見ようとする。

「！ ……えっ」

上まで登って最初に目に飛び込んできたのは、大量のロボットがこちらに迫ってきている所だった。その先に人間が走っている所を見ると、事務所まで避難しようと走っている途中でロボットを引き連れてしまったらしい。

『……おいおい、何なんだよアレ……』

ウォーロックも（無断で）実体化して呆然とする。いくらロボット単体では抑えられると言っても、多数となると厳しいものがある。

バトルカードでロボットを壊して退ける事は出来るが、テーマパークの人間でもないし許可も取っていないために躊躇われる。一瞬ロックマンになって電脳に入り、電脳を制圧しようとも考えたが、いま自分の隣にはバリケードの上から周りを見る見張り番のスタッフに、下には門番のスタッフと風来が、そして正面には逃げてくる人々がいる。その状態で電波変換すれば正体なんて即バレだろうし、何より時間内で全部のロボットの電脳を制圧できるかきわどい。

『おい！ どうすんだスバル！ いくらなんでもあの数で突進されたらこんなバリケード持たねえぞ！』

「クッ！」

スバルが躊躇っている間にも、お客とロボットの群れは自分たちとの距離を詰めてきている。

迷っている暇は無い。後で怒られるかもしれないが、バトルカードでロボットを破壊するのが現段階での最良だと思われた。

スバルは腰のポーチに手を入れてバトルカードを取り出した。

「バトルカード、ヘビー——」

「……ハウリングアイス……」

「！ 伏せろ星河！」

『！ 伏せろスバル！』

「へっ？」

不意に隣のウォーロックから、そして遅れてよじ登ってきた風来に頭を押さえられて強引に低姿勢になる。不意の事で思考が追いつ

かず、視線が下を向いている時、青い光が視界の上部に入ってくる。
……今更だが、何か、自分スバルがバトルカードを使おうとした時にウォーロックと風来以外の声も聞こえた気がしたが……。

『……これは……』

「？ ……わぁ……」

ウォーロックと風来が手をどけ、スバルが顔を上げると、ロボットが氷漬けにされて固まっていた。突然現れた綺麗な氷山に、思わず息を吞んでしまう。単純な驚きというより、感嘆さえも感じていた。ロボットの方から視線を手前に向ければ、非難しようと逃げてきた人達が腰が抜けたように尻餅を付いている。どうやら先程の攻撃による負傷者はいないようだ。そして……。

「……氷、つまりは水だから電子系はダメになるだろうけど、そこさえ交換すれば大丈夫……。……動作などのプログラムの方も、多分この規模のテーマパークならバックアップを取ってあるだろうから大丈夫だと思う……」

静かで、吹けば消えてしまうような儚ささえ感じられる声と共に、先程の攻撃を繰り返した張本人が一応の行動説明をする。そしてその人物は、スバルも知る人物だった。

「！ ド、ドッグ・ツイン……？」

「……久しぶりだね……」

電波変換状態でドッグ・ツインとなっているものの、かつて敵として戦った陸りく 犬地ケンジだった。

第29話 欠けた人との再会（後書き）

なお、ロックマンJrジュニアも感染しました。……え、来斗君も居たのになぜかって？ その理由も一応考えてますが、止めておきましょう（笑）。……強いてヒントを言えば、彼はロックマンとロールの良い所を受け継いでるナビ。イコール、『お人好し』、って所ですかね。

そして我ながら、ゴンタに対する扱いが酷い気がしてきました（苦笑）。彼だけ、『何で役に立つ』って明言してませんもん（笑）。

今回はルナ側です。ゴンタやジャック、キザマロも一緒に。OO（風来の言う『連れ』も登場します。……勘の良い人は、もしかしたら次話で風来の正体に気付くかもしれないね……。

第30話 少女（前書き）

今回はあのキャラが登場。……誰かって？ 見れば分かります。
OO（ってかこっちも短めだね、考えてみれば……（苦笑）。

第30話 少女

城からスバル達と離れて、物陰から様子を見るのはルナにキザマロ、ゴンタにジャックだ。

「次は、っと」

ジャックは懷からその辺で拾った小石を取り出し、スタッフの物と思われるウィザードの足元に投げつける。大胆すぎて無謀とも言えるが、この行動にはちゃんと意味がある。……訳だが……。

「……ねえ。いつまでこんな事してるのかしら？」

不意にルナが不機嫌な様子で口を挟んできた。まあ、ジャックの行動に理由があるように、今のルナの態度にもちゃんと理由はある。

最初ルナはクラス全員引率しようと考えていたのだが、逃げるなら三から五人の少数で逃げた方が逃げやすいとジャックに反対され、その場の状況——乱雑に逃げる中、最低限の人数がはぐれないようにするのが精一杯だった——に圧されてやむなく今のメンバーで城から逃走する事となったのである。

ようは、自分のやりたいようにやれなかったから不機嫌と。無論、彼女は普段そんな事でそんな態度は取らないが、彼女がそういう態度を出せるのは信頼できる相手を前にした時だけだ。信頼できる相手だからこそわがままな態度が出せる、といった所だろう。

「けど本当、何を目的にこんな事してるんですか？ ジャック君。……早くゴンタ君のオックスを何とかしないと、ゴンタ君が凹んだままになりますよ……」

キザマロは疑問と共に視線を後ろに蹲うずくまるゴンタに向ける。ゴンタはガサツで不器用、大雑把な態度とは裏腹に、ナイーブな心を持っている。

周囲と接する方法が力を誇示する事以外無かった彼は、クラスから総すかん（現代風に言えばしかと、無視）に遭い、孤独を味わった。例え、自分から見て自分の表現方法がそれしかなくても、周りから見てそれが理解されず、その態度通りに解釈されては、そういう結果を生む事も無理からぬ事だろう。

ルナはそんな彼に手を差し伸べ、再び皆の輪の中に戻した事で収まったのだが、その時の孤独はスバルと関わり、オックスに憑かれるまで残っていた。

ゴンタの記憶の仕方は、早々に忘れてしまえるような、そんなおらかな記憶のタイプではない。むしろ、辛い記憶や思い出は忘れられない、繊細な記憶のタイプだ。

そして今、オックスは暴走して暴れまわっている。……ゴンタとしては、心配で居ても立ってもいられないだろう。だが、一人でオックスを何とかできるとは思えない。故に、蹲るしかないのだ。

ジャックはそんなゴンタを見て、溜め息をついて「とりあえず」といった感じで自らの行動の目的を説明した。

結論を先に言えば、視覚や聴覚、暴走している時、それらの感覚がどのように働くのか調べるためだ。例えば、先程小石を足元に投げたが、その『音』を感知してロボットやウィザードがそちらを向けばソイツは音を感じできるという事。さらに、その音がした場所を見て小石に焦点を合わせた様なら視覚も働いてるという事。

ジャックはここまで説明すると、「だから」と纏める。

「だから、もし奴等に視覚が無い、または聴覚で察知した後視覚で確認。そこから対象を襲うという流れなら、別方向に小石とか何かを投げてロボットやウィザードの目がそちらを向いた隙に移動つてのが出来る訳だ。出来るだけ、荒っぽい逃げ方は避けたいからな」

荒っぽい逃げ方。例えば、ロボットなら足を壊す。ウィザードならデリートしない範囲で攻撃して突き進むという方法があるが、これだと攻撃の音で余計にロボットやウィザードを引き寄せてしまいかねない。それよりも、視覚や聴覚など、相手を感じ取る部分で死角があるのならそれを利用して、無駄な騒ぎを避けつつ行動するのが彼の中でベストだと考えられたからだ。

ロボットでは搭載されているセンサー。その情報を察知できるという訳だが、ウィルスに感染してその中のいずれかが麻痺している可能性も低いながらも有る。その隙を、利用させてもらわない訳にいかないだろう。そしてウィザードも同様に、理性がぶっ飛んでるようなので何かしら感覚器官が麻痺しているかもしれない。

「で、あぁなった訳だ」

そう言うのと、ジャックは先程小石を投げたウィザードの方を指差す。ウィザードは音のした方に闇雲に攻撃をしたり掴もうとするが、小石自体を拾ったり攻撃を当てている様子は無い。どうやら、聴覚はあれど視覚は無いらしい。いくつも違うロボ違うウィザードに石を投げたのは、いくつもの検証データを得るためだ。そして現在の所、全機視覚が働いていないのである。

また、見た所暴走しているウィザードはきちんと感染した側と感染していない側を見分けているようだがそれに対してはおそらく、暴走したウィザードやロボットから放出される電磁波に乱れがある

のを利用して、それを目印に区別を付けるように設定されているだろう。

「……おおー」

「……まあまあやるわね」

素直に感心するキザマロとゴンタに、いまだ不機嫌な態度を取るルナ。ジャックとしても、付け入る隙があるという事で悪い気分ではなかったのだが、同時に違和感が沸き起こる。

確かに音にだけ反応すればそれでほぼ十分だ。逃げる人々の足音や悲鳴のする方へ向かえば良いのだから。それは先程述べた通り隙を作る事に繋がる。仕組んだ側は、何故わざわざ隙を残すような手法を用いたのか。それだけがどうも想像できない。

ジャックは「まあな」と生返事してその事に関して考えようとしたが、それは出来なかった。

「……頭良いのね」

「「ッ！」」

全くの不意打ちだ。不意にした人の声で、ジャックだけでなくルナも、キザマロも、ゴンタも、それぞれのウィザードの呼吸と思考が止まった。しかも、声がしたのは後ろ。……いったい、いつの間に来たのか。

声を掛けた張本人は不思議そうな顔で首を傾げる。

「……？ ……どうしたの？」

「……どうしたのって……」

「急に声を掛けられたら驚きもするわよ……」

「ってかいつの間にオレ達の後ろに来たんだ……」

上から順に、キザマロ、ルナ、ジャックの順。サテラポリスの訓練を受けているジャックですら、気配を察知出来なかった。

声を掛けた少女はジャックの表の問いの『いつの間に』というのと、気配を察知出来なかった事の二つに答える。

「……貴方が自分の行動の真意を説明し始めた時から。……気配を消すのが癖になってるから、気付けなかったのも無理ないわね……」
「……癖かよ……」

絶句。

気配を消すのが癖になってる少女っていったい……。

そんなトンデモ少女の容姿を一言で言うなら、『儂げ』という所だ。真っ白の袖の長めなワンピースに、長く流れるような銀髪。そして済んだ淡い金の瞳。十分に街中の男の子から声を掛けられそうな美少女だが、どこか浮世離れたした雰囲気を持っており、触れればすぐに壊れてしまいそうな危うさ、儂さを抱かせる。

第30話 少女（後書き）

そんな訳で、マモン編で出てきた子でした。……3作目がメインと言いつつ、所々出てくる予定です。

なお、『聴覚が効いて視覚が効かない』という都合の良い展開、というか状態ですが、ご都合主義ではありません。ちゃんと理由はありますよ。（にっこり）

……余談ですが、『ご都合主義』。別にとある点においては良いと思うんですよ。

それまで登場してなかった要素で、これまでの因果関係をぶっ飛ばした展開はオレも難色を示しますが、『どちらの手を打たれても好都合』になるってのは有りだと思うんですよ。

本当に良い策というのは、水が高所から低所に落ちる様に、相手の出方に関わらず望む結果に収束される。某作品の一節ですが、本気の策の場合、『Aを出されたら勝つけどBを出されたら負ける』なんてギャンブルみたいな手を考えるべきではないって思うんす。

……ゲーム（オセロとか将棋とかの駆け引きモノ含む）だったら割とそういう面もあるし、だからこそゲームとして面白いって思うんですが、どこか甘く思えるのでね。

っと、ちょっと暗くなっちゃいましたが、次話もお楽しみに！。

第31話 行動方針（前書き）

さて、ルナ達の前に謎の少女が現れた所からスタートです。

それから広告として、今週更新したフェアプレイズI F。最新話はこの流ロクSSとのコラボです。16話で、ソラが視た夢の事です。

第31話 行動方針

文字通り不意に（しかも後ろから）声を掛けられてそちらを向くと、銀髪と淡い金の瞳の少女がしゃがみ込んでいた。

そして、その儂げな雰囲気魅せられたであろうキザマロとゴンはポカーンとし、ジャックも不覚な事に一瞬だけぽけーっとしてしまった。だが、それはあくまで一瞬。首を横にプルプルと振って我に返る。それは結果として良かったと言える。でなければ、ゴントやキザマロ同様に彼女から睨まれていただろうから。……彼女が誰かって？ それは簡単だ。

「！ ゴ、ゴントくん……」

「ん？ 何だキザマ——！ い、委員長……」

二人も気付いたようだが、もう遅い。儂げな少女に対して見惚れていた二人の男子は彼女の眼光をフルに浴びる事となる。

「……あんた達ねえ……。またなの……」

ルナが呆れや怒りを含みながらゴントとキザマロを睨む。もう少しジャックが我に返るのが遅れていたら、彼もまた睨まれていただろう。……どこことなくルナから怒りの他に嫉妬の感情が窺えるのは、気のせいではない。

自立心旺盛でリーダーシップも満点な白金ルナ。だが実際には寂しがりやな一面も持っている。なお、『また』、というのは以前天才スキー少女のアイという子と逢った際、似たような事（男子デレデレ）があった事だ。ちなみに、その時はプリプリして一人ホテルに戻った。

このままでは二人が睨まれて話が進まない。行動も取れない。だがしかし、ある理由でジャックは口を挟めなかった。ある理由というのは大層なものではなく、単にジャックが今、ルナに怖いという感情を覚えているだけだ。……まあ、本人はプライドの関係でまず認めないだろうが……。

そしてこの、なんとも困った空気を打破したのはある意味——ルナの怒りで気まずい状態の意味で——空気を読まず、ある意味——睨まれる男子二人を救って話を前に進める意味で——空気を読んだ少女だ。

「……それで、これからどうするの？」

「え、ええ……。……そうね……」

そう。この場には馴染み薄い少女が居た。普段関わってる面々なら睨みで黙殺も出来るが、知らない相手となるとそうもいかない。これからどうするかを思案するルナ。そして彼女が出した答えは……。

「……やっぱり、一度スバル君と合流しましょう。安否を確かめるって意味もあるけど、やっぱり頼りになるからね」

「……だな」

ルナの言葉にそれは妥当だと頷くジャック。少女にスバルとは自分達の友人である事を説明したキザマロは、ふと思い出したように顎に手をやる。

「……あれ？ ……今思えばスバル君、何ではぐれたんでしょ？ ……」

「なんか、全然知らない別の人と走って行ったよな。パツと見た限

り」

そう。本来なら彼はルナ達と行動するはずだった。しかし、人の波で良くは見えなかったが、あの時彼は人の波に流されたのではなく、自分から別の人の方に近づいたように思える。

彼が何故そういった行動を取ったか考える一同。そんな時、ふとキザマロのハンターの中のペディアが言った。

『……そういえば城の中でガヤガヤしてる時、ネズミがどうか言ってたような……』

一同がキザマロのハンターに視線を移すのを感じてか、彼は『気のせいでなければだけど』と付け足す。

ジャックは俯き、思考に入る。

「……ネズミ……」

「……もしかして、そのネズミがウイルスを感染させてたりして。ペストみたいに」

ルナの言葉に一同は彼女を見るが、次の瞬間には張本人のルナ含め、イツナ以外の全員が苦笑いでそれを否定する。

「「まさかね」」

声を潜めて笑う中、コーヴァスだけが首を横に振った。

『……いや、そりゃ案外当たってるかもしれないぜ。……あん時のネズミ、オレの識別が正しければ人工物、言っちゃえばロボットだ』

それは人間では分からない事だ。コーヴァスを始めとする電波体

は電磁波（電波）の識別は良くやる。だからこそ気付ける事なのだろう。

そしてその事を理解しているジャックはハッと目を見開いた後、すぐにネズミがロボットである事を前提とした場合の可能性を考察する。

「……確かに、ありえるかもな。……かじるとか引っ搔くとか、何かしらの接触でウイルスを内部に送れば……」

「じゃあスバル君が別の方に行ったのは、そのネズミの話を聞いため？」

「……アイツの事だ。おそらく、既にネズミロボットを何とかするための行動に出ている。……となれば、その事を知ったアイツが次に何をするかを考えれば良い」

キザマロの言葉に頷きと共に答えるジャック。そしてスバルが次にどこに行くかを考えれば、彼と合流できるだろう。

次の行動が決まりつつある状況で、ふと少女が小さく手を上げた。

「……私も連れとはぐれてしまったの。一緒に行動しても良いかしら……？」

困った風という訳でもなく、ひたすら無表情で言う少女だが、ルナは当然という顔で言った。

「何言ってるの。こうなったら助け合いよ。貴女一人こんな所に放って置くんなんて出来ないわ。一緒に行きましょう。……えっと……」

今更だが、少女の名前を聞いていなかった。

少女はルナが何の事で言い淀んだのか疑問に思ったように瞬きを一回した後、ルナの疑問に思い至った。

ようにポツリと静かな声で答える。

「……イヅナ」

イヅナと名乗る少女に、ルナは明るく、優しく笑いかけた。

「そう。よろしくね、イヅナちゃん。……ところで、私から一つ提案があるんだけど」

後半はイヅナよりもジャックやゴンタ、キザマロに宛てられた言葉だ。その表情はイヅナにしていたのとは違い、真剣な目である。

「？　なんだ？」

「せっかくだし、スバル君の所に向かいながらクラスの他の子も集めない？　ようはウィザードを外に出さず、私達がバトルカードで応戦すれば良いんだから、その場合人数が多い方が良いでしょ」

それはもつともない言い分なのだが、ジャックは納得いかないと言わんばかりにギリッと歯噛みする。

「！（まだんな事言ってんのか！　あんまり多くを束ねようとする」と統率仕切れなくなつて全体を危機に晒す事にも繋がるだろ！）」

暴走した者が音に反応する以上大きい声を出せないで低い声で怒鳴るジャック。だがルナもまた、彼女なりの言い分があるようだ。

「（大丈夫よ！　普段からクラスの子は纏めてるんだから、今回だつて！）」

「（今回は状況が違う！　クラスの奴等だって動揺とかでお前の声が聞こえず、勝手な行動を取っちゃう事も有り得るだろ！）」

「（じゃあ何！ ジャックはクラスの皆を見捨てろっての！？）」
「（そうは言ってねえ！）」

小声とはいえ言い争う二人。ジャックは声を荒げてはいるが彼の知性が弾き出した冷静な答え。そしてルナの方は、クラスの皆を心配する感情と、僅かにある「自分なら統率出来る」という過信。

「（落ち着いてくれ委員長！）」
「（ジャック君も、少し頭を冷やしてください！）」

ゴンタとキザマロに宥められるルナとジャック。そしてキザマロは、二人の意識を互いのいがみ合いから他に回すためにある事を言う。

「……それに、実はペディアがスバル君が居そうな場所をピックアップしてくれたみたいです」

……………。

「……いつの間に……」

その言葉に呆然とする一同。
ジャックの言葉に、ペディアは皆の当惑した様子に逆に戸惑いながらも答える。

『え、えっと……。スバルさんがどこに行ったかって話題になった時に、これは調べておいた方が良いかなくて……』

ネズミ型ロボットが元凶だとして、そこからスバルがどこに行っ
たかを考える。その方法は単純明快だ。単に、スバルなら何を優先

するかという彼の基本的な性格とこのテーマパークに在る建物を照らし合わせれば良い。その結果……。

「それで、どこって出たの？」

察しの良いルナはペディアの検索方法に気付いたらしく、信憑性があると判断したのだろう。先程のいがみ合いも忘れ、ペディアの答えに集中する。

ペディアは簡潔に、だが、ハッキリと答えた。

『このシェロ・カスティロの管理事務所。そこなら園内全土にネズミの事を知らせられるだろうし』

そしてその直後、管理事務所からアナウンスが流れた。

ネズミ型ロボットが元凶である事。出来るだけ壊さずに捕獲して欲しいとも。そして、スタッフ、お客問わず、捕獲に協力して欲しいとも。

これは十中八九、スバルの進言からだろう。

「……決まり、だな」

ジャックが息を吐きながら呟く。彼はルナにゴンタ、キザマロ、そしてイヅナに視線を送り、言う。

「管理事務所に向かうぞ」

「ついでにクラスの子を纏めながらね」

「！（まだ言うか！）」

「さあ、行くわよー」

「（しかも無視か！）」

まだ言い合うルナとジャックに、ゴンタとキザマロは諦めの溜め息をついた。もう、二人が騒ぎ疲れてから動いても良いかな、という意識が二人の間で芽生えていた。

一方イヅナはその様子を見ながら、考えてる事を表に出さないように注意しながら思案する。

(……星河スバル。……まさかこんなに早くまた会う事になるなんて……。……けど、アイツの周りにいる人の人柄を探るには、好都合かもしれない……)

第31話 行動方針（後書き）

これを書いてて思った感想。 「……やばい。この子達頭良すぎる……。ネズミって事からここまで導くなんて……」 って感じでした（笑）。

「……書いたの自分なのに何言ってるの……」

で、イヅナちゃん後書き初登場。俺の中で、彼女の能力がだいぶ形になったって事でその記念にね。最初は、神々をその身に宿してそのチカラを行使するって感じだったんだけど、それだとあまりに幻想の巫女と被るからボツ。

「……博麗の巫女、博麗霊夢。……すっかり東方に嵌ってるのね」

ゲームは買ってませんがね。どっちかっていうと、エルソードのあの子に近いかな。（見た目も

「………」 （……アレはどちらかというと能力というより戦い方だと思うけど……）

それでは、次話も実は出来ていて、今度はスバル目線です。〇〇（後書きにキャラクター登場させるの久々だから、まだ話のテンポが思い出せない（笑）。なお、彼女の言う『アイツ』はあの場にはいない人物です。）

「………」 （……審判の時は、まだ先……）

第32話 抜けた牙（前書き）

今回は大地のその後を少し書いてみました。……今思えば彼の境遇は直接は書いて無いんですね。けど、どういった事があってどういう内心だったかは、想像できるようにはしている。

全てを明かされないサブキャラ。けれど、そのサブキャラにもちゃんと過去はあり、今がある。……そういった事を、書きたいのかな。……たぶん。（↑自分の事だろ

第32話 抜けた牙

多量の暴走ロボットやウィザードと共に逃げてきた人達。ロボットやウィザードは凍らせて行動停止に追い込み――氷、すなわち水という事で、氷が溶けたとしてもロボットはそのまま動けなくなるだろう――、避難してきた人達は安全に職員が作ったバリケードの内側に入る事が出来た。

最後の一人が内側に入ってバリケードが閉められるのを見て、スバルはロボットやウィザードを凍らせた張本人に話しかけた。

「ありがとう。えっと……ドッグ・ツイン」

彼の本名は才葉シティでの事件の後、ツバサから聞いたので知っているが、今この場には見張りのスタッフと先程知り合ったフウキがいる。直で名前ちよくを言うのは避けた方が良さだろう。

そしてその事は大地も理解したらしく、表にはありがとうに応えるため。裏ではスバルが自分の名前を伏せた事に対しての了解と感謝を込めて頷いた。

「……別に良いよ。……キミ達とは色々あったけど、それで良かった事もあったから……」

かつて、スバルと大地は敵同士だった。そんな訳で、出会ったのは良いがどういう態度を取れば良いか迷ったが、良かった事があったという彼の言葉。そしてその言葉が嘘ではなく本心だと感じたので、スバルの中にあつた気まずさ等の感情が含まれた心の氷は融解する。酷く物静かな雰囲気になっているが、むしろ今の方が澄んだ空気を纏っている。

「良い事？」

そんな穏やかな空気で警戒心が安らいだためだろう。スバルの問いはしこりも無く、自然と出た。ドッグ・ツインは消極的な小さな笑みを浮かべ、言う。

「……そう。良い事。……その事を含めて少し話そうか。まずは下に降りよう」

現在バリケードの上に立っている。それも、近くに人がいる中ゆっくりも話せないだろう。スタッフやフウキは余所見をしたり「自分たちの事は気にするな」と気を遣ってくれているが、そもそも早々電波変換を解除した姿を見せるのも気が引ける。
で。

犬地は物陰に行ってから電波変換を解除。そのまま物陰で話をする。

「……キミの方も、大変だったようだね……。……ニュースで見たよ。ルシファーと戦った所……」

「……………」

苦い思い出だ。

あの時は言霊の事も知らなかったし、何より能力が突飛過ぎた。

……ほば言えば勝ちという能力ではないか。

見れば、彼は目にイジワルな光を浮かべている。……どうやらわかられたらしい。

……お返しだ。ニッコリと笑顔を浮かべて、僕は言う。
スバル

「……それを言えば、犬地さんもずいぶん物静かになりましたよね」

だがその言葉は、大地に思ったより効果を与えたようだ。戸惑いにも似ているが、困っているとも取れる。……だがそれ以上に、ほんの少し苦しそうな表情だ。自分のコンプレックスを突かれた様に。

「……ああ、うん。……才葉シティのセントラルシティで戦ってから、どうやったら元気良く話せるか。感情の出し方……いや、その感情その物が分からなくなって、出せなくなってしまったんだ……」
「えっ……」

いけない事を聞いてしまった。スバルは急いで大地に謝ると、当時の事を思い出す。

ツバサは、『エ』に憑かれた彼を助けるために彼とそのウィザード二体から三分の一ずつ魂を抜き出した。一度『エ』に憑かれ、それがある程度成長したら完全に取りのけるのは不可能。無理に滅したら、魂にもダメージを与えてしまうらしい。大地が魂を抜かれて廃人にならないようにするためには、三人から等しく魂を抜くしか無かったのだ。その事は、暁をはじめ誰にも言っていない。

ここまでできてふと思った。彼が物静かになっているように、彼のウィザード——炎牙と氷牙——も何かしら変わっているのではないだろうか。

「……ねえ。……もしかしてキミのウィザードも……」

「……ああ。……炎牙はガンガン引っ張っていく勇猛さを失った。

……氷牙は常に理知的で理性的だったけど、不意に思考がストップし、ぼんやりするようになった……」

炎牙は勇敢さを。氷牙は思考性の半減。そして、大地は明るさや饒舌さを失った。言わば、それぞれのもっとも特徴深い点が欠如されたという事だ。……感情その物が分からなくなって出せなくなっただけという事は、彼はもう泣く事も、大声で笑う事も出来ないかもしれない。

れない。先程のように笑みは作れるようだが、精々、無意識にその口の形を作るだけだろう。

「……けど、――」

と、彼は続ける。

「――そのお陰で良い事もあった。……それまでの僕はどこか余裕が無くて、強がって、自分に棘を持っていた気がする」

良い子であり続けるために頑張り、親や先生、友人の前で明るく、強く振舞い、やせ我慢と強がりを経り返して余裕を失う。そして、そんな自分を苦しいと思い始めた時、余裕の無さが他人への思いやりの欠如に繋がり、他に対してどこか見下したような、棘のある態度を取る。自分で止めたくても……いや、自分でそれだけが正しいと思っている時点で、自分で止める事は出来ないだろう。

自分で自分の選んだ事に納得してしまっただけで、特別な出来事がない限り、変える事は難しいから。結局、自分の在り方を見れるのは、変わり切った後の自分か、自分自身を自分の外から見ることが出来る――普遍的な言葉で言えば、客観的な――人間だけだ。

「けど、それで初めて家族が僕の言葉を聞き入れてくれた。……あからさまに僕の様子がおかしい事で気付いたのだろうね。……今まで良く頑張って、無理してきたなって、言ってくれたんだ……」

実際には強がりの中に家族も含まれていて、彼が打ち明けなかっただけというのも考えられる。だが、結果として打ち明けられず、家族に自分の抱えてる思いが伝わらずに苦しんだ事も事実。

精神的に追い詰められた者に、『頑張れ』という言葉はご法度だ。「これ以上どう頑張れば良いの？」や、「もっと頑張らなきゃ……」

もつと無理しなきゃ……」という風に自分を追い詰めて、哀しい結果を生んでしまう事がある。……相手の言葉を受け流せず、言葉通りに受け止めて自分を追い詰めてしまう子に多い。

その時救いになるのは、『よく頑張ったな』などと相手の『今まで』を認めてあげる事だ。そしてその事を語る大地の顔は、本当に嬉しそうだった。

「……そして、考える時間をくれた。……しばらく自分で考えて、少しずつ、それまでの自分の事を考えて、理解して、落ち着く事が出来たんだ……」

例え自分の事といえど、ありのままに見れるとは限らない。経験などから来る偏見や、『こうであって欲しい』などの願望が自分の姿をも歪めて映す。我々の見ている『自分』とは、案外その『歪められた姿』なのかもしれない。……自ら望んで、自分を歪ませているのだ。

しかし、出来る限りありのままに見ようとする事は出来る。それには、静かに、穏やかに考える環境と時間が必要だ。そして自分なりの答えを出したなら、それは自分を支える上で、これから生きる上で、大きなチカラになるだろう。何せ、誰かから与えられた答えではなく、自分で出した答えなのだから。

ここで、大地はスバルの方を真っ直ぐに見る。

「……だから、キミ達には感謝してもいる……。……お陰で、肩の荷が降りた。……僕は、僕でいて良いんだと気付けたから……」

「……そっか」

それしか言えなかった。まさか、かつて敵対した者からそこまで思われているとは思わなかった。嬉しさを抑えて、かろうじて出し

た返事がこれだったのだ。

それから少しの間、二人は話した。まるで古くからの友人のように親しく。他愛も無い話だったが、それでも十分。なお、話してる途中で事務所からお客さん、スタッフ双方にネズミ型ロボットの発表と捕獲の協力要請がアナウンスにより流れた。

一方、少しの間と言ったが、それは全く持ってもっともだ。話をしている途中、見張りの人の声がバリケード内に響き渡る。

「おい！ こっちにリアルウェーブの車が猛スピードで迫ってくるぞ！ 早くバリケード開け！」

とはいえ、それはつまりリアルウェーブの車が入ってこれるだけの隙間をバリケードに作るという事でロボットやウィザードが入り込んでくる危険も考えられる。

スバルと大地は自分達のウィザードに目配せしてバリケードに近づくが、ふと大地はボソツとある事を言う。

「……バリケードの前で止まってもらって、リアルウェーブをしまつてから入った方が、バリケードを広く開かなくて済むんじゃない……」

「……だよね」

ごもつとも。

二人はその事をスタッフ達に教えて、スタッフはそれをメガホンで車に乗る人に教える。

そうして入ってきた人は、なんとスバルを見るなり彼の方に駆け出してきた。

「な、なに何々!？」

「ああ！ やっぱキミだ！」

「はい！？」

戸惑うスバルに青年はスバルの手を掴むと嬉しそうな顔で言う。

「ほら、キミの友達にリアルウェーブの車を借りた」

「あっ……」

そういえば城から逃げるさい、ルナは知人を探すという人にリアルウェーブの車を貸していた。青年の後ろを見れば、探すのを手伝うと申し出た男性と、見知らぬ青年がいる。無事合流できたようだ。三人の顔には、安全な場所に来れたというのと合流できたという事で安堵がある。

「あの女の子にお礼を言いたいんだが、あの子、というかあの子達
は？ キミ一人かい？」

「あ、えっとそれが……」

スバルは何故彼女達とはぐれているかを説明した。いつの間にか
フウキも近づいて来ていて、物珍しげに会話を聞いている。

スバルがこれからルナ達と合流しつつネズミ型ロボットを探すと
いう所まで言った時、ルナから車を借り受けた青年は「ううん」と
腕組みをして唸る。

「ううん……。……なら、彼女から受け取った車に乗って行った方
が良い。ずいぶん暴走ロボットや暴走ウィザードが増えている。足
で行ったら何度も足止めを喰らって探すに探せないかもしれないか
らな」

「え、でも……」

躊躇うスバル。彼等自体車を借りてる身だが、そこからさらに自

分が借りて良いのだろうか。……彼の躊躇いはそういった明確な理由無しで、彼自身の遠慮がちな性格のためなのだが……。

そんなスバルに対し、別の男性——協力を申し出た男性——も同意だと頷いた。

「ああ、そりゃ良い。どうせ車を返すんだし、ちょうど良いな」

そういう事ならと思い始めたスバルの肩に、犬地の手が乗る。

「……そういう事なら行って来なよ。ここ——バリケード内——には暴走した奴等はいらせないように、僕が護りに出るからさ……」

ロボットはおろかウィザードを遙かに凌駕する電波変換体。それになれる彼なら、守護役としてお釣りが来る。

一連の会話を聞いていたウォーロックは、『ヘッ』と強気に声を出すとスバルに話しかける。

『決まり、だな』

「うん！」

それなら、何の気負いも無くルナ達を探しにいける。

「……さて、そろそろかな」

そして、バリケードの門の前で暴走した者が少なくなったのを見計らい、スバルはバリケードの上から地上に飛び降りる。そして地上に着地するなり、即座にリアルウェーブの車を実体化させた。

こういった状況下で、こういった用途で車に乗るのは無論初めてだ。僅かな緊張と共にスバルが運転席側に座ろうとすると、上から声と共に人が降ってきた。

「どいてどいてえ！」

『避けるスバル！』

「！ わぁ！」

ドスンという音と共に目の前——ちょうど運転席——に落ちてきたのはフウキだった。

彼はワクワクしたような笑顔をみせるなり、スバルに笑いかける。

「さあ、早く助手席に乗って！ あちら——暴走組——さんも、いつまでも待ってはくれないよ！」

「いや、っていうか何でフウキさんが」

そう言いつつ、時間が無いのも確かなので言う通りに助手席に乗る。……上を見れば、監視役のスタッフが驚いている。……誰にも打ち合わせ無しで実行したようだ。

そしてフウキは、スバルの何故という問いに答える。

「少し前に言っただろ？ オレにもはぐれた連れがいます。事務所に待ってるより——」

「！ わわわっ！」

スバルが驚いたのはフウキが急にアクセルを踏んだからだ。話を聞いている最中にそれは驚く。

「——自分から動いた方が探し出しやすいだろう！」

「そ、そりゃそうですね……」

「それに」

「『それに？』」

フウキはこの後、ニヤツと楽しそうな笑みを浮かべる。その時点で、スバルにはおおよその予想が付いていた。この顔は割と良く見た。ツバサやゲイルがイタズラをする時に見せるタイプの笑顔である。

「面白そうだから」

「……やっぱり」

『やっぱりかい!』

スバルとウォーロックの突っ込みを笑っていなし、フウキはアクセルを踏み、非日常なテーマパークを駆ける。

そしてその途中、スバルは左側にある者を見つけた。そのドリル……もとい大きなツインテールは嫌でも目に付く。

「……委員長?」

語尾は疑問系だが、まず間違いない。ゴンタのふくよかさも、キザマロの小柄さも、ジャックの黒髪ツンツン頭も、特徴としては十分だ。……一人見知らぬ女の子が走っているが、途中でルナがグループに招き入れたのだろうか。

「ん? 友人か?」

フウキは方向転換が効くようにとスピードを緩めつつ尋ね、スバルは素直に頷く。フウキはチラリとそちらを見ると、「うん」と頷いた。

「うん。どうやら見事に暴走した奴等に追いかけられているみたいだな。ここは अच्छو、助けに行くか」

「ええ、そうですね。……って……まさか……」

彼が依然浮かべている面白そうな笑み。そして今車に乗っているという状況。スバルの嫌な予感、次の瞬間見事に的中する。

「よっし、そうと決まったら！」

「！ や、やめっ！ あっ、安全カーブで……！」

ギュギャギャギャ！ という甲高い音と共に車はドリフト旋回。ルナ達の方に方向修正して一直線に向かう。ウィザード達を跳ね飛ばす気だ。

「はっはー！ ドリフト旋回、初めてだったけど何とかなるもんだなあ！」

「……………」

肝が冷えた。

（……この人と関わっていると、命がいくつあっても足りない……）

スバルは素直にそう思ったという。

第32話 抜けた牙（後書き）

後半書いてて思いました。……スバル君の一同に対する言い方が何か酷くなりすぎたかもと（笑）。

何故ルナ達が追いかけられる事になったのかは、次話にて。……実はこの話、次の話の後に書かれたモノなんですよ。その方が話的に上手く繋がりそうだったので。

第33話 合流（前書き）

本当に長らくお待ちしました。……ただでさえ週一ペースなのに余計に遅く……（凹み）

第33話 合流

数分前、ジャックが発見した視覚を用いた死角により、ロボットやウィザードの網を掻い潜れると判断した。……そのはずだったのだが……。

「な・ん・で——」

ジャックは走りながら、荒れる呼吸を抑えながら荒れる台詞を吐く。

「——こうなったああああああっ!!!!」

ジャックにルナ。ゴンタにキザマロは追いかけている。何にというのは愚問というものだ。暴走したロボットとウィザードに追いかけている。

こうなった発端は、少し前に遡る。……本当の本当に、少し前だ。

身を隠していた茂みから立ち上がり、ジャックは言う。反応されないために、声は低めだ。

「（よし、行くぞ）」

「おお！」

「ちよ、ゴンタ、貴方ねえ——」

つい、といった所だろう。つい、ゴンタは応じるのに勢い良く言ってしまった。それに対し、ルナはもう遅いかもと危惧しつつ注意

を促すのだが……。

ピリリリリッ！

「で、電話！？ ……こんな時に……」

ルナのハンターに掛かってくる電話。着信を無視する事も出来るが、彼女は小さく溜め息をついてそれに出る。差出人は、彼女の母親だったのだ。流石に無視するのもアレだろう。声と身を低くし、彼女は電話に応じた。

「（……はい）」

「あ、ルナ！？ そっちは大丈夫なの！？ 今、ニュースで偶然シエロ・カステイロの事が出て——」

「ママ！ 今は大きい声はアウトなの！ ……悪いけど、一段落付いたらまた電話するわ！」

向こうも向こうで我が子を心配していたのだろう。それゆえの声の大ききなのだが、暴走したロボットやウィザードが音を頼りに襲う状況でその声の大ききさはアウトだ。ルナは急いで話に割り込んで応じ、また電話すると言うなり切るのだが、先程の自分の出した声を思い出してジャックやゴンタを始めとしたその場の面々を見る。

「「「………」」」

……沈黙が気まずい。キザマロとゴンタは愕然と自分^{ルナ}を見て、ジャックは額に手を置いて「あっちゃー」という態度を取り、初対面のイズナに至っては呆れのあまり半眼だ。

彼女のプライドとして何か言い返したいが、ロボット達の方も心配だ。……もし、今の声が聞こえていたら……。

『……………』

ロボットはジッと自分達の居る方を見ている。どうやら、音を拾ったが良いが詳細な場所までは感知できなかったらしい。……どうやら声がしたらその方向にむやみに進むのではなく、ある程度詳細な方向が分からないと様子を見るというコマンドがウイルスに入っているようだ。

つまり、また先程のような大きな音が生まれない限り、ロボットは気のせいだと判断して通り過ぎるという事。

ジャックはその事を理解し、一同に声を潜めつつ言う。

「(……皆、分かっているとは思いますが、次に声を上げたら終わりだと思え……。ゴンタ、腹の虫も鳴らすなよ)」

「(おう。……まだ腹は減ってねえから大丈夫だ)」

「(……そうか)」

ゴンタに対しての言葉は、緊張しているであろう皆に対して、彼らしくも無い、気遣いによるちよつとしたジョークだったのだが、彼はまともに受け取ったらしい。ジャックはその事に内心呆然としながら頷いた。

その他の面々の顔を見るに、言われなくても分かっているという顔だ。伊達に春から数ヶ月間、彼等と同じ学校生活を送っている訳ではない。彼等の表情と感情の関係は、おおよそ分かっているつもりだ。……今日初対面のイツナはまだよく分からないが、おそらく物静かな性格なので大丈夫だろう。

自分の姉は怒ると大きな声を出す^{ジャック}が、イツナの場合それすらも怪しい。……怒りを表に出す以前に、怒りという感情があるのかすら

疑問に思うほど、彼女は無表情で感情を表に出さないのだ。

(まあ何にせよ——)

ジャックは初対面の彼女に対しての思考を止め、再びロボットの方へ視線を向ける。

(——オレらが声を出す可能性はまず無い。……あるとすればさっきの電話みたいなアクシデント——)

ところで、噂をすれば影、という言葉をご存知だろうか。誰かの噂をすればその誰かが。何かの噂をすればその何かが現れるという^{ことわざ}諺だ。

何故今ここでその話を持ち出したか。その答えは簡単だ。……今、さきほど、ジャックは内心とはいえ言ったではないか。……さっきの電話みたいなアクシデント、と。

そして彼は後日後悔する。ルナに、一時ハンターの電源を切っておくように言えば良かったと。

ピロロロロッ！

((……電話キタ————っ!!))

心の中で声を合わせるルナ、ゴンタ、キザマロにジャック。……イヅナは溜め息こそしたが、それでも無関心無表情だ。

……この親あってこの子あり。彼女の面倒見の良さがどこの両親の遺伝か分かるだろう。

「ルナ！ 大丈夫か!？」

今の状態ではあまりにKYで呼びでない、ルナの父親ナルオの声。

ルナは何も意図して着信対応ボタンを押したのではない。驚いて、たまたま指かどこかがぶつかってしまったのだろう。ルナは急いで一言加えて電話を切ろうとしたが、その隙を与えず彼は我が子に話し掛けてきた。

「会議中、私の秘書から緊急という事でお前の事を聞いてこうして電話したんだ！ そっちは大丈夫なのか！？ どんな状態だ！？」

父の秘書の事なら何度か食卓——オフィカスの事件以後、彼女の両親は出来る限り娘との時間、家族で過ごす時間を作るようにした——で聞いた。よく働き、真面目で美人という、絵に描いたような才色兼備だ。女性という事で妻（ルナの母親）から睨まれたが、本人はそんな関係ではないと否定。直に会った事は無いが、そこまで立派な人ならいずれは会ってみたい人である。

そして今回、ナルオに頼まれてシェロ・カスティロのチケットを取ってくれたのも彼女だったりする。話に聞く限り責任感の強い女性のようなから、この騒ぎをハンターに流れてくるニュースか何かで聞いてナルオに緊急で告げたのだろう。

「ば、パパ……—」

「もうすぐ会議も終わり、私も出来る限り動けるようにする！ 話ではサテラポリスも呼ばれたらしいし、それまで無茶はするな！」

「——だから……—」

ルナは何とか話に割り込もうとするが、我が子への心配のあまり、彼は娘の声が聞こえていないらしい。

「そうだ！ 友人の方は傍に居るのか！？ もしいたら、娘を……いや、協力し合って身を護ってくれ！」

プツンッ。

ルナの方からそんな音がした。彼女は息を最低限吸い、そして最大音量にて吐き出す。

「パパ！ こっちは大丈夫だから電話切るわ！ 良い！？ 奴等は音を頼りに私達の居場所を掴んで襲ってくるの！ そんな状態で大きい声を出したら――」

「……………」

そこまで言った時、イズナが無言でルナの袖をクイクイと引っ張ってくる。ルナは若干沸き起こる煩わしいという感情を抑え、彼女に応じる。

「……何かしら？ イズナちゃん」

彼女、イズナは平坦に言った。

「……もう遅いみたい……」

「……………」

……少しは声の中に危機感を持ってもらいたいものだ。イズナは全くの危機感なく、澄んだ瞳には一切の動揺も無いのに言ったのだから。

ルナは嫌な予感と共に彼女の指差す方を向くと、先程自分達を凝視していたウィザードを始め、いくらかロボットも集まってこちらを見ている。そして一から三を数えるまでもなく、彼等は『グルウオオオオオッ』という獣のような雄叫びを上げながら押し寄せてく

る。

「おおおおお!?」

「きゃああああ!」

「……………」

上から順に男子。次がルナ。最後にイヅナだ。イヅナを除いた面々は悲鳴を上げながら全力疾走で茂みから抜け出し、一丸となって駆け出す。

そして、もう声を抑える必要が無くなったというのもあるだろう。それぞれ思いっきり言いたい事を言いくる事となる。まずはジャック。

「つてかよお! 何で纏め役であるはずのてめえが一番大きな声出してんだよ! バカか、バカなのかてめえは!」

「し、仕方ないじゃない! あれはパパとママが心配してくれて電話を掛けて来てくれたんだから! そもそも何よバカって! バカって言う方がバカなのよ!」

事実としては両親が勝手に掛けてきたという方が合ってるが、ルナとしてはそういう言い方はしたくなかったのだろう。心配してくれた両親に対し、陰口になってしまいそうだから。

その後も2人は逃げながら、叫ぶように言い争い、その様子を少し後ろから走る三名は内心で思う。

(…………委員長…………)

(…………委員長が一番言ってる気がします…………)

(…………貴女が一番言ってるわね…………)

言葉は違えど、三人とも言ってる事は同じである。ジャックが二

回。ルナは三回だ。

「……とはいえ」

と、イズナはポツリと言った。そして後ろの追いかけてくるモノ達を見て、続ける。

「……このままじゃ追いつかれるわね」

園内のロボットは移動をスムーズにするため、平地では車両。階段などの段差がある時は足で登るようになっており、平地での車両モードの時は子供一人の走るスピードより速い。人間が足で自転車や自動車に勝てるかという話だ。

ジャックも後ろを振り向いてそれは察したらしく、舌打ちしてハインターを構える。及び立ち止まり、ルナやゴンタ達を自分の後ろに下げた。

「チッ。……やるしかねえか。コーヴァス！ ウィザードON！」

ウィザードを出しても、近接攻撃でもして噛まれたら元も子もない。ならば、近づかずに対処すれば良い。

「コーヴァス！ ロボットは大破を、ウィザードはデリートしない範囲でグレイブクローだ！」

グレイブクローは、紫色の小さな炎を相手に飛ばす技。遠隔攻撃のため噛まれたりという感染が危惧される攻撃を受ける事は無い。コーヴァスもその事を理解したのだろう。上空に舞い上がり、炎の雨を降らす。

『ケケッ！ オーライ！ 喰らえや！ グレイブクロー！』

空を焼く熱気と共にロボットやウィザードに降り注ぐ紫の炎。それによりある者は直撃を受け吹き飛び、ある者は降り注ぐ炎に足止めされ、またある者は炎が地面に激突した衝撃で足元を取られ、転ぶ。

「ちょ、ちょっと！ ロボットとかウィザードに攻撃って、ロボットはこのテーマパークのだし、ウィザードだってお客さんやスタッフの方のウィザードなのよ！？」

ルナは驚きや焦りといった感情を込めてジャックに詰め寄る。これまでの動作があまりにスムーズで、割り込めなかったのである。

だが、ジャックとしても余裕が無いらしい。炎の壁に遮られるロボットをそれでも油断無く見ながら、彼は言う。

「しょうがねえだろ！ 大事だいじにならないようにコーヴァスには加減するように言っただし、大丈夫だ！」

「けど万が一って事が――」

「……来るわ……」

ルナとジャックがまた衝突をしようという時、イズナの声がそれを止める。……本当、周囲も悲鳴などで決して静かではないし、ジャックとルナの声も大きかったのだが、その中でも聞き入ってしまうような澄んだ声をしていたため聞き取れた。

そしてイズナの視線の先には、雄叫びと共に突進してくるウィザード。グレイブクローは一体一体狙い撃つよりも数で圧す乱射タイプの攻撃。故に、狙いはいまいち甘い。ウィザードはそこを突いて突進してきたのだ。

『チィッ！ ジャック！ そっちでどうにかしろ！』

遠隔攻撃。それも狙いの甘い乱射系は近くに味方がいる状況に弱い。下手をすれば味方に攻撃が当たってしまうかもしれないのだ。ジャックは舌打ちをして懷からバトルカード、エランドを使って迫り来るウィザードを攻撃、及び麻痺させようとしたが、自分でも焦っていたのだろう。指からカードが滑り落ちる。

「！ くっそ——」

「ジャック！」

「！」

拾おうとした時、ルナの声が走る。気付けばウィザードは至近距離まで近づいていて、拳を振り上げている。これでは、拾った瞬間一撃を喰らう事だろう。

「……………」

イズナはふうと息を吐いて一枚の札を取り出した。そして、小声でポツポツと言葉にする。

「……………太古の衛兵よ——」

ズドオオオン！

「……………」

イズナは激突音と目の前の状況を見て言葉を止める。対処する必

要が無くなったのだ。

リアルウェーブの車がワイザードに突進。跳ね飛ばしたのである。そしてその助手席に座っていたのは……。

「皆、大丈夫!？」

「「! スバル!」」

「「スバル君!」」

スバルだった。彼は切羽詰った顔で助手席から降りるとルナ達の方に近づき、ゴンタにジャック、ルナとキザマロはそれを出迎える。何とか、大した怪我も無しで合流できた訳だ。

第33話 合流（後書き）

……さて、ナルオさんの秘書、思った以上に重要人物になってしまった……。我ながら愕然。

なお、イツナの言った「太古の衛兵」ってキーワードでムーのエランドを思い浮かべた方へ。「惜しい！」と言わせて頂きましょう。

次回。……何か、スバルとイツナで良い感じの描写が出ますが、誤解はしないでくださいね。OO（いや、そういうのも面白そうだけれど……。↑え

第34話 急転直下（前書き）

なくんか「やっとか」って感じですが、イツナとスバルがおぼろげな状態以外、現実で出会う話です。

第34話 急転直下

ウィザードを跳ね飛ばしたフウキの駆る車は一時スピードを落とし、その間にスバルを降ろす。そして、再びスピードを上げて周囲のロボットやウィザードを跳ね飛ばしに出る。周囲に暴走したロボットやウィザードがいるのでは落ち着いて話も出来ない。まずは周囲の五月蠅いのを黙らせるのが先決だ。

危害を加えかねない対象の排除はフウキに任せて、スバルは一足先に話に加わる事にした。まずは、無事に再会できた事を喜ぶしよう。

「皆、無事で良かったよ」

「そっちなね。……まったく、本当に心配したんだから」

一同が無事なのを改めて確認してホッとした様子のスバルに、ルナもまた安心したらしく腕を組んでスバルにジト目を送りながらも、雰囲気はそれほど刺々しくない。

そしてジャックは、意識を周囲に回して諸々を警戒しつつ、肩を竦めて笑う。

「ハッ。まあ良いじゃねえか。ウォーロックも無事だよな？」

「そりゃもちろん」

あの（色んな意味で）逞しいウォーロックがそう簡単に暴走組みに仲間入りする訳が無いと言いたげに笑みを返すスバル。その時、跳ね飛ばされていくロボットやウィザードを見ていたキザマロはスバルと周囲にある問いをぶつける。

「……ところで、スバル君と一緒に来た男の人は誰なんですか？」

……それに、あんなに強く跳ね飛ばして大丈夫なんですか……？」

「あ？ ……大丈夫だろ。ロボットの方は元々遊園地の物で、後で直せば良いしその時掛かるのは修理費だけ。ウィザードの方は客のもいくらか混じってるだろうが、あの程度じゃしばらく行動不能にさせるぐらいだな。むしろあのぐらいがちょうど良い」

まあ、一般人がロボットを跳ね飛ばしているため後で五月蠅そうだが、彼の事だ。イザという時はサテラポリス権限で黙らせそうだが……緊急時のためやむなく、とか言つて。また、ウィザードはそれなりに頑丈な上ある程度の自己回復能力が備わっている。時間が経てば自然と治るだろう。

キザマロの問いの一つに答えたジャックは、ここでチラリとスバルの方を見る。

「……ま、あの男の事はオレも聞きたい所だけだよ」

先程言った諸々だが、その一つはフウキの事だ。イヅナもそうだが彼等とは出会って間もない。いきなり「ああそうかい」と受け入れて信用するほどジャックは甘くは無い。……たった今再会を果たしたツンツン茶髪じゃあるまいし。

「ん、えっと、フウキさんは――」

そして当のツンツン茶髪はフウキの事に加えて再会するまでの大まかな事柄を説明した。管理事務所が陥とされる心配はもう無いだろうという事や、合流できた青年から車をありがとうという伝言も含めて。

「……なるほどな」

納得したように頷くジャック。そして、彼なりのフウキの人格の解釈がこれだ。

「ようは、ゲイルから変態さを除いたような感じか」

「……………そうだね」

言われて見ればその通りかもしれない。降りかかる状況、それがピンチだろうと楽しむ点が特に。

（つと、それよりも）

ジャックのあまりにも言いえて妙な言葉に感心して忘れる所だった。彼等がフウキの事を知らないように、自分も彼女の事を知らない。い。

「で、あの子は…………あれっ？」

車から見かけた時も降りた時もほぼ一瞬しか見ていなかったため気付くのが遅れた。どこ、というのは明確に思い出せないが、彼女は覚えがある。

スバルの疑問の声を不思議に思ったジャックがスバルにどうしたのか尋ねる前に、スバルは彼女に尋ねる。

「…………えっと。…………どこかで会ってない？ 僕と」

「…………無いわ」

「…………そう」

あまりにあっさり答えられて立つ瀬がないスバル。無論、デジャヴという事も考えられるし、スバル自身としても「そうかも」とい

う思いが強くなってきた。正直、本当に何となく程度なのだ。

だが実際の所、スバルは彼女とマモンが創り出した夢の中で出会っている。しかし、彼の中でほとんどの記憶は薄れてしまった。

マモンを殺めてしまった事実。

それに対する罪悪感。

ミソラや狐の親子が励ましてくれた事。

そういった一つ一つの状況は覚えているのだが、細かく何があったかを思い出せない。おそらく、自分の心が一線を越えないように踏みとどまる中、その間の記憶をいくらか失ったのだろう。だから、デジャヴ程度にしか覚えていないのだ。

で、場はなんとも気まずい沈黙に包まれる事となる。勘違いしたスバルは勿論、答えたイツナはあいも変わらずだんまりに戻り、ルナやゴンタ、キザマロにジャックも、こういった話をどう切り出すか迷っているようだ。

そしてその気まずい空気を吹き飛ばしたのは、おおよその周囲の掃討を終えたフウキだった。

「はっはっは。残念だったな、スバル。ウチの連れを口説けなくて」

否。文脈からして今さっき来たのではない。そうでなければスバルがイツナを口説こうとした等という妙な誤解（もちろん、冗談だろう）を言う訳は無い。そしてその誤解は、ルナ達がだんまりになった理由の一つでもある。

「どこかで会った？」という疑問から始まる運命の出会い云々という事をスバルが言うとは思えないが、冗談で言ってる様子も無い。……どっちだ。

等という考えがルナ達の思考の一部を侵食して「とりあえずイツナを紹介しよう」という考えにさせるのを阻害させてしまったので

ある。

一方、抱いて欲しくなかった誤解を抱かれたスバルは、例えそれが冗談だと頭の片隅で思っけていても反応してしまふ。

「い、いや！ そんなつもりじゃ——って……あれ、今連れって……」

確かに言った。

ルナは納得したように「ああ」と声を漏らす。

「ああ。そういえばイズナちゃん、連れが居るって言ってたわね」
「……そういえばフウキさんも……」

管理事務所に着くまでに、連れが居るとか言っていた。確かに、二人が知り合いと言われても違和感が無い。上手く言えないが、どこか二人とも浮世離れした雰囲気を持っている。

ルナとスバルの言葉にフウキは満足そうにうんうんと頷き、そして親しようにイズナの肩に手を回して肩を組んだ。

「そそそっ。いやゝ無事で良かったよ」
「……そうなの？」

思わずスバルはイズナに問うてしまふ。肩を組んでいるのはフウキだけで、イズナはどちらかというと迷惑そうな顔をしているためだ。知り合い、ではあるにしても、親しいのかどうかは疑ってしまふ。

イズナは自分の肩に乗るフウキの手を払いながら答えた。

「いちおう。……不本意だけど」

「容赦無いな……」

フウキは「グッ」と痛い所を突かれた顔をし、スバルやルナ等の人間はもちろん、その会話を聞いていたウィザードもまた同じ事を思っていた。……容赦無いなど。

(……けど)

と、ルナは思う。もし本当に親しくないのであれば、そんな辛辣な言葉は使わないのでは無いだろうか。人が容赦ない態度を取れるのは、嫌われても良い相手か、嫌われる心配の無い相手だけだ。

ルナはその事でどこか安心したようにイヅナを見る。無表情無感情な彼女の、人間らしさというのを垣間見れた気がして。それがどこか嬉しくて、そしてどこか、安心してしまった。

そんな彼女の視線が居心地悪く思えたのだろう。イヅナは「ところで」と話を逸らす。

「……ところで、この事態を起こした人はどんな人なのかしら……」

その質問で、真っ先にリアクションを示したのはスバルとジャックだった。彼等は顔を見合わせてから口を開く。俗に言う、アイコンタクトというやつだ。

なお、周りではリアルウェーブの乗り物(車やバイク)が目立つようになった。フウキが園内を駆ってロボットやウィザードを跳ね飛ばしているのを見たのだろう。確かに、走っている車ほど捕らえがたい物は無いし、強力な武器にもなり得る。

「似たようなイタズラをしそうなのを一人思い当たるんだけど……」

「奇遇だな。俺もだ。……もうこの世にはいねえけど、性格的にあ

りえる」

と、生死的にありえない事を言う。ここで大抵の人は、「その人が犯人では？」と詳しく問う可能性は無くなる。それは野暮という物だ。……代わりに出るとしたら、「その人はどんな人だったのか」という好奇心からの問いぐらいだろう。

スバルとジャックが思い浮かべた彼なら性格的にも、そして長寿という点でも当て嵌まるが、詳細を突かれるとそれはそれで説明に困る。全く関係ない人間相手に、デューオの力で永く生きてきた人間がいるという所から説明せねばいけなくなる訳だ。そんなトンデモ存在なんて、早々口に出来るものでもない。

イヅナはその事を察したのか「あ」と小さく言った後申し訳無さそうに続ける。

「……ゴメンなさい。……どんな人か、聞いても良いかしら？」

予想通り、深く踏み込んで聞くという事はしてこなかった。……イヅナにはどこか誤魔化しているようで申し訳ないが、この『一線』を保たせてもらおう。

「うん。……一言で言えば、イタズラ好きで——」

「イジワルで——」

「気まぐれで飄々としてる人ですかね。おまけにトラブルメーカー」

上から、スバルにルナ、キザマロの順。ルナとキザマロはスバルとジャックがそういった言葉を選んだ理由を察したようだが、ゴンは分からなかったらしい。そんな訳で、ジャックは小声で彼に説明。よって、二人のツバサに対しての紹介は無い訳だ。

それらの紹介に対し、イヅナはふとフウキを見て頷いた。

「……ああ、うん。……大体分かったわ」

「いや、俺の方を見るなよ！」

「けど、それで貴方達はその人と離れようとは思わなかったの？」

イヅナはフウキのツッコミを完全無視。フウキはそれで「……無視かい」と小さい声で言うといジケタ様子で地面に視線を移し、スバルはそのやり取りに苦笑しながら答える。

「そんなの思わないよ。イザという時には頼りにもなるし。……僕にとって、本当に信頼できる親友の一人だよ」

「！ ……そう」

「散々からかわれた奴の台詞かよ」

「ジャックだって振り回されてたじゃん」

「あ、あれは、アイツに合わせてただけでだな」

「「はいはい」」

「声を揃えるなてめえら！」

ジャックの冗談半分の揶揄にしれっと反撃するスバル。そしてそれに対しジャックは真に受けてしどろもどろ。スバルにルナ、キザマロの「はいはい、分かった分かった」という態度（もちろん三人の冗談）に怒るジャック。

だが、イヅナにはスバルの言葉以外、正確に言えば、その後のやり取りは聞こえてはいなかった。スバルが彼の事を信頼できる親友だと言った時の笑顔には全くの翳り無く、偽り無く、純粹で、眩しく思えた。

フウキはただ、そんな彼女の様子を見るだけで声を掛けるという事はしない。

そこでふと、第三者の声が広く響き渡る。

「おおおい！　ネズミみたいな奴がドラッキーの館に逃げ込んだってよお！」

リアルウェーブのバイクに乗った男性の叫ぶ事柄に顔を見合わせるスバルとジャック。

「それって！」

「間違いねえだろうな。どうする」

「……僕はドラッキーの館に行くよ。ジャックは委員長達をお願い」

スバルの言葉に、ジャックはどこかうんざりといった様子で溜め息交じりで言った。

「……言うと思ったよ」

「けど、一人で大丈夫なの？　このくらいなら私達が協力できる範囲だと——」

ルナの言う通り、FM星人やムーとの一戦、メテオGと違って今回の事は生身でもどうにかかなりそうな事柄だが、スバルも自分の意思というものがある。

「いや。委員長やキザマロ、ゴンタ……誰にも怪我して欲しくないんだ。ジャックにはコーヴァスもいるし、僕以上に場慣れしてると思う。だから……」

スバル自身はこういった事に慣れているし、どちらかといえば一般人の保護となるとプロであるジャックの方が良い判断を下せるだろう。何より、屋内となると物陰からの攻撃に対応しきれず、怪我をさせてしまうかもしれない。

自分の心配をいつもの調子で返されたルナは溜め息をついた。

「……はあ。……分かったわ。一度言い出したら頑固ですものね、スバル君」

「ツバサ君じゃないんだから……」

彼も彼で相当頑固だ。

苦笑いを浮かべるスバルにルナは「冗談よ」と笑みを返し、続けた。

「けど、無茶はしないでね。私達も、館の周囲を見張るくらいは出来るわ」

「ああ、もしネズミが館から出てきたら捕らえようと。そういう事なら、俺も協力するよ」

「！ ありがとうございます。一人でも人手がいるから助かりますわ」

フウキの会得のいった言葉にその通りという意味を込めて頷くルナ。そして、まさか協力してくれるとはという驚きを込めて礼を言う。なお、彼女が敬語なのは何の事は無い。フウキが暁並みに年上だったからだ。

着々と方針が決まってく中、イズナはスバルの前腕を掴んで言う。

「私も行くわ」

「えっ。でも……」

一見大人しい子なので、まさか申し出るとは思わなかった。何より、ついさっき出会った人を簡単に巻き込む訳にはいかない。

スバルは「危険だから」と断ろうとしたのだが、先手を打って彼

女は続けた。

「お願い」

「うっ……………」

で、結局押し切られてしまった。フウキはイヅナに本当に一緒に行くのかを尋ねたが、迷う事無くイヅナは首を縦に振る。

以下、ドラツキーの館に走るスバルとウォーロックの会話。

なお、先頭をスバルとイヅナが走り、後方をルナやフウキ達が走っている。それぞれの自己紹介は走りながら済ませた。

『ククッ。スバル、お前ホント女の押しに弱いよな』

「…………返す言葉もございません」

こればかりは本当にスバルにとっても溜め息の出る事だった。

「…………今笑った？」

「…………いえ？ 気のせいじゃない？」

僅かに後ろを走るイヅナに笑われた気がしたが、顔を向けてみれば彼女は変わらず無表情。スバルは納得のいかないように眉を顰めた。

「そうかなあ。…………あれ？」

「？ 今度は何？」

「…………いや、何でも無いよ…………」

動きっぱなしで集中力が途切れつつあるというのもあるのだろう。彼女の雰囲気、オーラと言いつつ換える事も出来るだろうか。それが見えてしまった。その一歩発展版が心情を読む、というものののだが、その雰囲気疑問を抱いた。だが、そんな事はない。

スバルは自分の中で思なおし、自身のチカラに再度蓋をして視線と顔を再び前に向けた。

そう。ある訳ないのだ。……雰囲気が『無色』なんて。

第34話 急転直下（後書き）

今回は基本的に、『作者は物知りさんじゃありませんよ』ポジションで書かせていただきました。……全てを分かりきった作者視点のナレーションじゃ、上手く皆さんを騙せないでしょうからね（笑）。

まあ狐もまた、人を騙すのが常ですからね。

第35話 気配（前書き）

今回は長いのをキリの良い所で分けた感があるため短いです。

第35話 気配

ドラツキーの館までの道中、スバル達は特にこれといって暴走したウィザードやロボットに襲われる事は無かった。……その理由は多少危ないと言わざるを得ない。

道行くスバル達を襲おうと近づこうとしたら、客の持っていたリアルウェーブの車に跳ね飛ばされてしまうのだ。暴走組からしてみれば『降りかかった災難』ならぬ『通りかかった災難』で、跳ね飛ばした客から見たら『やられる前にやれ』精神で跳ね飛ばし、スバル達は一瞬の判断ミスで跳ね飛ばされないか不安な状況で歩を進めた訳である。

車に乘ろうにも定員オーバー。よって、足で行くしかないわけだ。

そして、単純に走った事による疲れより常に緊張していなければならぬ心労の方が色濃いスバル達は何とか、一応、無事に、ドラツキーの館まで辿り着けた訳だ。

先程のドラツキーの館にネズミが忍び込んだ事はそれなりに知られているだろうから、自分達より先に入った勇士がいる事も十分に考えられる。中では、暴走ウィザードやロボットだけではなく、人間の襲撃にも気をつけねばなるまい。ロボットやウィザードだと思ったらスバルでしたという事になりかねないからだ。

「じゃあ、行つて来るよ。見張りお願いね」

「ええ。気を付けて」

ドラツキーの館に入っていく二人の後姿を見ながら、ポツリとフウキが言う。

「……本当に、二人だけで大丈夫なのかい？」

「ええ。……ああ見えてスバル君も頼りになりますし、きっとイヅナちゃんの事もちゃんと護ってくれると思います」

「ッ。そうか」

イヅナを護ってくれる、と言う彼女の顔に一瞬だけ複雑な色が浮かんだ。おそらく、今はどんな形であれ白黒ついているだろうが、一時期彼女は星河スバルという少年に恋をしていたようだ。

若々しい感情を見てつい微笑ましく思ってしまうのは、大人の悪い所だろうか。そう思った思いが表に出ていたのか、または彼女の感覚が鋭いのだろう。ルナはフウキのにやけ顔をジロリと見て睨み付けて来る。

「……何か？」

「いや、彼は彼を理解してくれる友人に囲まれて幸せだな、って思ってたね」

そのフウキの答えは本心からなのだが、ほんの僅かに、ルナに対して恐いという感情を覚えてしまった。その感情を表情の二枚裏に隠し、フウキは自分の連れの事を言う。

「……なら、イヅナも大丈夫か」

その言葉に、ルナは視線を正面に戻しつつ意識をフウキに向けて応える。

「……イヅナちゃんの事、大事にされてるんですね」

「……ああ」

そっと視線を館に移しながら、フウキは呟く。

「……昔からの付き合いだからね。……あの子が、生まれた時から
の……」

彼は本心を隠すのが上手い。彼の横顔からは、いつもの飄々とした態度しか見えないのだ。その内実、僅かな郷愁を持ちながら彼は視界の端でルナの方を見る。

（やれやれ。お堅いのは親御さん譲りか。……ま、何にせよイヅナの方も大丈夫そうだな）

それは、イヅナの事を心配して、スバルがちゃんと護ってくれんだろうという安心ではない。だが、ちょうど良くはある。

（そこまで頼りにされてるなら、イヅナもきつと、自身の手を下さずに済む）

彼なら、イヅナがチカラを使う前に動き、『使う必要が無い』という状況に持っていけるだろう、という安心だった。

一方、ドラツキーの館に入ったスバルとイヅナ。出来るだけ音を低くし、歩く音さえ忍ばせていたのだが、その努力は意味をなさなくなった。

「つくしゅ」

イヅナのくしゃみだった。

スバルとしては、なるべく早く終わらせたかった。何せ今いるのはドラツキーの館。テーマパークのアトラクションを大別するなら、

ホラー系に属する物だ。アヤカシなどあちら側の存在でもライトや狐の親子のような良いモノもいて少し慣れてきた感があるが、まだ少し恐い。よって、不意なくしゃみに若干驚いてしまったのだ。

「！……ん、えっと……大丈夫？」

それでも、風邪かどうか思い遣るのは彼の優しさだ。イヅナは口元を押さえていた手を離し、余程耳を凝らさねば聞こえないくらい小さな溜め息を付いた。

「……………はあ。……噂でもされてるのかしら……」

「……………」

何と答えよう。

あまりにベタなセリフにスバルが答えかねている間に、イヅナは不思議そうに首を小さく傾ける。

「……………進まないの？」

「……………あ、うん。行くよ」

《……………首を傾げたイヅナにスバルが若干赤くなった事、ミソラには黙っておくか》

まあ、その辺は決まった相手がいてもつい見惚れてしまうという子供らしさからなのだが、スバルもスバルで長年の付き合い——実際そこまで年月は経っていないが——でウォーロックの心の声を察したのだろう。本当に控えめながらもジト目をハンターの中に居るウォーロックに向けて送ってくる。

「ウォーロック。今何か思った？」

『……………いや、何も……………』

の割には、『思ったか?』というドンピシャな質問にビクツとなるウォーロックだった。

スバルとイヅナの意識が再び外への警戒に向いたのを見計らい、ウォーロックは傍に居るライトに話しかける。

『ふう。……ったく、長くいると互いの考えが分かるってのも考え物だなあ』

『……………』

『……おい、ライト。聞いてんのか?』

応えないライトを見ると、彼女は下を向いて考え込んでいるようだった。ライトは二度目の問い掛けでようやく気付いたらしく、顔を上げてウォーロックを見る。

『はっ。……そうですね』

『……………どうかしたのか?』

体調が悪いようならスバルに相談しようと思っていたのだが、ライトはその考えを先読みしたらしく首を振ってから答える。

『……いえ。体調が悪いというのは無いんですが……。ちょっと考え事を』

『? どんな考え事だ?』

『いえ。……いえ。……恐らく単なる気のせいです。気にしないで下さい』

『……おう』

気にはなるが、無理に聞く事も無い。それに、その考え事が『必要な事』ならちゃんと口にするだろう。

ウォーロックが自分から意識を遠ざけたのを確認して、ライトは再び胸の内の疑問を心の中で呟く。

《……この気配……一体なに……？》

ヒトに極限なまでに近いが、どこか違和感がある。彼女が初めて感じる気配だった。

《……二、つ……？》

漠然とだが、周辺に三つのそういった気配を感じる。

ウォーロックとライトの会話が進み、ライトの思考が進むのと比例してスバルとイヅナの歩も進む。だが、途中不意にイヅナは左手でスバルの右手を掴み、立ち止まる。

「？ どうしたの？」

結果、連られるように止まるスバルは首と顔を振り向いてイヅナの方を見る。彼女は俯いて少し黙り込んでいたが、やがて顔を上げて言った。

「……星河くん。……左手見せて？」

「え？」

正直、彼女が聞きたい事が分からなかった。暗がりのためスバルの左手はイヅナから見えないようだが、何故に今そんな事を……。スバルの戸惑いなど知っちゃこっちゃんと言わんばかりに、イ

ツナは続ける。

「良いから」

「う、うん……」

「………在る」

以上。差し出すスバルの左手を確認したイツナの第一声。

「あるよそりゃ」

思わずツツコミを入れるスバル。

無かったらおかしい。ドラッキーの館に入る前は在ったのだ。それが今無かったら千切れたか何か。スバルはとっくに千切れた痛みで絶叫している事だろう。

「……じゃあ……」

と、彼女は続けた。

「……今私の右手を掴んでるのは誰……？」

「えっ……」

スバルの中で、冷や汗が流れるのを感じた。

第35話 気配（後書き）

フウキが「親御さん譲りか」って言ったのはルナの事です。何故彼がルナの親を知っているかは、いづれ分かります。……情報をフウキに与えた張本人は、一応すでに登場しますね。名前も姿も出してませんが。

第36話 変態登場（前書き）

はい、サブタイで誰が登場するか予想できますよね。

第36話 変態登場

暗がりの中、イズナの手を掴む自分以外の手。……せめて、初対面であるイズナには恐がって叫んだりする所は見せたくない。その辺は男の意地というやつだ。

だが、恐い。それでも覗かねばならない。

そういった葛藤と闘いつつ、スバルはイズナの後ろの暗がりを目を凝らす。そこに居たのは……。

「やっ」

爽やかな笑顔を返したゲイルだった。

「「……………」」

対するスバルとイズナは沈黙。イズナは単純に「誰？」という沈黙で、スバルは驚きのあまりリアクションが出来ないでいる。

ゲイルが依然イズナの手を握っている中、最初に第一声をあげたのは被害者たるイズナだった。スバルに対しての問いである。

「……………ねえ。……この人セクハラで訴えて良い…………？」

「……………。いや…………一応知り合いだから…………」

結局穏便に済ませてくれという所で落ち着いたが、一瞬「本当に一度訴えられた方が良いんじゃないかこの人？」と思ってしまった。イズナがスバルを掴んでいた手を離してゲイルの手をペシッと叩いて魔の手から開放された時、スバルのハンターにピリリリッつと、着信が鳴る。

「？ 電話？ ……こんな時に。……あつ」

出る事にした。相手がルナだったからだ。何か外で動きがあったかもしれない。エアディスプレイに映るルナに、スバルは問う。

「何？ 何かあったの？」

向こうのエアディスプレイの片隅にゲイルが映っていたのだろう。ルナはちょうど良いといった感じで言った。

「ああ、ゲイルさんと合流出たのね。貴方達が館に入った後、ゲイルさん達が入って行つたの。連絡した方が良いと思って」

「そうなんだ。わざわざありがとう」

「礼は良いわよ。……それより、ゲイルさんイヅナちゃんに変な事しなかったでしょうね？」

……何だか、ゲイルが入っていた報告よりそっちの方が彼女の伝えたかった事に思えるのは気のせいか……。まあ、ゲイルの性格、振る舞いから考えて分からんでも無いが……。

「うん。やってきたけど今イヅナちゃんが自分で脱した所」

「……やるわね」

ルナの声は素直に感心している様子だ。彼女はスツと真面目な顔に戻る。

「それじゃ、電話切るから気を付けてね」

「うん、じゃあ」

『……おい、スバル』

「ん？ 何、ウォーロック」

電話が切れたのを確認してから、ウォーロックは話しかけてきた。

『今あの女、ゲイルさん達って言わなかったか？』

「……そういえば……」

自分でもうっかりだ。そして、不覚だ。

注意力が途切れていたのか。スバルが反省している中、ゲイルは自分と一緒に来たモノの事を言う。……自分の行いのためだろう。イヅナからは若干距離を置かれている。

「ああ、うん。連れてきてるよ」

「……誰をです？」

スバルの問いは、誰を、という事で人間である事を期待していた。だが、嫌な予感というのは良い予感よりも当たるものだ。現に、奥の方から異様な叫び声が聞こえてくる。

「ぎゃあああああ！？ 虎あああああつ！！？」

スバルの記憶に思い当たる節がある。バルズランドで、スバル達はゲイルの愛虎^{あいこ}、シュレディンガーと遊んだ。……いや、遊ばれた。

「ああ、うん。混乱に乗じてシュレディンガーと一緒にこのテーマパークにIN！」

「インじゃないです！」

『インじゃねえよ！』

「僕は入り口から。シュレディンガーは出口からで、双方から追い詰める作戦です隊長！」

「『誰が隊長か！』』

スバルとウォーロックのツツコミがハモる。それはもう、一緒に入ったのがシュレディンガーであると自白したようなものだ。

そもそも虎と一緒にニホンに入国したなんてそんな都合の良い事……。

スバルの脳内で、ある考えが浮かぶ。ゲイルのきまぐれぶりは自分も良く知っているから部下の目を盗んで旅行というのは考えられる。だが、いくら何でも虎を連れて、それも事件の起きているシェロカステイロに居合わせたなんて偶然、ある訳が無い。

「……ゲイルさん。……もしかして……この事件が起こるの知ってました……？」

ゲイルは「あははー」と明るく飄々と笑い、YESと答えた。

「うん。こないだジャック君からシェロカステイロに行くって電話があつてね。そしたらアイリスちゃんがキミも良く知るヒトが昔イタズラをしたって言って、心配で来てみたらこういう騒ぎだったって顛末かな」

「……………」

心配して来てくれたのは嬉しい。しかし、あの師匠あつてこの弟子あり。何だか、しばらくどこかに身を潜めて騒ぎを傍観していた気がしてならない。

もしそうなら、本気で怒る。

スバルはそう心に決めてゲイルに問おうとするが、奥の人の叫び声がそれを邪魔する。

「うわああああ！　ネズミと虎が入り口の方に行ったあああ！」

「もし誰かいるなら気を付けろお！」

入り口、つまり自分達がいる方向だ。スバルはゴクリと息を呑み、イヅナは無感情に、ゲイルは楽しげに行く先の角を見つめる。……やがて、何か小さい物が走る音とドスドスという重量感溢れる音が聞こえてくる。

「ぐるうおおおおおっ！！」

雄々しい雄叫びと共に、プロレーサーも真っ青なドリフトを魅せながらネズミ型ロボットと虎が駆けて来る。

「壁際に！」

「！」

ゲイルのつつさの指示で壁際に退避するように言う。それに反応したスバルはイヅナの肩を掴んで一緒に壁際に退避。ゲイルもまた同じように反対側の壁に背を付け、中央を開ける。そしてネズミ型ロボットとゲイルの愛虎のシュレディンガーは開けられた道を駆けて行く。

「……この後は？」

虎のプレッシャーに圧されたとはいえ、捉えるチャンス逃してしまった。スバルの問いに、ゲイルは体を壁から離しながら答える。なお、スバルもまたイヅナの肩から手を離し、一緒に壁から離れた。

「ん〜？ さっきも言っただろ？ 双方から追い詰めるって。入り口にはバッチリ鍵をかけて置いたよ」

電腦からロックを掛けられるのでビヤッコがやったのだろう。無論、テーマパークの所有物なのだからプロテクトは掛けられているだろうが、ビヤッコの戦闘力を考えれば単体でも余裕で解除できるだろう。

まあともあれ。

「それなら、僕達も行きましょう」

やはり人任せならぬ虎任せはいけない。スバルは視線と意識を入ってきた入り口の方に向ける。

「……？」

横から正面、入り口の方に向ける時、視界の端に何か動く者が映った気がした。瞬間、暗がりの中から凶暴な雄叫びを上げながら暴走ウィザードが出てきた。奥の方で騒いでる人がいる所から察して、彼らの中で暴走したウィザードが出たようだ。

手を前に出し、何かを捕らえようとしている。そして、ギラリと光る牙。ソードなどのバトルカードが転送されていないため、噛み付きで攻撃、という所だろう。そしてその狙いは、どうやらイヅナらしい。

「！ イヅナちゃん！」

とっさにスバルはイヅナを背に庇う。だが、その一瞬で彼に出来たのはそこまでだ。バトルカードの転送までは手が回らない。

『……グッ……』

だが、ウォーロックによってその凶刃は防がれる。……代わりに、

ウォーロックが噛まれる形で。ゲイルよりウォーロックがスバルの近い位置にいた。ただ、それだけの違いだ。

「！ ウォーロック！」

『逃げ……ろ。……スバ……ル……！』

体内でウイルスが回っているのだろう。ウォーロックは見えるからに苦しそうだ。そして、時は、暴走したウィザードは待ってくれない。

ウォーロックの肩から口を離したウィザードはスバルの方を見て、『グルル……』という唸り声を立てながら口を開く。

「！」

避ける事も出来るだろうが、後ろにはイヅナがいる。噛まれても人間なら痛いだけだろう。だから、スバルは動かない。

『く……そつ……！』

いくら集中しようとしてもウイルスを押さえ込むので精一杯なウォーロック。助けたくても助ける事が出来ない。

「！」(……何で……)

イヅナが理性で抱いた疑問とは別に、彼女の手は自分でも意識しない内に袖へと向かう。そこに取ってあるのは特別だ。ポケットだと何かと危ないが、袖の裏にホルダーを用意してそこに挟めているのなら、ちよつとやそつとじゃ落ちないだろう。

あとコンマ8秒あればイヅナが自分の手が無意識に動いていた事を察せたという時、本当に刹那という間でゲイルが動く。

トスッ……

小さく、そんな音がした気がした。続くのは、ゲイルの声。

「……二度も、僕の友人を傷付けられると思っていたのかな？
…友人の友人も含めてね」

友人の友人とはイズナの事だろう。その声は静かに広がる風の様に静かだったが、台風のような有無を言わせぬ^{プレッシャー}圧力を持っていた。ゲイルはリアルウェーブの爪を実体化させて暴走するウィザードに大事に至らない程度に刺傷を与えたのだ。先程まで暴走していたウィザードが唸り声だけで動かなくなっている所から見て、人体でいう麻痺性の毒を爪に纏わせていたらしい。

イズナは自身の袖に伸ばしていた自分の手に驚いたが、すぐに平静を取り戻して手を下ろす。

それからゲイルは、ウォーロックに対して申し訳無さそうに小さく頭を下げた。

「それと、ゴメンね。……いつ暴走するか分からないから、キミにも麻痺してもらおう」

『へっ。……むしろ礼を言うぜ。……オレが誰かを傷付けたら後でスバルが煩いだろうし、あの委員長ならなおさらだ』

ウォーロックの聞き慣れた減らず口の憎まれ口。スバルとゲイルは「彼らしいな」と笑みを浮かべ、ゲイルはウォーロックにハンターの中に戻らず、このまま横になってるように言い、スバルはイズナの方を見る。

「えっと、大丈夫だった？」

庇ったは良いが、何せ自分の視界が届かない後ろの事だ。スバルの背に押される形となって、どこかぶつけたかもしれない。スバルの心配にイヅナはコクンと頷いた。

「……大丈夫」

「良かった」

笑顔で言うスバルと対照的に、俯いて小さく彼女の唇が動く。

「……（ありがとう）」

「？ え？」

「……何でもない」

「……そう」

スバルは少し戸惑ったが、まあいいかと思考を次に移す。つまり、入り口に向かったシュレディンガーと合流してネズミ型ロボットを捕らえ――

グシャ

――るまえに潰してくれたようだ。

（（……ええええええええ……））

スバルとゲイルにあった「さあ行くぞ」という意思是、瞬く間に氷解していった。

第36話 変態登場（後書き）

……今更ながら、アイリスとイヅナ、キャラが被らないか結構不安だった。どちらも大人しめな子ですからね。……まあ、イヅナのほうが圧倒的に……（ネタバレ防止ごによ）

イヅナはワンピースの袖から何かを取り出そうとした訳ですが、手首でピシッと締まったタイプではなく、ふわっと広がっています。だから手を入れて裏のホルダーに挟まっている札を取る事が出来る。後で30話にも書き足しますが、イヅナのワンピースは袖長めです。（改めて調べてみたら、ワンピースって長い物でも袖が肘までしか無いんですね。↑服の知識が圧倒的に欠如

第37話 過去の意味（前書き）

今回でシエロカステイロ編、終了です。……いやはや、よもやこれほど長くなるとは……。二つ並行して進めてるせいかな、各編の話数感覚がおかしくなってるのかもしれないね。

第37話 過去の意味

どうやら、スバル達が合流してネズミ型ロボットを捕らえる前にゲイルの愛虎、シュレディンガーが潰してしまったらしい。

スバルやゲイル、イヅナはしばしその事に呆然と立ち尽くしていたが、そんな暇など無い事を悟らせる。

ピンポンパンポーン

イレギュラーな放送によって。

最初は管理事務所から何かしらの連絡かと思ったが、続く声から違うと判断される。誰の声か。こんな騒ぎを起こした奴だ。

「あーあー。皆さんおはこんばんちは。今回の騒動の大本、ウイールス付きネズミ君を作った者でっす」

あくまで軽い乗りでそんな事を言っただけのける声に、スバルは聞き覚えがあった。そばにイヅナがいたため名前は声に出せないが、心の中でやっぱりという気持ちと若干の怒りを込めて叫ぶ。

（やっぱりキミか！ ツバサ君！）

ひとまず外に出ようという事で館の外に出る——ウォーロックはゲイルのリアルウェーブの麻痺毒が効いているので置いていく——と、ルナとジャックは「やっぱりか……」というどこかうんざりした表情で項垂れ、キザマロとゴンタは予想はしていたようだがそれでも呆然と放送を聴いている。少し視野を広げて周りを見れば、やはり誰の声か分からないという人がほとんどのようだ。……所々で

あわただしいのは、恐らくクラスメイトだろう。彼等も、ツバサの声や性格の悪さは覚えているだろうから。

放送は続く。

「同じアトラクションじゃあいつか飽きが来る。そんな訳で、時には違う事を、という事でこんな事をさせて頂きましたー♪」

（（（ウソだな）））

離れていても、クラスメイト全員の心の声は見事にハモった。どうせ彼の事だ。当時このテーマパークに来た時、『あゝ暇だな』。……ちよつと面白いイタズラをしようか』とかそんな感じで即席でウィルスとロボットを作って騒ぎを起こしたに決まってる。

だが、同時に納得した。ロボットに視覚が無かった理由である。それがあればより良く対象を襲えただろう。その理由とは、彼の目的はあくまでイタズラであり、サプライズイベントの一つであり、本気で無かったからだ。ワザと隙を残して客にその隙を掻い潜ってスリルを楽しんでもらう。そういった意図があるのだろう。

そうして、その後も関係があるのか無いのか取り止めの無い話が続いて放送を聞く側のイライラ（こんな騒ぎに巻き込みやがって、という怒り）がピークに達しようとした時、彼のセリフはそれを見計らっていたかのように終わりを迎える。

「さて、最後にこの騒ぎを企てた者として言おう。……今回のパーテイ……」

そして一瞬溜めを作り景気良く言った。そう、それはさながら某昼の番組のように、腕を振り上げる動きが見えるようだ。

「楽しんでくれたかなー!?!」

「「「楽しめるかあああああああ!?!?!」」」

叫べる気力を持った全員のツッコミが天を裂く。その後も彼に対しての大ブーイングが至る所で大盛況。まずは彼の名前を知らない一般の客は……。

「恐かったわボケエエエ!!」

「てめえは何もんだあああ!」

「姿を現せええええええ!!」

……なんだか、下手に止めようとしたら暴力を振るわれそうな雰囲気だ。まあ、それは彼を知るクラスメイトも大差無いという事で……。

「少しでも寂しく思った俺が馬鹿だったよ!」

「向こうの人に迷惑かけないでねっ!!」

「神様に蹴り飛ばされて現世を通り越して地獄に落ちろ!!」

散々な言われようだった。

彼と接する事が多かったからだろうか。スバルにとっては大抵の彼の目論見が見えてしまい、苦笑いしか出てこない。……確かに理不尽な騒ぎに巻き込まれた怒りはあるのだが、企てている時の無邪気な子供っぽい彼の顔を想像したら、つい苦笑いを浮かべてしまう。そんなスバルの横にゲイルは静かに寄り添い、耳打ちをしてきた。

「実は、クリスマスイヴにバルブランドでクリスマスパーティーをするんだ。……良かったら、来ないかな?」

「えっ?」

きよとんとするスバルに、ニツと口の両端を引き上げてゲイルは笑う。

「本当なら、落ち込んでいるっていうキミを励ますための催しだったんだけどね。……まあ、見た感じ立ち直ったみたいだけど、せっかくだし、ね？」

どうやらこっちにも心配をかけてしまっていたようだ。迷惑を掛けてゴメンと謝るスバルに、ゲイルはとんでもないとばかりに手を振った。

「いやいや。どの道楽しそうだからウチの男衆も張り切っちゃってね。……楽しみにしてるよ。キミたちに逢えるのも」

『今回の騒ぎが起こる可能性があるってアイリスに聞いて助っ人としてニホンに来たのはあくまで目的の一つ。もう一つは、お前等にパーティの誘いをとってな』

ゲイルのハンターの中からビヤッコが補足を加える。

「……つまり、別にメールや電話で言っても良いけど、どうせニホンに行つて会うんだからその時に言っちゃえと」

「『そのとーり』」

「……………」

それはどこか、クイズ番組で聞いた事があるのだが……。そう、『アタックチャーンズ』とか言いそうな番組で。……なんで知ってる何で。

スバルが呆然としてゲイルはけけらけら。すっかりスバルがゲイルのペースに飲まれた時、管理事務所の方から所長を始めスタッフの人達が歩いてきた。所長は広場の中心に立ち、マイクを手にすると

お客さん達に頭を下げてくる。

「えー……今回の事は無論サテラポリスに報告して犯人を捕まえてもらうつもりですが、まずは皆様に謝罪申し上げます。このたびはこのような騒ぎに巻き込んでしまい、申し訳ありませんでした」

所長を始めスタッフが覚悟していたのは、先程の主犯者に対してやられたような大ブーイング。くちこみで今回の騒ぎが知れ渡り、シエロカステイロの閉鎖まで考慮していた。

だが、最初に届いたのは戸惑いの声。明確な言葉でなく、ざわざわという人垣の声だ。そして次に届いたのは、意外な言葉だった。

「……いや、けど……割と楽しかったかもな……」
「!？」

驚いて顔を上げる所長とスタッフ。

最初に楽しかったと言う人の周りの人も、口々に言う。

「……だな。確かにこんな騒ぎに巻き込まれてムカついたのは確かだけど、スタッフさん達のせいじゃないからな」

「これはこれでスリルはあったし……」
「やったのはさっきの放送の奴だろ？」

その声はまるで水面を渡り、広がる波紋のように広がっていく。おそろく、かつて彼のクラスメイトだった者でも一部の者——スバルなど特に良く接していた側——しか察する事が出来なかっただろうが、その流れすらツバサの計算通りなのだろう。

自分が主犯だと言う事でテーマパーク側の責任を減らし、さらには長々と無駄話をする事で客の怒りを一点に、つまり自分自身に向ける。そんな中でテーマパークの所長やスタッフが頭を下げてても、

「え、悪いのアイツっしょ？」という流れに出来る。そして、皆が何となく思っていた事は、誰かが具体的にスタッフは大して悪くなく、本当に悪いのは企てた者という事を言えば、それは程よく広がる。人は、自分だけがそれを思っている訳ではないと思えると思え、積極的に意見を言えたり手を上げられてしまうから。

だが、客は恐がると同時に一生忘れられないくらいの刺激を受けたのも事実。

かつての事だが、恐かったけど楽しかったという意見が多かった事で、当時のシェロ・カステイロの運営人側では「これから常に斬新に、常に進化を」というのがモットーになった。……流石にその時並みのトラブルはマズイので、せめて時代や世代のニーズに对应しようという流れに落ち着いたのだそう。

……ただ、それでも……。

「……ホント。……ツバサ君のイタズラは寿命が縮むよ」

彼が純粹に誰かを困らせたり不幸にさせるために動く訳じゃないと知っているスバルであっても、そう思わざるを得ない。彼が帰ってきたら、文句の一つでも言わせて貰おう。

「って、あれ？」

「ん、どうしたの？ スバル君」

スバルの疑問にひょっこりと顔を覗かせるゲイル。スバルは辺りを見渡し、ポツリと言った。

「……イヅナちゃんとフウキさん、どこいったんだ……」

いつの間にか、彼等の姿が消えていた。

「……とことん、人を喰ったような男ね……」

イヅナはふうと溜め息を付く。場所が場所ゆえに風が強い。彼女は視界に入り込む髪を押さえる。

「俺よりも？」

イヅナに尋ねるフウキもまた同じように、そこから落ちないように座る事で接地面積を増やす。

彼等がいるのは、シエロカステイロのシンボルとも言える城の屋根の上だ。そして彼等の文脈からして、ツバサの思惑はおおよそ見抜かれている。彼とは実際に会った訳では無い。それでも、知っている。

「……そうね」

平坦で淡白なイヅナの返事に、フウキは話題を変える。スバル達と接していた時とは違う。厳しめで、突き放したような声だ。

「何であそこまで関わった？ ……下手したら正体を察せられたかもしれないのに」

「……知りたかったの。……アイツを親友と言う、彼の人柄を。……あそこまで強く、人が人を信頼するなんて……見たこと無かったから……」

スバルがツバサの事を大切な友人だと言った時、イヅナの中で戸

惑いがあった。事実と人々の認識にギャップがある。それも、とても大きく。だからイズナは、スバルの人柄を探るためにドラッキーマの館への侵入を頼んだのだ。

「……それで、何か分かったのか？」

「……………分からない」

としか、言えなかった。館の中でのスバルはいつだって、会って間もない自分の事を気遣って、優しくかった。……ありのままの流れを、理を崩し、時空を流れる時間の流れすらも遅くしてしまった人物の親友とは、思えなかった。

その信じられないという心情を察したのか、フウキは視線をイズナから正面、風が舞う空に向けて続ける。

「……あの若ジジイの事だ。そういう報告は受け付けねえぞ」
「分かって——」

る、と言い掛けたが、ふとイズナはある事を思い出す。

「……今思えば、今回下界に先に降りたのは貴方よね？ 私はそれを追いかけてきたんだけど……」

「暇だったから」

「……………」

この風のように自由過ぎる奴、どうにかならないだろうか。

イズナはそんな気持ちで溜め息を付き、ボンヤリと視線を下、スバル達の方に向ける。

一方、暗がりの一室。机にはパソコンが置いてあり、その前には一人の女性が座り、パソコンを操作している。だが、ふとそのキーを叩く手が止まり、後ろの暗がりに声を投げかける。

『……あらルシファー。どうかした？』

『……気付いていたのか』

ライラの姿をしたベルゼブブの声にスルリと闇から這い出るように現れたルシファー。ルシファーとしては完全に気配を消していたつもりだったのでそれが気付かれたのは若干の驚きだった。

『ええ。……私が主に司るのは暴食だけど、伝染ってのもあるからね。気配を探る索敵系も得手分野よ』

ベルゼブブ。暴食を司る悪魔で、聖書においてその姿は蠅の姿として現される事が多い。蠅は動物のフンや死肉に集まり、疫病すらも『伝染』させる存在だ。

『フッ、なるほどな。……ところで、頼んでいた物は』

ルシファーの言葉で、ベルゼブブはパソコンからディスクを取り出してルシファーに差し出す。

『はい。ちょうど今さっき終わった所よ。……ココロサーバーのプロテクト解除コード。……けど、どうせなら私がやった方が良くない？ 私の元になった人間、相当の電子技術持ってたみたいだし』

これもまた得手分野だからこそその提案だ。しかし、ルシファーは即座にそれを断る。

『いや。これは私の手でケリを付ける。……自らの願いで、他人ばかり動かすわけにもいかんだろう』

『あら残念。……ま、良いけどねえ』

『？ 嫌に聞き訳が良いな』

肩透かしを食らって不思議がるルシファーに対し、ベルゼブブは『うふふ……』と妖艶に笑い、ディスプレイにある映像を映した。

『……これは……』

『なんだか楽しそうだからさ。……壊しちゃう♪』

それは衛星画像から拝借された映像であり、パーティの準備に勤しむバルズランドを映したものだった。

第37話 過去の意味（後書き）

……ああ、やっぱりオリキャラの男性は扱いやすい。「てめーこのやろー!」とかっていうのを気軽に書けるから。（↑え

なお、「楽しんでくれたかなー!？」の元ネタですが、『いいとも』の「明日も来てくれるかなー!？」です。アタックチャンスはともかく、アレじゃあ少し通じづらかったかなと思って補足をね。

……しかし我ながら、自己犠牲的なプランが多いなー。……ま、オレ自身そういう面があるからね。

誰にも知れない事は無かった事と同じ。……俺が苦しくても、それを他人が悟らなければ、悟らせなければ、無かった事と同じですから。

さて、そんな訳でお次はベルゼブブですが、先日やっこさ納得のいくプロットを練れました。後は、自分の納得のいく文章でそれを表現するだけですかね。

第38話 半年ぶりの国（前書き）

うん。やっぱりしばらく書かないキャラがいるとどんな子だったか忘れそうに――

「……………」（ジトーツ）

……………ゴメンなさい、ソラ。

第38話 半年ぶりの国

「ふう」

スバルはアメロッパの荒野を走るバスの中で溜め息をついた。もう少してゲイルの待つバルズランドに着く。やっとここまで来た、という溜め息である。

スバルが頬杖を突いて窓の外に目をやった時、後ろの席から上向きの平手が伸ばされているのがガラスに映った。

「大丈夫？ スバル君。結構な長旅だったものね」
「委員長」

ガラスから通路側に目を向けると、ルナがそんな事を言ってくる。そして伸ばされた彼女の手の上に乗っているのは小さなキャンディーだ。乗り物酔い対策を始め、甘い物は長旅の友だ。

スバルは礼を言いながら受け取り、口に放り込んだ。茶色い色だったため想像は付いたが、コーラ味だったらしい。

（それにしても……）

と、スバルは再び窓の外に目をやる。彼が心の中で思ったことはこうだ。よく母さんがバルズランドに行くのをアッサリ許したなど。

実際、半年前にツバサの付き添い（ルナの意地による強引な付き添い）でバルズランドに行くと行った時は、サテラポリスの暁やジヤック、クインティアがいるからと説き伏せたくらい説得に手こずったのだ。当時、世間におけるその国の認識は、『逸れ者達の集まる国』というもので、決して良い物では無かった。

しかし、数ヶ月前のエーテルとの戦い。その時、彼等も動いていた。自分達の国の防衛だけでなく、周囲の小さな村や町、集落。全てを、何て傲慢な事は言わない。しかし、自分に出来る限りの範囲で他者を護っていた。衛星カメラによる映像は後に『それ』を不都合に思う者から改ざんされる可能性がある。しかし、人の口には戸は立てられない。例え政府などから口止めの指令がされたとしても、物珍しい話はいくつ話してみたくなるものだ。

そして、元々別にどこの国もバルズランドを格別嫌おうと思っていた訳ではない。単に、逸れ者達が多く集まっているから治安が悪くて悪い人が多いんじゃない？ という思い込みがあっただけ。ならば、人々を助けたというありのままの情報を流せば、今までの常識から与えられた考えに疑念が起こり、疑念は更なる情報で自身を革新させる要因になる。……まあ、現実を受け止める事から逃げて誰かを見下したり、自分の思い込みにしがみ付く事で自身のアイデンティティー（威厳）を護ろうとする人間は無論いる訳で、そういう人達は同属同士で集まってネットの片隅で陰口を言っているとかいないとか。

話が逸れたが、スバルの母はスナリ受け入れられた方らしい。大吾に至っては、基本あの人はヒトを信じてこそ、という人なので二つ返事でOKを出してくれた。

「おい、もう着くぞ」

「あ、うん」

景色を見ながらぼんやりしていたら後ろの席のジャックから声を掛けられた。降りる準備をしなければなるまい。バルズランドは隣国のボスニュー同様北アメロッパに位置している。そのため、時差はあれどニホン同様季節は冬——まあ、流石にニホンほど雪は無く、肌寒い程度だろう——だ。なので、服も割りと厚手な物を用意した。なお、クインティアと暁は通常の治安維持業務に加えて年末決算、

ミソラは芸能界の年末企画で忙しいという事で、先に行つてとの事だ。……ソラやツカサにも誘いのメールを送ったのだが、彼等は別の便でアメリッパに渡ったのだろうか。

「おお、よお来たな」

国を覆う城壁の門を越えた所に立って待っていてくれたのは黒蓮さんだった。寒さ対策としてスバル達同様厚手の服を着ているとはいえ、年配の方が立って待っていてくれるとどこか申し訳なく思つてしまう。

「……黒蓮さん……」

「わざわざ立って待ってなくて良いぜ？ どうせあの野郎は城に居るだろうし」

スバルとジャックで黒蓮を氣遣うのだが、当の黒蓮は何でも無いとでも言うように呵々^{かか}と笑う。

「ふははっ。まあゲイルもそうは言ってくれたんじやが、この歳になると動かなければ逆に足腰が弱ってなあ。散歩であれ何であれ、筋肉に適度な刺激を与えるのは悪い事では無いわい。……さあ、もう行つてしまおう。いつまでも外で長話というのもなんじやからな」

それはそうだ。雪は二ホンで言うトウキョウ並みの少なさだが、それでも寒いものは寒い。早く屋内に入つてこの寒い風を凌ぎたいものだ。

「あれ、もういる」

先着がいた。ゲイルの住んでいる王城は図書館としての役割も受け持っている。一階ロビーのソファーに座って足を伸ばしていた人物はスバルの言葉に若干ムスツとした様子で立ち上がり、近づいてくる。

「居て悪いのかな？ スバル君」

ムスツとした様子のソラは両手を腰に当ててスバルを嗜め、対するスバルは先程の不躰な発言を思い出す。

「あっ、いえ。ごめんなさい。……つい……」

まさか自分達より早く着いているとは思わず、つい正直な感想を言ってしまった。ソラもそんなスバルの正直さを分かっているのか、スバルが自分の非を認めた事でふっと表情を和らげた。

「いいよ、分かれば。……そして改めて――」

『久しぶりだね、皆』

ソラの言葉を実体化したスザクが引き継ぎ、スバル達は改めて再会を喜ぶ。なお、クリスマスは旅館が忙しくないかという気遣いには、正月の方が忙しいので今のうち抜け出して楽しもうとの事だ。

ソラの容姿だが、流石に冬という事で厚手の服を着ている。ふわふわした生地なのは、女の子らしさというものだろう。髪型はストレートだ。

「けど、ソラさん早かったですね。僕達の学校、冬休みに入るのが遅めだったので冬休みに入り次第即飛行機に乗れるように日程を組んだんですが」

そう。スバル達の学校は今年冬休みに入るのが十二月の二十日と遅めだったのだ。それゆえ、終業式の翌日（二十一日）には出発できるように準備をしていたのである。だが、実際にはソラの方が早かった。

そのキザマロの疑問に対し、ソラは「ああ」と納得したように小さく頷いたが、何かおかしな事でもあったのか苦笑いを浮かべながら答える。

「そりゃ、電波変換で来たからね。……まあ、着いたのはつい数時間前だけど」

そりゃ早いわけだ。それは金銭面での対策でもある。スバル達はルナがいるが、ソラは女将から借りるしかない。その分を返すために仕事が増えるより、電波変換で来た方が良さだろう。

『ちなみに、ソラの方角音痴はゲイルがカバーしましたー』

「うぐっ……………」

スザクの補足に凹んだ様子のソラ。その後、スザクを捕まえて口を封じようとしたソラの手を巧みに避けつつ続けられたスザクの説明によると、ゲイルがシェロ・カステイロを訪れた後、あのままニホンに居座っていたらしい。その間の衣食住はソラのいる旅館、うらかわにお世話になっていたそうだ。

ゲイルは好奇心旺盛な一面を持っているらしく、しみじみと染み渡るようなニホンの『和』をこの機会に存分に堪能したかったのだそうだ。

『けどその時、女将から借りた部屋がホコリっぽい物置でねえ。いやー笑った笑った』

「そ、そうなんだ……」

スザクのあまりにも清々するような笑い方に、スバルやルナ達はこの場にいないゲイルに対して申し訳なさから苦笑いを浮かべる。本人が居ないから良いものを——いや、スザクの事だ。本人が居てもこんな感じで笑うだろう。

なお、物置と言っても無機質な物ではなく、一種の蔵^{くら}だ。掃除で丸一日潰れたそうだが、泊まった際の本人が言うには「住めば都」だそう。ちなみに、先程から女将やスザクのゲイルの扱いが酷い理由だが、やはりあのゲイルの人柄だろう。女将はスザクに言われるまでも無く女の勘でゲイルの一面を見抜き、物置に押し付けたのだ。それでも住めば都なんて言って安穩と笑っていたというのだから、その図太さに感心すら覚える。

「ってか、あれ？」

噂の人物たるゲイルがいない。スバルの疑問に気付いたのか、いつの間にやらソファアに腰を下ろしていた黒蓮が答えた。

「ああ、アイツなら——」

「ようやく執務が一息ついた所だよ」

答えを横取りしたのはゲイル本人だ。こっちもこっちで年末という事で忙しいらしい。肩に手を置いて解しつつ、首を動かしながら上へ続く螺旋階段を下りてくる。

ゲイルはスバル達に「よく来たね」等と歓迎の挨拶をしようと口を開いたが、途中で言葉を変えた。

「皆、よく——あれ？ 藍川とアイリスはまだ地下なのかな？」

そういえば二人がいない。ソラは地下に通じているらしい階段に目をやり、ゲイルに視線を移した。

「あー……みたいだね。こっちに来てないのは確か」

「ねえ、地下って？」

ルナの問いに対し、ソラはあっさりと答える。

「地下にはこの階以上に本があって、二人ともその本を読んでいるの。……私も来た時は二人に挨拶したんだけど、上の空の返事だね。ぜんっぜん気付いた様子無し」

「……凄いね」

思わずスバルはそんな事を言う。正真正銘、本の虫だ。ソラは全くだと言わんばかりに頷き、そんなスバルとソラの肩にゲイルの手が置かれる。

「まあ、結構人も集まってきたし、そろそろあの二人には読書を中断してもらおうかな。……黒蓮とルナちゃん達は疲れただろうから待ってて。スバル君と迎えに行ってくるよ」

「……はあ」

黒蓮は無言で「心得た」と言いたそうに頷くが、ルナは釈然としない返事を返す。彼女の目から判断して、何で自分達がのけ者なのか、という事を言いたいらしい。そしてゲイルはそれを察したのか、少し困ったように笑みを浮かべて弁解する。

「あはは……ゴメンね。けど、黒蓮は寒い中立っていて、キミ達は長旅で疲れているだろう」

「じゃあスバル君は？」

「スバル君の事はアイリスが特に心配していてね。早く元気な彼を会わせてあげようと思って」

キザマロの問いにすらすらと答えるゲイル。それは決して間違いではないが、全てでもない。地下にはツバサが捕われている巨大な黒い繭まゆも存在する。ツバサはルナ達にも死んだという事にされているため、多くを知られる訳にはいかない。

(……そっか)

スバルは意識的に自身のチカラを使った。使う必要のない時に封じるのも重要だが、使いたい時に使うというのも訓練になると考えてだ。

そしてそれで見えたゲイルの真意は、スバルにも一度ツバサが捕われている繭を見てもらおうというものだった。かつて、最も彼の近くで戦い、彼の心に近づいたスバルだからこそ、一度その状態のツバサと逢って欲しいのだろう。

ならば、言う事は一つだ。スバルはルナ達の方を向いて明るく言う。

「委員長、僕の方はまだ大丈夫。すぐ戻るよ」

「……そう？ ……まあ、貴方がそう言うなら良いけど……」

そんな明るい笑顔で言われては無理に引き下がる訳にはいかない。ルナは不承不承という様子で引き下がり、おとなしくソファアに腰を下ろした。ゲイルはそんな彼女に申し訳無さそうな笑みを送った後、足を地下へと続く階段へと向けて歩き出し、スバルもまたその背中を追うように歩き出す。その途中、ゲイルは後ろの一同に聞こえないような小さな声でスバルに言う。

「(……話が早くて助かるよ。……便利そうだね、それ)」
「！」

それはスバルのチカラを見越しての言葉だが、それはおかしい。
スバルは直接ゲイルに自身の能力の事は話していない。……暁が話したのだろうか。

「(……何で……)」

スバルの小声の問いに、ゲイルは肘の高さまで持ち上げた手の平を見下ろし、小さく笑みを浮かべて言った。……それは苦笑いとは少し違っていた。むしろ、それよりも重い失笑だ。

「(……戻って来たのかな……)」

「え？」

「何でもないよ」

スバルはゲイルの言った意味が良く分からなくて彼の顔を見上げるが、彼はいつもの暢気な笑みに戻っていた。

「ささ、足が疎かになってるよ」

「あっ……」

気になるあまり、歩みがゆっくりになっていたらしい。ゲイルに促され、スバルとゲイルは再び意識と動きを歩行と地下への階段に向けた。

第38話 半年ぶりの国（後書き）

さて、段々藍川にも『色』が付いてきたな。『明日へ』において、個性が出せなかったのは『藍川』と『黒蓮』だからね。今作では二人の内面や個性を明確にしようという意図もあるのですよ。

なお、スバルの「それにしても」の後はあくまでナレーションです。おそらくスバル君はオレ以上に、誰かの事を悪く言うってのは無いでしょうからね。

さて、次話は『また』騒動の予感です。困った師弟ですよ、本当に。

第39話 黒蘭（前書き）

お待たせしました。……色々私生活の方が忙しくてですね。特に肉体的に。慢性疲労には勝てません（苦笑）。元々強い方じゃ無いですからね、体。

第39話 黒繭

地下へ下る階段は螺旋階段だった。入り口辺りから下を見下ろすと、螺旋階段の所々に踊り場があり、その壁にも本棚がある。傍に滑車で左右に動く梯子はしごがあり、それで上の本を取るのだろう。……下の方は薄暗くてよく見えない。

「スバル君、行くよ」

「あ、はい」

目を凝らして良く見ようと思った矢先、先を歩くゲイルから声が掛かってスバルは視線を正面に戻した。

「……これは……」

最初、階下が暗いのは単純に上の光が届かないためだと思われた。だが、途中まで来て分かる。それは自然の闇ではなかった。最下層まで続く螺旋階段。その中空に、真っ黒な繭のような物が在る。全く光を反射せず、上からの光を纏めて吸収してしまっているのだ。そしてその繭からは自身の自重を支えるために方々へ黒い糸ほうぼうの束が伸ばされている。それが壁や本棚にくっ付き、繭を支えているのだ。その糸が無ければ、スバルはその黒い繭の存在に気付かなかっただろう。

そして、ゲイルはスバルの視線の先にあるモノに気付いたのだろう。歩きつつ、あくまで平坦に述べた。

「……ああ。……これがツー君の囚われている黒い繭だよ。……アイリスはよく僕たちの仕事を手伝ってくれるけど、空いてる時間はここにいる。……いや、ここにしか居ない」

「……………」

おそらく、ルナ達を待たせた理由の一つはこれだろう。繭の大きさはほぼ円形。半径は五メートルほど。一人の人間を閉じ込めるには巨大すぎる大きさだった。……その分の恨みが、あの中に満ちているのだろう。こんな物、どう説明しようと怪しまれるだけだ。

(……けど……どこか変だ……)

具体的な事は分からないし口に出来ないが、違和感がある。心を視るチカラではなく、アヤカシなどを視る感覚でだが、恨みや憎しみなどの感情は無論感じるが、酷く小さいとはいえ別の感情も感じるのだ。

「? スバル君?」

「! 今行きます」

立ち止まったスバルを不思議に思ってか、ゲイルが振り返ってくる。待たせるのも何だし、アイリスと藍川を迎えに行かねばならない。

(ま、いっか)

若干気になるが、今は下に歩を進めるとしよう。

そして最下層。壁の本棚に加えて床にも本が乱雑に詰まっている。机と椅子が無い所から見て、本がそれらの代理らしい。

先の方に明かりが見える。おそらく、そこにアイリスと藍川がい

るのだろう。

「『……………』」

「「……………」」

上から順に、本を読んでも藍川とアイリス、そしてそれを見ているスバルとゲイルの沈黙だ。二人とも本を読み耽っていると聞いたが、まさかこれほど集中しているとは思わなかった。声を掛けるのを申し訳なく思うくらいに熱中しており、スバルやゲイルが傍で会話しても気付かないほどだ。

「……凄いですね、二人とも……」

無論そのスバルの言葉も底の無い穴に小石を投げ入れるように二人は声を返さない。その代わりに、ゲイルが苦笑交じりで返す。

「ああ、全くだ。……気持ちも分かるんだけどね。何せここに置いてある本は、それぞれの国で都合の良い様に改ざんされた情報ではなく、真正銘歴史の真実、言わば歴史の裏を始め、かつての科学者達が残し、危険故に封じた資料もあるんだから。知的好奇心の強い子は——」

「！」

スバルはゲイルに後ろから襟首を掴まれてビックリする。どうやら自分でも気付かぬまま本の方に手を伸ばしていたようだ。

「——ミイラ取りがミイラになりかねない。……わかりた？」

「……………」

無言で頷くスバル。「わかりた？」というのが何から取った——

パクった——ネタなのかは分からないが、危うく自分まで本の世界に旅立ってしまう所だった。

スバルは再び目を周囲に向ける。ここにある全ての本が、当たり前毎日の送り、教育を受ける『表の世界』では伝えられない歴史の真実。そして、各国の発展の一翼を担ってきた科学者の負の遺産なのだ。……いや、それはあくまで一部で、それ以外のモノもあるのだろう。人間が探求してきた学問は、何も歴史や科学だけでは無いのだから。

『で』

と、スバルのハンターの中からウォーロックが言う。

『見事にミイラになってんのがあの二人って訳だな』

「あはは……。まあ、藍川もアイリスも本が好きだからね。けど、そろそろ戻ってきてもらおうか。スバル君はアイリスの方をお願い」
「はい」

あえて補足を加えるなら、藍川は好奇心旺盛プラス本好き。アイリスは静かな時間が落ち着くというのもある。

「あ、スバル君」

「？」

まずは直接声を掛けてみようとしたスバルに、ゲイルの声がかかる。彼は今思いついたという顔でこんな事を言った。

「呼びかけるのはスバル君で、アイリスの目の前に立つのはウォーロックでお願い」

「えっ？」

『はっ？』

おかしいな要求にスバルとウォーロックは首を傾げつつ、ウォーロックは実体化。ライトが小声で『あゝ……』と納得したような声を上げた事は気付かなかったようだ。

アイリスの前にウォーロックが立ち、その後ろにスバルが立って実行。

「……アイリスー」

『……………』

ただの呼び掛けでは反応無し。続いて、ポンポンと肩を叩いて呼び掛けてみる。

肩を軽くポンポンと叩いて……。

「アイリスー」

『ッ。スバルさ——』

アイリスの言葉は止まり、目が見開かれる。スバルかと思えば目の前にいたのは一見して熊のようなウォーロック。

『きゃ……！』

ドダッ！

「！？ アイリス！？」

『おい大丈夫かよ！』

結果、驚いて上体を反らしたあまり本の椅子のバランスを崩し、小さな悲鳴を上げて後ろに倒れる事となる。スバルの手を借りて上

体を起こした彼女の第一声は、呆れと慣れを含ませた言葉だった。

『……ゲイルさんね……。言いだしっぺは……』

「……ご名答」

ようは、スバルかと思ったらウォーロックでドッキリ大作戦という訳だ。そんな事を思い付きそうなのはツバサとゲイルくらいだろう。スバルとアイリスはやれやれという溜め息を同時に付き、互いに笑みを浮かべた。

「改めて、久しぶり。アイリス」

『ええ、本当に。……ウォーロックが元気なのは見れば分かるけど、スバルさんは……その……』

「大丈夫」

後半を言いづらそうに言うアイリスに、優しい笑みで応えるスバル。彼女も恐らく、マモンとの戦いの事を聞いて心配していたのだろう。久しぶりに逢えて元気そうな様子を見て安心したが、無理はしていないだろうか。そういった事が心配だったのだろう。だからスバルは、アイリスを安心させられるように優しい笑みで答えたのである。くどくど理由を話さず、たった一言に、「自分はもう大丈夫。心配を掛けてゴメン。それと、ありがとう」という思いを乗せて。

アイリスも始めはキョトンとしていたが、次第にスバルの伝えた事が分かったのだろう。ホッとしたような、小さくて柔らかい笑みを返した。

『……良かった。本当に』

「っと、そうだ。ゲイルさんと藍川さんは……」

どうもこういう雰囲気は慣れない。どこか照れくさくなってしま
う。それに加え、ゲイルが藍川を本の世界から現実に戻せたかも気
になる。そういった次第でスバルは視線を藍川の方に向けたのだが
……。

「……………」

「あっ。こっちも終わったよー」

にこやかに言うな、にこやかに。

前者は藍川の沈黙で後者はゲイルの言葉なのだが、状況が異様だ。
ゲイルは藍川の後ろに回り、藍川の首に手を巻きつけて絞め上げて
いる。……もう既に、ぐったりして動かなくなっている。

（《終わったって何終わったって!?!》）

内心でのスバルとウォーロックのツツコミは見事にハモった。こ
のままでは藍川、ご臨終である。

『……やり過ぎよ、ゲイルさん……』

流石にアイリスもゲイルに咎める目を送る。そりゃ、アイリスの
性格上咎めたくもなるだろう。それに対し、ゲイルはてへっと茶目
っ気を持たせて言う。

「いやー。このまま口で気付かせても、【人が熱心に読んでたの
にー】とか言われそうです。気絶した状態で上に運ぶ事にしまし
た」

「……セイリユウは良いの?」

あまりに気軽に言われたのでスバルからは怒りが消えて呆れへと

変わっていた。まあ、ゲイルなら死なない範囲で絞めて気絶させるくらいわけ無いだろう。対するセイリユウは藍川のハンターの中から溜め息を付き、自らのパートナーに関して容赦無く言い伏せた。

『……ゲイルには二言三言は言いたい、以前同じような事があって同じような文句を言ったんでな、藍川は。……少しは懲りろ』

そういった事は本当にあつたらしい。スバルの横でアイリスが『あつ』と思い出したような声を漏らしたのだから。

「……さて、無事気絶した事だし、上に行こうか。そろそろ——」
「おぉーい！ ゲイルー！」

黒蓮だ。上から声を張り上げて叫んでいる。

「暁君とクインティア君が着いたー！ 早く上がってこぉーい！」
「りょうかーい！」

ゲイルは顔を上に向けて叫び返すと、スバルとアイリス、ウォーロックの方に視線を向けてウインクをした。

「——到着すると思っただけ」

スバルにゲイル、アイリス。そして藍川は、ウォーロックと実体化したセイリユウ、そしてジャックが運んでいる。そうして七名は螺旋階段を登り、一階のロビーに辿り着いた。

「スバル君！」

「！ ミソラちゃん！」

最初に声を掛けて来てくれたのはミソラだ。

「ミソラちゃんも今来たの？」

「うん。途中暁さん達に会って、せっかくだから一緒にさせてもらっちゃった」

なお、ゲイルや暁といった大人衆は大人衆で再会を喜んでいる。ちょうど、子供と大人で分かれて再会を喜んでいる状態だ。

「流石に、仕事の方は年末には戻らないといけないそうだけどね」

「歌の特番に出るんだそうです」

「！ この国にもテレビあるよな！？」

「……ってか同じチャンネルが映るかどうかすら怪しいだろうがよ」

そこにルナやキザマロ、ゴンタやジャックも輪に加わる。ジャックの冷静な指摘を受けたゴンタはショックで膝を突き、口から魂が出ている。

年末恒例歌の特番。流石にそれは抜ける訳にはいかないらしい。ゴンタはそれを海外で見れるかどうか心配だったようだ。落ち込んで放心状態のゴンタに、ミソラは汗々とフォローを入れる。

「だ、大丈夫だよゴンタ君。クリスマスパーティーがあるって言うし、その時私歌っても良いよ？」

「えっ。せっかくの休みなのに、良いの？」

ゴンタはミソラの言葉に喜んでいるが、スバルとしてはつい気遣ってしまふ。彼女の多忙さは想像に難くない。ゆっくり出来る時に休んで欲しいものだが……。対し、ミソラは元気に頷く。

「うん！　むしろせっかく皆で楽しめる時間があるんだから、全力で楽しまないとね！」

彼女らしい。

そこまで強く、眩しく言われたらスバルには頷くしかなかった。

「分かった。……けど、無理だけはしないでね？」

「うん！　りょかい」

「……あのー。一つ質問」

「？」

彼女にしては珍しい。おずおずとした様子で小さく手を上げている。

「……歌って、もしかしてあたしもやらなきゃダメ……？」

そういえば、彼女は半年前の夏休みでミソラと一緒に歌を歌っていた。その事を一同が思い出した時、ミソラは自身の平手にポンツと拳を置いて言った。

「……良いかも」

思い付いていなかったらしい。ソラは後悔と自棄^{やけ}の感情から両手を頭の両脇に置いてショックという様子だ。

「やぶ蛇じゃあああん!!」

意外にも、あまり目立つのは好きでは無いらしい。まあ、同情の念を抱けど意地になって反対するのはソラだけだろうという状況な

ため、彼女が折れるのも時間の問題だろう。

ゲイルはうんうんと喜びを表情に出しながら会話に加わった。

「うんうん。これはゲームの後の良い企画になるね。採用！」

そのマイペースな言いように、ソラは「こっちの気も知らないでえ！」という怒りを込めて噛み付く。

「企画ってあんた！……………。……………ゴメン、ゲイルさん。……………企画の前って何て言いました……………？」

だが、彼のセリフの中にもう一つ気になる単語があった気がする。そしてその単語を思い出したであろう一同は同じ顔をする。

（ゲーム？……………何それ？）

と。そしてそれは普段一緒に居るはずの黒蓮とアイリスも同じだった。一同の疑問は、やがて一同の不安に変わる。

「え？ 全部僕がプロデュースした年末競技大会だけ？ S A S

● K E みたいな」

「……………全部……………ゲイルさんが……………」

「そそそっ」

スバルの確認にアッサリと答えるゲイル。

不安だ。何が待ち構えているか分かったものではない。

「……………ゆっくり体を休めておこう……………」

そのスバルの言葉は誰宛でもなく、ポツリと言った独り言だった

が、それはゲイル以外の面々も同じだったようで次々に頷いた。

第39話 黒蘭（後書き）

前もって言うておくと、ミソラもソラも結局歌わずに終わりそうです。……それ所じゃない騒ぎが起こるので、ね。

ああ、ちなみにゲイルが企画してるのですが、他の例を挙げるなら『筋肉番付』とか、そんなんです。〇〇（……あ、ジョーカー忘れてた。ま、いつか。↑こら

第40話 特別企画（前書き）

お待たせしました。今週はフェアプレイズⅠFが二話更新で来週はお休みさせていただきますが、こちらは来週も更新しますよ。

……後書きで言うのがメンドクサイので今ここで言っておきますよ。作中にある諸々はほとんどゲイルの趣向です。（↑ここ重要）

第40話 特別企画

そしてイヴ当日。ロマンチックな二人の思い出を夢見てワクワク落着かないカップル。夜に過ごす家族との温かい時間のために、世のお父さん方が帰りに買うケーキの事を頭に置きつつ仕事に専念するそんな日。対し、スバル達の気はどちらかというと陰鬱、さらに詳細に言えば、不安、といった様子だ。

その理由は、イヴの企画を全てゲイルが考えたという事である。ゲイルの面白い事――またの名をはた迷惑な事――を好む趣向は良く知っているため、何が飛び出るか分からない。

「……良くこんな作ったもんだよなあ……」

が、この時ばかりはそんな事を言ったジャックだけでなく、その場にいた一同も頷き、感心という感情を覚えてしまった。ゲイルから指定された会場へ移動したのだが、その規模に驚いてしまったのである。国の城壁の外にあると聞いた時は単に移動が億劫にしか感じなかったが、確かにこの規模の会場は国の中に置くには大き過ぎるし広過ぎる。

手早く言えば、迷路だ。ただし、奥の方に迷路の壁を越えて台形の物が建っており、単なる平面の迷路とは違うらしい。ゲイルが城で「S A S U ● E のようなもの」と例を出したため、アスレチック的な要素も加えているのだろう。

「えーけど結構楽しそうだよ」

元々体を動かすのが好きなのだろう。そして実際に見て楽しみになったのだろう。ソラが楽しそうな口調でそんな事を言った時、迷路の中心と思われる地点から円柱の柱が競り上がって来た。上部に

透明の半円カプセルのようなものがあり、そこで小さく動く者が見える。おそらく、そこが迷路全体を見通せる司会者の席なのだろう。そしてその司会者たるゲイルはエアディスプレイを活用して迷路の四方へ巨大な自分の顔を映す。

「レディース&ジェントルマァーン！ 今日が集まってくれてありがとー！ 各所に用意してるカメラからの映像を見るに、割と多くの人が参加してくれるみたいだね」

次のゲイルの言葉までの僅かな間にスバルはチラリと視線を迷路の壁の方に向けた。約十メートル間隔でカメラが設置されてある。首のようにぐると稼動が効き、内側と外側を映せるようになってようだ。そしてゲイルの言葉から察するに、自分達の他にもいくらか運動神経に覚えがある人が挑みに来ているらしい。別の辺にいるため、スバル達からは見えないだけだ。

「それじゃあ挨拶はこの辺にして、ルールの説明をしよう。基本的には単純明快。迷路各所にある入り口から迷路に侵入。中心部たるこのタワーのエレベーターを登り、今僕がいる司会席のスイッチを押せば優勝だ。分かりやすくドクロマークのスイッチにしてるからすぐ分かると思うよ」

「ド、ドクロ……」

「……何だか自爆スイッチみたいね」

ゲイルの解説にスバルがたじろぎ、クインティアは若干やつてられないとでも言いたげなテンションで溜め息交じりに言う。確かに分かりやすいが、押して本当に大丈夫なのか不安になる。

そういった戯言も司会席に聞こえているのだろうが、先にルール説明を終わらせようと判断したのだろう。ゲイルは続いて注意事項を語る。

「それと、二、三人でチームを作ってもらいます。一人より、そっちの方が面白そうだしね。ルートによっては合流する事もあるけど、その時は協力するなり何なりそれぞれのプレイヤーにお任せするよ。それから、生身の人は出来れば電波変換が可能な人と一緒に行った方が良いかもね。一応安全装置はあるけど、その方が安心できるだろうから」

「「……………」」

一同の沈黙。不安になってきた。そして、帰りたくなってきた。電波変換メンバーとのパーティ推奨という事は、ゲイルらしい危険なトラップがあるという事。だが、ここで何があるのかと野暮な質問をする奴はいない。どうせ大方、「それは入ってからののお楽しみ♪」と可愛くも無い猫撫で声で誤魔化すに決まっている。

ひとまず纏めると、チャレンジャーは複数の入り口から二、三人のパーティでそれぞれ進入。中には様々なトラップ……もとい企画を面白くする仕掛けが施されており、出来る事なら電波変換が出来るメンバー推奨。憶測ではあるが、迷路の中にある大きな台形の物のような大きなアスレチックはあれだけではないだろう。ゲイルの性格上、大きなアトラクションが一つだけなんて可愛すぎる。ありえないと言っても良い。

「それじゃあ、各入り口への移動はリアルウェーブの車を手配するからそれで移動してね。あ、中の様子は国の中にあるモニターで皆見れるようにしてるから、参加しない人もそれで楽しんでくれ！」

いくら武闘派が多い国民性とはいえ、全員が参加という事は無いだろう。中にはライラのように電子系を得意とする女性や子供、興味が無いというドライな者もいるのだ。そんな人も、『見て』楽しめるようにという措置だろう。純粹にどこかのチームを応援したり、

中には酒等を懸ける人もいそうだ。

「それと、司会席には僕の他にサブコメンテーターとして藍川がいまゝす」

その言葉と共にエアディスプレイに藍川の姿が映ったのだが、その藍川の姿にスバル達だけでなく、モニターで様子を見ている国内の人々も絶句した。

「……どうも」

それは不当な扱いを受ける外交官の如く。普段の穏やかさはどこへやら。不満を雰囲気前面に出している。……まあ、無理は無いだろう。何せ今の彼は、椅子の背もたれの後ろに腕を回されて縛られ、さらには胴体も椅子に縛られているのだ。なお、スバル達ディスプレイで見ている側には分からないが、足の方も縛られている。……姿が見えないからどこにいるのだろうと気になっていたが、まさかこんな事になっていたとは。

「……あれ？ 黒蓮さんは？」

姿が見えないといえれば彼もだ。スバルの呟きに、ゲイルはあくまで自然にしれっと答える。

「黒蓮には買出しに行ってもらいました♪ ほら、こっちもただ待つってのも暇じゃん？ だからその間のお菓子とかを」

（（……嘘だな））

一同はある意味納得して頷いた。藍川も黒蓮も、ゲイルが暴走しすぎないようにするストッパーの役割を持っている。その二人をそ

れぞれ自由に動けなくさせたという事は、体良く言えば厄介払いだ。

「はいはい、それぞれの考えてる事は大体想像できるけど、そろそろリアルウェーブの車でそれぞれの入り口に向かってもらおうよ。パーティは、車が到着するまでに決めてね」

以上、注意事項とルール説明終わり、という事だろう。ゲイルや藍川が映ったエアディスプレイは消えて場に静寂が訪れる。

「……とりあえず、チーム分けしましょうか」

「うん。……けど委員長、本当に参加するの？」

「そうだよ。中に何があるか分からないし……」

ルナの言葉に頷きつつ確認を取るスバルと、電波変換推奨と言わしめるトラップをルナが凌げるかを心配するミソラ。

対し、ルナはしれっと何でも無いとも言いたげに返す。

「別に良いわよ。……まあ確かに不安だけど、まるで生身の人間は脱落前提みたいな言い方じゃない。それが気に食わないから参加するの」

ようは負けず嫌い。彼女のプライドの高さも少なからず影響しているだろう。ルナは「でも、」と続ける。

「でも、流石に何があるか分からないから、ゴンタとジャックに護衛を任せるわ」

「あの、僕は……」

「キザマロは残りなさい。これはあくまで私の負けず嫌いから来るもの。……大丈夫。二人がいるから、何とかなるでしょう」

ルナはキザマロを安心させるように笑みを送り、キザマロは残念そうにコクンと頷いた。

「……分かりました」

キザマロとしては行きたかったのだろう。いつだってルナとゴンタとキザマロは一緒だった。だから今回も一緒と思ったのだろう。しかし、スバルほど機敏でも無いし、ゴンタほど力がある訳でも無い。スポーツ的な運動能力を競う今回の企画では相性が悪いのだ。本人もそれを分かっているため、渋々引き下がる。

「あの……僕は……」

「貴方にはミソラちゃんを護るって役目があるでしょ、スバル君」

「……だよね」

スバルはおずおずと手を上げたが、ルナに一蹴。まあ、ルナの方にゴンタとジャックがいる以上、向こうは安心だろうという事で納得した。……もしかしたらルナの人選には、スバルに自分達を危惧する必要を無くさせて、心置きなくミソラを護る事に集中させようという意図があったのかもしれない。スバルの事だから、他のチームの事も心配してしまうだろうから。

そして、暁はもちろんクインティアとパーティを組んだ。が、そうなると一人余りが出てしまう。

「……で、私は一人な訳ね」

「「「あっ……」」」

ソラがいた。ツカサが来ていれば良いのだが、生憎な事に結局来れなかったらしい。

「えっと、僕たちのパーティ入ります？」

「……そうですよ。流石に一人は危ないし」

スバルの言葉にミソラは一瞬複雑——どうせだから二人で入りたかったのだろう——な顔をして、それでも彼の言葉を肯定する。暁やクインティア、他の面々も一人では危ないという考えのようだ。ゲイルの信用の無さが窺える。

だが、周囲の心配を察してかニコツと笑って応じる。

「あゝ大丈夫大丈夫。それぞれのカップルの邪魔は出来ないし、スザクは並みのウィザードじゃない。何とかなるよ」

「……確かにスザクを始めとした四神ウィザードは地球人が作ったバトルウィザードの比じゃないポテンシャルを持っているが……」

単純に、ポテンシャルの強い電波体と電波変換した方が強い。それ以上に人間と電波体との波長が合い、電波変換後の戦術の方が重要だが、それを差し引いてもツバサの作った四神型ウィザードのポテンシャルは優れていた。

暁を始め、それでもどこか納得できない一同の耳に車が走ってくる音が聞こえてくる。その車は大型のバスのような形状で、それでチャレンジャーを纏めて各入口へ運ぶのだろう。バスはキキツと鈍いブレーキ音を立てて目の前で止まり、スバル達が乗り込むのを待つ。

「さっ」

と、ソラはスタスタとバスの入り口に近づき、背後のスバル達に振り返る。

「行こうか。私達の方はホント心配無いからさ」

「「……………」」

無言で頷く一同。確かに一人で行かせるのは不安が残るが、先程言ったとおりスザクのポテンシャルの強さ、そしてソラ自身運動神経が良い点などから考えて、無理に食い下がるわけにはいかない。

第40話 特別企画（後書き）

本格的に仕掛けが爆発するのは次話からですね。ゲイルが施した仕掛け、その性格の悪さを特と御覧ごらんじろ！

（……書いてるのも考えてるのも作者さんだけどね。全部僕のせいにされてもな）

それを言っちゃあお仕舞めえよ、ゲイル。

第41話 ハチャメチャラビリンス（前書き）

お待たせしました。今週はフェアＩＦお休みでこっただけの更新ですね。

第41話 ハチャメチャラビリンス

「……やっぱりこうして見るとでかいなあ……」

「……だねー」

いざ迷路の中に入ってみると、やはり大きい。道の幅自体一、五メートル程あり、無論壁は大人でも向こう側が見えない高さになっている。

ヴンツという独特の電子音と共に、ウォーロックは勝手に実体化。驚くスバルをよそに壁に近づき、ジッと壁を見つめる。

「わっ！ ちょっとウォーロックいきなりー」

『……やっぱりだ。この迷路、リアルウェーブで出来ていやがる』
「えっ。……あ、なるほど……」

考えたものだ。これだけの規模となると流石にリアルウェーブを実体化させるためのプロジェクターが必要だが、リアルウェーブなら実際の物質を使わない訳だから資源も建設時間も必要なく、ただその迷路のプログラムを組み上げるだけだ。さらに言えば、リアルウェーブなら様々な仕込みが出来るため、トラップのバリエーションも広がる。

（（……何が待ってるんだろう……））

……まあ、これはスバル達にとっては良い事ではないという事で、スバルとウォーロック、ハープは内心で冷や汗をかいた。

「……………」

「？ ミソラちゃん？」

『ミソラ?』

だが、ミソラはただ黙ってるだけ。自身の口の辺りにグーを置いて、何かを悩んでるようだ。その様子を心配してスバルと実体化したハーブが話し掛け、ミソラは視線を俯かせたままポツリと言った。

「……ソラさん、大丈夫かな……」

ミソラが心配している理由の1つがそれだ。つくづくゲイルに失礼な気がするが、トラブルメーカーの彼が全面プロデュースした企画となると何が待っているか分からない。……例えば、落とし穴が敷き詰められた通路や巨石（リアルウェーブ製）が転がってくる通路など……。

実際に訪れる現実よりも、ヒトは想像という恐怖に恐れを抱く。

頭の中の想像は、限りが無いからだ。

『……ただでさえ一人ですからね……』

スバルのハンターの中、ライトの言葉でさらに頭を沈めるミソラ。そういった落ち込んだ空気は嫌いなのだろう。ウォーロックは溜め息を付いて頭をポリポリと搔く。

『……はあ。……んな思い詰めなくても、どっかで合流すりゃ良いだけだろ。なっ、スバル』

「うん。さっきゲイルさんルール説明で言ってたじゃない。ルート次第じゃ途中で合流する事もある。その時は協力するなりご自由につて。……これって、ゲイルさんが意図的に残したルールの抜け道じゃないかな」

ようは、イザという時は迷路の中で出会った者同士で協力できる

ようにという救済策だ。ゲイルは何も脱落させるために仕掛けを組んでる訳ではない。あくまで企画を盛り上げる。その為には、簡単に挑戦者全員が脱落してはつまらないのだ。つまり……。

「……そっか。……それなら……」

『途中で彼女と合流する事も出来るわね』

「うん！」

元気に頷くミソラ。どうやらもう一つの不安も消えたようだ。バスで移動という時、心配する自分達を気遣ってワザと元気に振舞わせてしまったかもしれない。その事が、もう一つの心残りだった。

ソラは約半年前、スバル達と出会ってスザクの一件が起こるまで頑張り過ぎてきた。周りに心配をさせず、ずっと良い子でいる事で自身を護ってきた。それは、辛い事があっても笑顔を見せ続けなければいけない、周りの期待に応えないといけないアイドルとしてのミソラと重なる面がある。

今でこそ大切な友人やかけがえの無い人が出来たという事で良い状況になっているが、その彼女にまた無理をさせて振舞わせてしまった事で、胸がチクリと痛んだ。しかし、ルールで合流・協力が許されているのならそれを最大限使わせてもらおう。ミソラにとってソラは大切な友人なのだ。大切な友人が苦しんでいるとこちらも苦しい。友人を助ける理由なんて、それで十分だ。

「さあ！ 早く行こう！ スバル君！ ロック君！ ハープ！」

そうと決まれば善は急げ。歩き出すミソラの後方で、他の面々が言葉を交わす。

「良かった。ミソラちゃん元気になった」

『へっ。現金なもんだがな』

『その割には嬉しそうです』

『こいつは昔っからこうなのよ。……こう憎まれ口を叩かず、もうちょっと素直になれば良いのにねー』

『ハープうるせえ！』

スバルの素直な感想にいつものウォーロックの本心ではない憎まれ口。ハープが親しげにウォーロックの一面をライトに教え、聞き咎めたウォーロックが一蹴。スバルを中心にして二人は衛星のように追い掛け回し、スバルとライトは苦笑いを浮かべる。

先を歩くミソラは遅れてる三人を振り返り声を張り上げる。なお、この間も歩を進めており、後ろ向きで歩いている状態だ。

「何やってるの！ 早く――！ わわっ!？」

「！ ミソラちゃん!？」

『!？ ミソラが消えた!？』

彼女の驚いたような声で慌てて前方を見ると、ハープの言う通り彼女の姿は忽然と消えていた。^{こっぜん}彼女の声が出た辺りには暗い大きな穴が開いている。

『……！ いや、よく見ろ』

そう言いながらウォーロックは前方に飛んで行き、穴に手を突っ込んだ。彼の意図が分かったスバルもウォーロックに駆け寄り、手を貸す。ウォーロックが見つけたのはミソラの細くて小さな指だ。おそらく落ちる時、かろうじて縁を掴んだのだろう。覗き込んでみると、案の定ミソラは縁に掴まって落ちないように耐えていた。

スバルは先にミソラの左手を掴んでいたウォーロックに倣い、彼

女の右手首の辺りを掴むとウォーロックと目配せ。掛け声と共に引き上げる。

「『せーのっ!』」

「わっ! ……あ、ありがとう、スバル君、ロック君……」

「ど、どうしましたして」

ミソラは引き上げられてからも少しの間心ここに在らずといった様子だった。スバルもそれに答えはするが、冷静になってみると冷や汗が出てくる。もし掴む事が出来なかったらどうなったのだろう。一同が恐る恐るといった様子で先の通路を見ている時、スピーカーでゲイルの声が聞こえてくる。おそらく、リアルウェーブの壁に紛れてカメラを設置。それで各所の様子をチェックしているのだろう。

「おやおやー。最初に仕掛けに掛かったのはスバル君とミソラちゃんのパアだね。その通路は落とし穴がランダムで現れるよー。落ちても怪我が無いようにクッションのリアルウェーブをセットしているけど、そうになったら脱落だから注意してね♪」

とことん楽しんでる口調だった。

「……ランダムって事はつまり、一定の固定された場所に落とし穴があるという訳ではなく、ランダムで落とし穴の位置が変わる、って事ですか……?」

「イエス! その通り! 流石理解が早いね、スバル君。……あ、一回現れた落とし穴は消えず、その場所に固定されるよ」

洒落にならない。それはつまり、どこに落とし穴があるかは実際に引っ掛かって見なければ分からないという事だ。……おまけにと

うやら、集音性もバッチリらしい。こっちの声が丸聞こえである。

「それじゃ、そんな訳で頑張ってね♪」

以上で通信終わり。……本当、何を考えているのか分からない、掴めない人だ。

「え、えっと……とりあえずどうやって突破するか考えようか……」

そのスバルの言葉に、ミソラにウォーロック、ハープの順で応えた。

「そ、そうだね……」

『アノ野郎、出たら覚えてろ……』

『まあまあ。今は迷路を無事抜け出る事を考えましょう』

ウォーロックが素直に恨み言を言うのを冷静に抑えるハープ。……に見えるが、『今は』というのを強調したので後が恐い。

それはさておき、現状打破だ。まだ現れていない落とし穴の位置がランダムに変わるという事は、一步一步慎重に体重をかけて安全を確かめる方法も使えない。慎重に前方の安全を確かめている間に、自分が今乗っている場所が落とし穴になるかもしれないのだ。つまり、この場所を抜けるには一か八かで一人ずつ一気に走り抜くか宙を浮いて突破するしか無いという訳である。

「で、一つ目の一か八かは危険だから出来れば宙を浮いて突破がベストだと思っただけ……」

と、スバルとミソラ、ウォーロックにハープはしゃがみ、頭を寄せ合って相談。スバルの提案にミソラは唸りながら手を小さく上げ

る。頭の片隅で改めてスバルの聡明さを感じしたが、ここは自重。

「んゝ……電波変換は？ 一気にピチュンと一っ飛びだろうし」

『……電波変換かあゝ。……けどなあゝ』

が、ウォーロックはその意見に難色を示す。そして、迷路の上部を見上げた。

『……なゝんか嫌な予感がするんだよなあゝ……。……電波変換がアリだって明言して、競技が迷路脱出。……電波変換なら迷路の上まで飛んで塀の上を歩くみたいに中心に向かう事だって出来る』

『なるほどね。電波変換が可能な者にとって、この競技は簡単すぎる。この壁を乗り越えるだけのジャンプ力があれば、容易に中心のゴール地点まで着く事が出来るんですもの』

ハープが察した事は正しかったらしい。ウォーロックは頷くと真剣な声で続ける。

『ゲイルの事だ。簡単にクリアしてもつまらないと思うだろう。な
らどうするか』

「……何か……罠を張る……？」

『そういうこった。……推測に過ぎねえが……』

ウォーロックはこれ以上言うのを控えた。それ以降はここにいる全員が同じ事を思っただろうと思ったからだ。

（（……でも、あのゲイルさんならそうなった時の罠ぐらい平気で仕掛けていそうだな……））

と。

『って事で、電波変換で行くにしてもあまり高く飛び過ぎないように――……何だ？』

ウォーロックは気付いた。スバルにミソラ、ハーブが自分の方を見ている事を。まず最初に、スバルが口を開く。

「……ロックって、浮いてるよね」

『……まあ、ウィザードだからな』

元々が電波星人のようなウォーロックを始め、単体の状態においてほとんどの電波体は宙に浮いて移動できる。次はミソラだ。

「……力もあるよね……」

『……まあ、バトルウィザードだからな……』

そしてウィザードの中でも、オックスやアシッド、ウォーロックのようなウィザードはバトルウィザードと呼ばれる。ある程度力が強くて、戦闘が得意なのが特徴だ。

『……おい、まさか……』

それらの事実をスバルとミソラが口にして、さらにこの状況と三人の眼差し。ここから考えられる事は……。

「運んで、ロック」

「よろしく願います、ロック君」

『頼むわよー』

『やっぱりかいっ！』

ウォーロックが気付くや否や要求を出す人間二名。確かに電波変換よりも手間が少ないから良い手と言えば良い手なのだが、まさか三者全員が同じ事を考えるとは。

で。

念のためという事で次の曲がり角までウォーロックに掴まって運んでもらい、落とし穴ルートを突破。ハープはウィザードという事で宙を浮いていった。そして当のウォーロックはハンターに戻り、スバルに言う。

『……スバル。……しばらく休むから……』

「……お疲れ様です」

言外の圧力というのもあり、スバルは押し黙るしかなかったという。運んだのは一人ずつだから肉体的な疲れはそうでもないと思うが、このまま外に出ていたらちよくちよく手伝わされると考えたのかもしれない。

第41話 ハチャメチャバリンズ（後書き）

……何だろう。四神メンバーって自分の心を偽る事が多い気が…
…。……まあ、そんな人が創ったモノ達ですからね、スザク達は。
そのパートナーもまた似たようなものか。

さて。また来週の前に、最近本格的に冷えてきたので風邪等に気を付けてと言っておきましょうか。

それでは、また。

第42話 少女の奮闘（前書き）

何だかずいぶん可愛らしいサブタイになっちまったな〜とか思ってたたり（苦笑）

特にルナちゃんが「おお！」っていう見せ場を残してくれたり。それでは、お楽しみ頂ければ幸いです。

第42話 少女の奮闘

スバルとミソラ組が最初の仕掛け、ランダム落とし穴と相對した時、ソラはというと……。

「……これってこんなに近かったっけ」

目の前の仕掛けに呆然としていた。迷路前に集まった時は奥の方に見えた台形のアスレチックだ。

台形の斜辺に当たる斜めにした支柱。その支柱（右）と反対側の支柱（左）の間には十字に張られた縄があり、それを伝って頂上に行き、また降りるという物である。

なお、ゲイルがスバル達に行ったアナウンスは聞こえていない。挑戦者達がそれぞれの競技に集中できるようにという意図だろう。全体アナウンス含め、このチームへのアナウンスと映像中継を見られるのは国内にいる民とゴールにいるゲイルと藍川だけという事だ。

『あゝほら、最初に集まった時奥に見えたのは、こことは逆の辺だからじゃない？』

つまり、ソラがスタートした辺は最初に集まった辺の真逆に当たると。

ソラは納得したように頷くと正面の関門に顔と意識を向ける。

「なる。……さて、いつまでも立ちぼうけってのも性に合わないし、そろそろ行こうか」

『りょーかい』

スザクは答えつつ、内心でぼんやりとスタート地点での事を思い出す。

《……ソラが心配する皆のために元気に振舞った事、ほとんどバレてみたいけど、言わなくても良いよね》

ミソラの心に残っていたしこり、ソラに自分達に心配を掛けまいという態度を取らせてしまった事はスザクの見る限りあの場にいたほとんどの面々が気付いていたらしい。ミソラやクインティアは女性同士という事で感じるモノもあるだろうし、何よりソラは自分が思っている以上に感情が外に出やすい性質だ。ようは、感情を隠したり本心を偽るのが苦手という事である。

《……ま、その後ありそうな気を遣い合う気まずい時間は、パーティーが解消してくれるから良い――》

「!? なになっ!?」

『!? ソラッ!?』

かな、と続けようと思ったら不意にソラの悲鳴が聞こえて意識を外に戻すスザク。現実世界で何があったのかと出てみたが、直後彼女はあるモノに襲われる。

突風だ。

何とかソラの靴にクチバシで喰らい付いて吹き飛ばされずに済むが、危うく吹き飛ばされるかと思った。突風は下から吹いており、それによりソラは両手を縄にしがみ付いて体は風で浮き上がり、逆立ちの体勢になっている。登ってる途中、下からの予想外の突風に襲われて、足はアッサリ縄から離れてしまったのだろう。

なお、その状況で腰に付いているハンターが落ちないのは、上か

ら小さなベルトを回して中の物が落ちないようにするタイプだからだ。

『ら、らんらのほれっ!?!』

「私も知らないよ!」

口でしがみ付いてるためか上手く発音できないのをよく理解できたものだ。なお、スザクが言ったのは『な、なんなのこれっ!?!』という言葉である。

二人が突風に飛ばされないように必死でしがみ付いてる中、ゲイルのアナウンスが入る。

「おっ。ソラちゃんの所も仕掛けに入っみたいだね。ただ縄を渡って昇り降りじゃあつまらない。そんな訳で、下から突風を吹かせてみましたー♪ 人間一人だったら簡単に浮き上がる風力だから、一回手を離れたら戻る事はまず出来ないね」

「っ、つまり……手を離れたらアウトと……」

ゲイルの説明に何とか応えるソラ。ゲイルはそれに対し、陽気に肯定する。笑顔で頷いている顔まで想像できるようだ。

「うん、その通り。それじゃあ、頑張ってね♪」

「『終わるかいつ!』」

何だか競技の解説が少ない気がするが、まあこれは説明も何も無いだろう。このアスレチック自体は公園にあるような遊具を大きくしただけで、違う点、そして留意点は下から吹いてくる常識外の突風だけだ。

ソラは溜め息を付き、スザクに声を掛ける。

「はあ。……スザク、悪いけどハンターの中に戻ってて。そこに掴まっていたらいつ飛ばされちゃうか分からないよ」

『……だね。一人で大丈夫？』

スザクはハンターに戻りつつソラを心配し、対するソラは「ふつ」と不敵な笑みを浮かべる。

「大丈夫大丈夫。この位の方が燃えるわ！」

『そ、そう……』 《流石、体を動かすのが大好きなだけあるわ……》

どうやら彼女の中のやる気スイッチが作動したらしい。

「すう……。……じゃ、行くよ……」

ソラは意識を集中させるために静かに息を吐くと静かに動き出した。

まずは慎重に片方の手を離し、片手で掴まるバランスに慣れたら離れた手を前の縄に運び、掴まる。行き、つまり登りなのが幸いだろう。前方の縄が前に掴まっていた場所より上にあるため、離れた手は容易に前方の縄を掴める。

「……ふう」

上記の通り登りはスムーズに行き上辺に着いたが、問題はここからだ。並行と降りには登りより神経を使う。離れた方の手を次の縄に掴ませるには、掴まっている方の手を曲げて自身を縄に引き寄せなければ届かない。腕力と握力が試される訳だ。

ソラは一旦息を吐いて片方ずつ交互に離して手の汗を風で乾かし、改めて前方を見据えた。

一方、三人グループで進んでいるルナとジャック、ゴンタはとうと……。

「「「……………」」」

呆然としていた。そして、彼等の心の中にある言葉は見事なまでに合致。

（（（……子供の出る競技じゃない……）））

まあ、ゲイルが単純なアスレチックを組むはずが無いが、これはやり過ぎでは無いだろうか。

道は一本道、踏み外せば奈落。……恐らく、落ちても害の無いようにリアルウェーブのクッションでもあるだろうが、そうなれば間違いなく脱落だろう。だがそれ以上に厄介なのは、一本道を渡る事を阻む三つのハンマーだ。

ルナはジャックの方を見ておそるおそる尋ねる。

「……ねえジャック。これも、当たっても大怪我しないわよね……」
「……………多分な」

この迷路がリアルウェーブで出来ており、中の仕掛けもリアルウェーブで大怪我にはならないように設定されているというのは迷路に入って即コーヴァスが識別、ジャックが考察したが、そのジャックも驚いていた。

振り子のように左右に大きく揺れるハンマーは大きく、大の大人でさえ立ったままハンマーの面に隠れてしまいそうだ。頭では大丈夫だと思いつつ、本能的に足を踏み出すのを躊躇わせる。

ルナは一度大きく深呼吸をして、両手を左右に伸ばして思いっきり自分の両頬を叩いた。

「!?!? 委員長!?!」

「どした!?!」

驚くゴンタとジャックに対し、ルナは握り拳を固める。……頬が赤く、若干涙ぐんでるという事は、自分でやって割と痛かったらしい。

「何って、渴よ渴。自分に入れたの! さあ、行くわよ!」

そう言って、ゴンタとジャックが何かを言う前に前へ進んでいく。ハンマーの方に目が行っていたが、実際に渡ってみると案外楽だ。一本道と言ってもさして細くなく、注意深く行けば問題無い。ハンマーの方も、タイミングを見計らって一気に駆け抜ければ問題は無かった。

(……このまま行けば大丈夫ね)

そう、ルナは二つ目のハンマー地点を潜り抜けつつ心の中で呟く。……が、やはり個々人で差異はあるようで……。

「い、委員長……」

しんがりを務めるゴンタの弱気な声に振り返ってみると、思わず彼に同情してしまった。

ゴンタは横に広い体付きをしている。無論、それは骨盤も同年代より多少大きく、広い事を意味する訳だが、それは細い足場を渡るのには難易度を上げる要因となってしまう。足を内側に向け、モ

デルのように歩くのが難しいのだ。ルナやジャックのように体を正面に向けて歩く事は叶わず、横向きにして恐る恐るといった様子で歩いている。

ルナは次のハンマーとはまだ距離がある事を確認すると、ゴンタではなくオックスに向けて声を張り上げた。

「オックス！ ギンタに手を貸してあげなさい！ ギンタが落ちそうになったら支えてあげるの！ 良いわね！」

『ブロロロ。分かったぜ！』

宙に浮くウィザードなら落ちる心配は無い。それを上手く使えば、人間が落ちそうになったら回りこんで支えるという事が可能となる。だが、これではまだ一本道を安全に渡れるようになった程度。ここにはハンマーもあるのだ。

「ジャック！ 貴方は自分がハンマーを渡った後、渡るタイミングをギンタに教えてあげて！」

「そりゃ良いけど、もし間に合わなかったら？」

慣れない横歩きで細い道。さらにはハンマーが当たる前にその地点を通過しなければならぬ精神的なプレッシャー。それらは進みにくい横向きの歩みをさらに遅くし、衝突の確率を上げてしまう。

その問題に対し、ルナは一旦息を吸い、意を決して言った。

「ハンマーを壊しなさい！」

『えっ！？』

「「『はあ！？』」」

驚くルナのウィザード、モードとギンタにジャック、コーヴァスにオックス。男性にも負けないリーダーシップを持ってるのは周知

の事実だが、まさかこんな過激策が聞けるとは思わなかった。これは彼女も息を吸うなり意を決するはずだ。

あくまで冷静に分析するタイプのジャックは、慎重な意見を述べる。

「け、けどよお、迷路の中の物、勝手に壊して大丈夫——」

「大丈夫だよん」

「「!？」」

何とか落ちずに済んだが、あまりにも急なアナウンスは止めて欲しい。危うく落ちるかと思った。ルナ、ジャック、ゴンタの非難の目にゲイルは一瞬頭にハテナを浮かべたが、すぐに三人の言わんとする事が理解できたのだろう。けらけらと笑いながら謝罪を入れる。

「あはは。ゴメンゴメン。驚かせた事は謝るよ。ああ、さっきの事だけど、迷路自体、つまり壁だね。それを壊さない限り、中の仕掛け、邪魔になるようなら個々人の意思で壊して構わない。電波変換が有りって事は、ウィザードを使うのも有りって事。……このルナの抜け道、上手く使いなよ、ルナちゃん」

「ッ！ ……どこまでも見透かしたような人ですね」

「あはは。……褒め言葉として受け取っておくよ」

ゲイルは苦笑し、通信を切る。どうやら、ルナの『電波変換出来る者前提の競技で勝ち抜く』という意図はモロバレだったらしい。その感情や態度は外に出した覚えは無いが、そこを悟り、ルナにピンポイントで投げかける辺り、やはり一筋縄に行かない感を抱かせ侮れない。……いや、もしかしたら最初からこんな抜け道を用意する辺り、ルナのような非電波変換メンバーをやる気にさせるための措置だったのかもしれない……。

ジャックは先程のルナとゲイルのやり取りの意味に気付いたよう

だが、ゴンタは首を傾げている。ルナはそんな二人に気持ちを切り替えるようにと手を二回パンパンと叩き、先を指差す。

「さっ。いつまでもこんな所で止まってないで、先に進むわよ！」

言うが早い。彼女は膝を曲げるといつでも駆け出せる体勢を作り、ハンマーの動きを見極め始める。そして、視線と意識を前に向けたまま後ろの二人に声を掛けた。

「まず私が渡り切るわ！ 二人はその後で！ それなら、もしハンマーを壊す事になっても加減無しでやれるでしょ」

ハンマーを壊す攻撃の余波が先頭を進むルナに影響を与え、落としてしまわない保証は無い。ならまず、ルナが先に突破する事で遠慮なく進めるという訳だ。

「……じゃあ……行くわよっ！」

タイミングを見極め、勢いよく駆け出すルナ。しかし、後一步でハンマーの通る地点を越えるという所で左足を捻ってしまう。

「いっ！ ……こっ……のお！」

痛みで一瞬動きが止まるが、もたもたしてる時間は無い。捻った方の足を折り曲げ、基点とし、伸ばしながら腰を回転。さながらステート選手のスピンジャンプのように宙を舞い、ハンマーが通過するエリアの先に着地した。……多少女性らしからぬ掛け声が聞こえた気がしたが、緊急時ゆえに仕方ないだろう。例え後ろのゴンタとジャックが啞然としていてもだ。

ルナは捻った足首の痛みと男子の物珍しげな視線による恥ずかし

さに耐えつつ、平静を装って二人の方を振り向いてビシッと指差す。

「なっ……何してるの。早く来なさい！」

「お、おう！」

ゴンタはいつもの条件反射というもので素早く頷くが、ジャックはある事に気付いた。彼女はまだ……。

「！手を引っ込めろ！持てられるぞ！」

「えっ？……！」

声を上げる暇も無かった。いや、正確には驚愕により息が止まって声を出せなかったと言った方が正しい。

完璧にハンマーの範囲から脱していたと思っていたが、ビシッと指差した腕がその範囲に入っていたのだ。その隙だらけな彼女と腕に、容赦なくハンマーが襲う。ルナが伸ばしていた手は右手。そこに右側、つまり外側から内側への衝撃はルナの体を左へ傾けさせ、バランスを崩させたのだ。

「痛っ！」

そしてさらに良くない事に、左足は絶賛負傷中。体が左へ傾けば当然重心は左足に移る訳だが、その軸足を痛めている以上、体重を支え切る事は出来なかった。

横向きに倒れる自身の体。ゴンタやジャックが何かを叫んでるようだが、声が聞き取れない。もうダメかとルナが目を閉じた時、ガシッと自身の右手を掴む感触がした。

「？……ジャック……」

「……ったく。言わんこっちゃねえ」

目を開けて自身の右手を見ると、黒い手が右手を掴み、それを伝って見るとジャックが電波変換したジャック・コーヴァスが安堵の息を付いていた。ジャック・コーヴァスはルナを一本道を渡り切って少し進んだ所に降ろす。すると、そこには意外な人物がいた。

「……ゴンタ。……貴方どうして渡りきってるの？」

さっきから呆然としてばかりだが、実際驚いているのだから仕方が無い。ゴンタはオックス・ファイアに電波変換しており、照れくさそうに頭を掻く。

「ブロロロ。……オレがハンマーを全部粉碎して――」

「オレがお前を助けるってな」

ゴンタの言葉に続くジャック。即席の連係という訳だ。まず、オックス・ファイアが自慢のタックルにより先にあるハンマーを全て粉碎させて道を切り開き、そのまま渡りきる。ジャック・コーヴァスはスピードと飛行能力を活かして道を切り開け次第ルナを助けに行った訳である。

そしてさらに、その策はジャックではなくゴンタが思いついた策らしい。……もつとも、暁やツバサのように冷静な指示をジャックに送ったという訳ではなく、「ジャック！ 委員長を頼む！」と一言言って即タックルをかまし、ジャックがその意図を即座に理解して実行、そして成功した策らしい。

ルナは意外そうな目でゴンタを見る。なお、オックス・ファイアの巨体では迷路の移動がしづらいため電波変換を解除した。

「……けど、ジャックが素早く察してくれたからとはいえ貴方がそこまで考えるなんてね……」

意外そうとは書いたが、ルナは確かに感心していた。ようは、ゴンタを褒めている。ゴンタはその事が嬉しくて、照れたような笑顔と共に言う。

「お、おう。……あの時は委員長を助けたくて、その気持ちで一杯で……自分でも良く分からない内にジャックに声をかけて動いてた」それを聞いたルナはクスツと微笑むと、ゴンタの腹をポンツと叩いた。

「ふふっ。アンタらしいわ。……？ ……ジャック、今舌打ちしなかった？」

「してねえ」

しれっと返すが、ルナはずいっと詰め寄ってジト目を送る。

「いいえ、確かに聞きました。一体何が不満なの？」

「だからしてねえって！」

「だから何でそう不機嫌そうなの！」

ゴンタとオックスは戸惑いながらも二人を宥めようとし、モードはルナのハンターの中で溜め息混じりに呟く。

『……はあ。……鈍感さって伝染^{うつ}るのかしら……。……ねえコーヴアスさ——』

『クツ……クククツ……あ？ 何だ？』

笑いを堪えていた。

『……いえ。別に……』

モードは再度溜め息を付き、二人を宥める作業に入った。

第42話 少女の奮闘（後書き）

……今回は分かりやすかったかもしれませんが、あの三人の事は、三作目に白黒付ける予定です。

何か色々仕掛けが出てきましたが、どれも（一応）電波変換無しでクリアできるようにはなっています。……頭を使って、機転が利けばね。

さて。次回から動き始めますね、本章が。ベルゼブブが動き出します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9054m/>

流星のロックマン Secret Story

2011年12月3日15時53分発行